

# 伝統と現代が重なり合うまち —南砺市福野・井波・福光—

地域社会の文化人類学的調査 25



2016

富山大学人文学部文化人類学研究室



## はじめに

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979年の研究室創設以来、北陸の一地域で毎年調査実習（現在「文化人類学実習」1～4）を行い、得られた知見を報告書「地域社会の文化人類学的調査」にまとめてきました。本報告書はその第25巻になります。

県南西部に位置する南砺市については、2004年の南砺市成立前もふくめると、第13巻『海と山の文化誌：富山県氷見市と利賀村の生活文化の研究』（2003年）、第21巻『平野の小宇宙：富山県南砺市城端の生活文化』（2012年）でとりあげてきました。ただし、同市北部の福野町・井波町・福光町についてはこれまで一度も扱ったことがなく、今回初めてとりあげることができました。

2014年秋、二年生の学生たちと話し合って調査地域を南砺市北部と決めてから翌年春より本格的に調査を行い、秋からその成果を執筆し、本報告書にまとめてきました。このスケジュールは例年通りのものでしたが、今回はいつもと違った点もありました。

まず、例年8～9月に一週間程度の泊まり込みの合宿を一回行い、そこで調査を集中的に進めますが、今回はそれ以外に4月末～5月初めのゴールデンウィークの時期に5日間の春合宿も行いました。これは調査地がやや離れているため、通常の授業時間では現地で十分な調査時間を確保するのが難しいからでしたが、その時期に福野で夜高祭があり、夜高祭はもちろん、他の調査も進展させるきっかけにしたいということもありました。実際、学生たちは春合宿で一定の成果を得、夏合宿でより本格的に調査に取り組んでくれました。

また、今回は学生数が15名と例年以上の多さでした。ここしばらく一学年12、13名の学生数が続いており、数名増えたところで大きく変わることはあるまいとふんでいましたが、その読みは甘く、教員が実質的に指導できる範囲をこえていたように思います。教員は二名の担当となっはいますが、実習は三年生だけでなく二年生のもも別にあり、それらを二人の教員で交互に担当しているため、それぞれを教員一人で担当することがほとんどで、昨年度（二年次）は野澤が、今年度（三年次）は藤本が主に担当しました。これも結果的に大きなチャレンジになりました。ただ、こうしたことは学生にとっても教員にとっても好ましい状況でないと認識されたため、来年度以降こうした学生数はないはずで

一人一人の学生を丁寧に指導できなかつたことが関係してか、調査地と調査テーマには多少偏りが生じました。基本的にそれらは学生たちが自分で決めていくものですが、途中で教員が全体の様子を見てさまざまなアドバイスをを行い、調査地と調査テーマのバランスをはかろうとします。しかし、今回はこの調整がはかれませんでした。具体的には、調査地として福野・井波・福光となっていますが、福光で調べた学生は一名になりました。二

カ所に絞ることも提案してみましたが、時すでに遅しでした。また、例年は農村部で調査する学生が半分近くいますが、今回はそれも一名だけでした。これは15名の学生のうち14名が女子であったことも関係していたかもしれません。

それでも学生たちは自分の関心にもとづいた調査テーマを立てて調査に臨み、最後まで頑張っこの報告書に成果を全員がまとめてくれました。その甲斐あってか、近年の報告書は全体でおよそ200頁前後でしたが、今回は300頁をこえるものになりました。本報告書は各章のタイトルはもちろん、報告書のタイトルや章立て、表紙など、いずれも学生たちが話し合って決めたものです。こちらは脇で聞きながら意見を述べることはあっても、決定権はなく、学生たちが最終的に判断して決定していきました。そうした意味で本報告書は学生たちの手作りのものです。

とはいえ、本報告書の文中には初歩的な誤りがふくまれているかもしれません。学生の原稿を昨秋より何度も目を通し、不明瞭な文章や事実関係の誤認などないか繰り返しチェックしてきましたが、決して完全ではないはずです。成果は道半ばのものであることはたしかで、そこにふくまれる不十分な点などについては指導する私たちに責任があることをあらかじめお伝えいたします。忌憚のないご批判・ご助言をお寄せいただけると幸いです。

最後になりましたが、このたびの調査ではたくさんの方々にお世話になりました。ここにそのお名前を記すことはいたしませんか、この報告書は皆様のご協力あつてのものであることはまちがいありません。大変ありがとうございました。

2016年2月10日

富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野  
藤本 武／野澤豊一

※印刷した紙版のものは発行部数も数百部のみで、頒布先もごく限られていますが、近年の実習報告書は下記の富山大学学術情報リポジトリのサイトより閲覧可能です。昨年発行の第24巻は公開10カ月で国内外よりすでに700回以上ダウンロードされています。こちらもあわせてご覧いただくと幸いです。

[https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=repository\\_opensearch&index\\_id=69](https://toyama.repo.nii.ac.jp/?action=repository_opensearch&index_id=69)



## 目次

はじめに（藤本武／野澤豊一）

### 地域の概要

1. 南砺市の概要..... 1
2. 福野の概要..... 6
3. 井波の概要..... 11

### 第1部 福野の調査報告

1. 人々を繋ぐ地域の誇り高い祭り—南砺市福野町の夜高祭—（今井綾音・大間知実咲・竹田里奈）..... 19
2. 「市の里」福野の変化と朝市への取り組み（林陽子）..... 70
3. 福野縞の保存・継承の今—織物産業の歩みから見る—（島崎遥）..... 92
4. 福野商店街の活性化—空き店舗を利用した市の里ギャラリー—（池端優佳）.... 107
5. 市民が生み出す新たな文化—スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド—（中沖祥子）.. 127

### 第2部 井波の調査報告

6. 井波彫刻の現状と伝統の継承（河西朋子）..... 151
7. 時代に合わせて変化してゆく井波彫刻（青山千暁）..... 168
8. 現代的彫刻からみる井波彫刻の現在とこれから（伊藤芽依）..... 183
9. 南砺市井波八日町通りの町家と町並み—息づく暮らし・守り伝えていくために—（布島あか音）..... 207
10. 井波の観光事業における潜在力と町を支える人々（岡田真歩）..... 242
11. 木彫刻による国際交流と地域貢献—南砺市いなみ国際木彫刻キャンプから—（大田麻美子）..... 264
12. 散居村の生活・農業から見る民具—南砺市飛騨屋地区の事例より—（熊谷俊哉）..... 280

### 第3部 福光の調査報告

13. アサガオにかける想い—福光新町あさがお通り—（西尾早織）..... 302

## 地域の概要

### 1. 南砺市の概要

#### 1-1. 南砺市の自然と地形

南砺市は富山県の南西部に位置し、北部は砺波市と小矢部市、東部は富山市、西部は石川県金沢市と白山市、南部は 1,000 メートルから 1,800 メートル級の山岳を経て岐阜県飛騨市や白川村と隣接している。

面積は 668.64 平方キロメートル(東西約 26 キロメートル、南北約 39 キロメートル)で、そのうち約 8 割が白山国立公園等を含む森林であるほか、岐阜県境に連なる山々に源を發して庄川や小矢部川の急流河川が北流するなど、豊かな自然に恵まれている。また、市北部の平野部では、水田地帯の中に美しい「散居村」の風景が広がり、独特の集落景観を形成している。



図 1. 富山県市内における南砺市の位置 (ウェブサイト「南砺市の観光情報サイト」より)

気候は、典型的な日本海側気候で、冬は寒く、降水・降雪量が多い地域である。中でも、城端、平、上平、利賀、福光の各地域は、特別豪雪地帯に指定されており、山間部では最大積雪深が 3 メートルを超えることもある。また、平野部では春先の強風や台風、冬の雪、夏の暑い日差しを遮るため、散居村特有の「カイニョ」と呼ばれる屋敷林で家屋を守っている。

## 1-2. 南砺市の人口

南砺市の平成 27 (2015) 年 12 月末現在の人口は 53,136 人で、世帯数は 17,773 世帯である。性別人口は男性 25,400 人、女性 27,736 人である。1920 年から 2010 年までの南砺市の人口推移を、以下の図 2 に示した。1940 年から 1947 年にかけて人口は急増している。しかし、その後は緩やかに減少傾向にある。

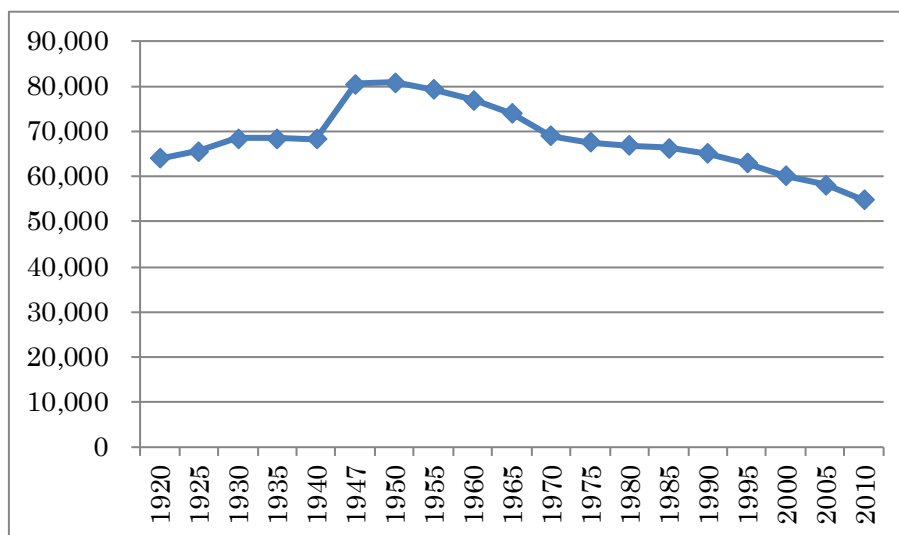


図 2. 南砺市人口の推移 (国勢調査による人口推移を参考に作成)

次に、南砺市における 2015 年 12 月末日現在の年齢別人口の割合を、図 3 に示した。この図 3 からわかるように、南砺市では少子化高齢化が進み、65 歳以上の人口の割合が 35% を超える超高齢化社会であるといえる。

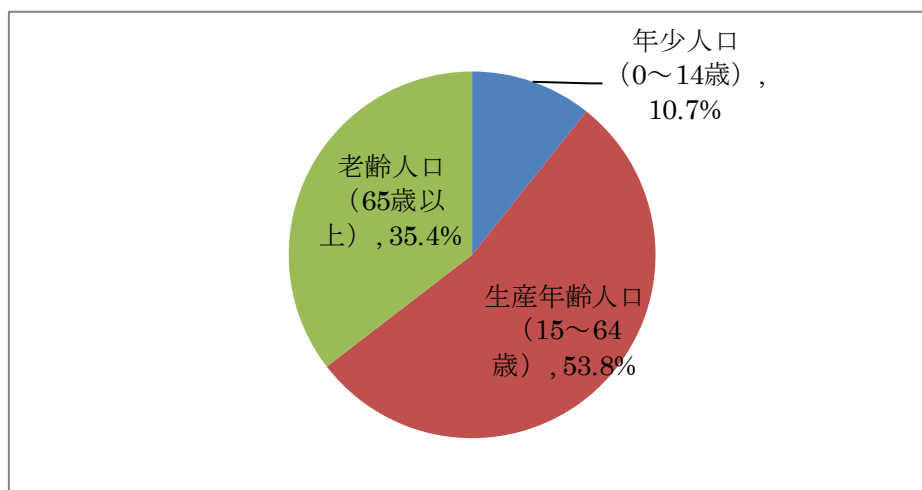


図 3. 2015 年 12 月末日現在の南砺市年齢別人口割合 (南砺市ホームページを参考に作成)



### 1-3. 南砺市の歴史

南砺市の歴史は古く、立野ヶ原台地から約3～2万年前の旧石器時代を中心とする遺跡がたくさん発掘されている。大量の石器が出土しているほか、縄文時代の竪穴住居跡なども確認されている。奈良・平安時代には、小矢部川流域の平野部で荘園が発達し、高瀬遺跡では荘園の役所跡と思われる掘立柱の建物群が見ついている。

中世に、瑞泉寺が建立され、善徳寺が加賀から移ると、旧井波町や旧城端町は門前町として栄えた。また、近世に入ると旧福野町や旧福光町は市場町として発展していった。

平野部では加賀藩の支配下で新田開発が進められ、また五箇山地方では日本の他の地域には見られない「合掌造り家屋」の集落が成立・発展するなど、独自の風土に根ざした、固有の文化を育んできた。

そして、近代から現代にかけて、その時々々の社会経済情勢の大きな流れに的確に対応しつつ、生活環境の充実や社会資本の整備等、地域特性を活かしたまちづくり、村づくりに取り組んできた。

旧平村、旧上平村、旧利賀村、旧井口村は、明治の町村制施行により村域が形成されており、旧城端町、旧井波町、旧福野町、旧福光町は、さらに昭和の大合併を経て町域が形成されたという歴史的経緯があり、近年は道路網の整備や広域行政の推進により、一層、地域間の結びつきが強くなってきたことから、平成の大合併に至った。

### 1-4. 南砺市の産業

産業別就業人口の構成は、富山県全体と比較すると、第1次産業と第2次産業が高くなっているが、近年は就業率が低下しており、第3次産業の就業者人口は、平成12年に第2次産業を逆転して以来増加傾向にある（表1）。

表1. 南砺市の産業別就業者人口・割合の推移

年度		平成2年		平成7年		平成12年		平成17年	
		(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)	(人)	(%)
南砺市	第1次産業	3,408	9.2	2,952	8.2	2,073	6.2	2,179	7.0
	第2次産業	17,937	48.6	17,092	47.2	15,011	45.2	12,766	41.3
	第3次産業	15,528	42.1	16,139	44.6	16,133	48.6	15,978	51.7
	総数	36,873	100	36,183	100	33,217	100	30,923	100
富山県	第1次産業	39,215	6.6	34,734	5.6	23,515	3.9	24,576	4.3
	第2次産業	242,293	40.8	244,989	39.8	229,675	38.5	201,001	35.0
	第3次産業	311,872	52.6	335,098	54.5	343,204	57.5	348,942	60.7
	総数	593,380	100	614,821	100	596,394	100	574,519	100

市内の産業構造は、平野部と山間部で異なり、平野部はアルミニウム、橋梁・建築建材、工作機械等を中心とした製造業、山間部では建設業や観光産業などサービス業の就業割合が高くなっている。

農業は、良質な米の産地であるほか、干柿、里芋、そば、赤かぶ、チューリップ球根などの特産品づくりに取り組んでおり、市場性の高い農畜産物の生産・安定供給と、地産地消を基本とした流通・販売体制の構築に努めている。林業は、木材価格の低迷と林業従事者の高齢化などから厳しい状況にあるが、緑資源幹線林道や森林基幹道の整備などによる経営基盤強化とグリーンツーリズムの推進に努めている。

商工業は、各商工団体を支援するとともに、若手経営者の育成や中小企業支援、TMOが行う事業の支援を推進し、市内商店街の賑わい創出に努めている。また、国の伝統的工芸品に指定されている「井波彫刻」、「五箇山和紙」のほか、安土桃山時代から続く絹織物、そしてプロ野球選手が愛用する木製バットの製造といった地場産業の振興や、ブロードバンド環境を活用したアニメ制作や次世代ロボットの生産などの新産業創出、起業家支援にも力を入れている。

また、世界遺産をはじめとする歴史・文化資源や、伝統工芸・特産品を活用した多彩な観光イベントが四季を通じて市内各地で開催されており、これらの資源を連携し、交流人口の拡大、雇用の創出に努めている。

### 1-5. 南砺市の年中行事

深い雪に閉ざされていた大地に春の訪れが感じられる頃、福光地域では、神輿が桜並木を勇ましく巡行する。また、5月の連休には、夜を赤々と染める行燈が練り回る「福野夜高祭」や、絢爛豪華な曳山と江戸情緒あふれる庵唄が響く「城端曳山祭」が催される。

夏には、世界の演劇人が集う「利賀 SCOT サマー・シーズン」や、五穀豊穡を祈って行われる「福光ねつおくり七夕祭り」、スティールドラムの音色がまちに溢れるワールドミュージックの祭典「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」が夏の夜を熱くする。

秋には、踊りの輪が広がる「むぎや祭」、「こきりこ祭り」が開催されるほか、愛好家の力作が揃う「南砺菊まつり」が、冬には、世界遺産のライトアップや巨大雪像と伝統の味「南砺利賀そば祭り」、多彩なコースが自慢の市内3スキー場など、雪を活かした多彩なイベント・レジャーが楽しめる。

表 2. 南砺市の年間イベント（ウェブサイト「いこまいけ南砺」を参考に作成）

時期	場所	できごと
4月中旬～ 5月上旬	五箇山：平・上平の各集落 4月20日：相倉合掌集落 5月3・4日：菅沼合掌集落	五箇山春祭り
4月下～5月上旬	利賀芸術公園	利賀フェスティバル

5月1日、2日	福野	夜高祭
5月2日、3日	井波八幡宮	よいやさ祭り
5月3日～5日	利賀	利賀の春祭り
5月4日、5日	城端	城端曳山祭
5月	菅沼、五箇山合掌の里	四季の五箇山 春の宵
5月中旬	赤祖父レイクサイドパーク	ふれあいへラブナ釣り大会
7月下旬	福光	福光ねつおくり七夕祭り
7月21日～29日	瑞泉寺	太子伝会
7月下旬	井波	いなみ太子伝観光祭
7月22日～28日	善徳寺	善徳寺虫干法会
7月下旬	利賀芸術公園	利賀サマー・アーツ・プログラム
8月中旬	桜ヶ丘クライミングセンター	クライミング・ジュニアオリンピック
8月下旬	文化創造センターヘリオス	スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド
9月中旬	城端市街地、じょうはな座、 城端別院	城端むぎや祭
9月中旬	道の駅たいら五箇山和紙の里	五箇山和紙まつり
9月23日、24日	五箇山・下梨：地主神社	五箇山麦屋まつり
9月25日、26日	五箇山・上梨：白山宮	こきりこ祭り
10月下旬	利賀村坂上 そばの郷広場	ど〜んと利賀の山祭り
11月3～11日	南砺市園芸植物園	南砺菊まつり
11月上旬	五箇山・菅沼集落	世界遺産菅沼合掌造り集落一斉放水
11月23日	IOX-AROSA スキー場	雪恋まつり
11月23日	福野小学校第2体育館	里いもまつり
12月27日	福野	歳の大市
1月1日	井波地区：高瀬	越中一宮 高瀬神社初詣
2月第1日曜日	城端中学校グラウンド	ザ☆雪合戦 in じょうはな
2月上旬	道の駅 福光	ふくみつ雪あかり祭り
2月上旬	IOX-AROSA スキー場	IOX-AROSA ウィンターフェス
2月上旬	井波木彫りの里	雪国祭アイスフェス
2月上旬	菅沼合掌造り集落、 五箇山合掌の里	四季の五箇山 雪あかり
2月上旬	五箇山・上平	カンジキカントリー一選手権大会
2月中旬		こきりこ味祭り
2月中旬	利賀国際キャンプ場	利賀そば祭り
2月28日	城端	つごもり大市

## 2. 福野の概要

### 2-1. 福野の自然と地形

福野町は、平成 16（2004）年に 7 つの町村と合併し、南砺市の一部となった。南砺市の北部に位置し、北部は小矢部市と砺波市、東部は井波町、西部は福光町、南部は井口村と接している。福野町は、散居村<sup>1</sup>で有名な砺波平野のほぼ中央に位置している。砺波平野は、周りを山や丘陵に囲まれ、日本海に注ぐ庄川や小矢部川の造った複合扇状地である。肥沃な土と豊富な水に恵まれた穀倉地帯が広がり、水田化率が高く良質な米の産地として知られている。また、里いもづくりも盛んで、現在、特産品として多くの生産量を誇っている。



図 4. 福野の位置（砺波地域市町村合併協議会ホームページより）

### 2-2. 福野の人口

南砺市の平成 27（2015）年 12 月末現在の統計資料<sup>2</sup>によれば、福野の世帯数は 4538 世帯、人口は 14070 人（男性：6805 人、女性：7265 人）で、人口・世帯数ともに南砺市で 2 番目に多い地域である。

図 5 を見ると、福野地域の人口全体は昭和 60 年以降から減少傾向にあると言える。平成 15 年で 14500 人を超えていたが、平成 27 年には 14070 人となっており、人口減少は続い

<sup>1</sup>庄川の田園地帯において、農家の家が 100～150 メートルずつ離れて点在している村落形態のこと。

<sup>2</sup>南砺市ホームページ「住民基本台帳人口・世帯数」より（2016 年 1 月 6 日閲覧）

ている。しかしながら世帯数においては昭和 30 年から緩やかに増加している。

これは、福野の周辺部で住宅団地や町営住宅が建てられ、住環境の整備が進められたことで世帯が増加したのと同時に、福野の中心から人が流出しているためである。福野の中心部から生産年齢人口(15～64 歳)にあたる世帯が流出して、福野周辺部の団地に家を建てたり、町営住宅に住んだりしたことで、中心部の人口は減少し、福野地域はドーナツ化現象が起きている。

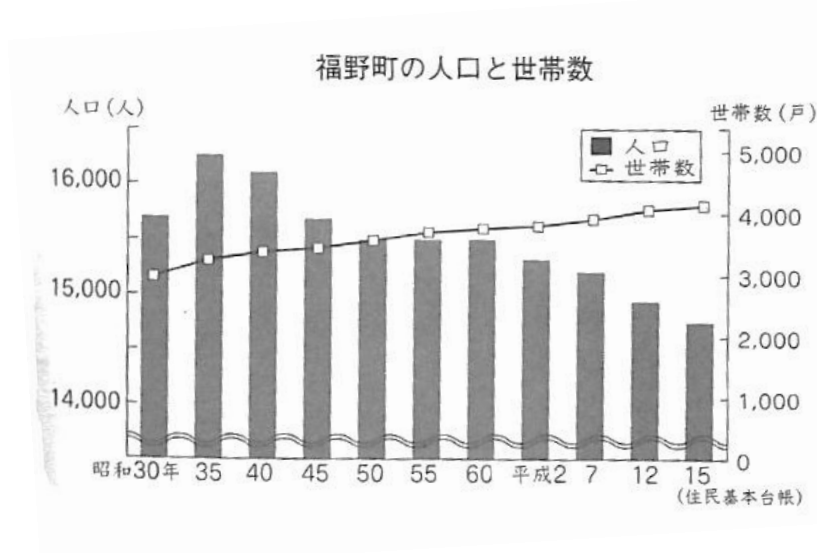


図 5. 南砺市福野地域の人口・世帯数の変化 (『続福野町史 通史編』より)

### 2-3. 福野の歴史

福野町の旧町は昔、一面の野原であった。そのため、この付近は野尻野と呼ばれていた。また、福野の町立て以前、現在の二日町は、二の日に市が立ったので二日町と呼ばれていたらしい。

福野の町立ては、慶安 2 (1649) 年に本江村の阿曾三右門が野尻野のやせた土地に新しい町を立てたいと、郡奉行に願い出たことが始まりである。この願い出によって、わずか半年余り後の慶安 3 (1650) 年の正月に町立ての許可が下りた。というのも、当時加賀藩では、農業生産力の拡充と年貢増徴をはかる改作法実施の準備を進めていた。その都合上、安居村に注目し、新しい町を作ろうとしたが実現しなかった。そんな折に町立ての願い出が出されたため、すぐに許可が下りたというわけである。

また、地理的条件から見ても、福野は格好の地を占めていた。福光・井波・杉木新・津沢の町々まで、それぞれ一里余の距離を保ちながらその中心に位置し、砺波郡のほぼ中心に土地があった。そのため、福野が砺波郡の物資集散の中心地として注目された。

町立てが許可された年、直ぐに 57 軒の家が、近くの農村の次男、三男たちによって建てられた。町割りによると四つ辻を中心にほぼ南北に家が並び、街路の両側に奥行きや屋敷地が決められ、翌年には 64 軒の家並みとなった。

当時の商品貨幣経済の発展の時代背景は、当時の福野町にも影響し、福野に二・七の六斎市が開かれると、近村の農民たちの交易の場、先にも述べたように砺波郡の物資集散の中心地として賑わい、町の発展を促した。

町立てから2年後の慶安5（1652）年の春、福野町は大火に見舞われて全戸が焼失するという災害を受けた。町の人々は復興のため藩から御城銀を拝借し、福野町は危機を切り抜けた。万治2（1659）年にその返済を終えた後は順調に町を成長発展させていった。

一方で福野町の人々は大火の直後、町の平安無事のため神の加護を求めて、2名の代表者を伊勢神宮に参拝させ御分霊を勧請し、氏神を祀ることになった。その帰り、県境の倶利伽藍峠のあたりで日が暮れることを伝え聞いた人々が行燈を持ち、迎えに出た。このことが福野夜高祭の起源とされている。

明治22（1889）年、町村制施行により礪波郡福野町、南野尻村、広塚村、野尻村、東石黒村、西野尻村、高瀬村が成立した。明治29（1896）年には東石黒村、西野尻村が西礪波郡へ、上記の残りは東礪波郡へと別れた。

昭和に入ると福野町は多くの合併を繰り返すことになる。昭和16（1941）年に東礪波郡南野尻村、広塚村、野尻村が福野町へ編入され、昭和29（1954）年には福野町と西礪波郡東石黒村が合併した。さらに昭和32（1957）年に西礪波郡西野尻村の一部、昭和34（1959）年に高瀬村の一部、昭和36（1961）年に井波町の一部が福野町に編入された。

そして平成16（2004）年には西礪波郡福光町、東礪波郡井波町・城端町・平村・上平村・利賀村・井口村と合併し、南砺市福野が誕生した。

表3. 福野の略年表

西暦	年号	できごと
1650	慶安3年	福野の町立ての許可が下りる
1652	慶安5年	大火に見舞われる
1889	明治22年	町村制施行により礪波郡福野町、南野尻村、広塚村、野尻村、東石黒村、西野尻村、高瀬村が成立
1896	明治29年	東石黒村、西野尻村が西礪波郡、上記の残りは東礪波郡となる
1941	昭和16年	東礪波郡南野尻村、広塚村、野尻村が福野町に編入
1954	昭和29年	福野町と西礪波郡東石黒村が合併
1957	昭和32年	西礪波郡西野尻村の一部を編入
1959	昭和34年	高瀬村の一部を編入
1961	昭和36年	境界変更により井波町の一部を編入
2004	平成16年	西礪波郡福光町、東礪波郡井波町・城端町・平村・上平村・利賀村・井口村と合併し、南砺市になる

## 2-4. 福野の産業

平成 12（2000）年の国勢調査によると、15 歳以上 64 歳までの福野の生産年齢人口、職業別就業者総数は減少している。しかしその中で増えているのは専門的・技能的職業従事者、サービス職業従事者である。農業・漁業従事者については、昭和 60（1985）年から平成 12（2000）年の 15 年間で総数が激減し、全体の構成比は 6.4% になった。これは、農業の機械化や集団化の進行に関係すると思われる。平成 12（2000）年の調査で男女別に見ると、男性では、ほぼ 2 人に 1 人が製造業に従事している。建設業等従事者であり、次いで専門的・技能的職業従事者、販売業者、事務従事者がそれぞれ 10% である。女性で最も多いのは、男性と同様製造、建設等従事者で 30% 以上を占め、次いで事務従事者が 27% である。また実数は少ないものの男女の構成数に大きな違いが見られるのは、管理的職業従事者、保安職業従事者、運輸・通信従事者であり、圧倒的に男性が多い。また、サービス職業従事者や事務従事者は女性が多数である。

福野は、かつては織物産業が盛んであり、特に、明治期から大正期、昭和期にかけて、工業化が進み、織物の試験場や染色場が林立し、その織物の販売は日本全国に及んだ。福野で織られた縞木綿織物は「福野縞」と呼ばれ、特産品として人々の生活に根ざした品物であったが、現在はその生産は行われていないために、実物はごくわずかである。

なお、現在、福野では農業・観光資源の活性化に力を入れている。福野の特産品は主に里芋とスプレー菊<sup>3</sup>であり、毎年それぞれのイベントが行われている。里芋は町の農協の直売所、また朝市や 12 月 27 日に行われる「歳の大市」で、農家や南砺福野高校の農業環境科の生徒たちが作ったものを生徒たちみずから直売している。昭和 60（1985）年から福野市の里振興協議会によって企画された「福野ごっつお里いもまつり」という収穫感謝祭のイベントが、福野小学校の第 2 体育館を会場に行われており、そのときに里芋料理や、土産として里芋 1 袋をつけるなどして、福野町の内外にアピールしている。

また、福野では園芸が盛んであり、特にスプレー菊や電照菊<sup>4</sup>などの品種改良など菊の栽培が盛んに行われており、菊が町の花になっている。電照菊の分野においては県内シェアの約 70% を占めており、北陸最大の産地形成をなしている。昭和 57（1982）年には第一回福野菊まつりが開催され、それ以来毎年 11 月に福野園芸植物園にて開催され続けている。そこではそういった電照菊や新種のオリジナルスプレー菊などの色とりどりの菊花が展示される。

## 2-5. 福野の年中行事

福野町では四季を通して祭りやイベントが行われており、その代表的なものには福野町

---

<sup>3</sup>スプレー菊とは、小枝の先が小分れしている菊である。ハウス栽培切り花として生産され、「仏花」などの用途で周年供給される。

<sup>4</sup>電照菊とは、花芽が形成される前に人工的に光をあてることにより、花芽の形成と開花時期を遅らせる抑制栽培で栽培された菊である。

にある神明社の春季祭礼である「夜高祭」、夏のイベントには音楽を通して異文化理解と新しい文化の創造を目指す「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」、秋の「南砺菊まつり」と「ごっつお里いも祭り」、年の瀬の風物詩「歳の大市」がある。ここではこれらの代表的な祭り・イベントを紹介していく。

毎年5月1日、2日は福野神明社の神迎えの行事として夜高祭が行われ、大小20数本の夜高行燈が町中を紅で染める。夜高祭は350年以上もの伝統を持つ勇壮で美しい富山県指定無形民俗文化財であり福野町を象徴する祭りだが、町の人口減少や経費の問題から祭りの継続が危惧されている。5月3日の春季祭礼本祭では、福野町の中心部である上町、横町、浦町、新町の4町の曳山の町内練り回しが行われている。曳山は町有形文化財に指定されており、その伝統の姿が現在に継承されている。

8月下旬には、異文化交流をテーマにワールドミュージックの紹介を通して世界各地の民俗文化との出会いと交流の場をつくることが主旨であるスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドというイベントが行われる。そのイベントにはインドネシア、南アフリカ、フィンランド、スペイン、韓国をはじめ、国内外から多くのアーティストが訪れ、様々な国の音楽が町に溢れて活気がみなぎる。地域の文化向上と活性化に貢献したとして、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの実行委員会は、平成14年にサントリー地域文化賞を受賞している。

11月には、2002年に開園した福野園芸植物園フローラルパークにて福野菊まつりが開催される。全国の菊愛好家の作品約5000点が出展され、2日間で約2万人の入場者が訪れるこのイベントは、北陸3県の菊花展の中心的な役割を果たしている。また毎年11月23日には、収穫感謝祭のイベントの1つとして福野ごっつお里いも祭りが福野小学校の第2体育館を会場として行われている。福野町の特産品である里いもが、様々に調理されて振る舞われ、その来場者数は1万人を超える。

年の暮れ12月27日には、福野開町以来の毎月2と7が付く日に行われる六斎市の締めくくりとして歳の大市が開催される。歳の大市には若い人々もたくさん集まり、早朝から夕方まで賑わう。しかし、近年出店総数は減少傾向にある。

表4. 福野の年中行事（『続福野町史』をもとに作成）

開催月	行事
5月	福野神明社春季祭礼 夜高祭
6月	花と緑のフェスティバル
8月	スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド
9月	福野神明社秋季祭礼
11月	南砺菊まつり 福野ごっつお里いもまつり
12月	歳の大市



### 3. 井波町の概要

#### 3-1. 井波の地理・地形

井波は南砺市の南東の端に位置し、砺波平野の東南にそびえる八乙女山地とその山麓一帯を占める。井波町の背後の山々は飛騨高原からつづく 1000メートル前後の山々で、その北端の山稜は、北東から南西に連なり、急斜面となって砺波平野に没している。八乙女山地から砺波平野に流れる、干谷川・旅川・西大谷川・東大谷川などの急流河川は、谷口を中心に扇状地を形成し、山麓一帯は複合扇状地となっており、農地として開発されている。



図 6. 井波の周辺地図（「Yahoo 地図」より作成）

次に井波の気候について説明する。

旧井波町（現砺波市北部）は富山県の西部、砺波平野東南にそびえる八乙女山（標高 756m）とその山麓一体に位置する。気候分布は、冬は寒くて降水量が多く、4月から6月にかけて気温が急上昇し、やがて雨の少ない夏、という日本海側気候に属している。しかし、梅雨前線による雨量もかなりあるため7月は降水量が多くなっている（図 7）。また、旧井波町は山麓にあるため砺波平野でも多雪地帯であり、町の中でも山麓に近づくにしたがって降雪量が多くなる。特に強い季節風によってもたらされる山雪型の場合には多くの積雪となる。そして降水量とともに湿度が高いことも大きな特色であり、年平均 72.9%に達する多湿地帯であるが、南風の吹く 3~5 月は比較的乾燥する。

風に注目すると、春先の南風が井波風として知られている。これは八乙女山地に発生したフェーン現象から山麓に吹き降ろす強風であり、最盛期には砺波平野全般に風速 10 メートル以上にもなり、特に井波では 20 メートルを超えることもある。春先の 3～4 月が最も多く発生し、台風期の 9 月や 11 月にも多い。井波風の吹く一帯では家の構造、向き、屋敷林の方向、農作物の選択にも注意が払われている。強風時の失火は大火の原因にもなるため、火気の使用を一切しないなど日常生活から風俗習慣にまで大きな影響を及ぼしている。

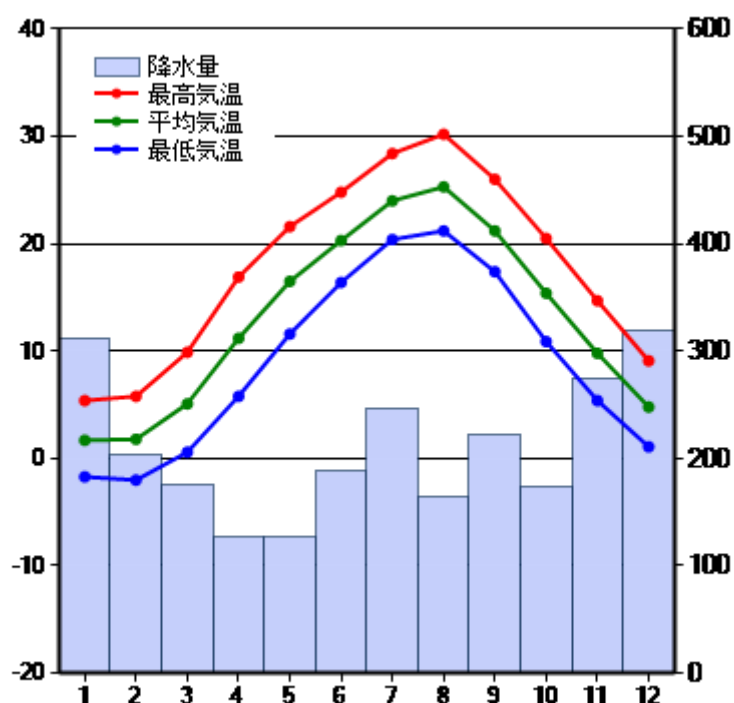


図 7. 南砺市高宮の気温、降水量のグラフ<sup>5</sup>

### 3-2. 井波の人口

旧井波町の平成 27 (2015) 年の人口は 8853 人である。1920 年から 2015 年までの旧井波町の人口推移を図 8 に示した。第一次ベビーブームが起こった 1947 年から 1949 年にかけて人口は急激に増加したが、1955 年以降はゆるやかな減少傾向にあり、2000 年代に入ってからはその減少幅がいくぶん多くなっている。このことから、今後も人口減少はゆるやかに続いていくものと考えられる。

<sup>5</sup> 「富山県 南砺高宮の気温、降水量、観測所情報」  
(<http://weather.time-j.net/Stations/JP/nantotakamiya>) より引用

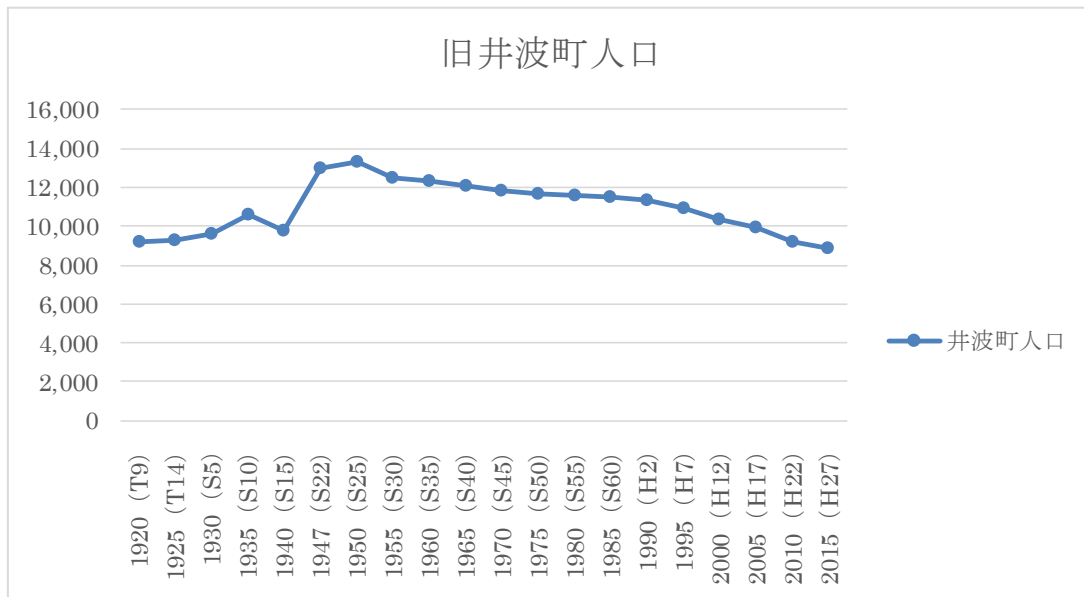


図 8. 旧井波町の人口推移（ウェブサイト「人口・面積・人口密度」を参考に作成）

### 3-3. 井波の歴史

井波の歴史を記述するうえで欠かせないのが瑞泉寺、火災、彫刻である。

明徳元（1390）年本願寺 5 代綽如が北陸の真宗布教の拠点として井波に寺院建立の勸進状（寺院、仏像を建立、修復する際に寄付を募るための書付け）をしたため、建立に着手した。瑞泉寺は北陸の浄土真宗信仰の中心として多くの信者を集め、又越中の一方向一揆の重要拠点ともなった寺院となっていく。天正 9（1581）年には城端北野に移るものの、慶長元（1596）年に再び井波に戻り、現在地に再建された。現在の本堂は、明治 18（1885）年に再建されたもので、木造建築の寺院としては、日本でも有数の建物である。

また、井波は大火が多く、瑞泉寺も火災被害を何度か受けている。宝暦 12（1762）年に起きた井波大火では家屋 667 軒が焼失、瑞泉寺も伽藍が全焼した。これを受けて、翌年 13（1763）年より再建工事が始まり、京都の寺院建築様式や彫刻の技法が伝えられた。これが井波彫刻の起源とされている。明治に入り民間への欄間・衝立などの需要が次第に高まり、昭和 50（1975）年、井波彫刻は伝統的工芸品として通産省から指定を受けた。

井波町は、明治 22（1889）年に市町村制の実施により松島村、藤橋村、北川村、山見村、杉谷新町との合併が行われた。その後昭和 26（1951）年、29（1954）年、34（1959）年にも合併が行われている。交通に関しては、明治 4（1915）年に砺波鉄道が福野から井波経由で青島まで開通、明治 11（1922）年には加越能鉄道が福野・石動間の営業を開始し、昭和 9（1934）年には加越線井波駅舎が完成した。しかし、昭和 47（1972）年にバス代替案が採用され、同年、井波駅は廃止となっている。

表 5. 井波の略年表（参考文献『井波 歴史のうねり 六〇〇年』を参考に作成）

時代	西暦	年号	できごと
室町	1390	明徳元	綽如が越中井波の地に寺院建立の勸進状をしたためる
	1475	文明 7	本願寺 8 代蓮如が井波を訪れて布教する
安土桃山	1596	慶長元	瑞泉寺が北野寺内から旧寺地近くの現在地に移る
江戸	1700	元禄 13	蚕種業が盛んになり、井波紬などの特産品ができる
	1762	宝暦 12	井波大火で家屋 667 軒が消失し、瑞泉寺も類焼する
	1763	宝暦 13	瑞泉寺の再建工事が始まり、 京都の寺院建築様式や彫刻の技法が伝わる
明治	1883	明治 16	石川県から砺波郡、新川郡、婦負郡、氷見郡が分離して 富山県が設置される
	1889	明治 22	松島村、藤橋村、北川村、山見村、杉谷新村、井波町が 合併し、井波町となる
大正	1915	大正 4	砺波鉄道が福野から井波経由で青島まで開通する
	1922	大正 11	加越能鉄道(株)が福野・石動間の営業を開始する
昭和	1934	昭和 9	仏閣式の加越線井波駅舎が完成する
	1951	昭和 26	井波町と南山見村が合併する
	1954	昭和 29	井波町と山野村が合併する
	1959	昭和 34	高瀬村が井波町と福野町に分村合併する
	1972	昭和 47	加越線が廃線し、井波駅が廃駅となる
	1975	昭和 50	井波彫刻が伝統的工芸品として通産省から指定される

### 3-4. 井波の産業

かつて井波は特に蚕種業が盛んであり、練木喜三の『蚕種要録』には、藩政前期の元禄時代にすでに蚕種産地として認められていたとされる。井波において、蚕種業は第一の産業であり、中部から奥羽地方に広く販売されていた。元禄～宝永の間蚕種は全盛を誇っていた。その後に 2 度の大火により一時は衰退していったが、明治初期には第一の産業に復活し、大正・昭和に企業化が進んだ。また蚕種業の副産物に井波紬があった。明治時代に生産が始まり、大正年間には普段着として需要があったが、太平洋戦争以降には姿を消した。

井波は真綿の生産地でもあり、文化 8 (1822) 年ころには主産業である蚕種の半額にも及んでおり、井波商人は京都や大阪へも売りさばっていた。

また、今日の井波の産業で最も有名なのが木彫刻である。焼失した瑞泉寺の再建のおり、京都本願寺より御用彫刻師・前川三四郎が派遣され、そこから彫刻の技法を本格的に習っ

たのが井波彫刻の始まりである。社寺彫刻や一般住宅欄間、獅子頭、置物などは伝統的な作品とされる。昭和 22 年に井波彫刻共同組合を結成し、昭和 50 年には通産大臣より伝統工芸品の指定を受けた。伝統工芸品をつくる一方で、日展や中央・地方展などの公募展に出展する彫刻師もいる。井波彫刻は、住宅欄間が主力となり生産量は昭和後半ころにピークに達したが、現在は職人の数とともに生産量も減少している。

木工業と繊維工業も井波の代表する工業である。太平洋戦争後もそれらとともに、昭和 7 年の設立された東洋紡績井波工場をはじめ、カロリナ・ナイロン編物の各工場は繊維工業を、大建工業は木材工業を代表している。

### 3-5. 井波の年中行事

井波では年間を通して、様々な行事やイベントが行われている。下の表に主な行事をまとめた。

表 6. 井波の年間イベント

時期	できごと
2 月上旬	南砺市アイスフェス
5 月 3 日	よいやさ祭り
6 月 第一日曜日	八乙女風神堂祭典
7 月 22 日～29 日	太子伝会
7 月下旬	いなみ太子伝会観光祭
8 月下旬 (4 年に一度)	国際木彫刻キャンプ
9 月	寺のまちアート in いなみ
9 月	井波彫刻まつり
11 月	木彫りの天神様展・物産フェア

次にそれぞれの祭りについて説明していく。南砺市アイスフェスは伝統工芸・井波彫刻の職人たちによる、その年の干支の大雪像を観賞できるイベントである。

よいやさ祭りは毎年 5 月 3 日に行われる、商売繁盛・家内安全を祈願する神事として始まった祭りである。3 つの獅子と 5 つの屋台とともに町内を賑わせる。

八乙女風神堂祭典では春秋に吹き荒れる風を鎮め、豊作を祈願するため、八乙女山の山頂近くにある風神堂で風を鎮めるお祓いが行われる。

太子伝会は井波別院瑞泉寺の伝統行事である。8 つの掛け軸に描かれた絵をもとに、聖徳太子の一生を 9 日間かけて語る「絵解き」や、聖徳太子二歳像の「ご開扉」などが行われる。

いなみ太子伝観光祭は太子伝会の期間に行われる井波の代表的なイベントである。勇壮な木遣り踊りの奉納や清涼感あふれる氷の彫刻などが行われる。

国際木彫刻キャンプは「木彫りを通して世界をつなぐ」をテーマに 4 年に一度開催して

いる国際交流イベントである。木彫刻のイベントとしては国内最大規模を誇る。

寺のまちアート in いなみは寺・民家・商店など約 100 箇所をギャラリーに見立て、木彫や工芸、写真、生花など 400 点余りの多彩な作品が飾られるイベントである。街全体がアートな雰囲気に包まれる。

井波彫刻まつりは長い歴史を持つ、地域の伝統産業である井波彫刻を広く紹介するイベントである。「彫刻公開制作コーナー」が開催されるほか、各彫刻工房による作品展示が行われる。

木彫りの天神様展・物産フェアは 100 体以上の井波彫刻「天神様」が展示・即売される。展示会場には、井波彫刻師が販売員として説明をする。

### 参考文献

- 福野町史編纂委員会 1964 年 『福野町史』  
同上 2005 年 『続福野町史』  
福野夜高保存会 2003 年 『万燈：福野夜高三五〇周年記念誌』  
井波町史編纂委員会編 1970 年 『井波町史 上巻』  
千秋謙治著 1990 年 『井波 歴史のうねり 六〇〇年』  
千秋謙治著 2005 年 『瑞泉寺と門前町井波』

### 参考にしたウェブサイト

- 「南砺市の観光情報サイト」  
(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/kanko/index.jsp> ; 2016 年 1 月 18 日閲覧)  
「南砺市公式ホームページ」  
(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/index.jsp> ; 2016 年 1 月 6 日閲覧)  
「いこまいけ南砺 年間イベント」  
(<http://nanto.zening.info/event.htm> ; 2016 年 2 月 2 日閲覧)  
「砺波地域市町村合併協議会」  
(<http://gappei8.city.nanto.toyama.jp> ; 2016 年 1 月 9 日閲覧)  
「福野観光案内所」  
(<http://www.tabi-nanto.jp/fukuno/about.html> ; 2016 年 1 月 9 日閲覧)  
「総務省統計局」  
(<http://www.stat.go.jp/index.htm> ; 2016 年 1 月 10 日閲覧)  
「南砺市 さきがけて 緑の里から 世界へ」  
(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/index.jsp> ; 2016 年 1 月 10 日閲覧)  
「人口・面積・人口密度」  
(<http://demography.blog.fc2.com/> ; 2016 年 1 月 10 日閲覧)

「真宗大谷派 井波別院 瑞泉寺のオフィシャルホームページ」

(<http://www.geocities.jp/inamibetuinzuisenji/> ; 2016年1月11日閲覧)

「南砺市役所」

(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/index.jsp> ; 2016年1月30日閲覧)

「なんと-ecom」

(<http://mu52002.group.nanto-e.com/> ; 2016年1月30日閲覧)

「とやま観光ナビ」

(<http://www.info-toyama.com/> ; 2016年1月30日閲覧)

「井波観光案内所」

(<http://www.tabi-nanto.jp/inami/> ; 2016年1月30日閲覧)

「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」

(<http://inami-camp.city.nanto.toyama.jp/index.jsp> ; 2016年1月30日閲覧)

## 第 1 部 福野の調査報告



# 人々が繋ぐ地域の誇り高い祭り—南砺市福野町の夜高祭—

今井綾音、大間知実咲、竹田里奈

## 1. 福野夜高祭とは

「福野夜高祭」とは毎年5月上旬に南砺市北部の福野地域で行われる行燈の祭りである。前夜祭、宵祭り、曳山祭で構成され、4月30日に前夜祭、5月1日と2日に宵祭り、3日に曳山祭という流れで行われている。毎年多くの観光客でにぎわい、2015年は前年比1万4000人増の8万2000人の観光客が訪れた<sup>6</sup>。祭りのメインは2日目の夜に行われる、行燈と行燈の壊し合い（引き合い・ケンカと呼ばれる）であり、観光客の多くはこれを目当てとして観に来ている。以下ではまず、夜高祭の由来について述べる。

### 1-1. 夜高祭の由来

「夜高祭」は、富山県内では福野夜高祭だけでなく、砺波市の砺波夜高祭りや同じく砺波市の庄川観光祭（庄川夜高行燈）、小矢部市の津沢夜高あんどん祭り、射水市の黒河夜高祭などがある。

福野、砺波、庄川、津沢で行われる夜高祭は、江戸前期から中期の慶安～万治年間に新田開発や町立てが行われた地域であり、新しく開発した土地の豊かな稲作を願い、小さな祭祀を行ったことが始まりである<sup>7</sup>。

そうした小さな祭祀が変化したのは、福野で起こった大火事がきっかけである。町立てが行われた翌年、福野の町は火事で全焼した。そこで、町の平安無事のため代表を伊勢神宮に参拝させ、その御分霊を勧請した。彼らが福野に戻る際に、俱利伽羅峠付近で日が暮れてしまい、福野の人々が手に行燈を持ち、迎えに行った<sup>8</sup>。これをきっかけとして、福野では「神を迎える祭り」として行われるようになった。また、福野の人々が手に持っていた行燈は装飾され、大型化し、福野夜高祭へと発展していった。この行燈が後に砺波や庄川、津沢等の周辺地域にも広まり、稲の豊作祈願という由来はそのままに、夜高祭として行われるようになったのである<sup>9</sup>。また富山県内には他にも農村地域で小規模の夜高祭が行われていたが、その多くはすでに消滅しているようである。

こうした夜高祭はその後の開拓移民によって北海道・空知地方の沼田町にも伝えられており、今日沼田町夜高あんどん祭りとして行われている<sup>10</sup>。

<sup>6</sup>2015年5月9日 朝日新聞 第31面

<sup>7</sup>北野潔 2004年3月 『夜鷹行燈と夜高行燈について—いつ、なぜ「鷹」が「高」に変わったか—』 富山史壇 第142-143合併号

<sup>8</sup>福野夜高保存会 2003年3月20日 『万燈』

<sup>9</sup>阿南透 2014年 『となみ夜高祭り』の成立 江戸川大学紀要24

<sup>10</sup>「北海道沼田町」(<http://www.town.numata.hokkaido.jp/>)

## 1-2. 七町による夜高行燈

福野夜高祭の担い手は、福野神明社の氏子である御蔵町、浦町、辰巳町、横町、新町、上町、七津屋の7つの町である（図1）。



図1. 各町の位置 (Google マップより地図作成)

7つの町の中でも「四町」と呼ばれる「浦町」「横町」「新町」「上町」は祭りの核となる町である。祭りのメイン会場となるのは、上町にある「上町交差点」であり、四町の中央に位置する。また、上町交差点は周囲を3つの銀行に囲まれていることから、通称「銀行4つ角」と福野の人々から呼ばれている。この銀行四つ角では祭りの間、全ての行燈が行き交い、各町の行燈を観ることができる。

祭りで使用する行燈は、毎年7つの町でそれぞれ制作する。行燈の種類は、大行燈・中行燈・小行燈・ちび行燈の4種類ある。大行燈は高校生以上、中行燈は高校生～中学生、小行燈は中学生～小学生、ちび行燈は小学生～幼児など、その行燈を引くおおよその年齢に合わせて制作されている。

ただし、全ての町が大・中・小・ちびの4つの行燈を制作するとは限らない。行燈を制作する人数や行燈に乗る人の年齢、作業の開始時期などによって制作する種類や個数が町によって異なる。平成27(2015)年は、7つの町合わせて全部で22の行燈が制作された。御蔵町は大行燈・ちび行燈の2つ、横町は大行燈・中行燈・小行燈・ちび行燈の4つ、浦町は大行燈・中行燈・小行燈・ちび行燈の4つ、辰巳町は大行燈・中行燈・小行燈の3つ、新町は大行燈・小行燈・ちび行燈の3つ、上町は大行燈・小行燈の2つ、七津屋は大行燈・中行燈・小行燈・ちび行燈の4つ制作した（表1）。

表 1. 各町が行燈の数

町名	大行燈	中行燈	小行燈	ちび行燈	合計
御蔵町	1			1	2
浦町	1	1	1	1	4
辰巳町	1	1	1		3
横町	1	1	1	1	4
新町	1		1	1	3
上町	1		1		2
七津屋	1	1	1	1	4
計	7	4	6	5	22

平成 14 (2002) 年には 24 の行燈があった<sup>11</sup>が、その後、浦町と御蔵町がそれぞれ小行燈を 1 つずつ減らし、現在の 22 の行燈になった。行燈のモチーフは、各町で以下の違いがある (表 2)。

表 2. 各町が行燈の山車と釣物 (『福野夜高行燈・曳山』(野夜高連絡協議会) より作成)

町名	山車	釣物	
		前	後
御蔵町	花車	鳳凰	火炎軍配
浦町	御所車	火炎太鼓	のし
辰巳町	宝船	宝物	巾ちやく
横町	大黒	牡丹軍配	鶴と亀
新町	神輿	冠大ぬさ鏡	獅子牡丹
上町	高御蔵	鳳凰	打出の小槌・扇子
七津屋	屋形船	羽衣	恵比須

表 2 の通り各町内の行燈のダシとツリモノにはそれぞれモチーフがある。この表の山車や釣物は主に大行燈のものを差しており、中行燈以下は必ずしもこの表の通りとは限らない。町によっては、大行燈とその他の行燈でモチーフを変えているところもある。例えば、辰巳町では大行燈の山車は宝船であるが、中行燈の山車は花車、小行燈の山車は竜宮城と 3 つとも山車の形が異なる。また、御蔵町では、2014 年まで制作していた小行燈は大行燈を小さくしたものであったが、2015 年に制作されたちび行燈は、山車にアニメのキャラクター (妖怪ウォッチのジバニャン) が使用された。反対に新町では行燈の種類に関係なくどれも大行燈と同じ形や模様をデザインしている。以下は 2015 年に筆者が撮影した各町の内

<sup>11</sup>福野夜高保存会 2003 年 3 月 20 日 『万燈』

燈の様子である。カッコ内は山車・釣物（前）・釣物（後）の順に示している。また、中行燈と小行燈は撮影できたものだけである。



写真 1. 御蔵町の  
大行燈  
(花車・鳳凰・火炎軍配)



写真 2. 浦町の  
大行燈  
(御所車・火炎太鼓・のし)



写真 3. 辰巳町の  
大行燈  
(宝船・宝物・巾ちゃく)



写真 4. 横町の  
大行燈  
(大黒・牡丹軍配・鶴と亀)



写真 5. 新町の  
大行燈  
(神輿・冠大ぬさ鏡・獅子牡丹)



写真 6. 上町の  
大行燈  
(高御蔵・鳳凰・打出の小槌  
と扇子)



写真 7. 七津屋の  
大行燈  
(屋形船・羽衣・恵比寿)



写真 8. 七津屋の  
中行燈  
(七津屋は中行燈と小行燈でモチーフが異なる)



写真 9. 七津屋の  
小行燈  
(七津屋は中行燈と小行燈でモチーフが異なる)



写真 10. 新町の中行燈 写真 11. 新町の小行燈 写真 12. 御蔵町のちび行燈  
 (新町は中行燈も小行燈もモチーフが同じ。御蔵町のちび行燈は子供たち向けのキャラクターがモチーフとなっている)

### 1-3. 夜高行燈の構成

夜高祭で使用されている行燈は、主にダシ、カサボコ、シンギ、ツリモノ、デンガク、ダイで構成されている (図 2)。ここでは行燈を構成している部位について紹介する。

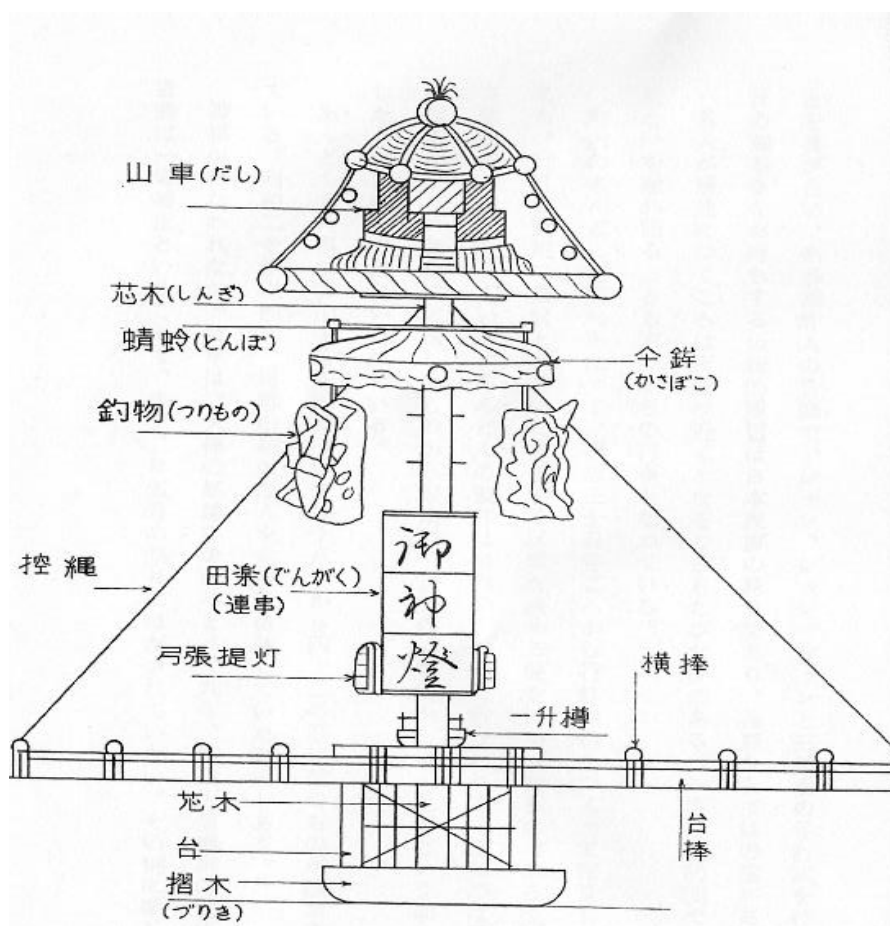


図 2. 夜高行燈の構成 (『福野の夜高あんどん雑考』(長岡一忠) より)

#### ダシ

ダシとは、全体の一番上にある大きな飾り行燈のことである。ダシは「山車」と表記される。行燈の中心の先の飾りを出すという意味からその名がついたと言われている。

#### カサボコ

カサボコとは、ダシの下に円状に吊るされている幕のことである。カサボコは「傘鉾」と表記される。「オシメ」や「コシマキ」と呼ぶところもある。カサボコの文字や色でどの町が行燈か知ることができる。

#### シンギ

シンギとは、行燈の中心を支える棒のことである。「心木」「心棒」「神木」「芯木」など表記の仕方は様々である。

#### ツリモノ

ツリモノとは、行燈の前と後ろに吊るされている飾り行燈である。正式には「ツリモノ」であるが、訛って「ツリモン」と呼ぶ地域がほとんどである。行燈を飾り立てるために付けられる。

#### デンガク

デンガクとは、前後のツリモンの間に挟まれた四角の形をしたもののことである。デンガクは「田楽」と表記されるが、これは料理の「田楽」と形が似ているためであると言われる。「連楽」と呼ばれることもある。デンガクには武者絵や氏子の町名などがかかっている。

#### ダイ

ダイとは、行燈の一番下で行燈全体を支える木の土台のことである。台棒、横棒、台、摺木（づりき）が組み合わさって作られている。近年の摺木の底部には車輪が左右に一つずつ付いている。

他に「ダイ」を繋ぎ合わせたり、シンギとダイを結ぶ縄などがある。シンギとダイを結ぶ縄は「控縄」と呼ばれ、ダイの上に乗る人が身を支える意味もある。このようにして行燈全体が完成する。

なお、夜高行燈は「大行燈」「中行燈」「小行燈」と大きさによって名称が分けられるが、それらの構造に基本的な違いはない。福野の夜高行燈では「小行燈」よりさらに小さい「ちび行燈」も作られる。

### 1-4. 夜高祭の担い手と役割

行燈制作の主な流れは、①木で骨組みをつくる、②竹でダシとツリモノの行燈の形を作る、③和紙を貼る、④線引き・蠟引きをする、⑤色付けする、という流れである。線引きや蠟引き、色付けの仕方など各町内によって細部に違いがある。

こうした行燈の制作は、2月半ば～3月頃から開始される。作業は各町の会館などで毎晩19時～22時頃に行われているところが多い。2月や3月は日曜日が休みで、4月に入って

からは日曜日でも日中から作業を開始しているところが多い。

行燈制作を行うのは若衆である。若衆とは主に 20 歳前後～25 歳くらいまでの年齢の男子を指す。その若衆のまとめ役や行燈を動かす指示役として若衆頭、(副頭がいる町もある。若衆頭と副頭を合わせて頭連中と呼ぶ)、さらに行燈の引き回しの最高責任者として裁許が各町で決められている。裁許の数は、町によって異なり、横町 4 人、浦町 3 人、辰巳町 3 人、御蔵町 2 人、新町 4 人、上町 3 人、七津屋 3 人である。その他、行燈が進む道を開けたり、祭りの交通整理をする役として誘導係がある。25 歳で若衆頭を務めたあとは、行燈制作から離れ、42 歳頃に裁許につくというのが主流である。若衆頭が 25 歳であることや裁許が 42 歳であることは、男性の厄年が 25 歳、42 歳であることと関係している。若衆頭や裁許を終えると若衆 OB、裁許 OB となる (図 3)。

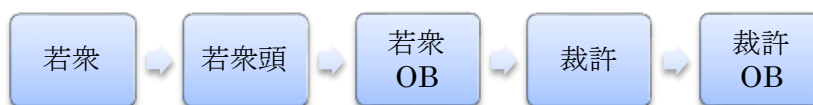


図 3. 役割の流れ

ただし近年は、行燈制作の担い手のメインとなる若衆の減少により、その年齢層は変化している。町によって行燈制作をする若衆に入る年齢を早くする町と、若衆を退く年齢を遅くする町があり、その対応の仕方は各町の状況 (子供がいるかいないか等) によって異なる。

一方、若衆の年齢範囲を変えていない町も一部ある。若衆の年齢範囲を変えていない町も若者が多いということでは必ずしもなく、OB に行燈制作を手伝ってもらい、若者 (人数) 不足を補っている。

また、現在は人数不足により行燈制作にその町の人以外の人に参加している町がほとんどである。しかし、それは全くのよそ者ではなく、町内の人とつながりのある人 (その町出身で現在町外に住んでいる人など) である場合が多い。また、それでも人数が不足していると、外部に向けて行燈制作の公募をして、行燈制作への参加を呼びかけることもある。

このように若者が町外・県外へ出ることで、OB が多く準備に参加したり、町外の人に手伝いにきてもらったりと、全体を通して準備の段階で人手の少なさが見られる。それに伴い、若衆頭や裁許の年齢も年々上昇しているのである。

## 2. 祭り準備

### 2-1. 祭りに向けての動き

#### 2-1-1. 裁許会の動き

祭りが開催されるまでに、さまざまな下準備がある。それを主に動かしていく役目を担

うのが当番裁許である。当番裁許は、スケジュールを決めたり、会議前の準備(議事・資料の作成)、名簿や書類・依頼まとめ、連絡協議会へのお願い、挨拶まわりなど、毎週何かしらの仕事に追われる(表4)。また、下記のスケジュール以外にも、臨時で裁許会が開かれることもある。

**表4. 2015年の当番裁許のスケジュール**

3月8日(日) 挨拶回り	当番裁許が、あらかじめいつ行くのかの連絡を取った上で、各町の裁許に一軒一軒挨拶しに行く。この時に第一回裁許会のお知らせを配る。
3月21日(祝日) 裁許顔合わせ	裁許の顔合わせをし、また各町が道路の補修箇所を依頼する。当番がそれを取りまとめて市役所にもっていく。また、来週の裁許長会議での名簿(若い衆、交通整理員、行燈の上に乗る搭乗者の名はだれかを記載したもの)や、水道栓の位置の詳細の提出を各町にお願いする。
3月28日(土) 裁許長会議	補修箇所などをまとめた資料を持ってくる。また、名簿を各町が提出し、当番が回収する。
4月5日(日) 全体裁許会	自己紹介をした後、警察署からの指導事項を聞き、ねりまわしの順番の抽選をする。また、高校生なども参加するため、中高の校長からの門限や禁酒のお願いを代読する。その他に保険加入日の締め切りの説明や、補助金分配の説明を行う。この日は来賓(敬神会会長・行政センター長(市長代理)・警察署4人・市役所観光課・消防団・商工会)も呼ぶ。来賓の方も合わせると総勢30人ほどになる。
4月12日(日) 安全点検	各町の裁許長が集まり、町全体を歩きながら確認作業を行う。まず、ねりまわしの際のコースの折り返しの詳細や行燈がどこまで道に入っているかを各町の裁許長に説明してもらい、他町がそれを確認する。また、すり替え時のすり替え待避場所(行燈の定位置)の確認を行う。電線や道路の安全を確認することも並行して行う。主に補修箇所として各町が依頼した部分がちゃんと補修されているかの確認する(北陸電力・ケーブルテレビ・NTTにこの日までに補修を依頼している)。また、古くからの習わしで、もしも火事になった時のためにどこから水を引けるかの水道栓の確認も行う。

#### 2-1-2. 各町の動き(七津屋の場合)

まず、1月中旬に新年会を行い、今年度の夜高祭のメンバーの顔合わせを行う。

ついで2月第一週の日曜日(2015年の場合は2月1日)に、七津屋会館の2階で公聴会を開く。そこでその年の予算を決める。町の人全員が集まっている中で予算を発表する。



年配の方がなにか意見や文句などと言われることが多いが、最近はすんなりいくことの方が多い。しかし昔に比べると予算も減ってきているため、連絡協議会から補助金をもらっている。

そして、2月第3日曜（2015年は2月15日）の朝9時より行燈制作を開始する。ちなみに、4年に一度の当番の年はしゃんしゃんの練習があるため、早めに制作を終わらせる必要があり、開始の日時を一週間早める。最初は、去年の行燈の紙めくりや会館の掃除、行燈配置を行う。次の日から竹細工が必要なところはやり、竹細工が壊れておらず紙を貼れるところには紙を貼る。はじめ一週間は竹細工や紙貼りがほとんどであり、その後に蠟引き、紙貼りを並行して行う。

4月に入るまでは、19時30分～23時00分にほぼ毎日活動し、日曜日が休みである。

## 2-2. 行燈の制作

様々な準備が整ったら、ついに行燈制作を開始する。行燈の制作は、町によって異なるがたいてい2月中旬から下旬に始まり、主に若衆を中心に行う。昔は30代半ばを過ぎると行燈制作はしなかったが、今は人手不足のため、それ以上の年齢の人も制作している。他町や砺波から来て手伝ってくれる人もいる。制作をしなければ行燈に乗れない、若いころから制作をしていなければ乗れない、他町の人は制作しても乗れないなどといわれることもあるが、実際の所はそんな閉鎖的なことはなく、何年間か制作に携わっていれば行燈に乗り、喧嘩に参加することもある。

以下、行燈の制作過程を説明していく。全体の流れとしては「竹細工、配線、紙張り、下絵描き、蠟引き、色塗り」の順で作業を進めていく。

まず竹細工は、前年壊れた部分を、細長い竹で形を作る。それを番線で締める。その際、手で揺らしたりして竹の強度を確かめる。次に行燈を照らす豆電球の配線をする（写真13）。

骨組みと配線ができれば、次に和紙を使って紙張りをする（写真14）。これは毎年するものであり、誰にでもできる作業であるため、若衆に加わったばかりの高校生はこの作業から始める。紙が貼れたら、和紙に下絵を描く。そして、溶かしたロウをその下絵の縁どりとして塗っていく。これは蠟引きと呼ばれる（写真15）。この蠟引きの作業は比較的難しい作業であり、町によってはできる人とできない人がいる場所もあり、若い人よりも、経験のある方がやることが多い。

ロウ引きができれば、最後に色塗りをする（写真16）。染色用の粉末を水を温めて溶かして色を作る。だいたい色は、赤・ピンク・黄・青竹・青の五色が基本である。あとは各色を混ぜて色を作り、一色を使う際、濃淡を調整して色味を変えたりする。色塗りも紙張りと同様、誰でもできる。色は薄いもの（黄色）から塗っていく。青竹という色が一番濃い。強い色は色があせやすいため、最後に塗る。また、各町によって、この色を多く使うという色がある。例えば、新町は青竹、上町は、ピンクを基本色としている。



写真 13. 配線の様子 (新町)



写真 14. 紙張りの様子 (横町)



写真 15. 蠟引きされたつりもん (御蔵町)



写真 16. 色塗りの様子 (新町)

以上、行燈制作の工程を述べてきた。基本的なところは各町あまり変わらないものの、細かい所には違いがある。特に、唯一喧嘩に参加しない御蔵町行燈は、他町行燈と作りが異なっている部分がある。ほかの町が、竹を 3 本重ねて竹細工を作るのに対し、御蔵町は、竹 1 本のみで作る。そのため、喧嘩のようなことをすれば、一発で壊れてしまう程もろいため、あまり行燈に乗れるところが少ないつくりとなる。

### 2-3. 行燈の「台締め」と「組立て」

行燈の台締めと組立ては準備の仕上げであり、祭り前日（4月30日）や、当日（5月1日）の朝に、主に若衆によって行われる（表5）。

表 5. 各町の台締めと組立ての日時

	台締め	組立て
上町	4月28日13時30分～	4月29日
七津屋	4月26日13時～	4月30日9時～
新町	4月29日13時～	5月1日9時～
浦町	4月29日18時30分～	5月1日6時～
辰巳町	4月29日19時～	5月1日6時～
横町	4月29日9時～	5月1日5時～
御蔵町	4月27・28日19時～ 4月29日19時～ 花組み	5月1日5時～

「台締め」とは、行燈の土台となる台を締め上げる作業である（写真 17）。縄と番線で土台の丸太をしめて、上からまた縄でもう一度締めて、番線を覆う。なお、20、30 年前までは番線がワイヤーだった。さらに昔は番線なしで縄だけで締めていたという。

縄の締め方の向きや出だしを間違えると初めからやり直しになるため、気を付けながら、ゆるめないように締めていく。この作業は今でも人力のみでどの町も行う。



写真 17. 台締めの様子



写真 18. 七津屋の組み立ての様子

「組立て」はその名の通り、毎年分解して保管されている行燈のパーツを順に組み立てて行燈を仕上げる作業である。台締めと組立ては各町、時間もやり方も違いがある。組立ては、クレーンやレッカー車を使って組立てをする町（写真 18）が今日多いが、新町と横町は昔ながらの人力の方法で組立てをする。また、上町と七津屋は組立ての後に、4 月 30 日の前夜祭の時に駅前仮設小屋をたて、そこで点灯式をする。そのため他の町に比べて台締め・組立てを早く行う。以下では、人力による組立て作業について見ていく。



写真 19. 台を横に倒している様子

①まず、蔵の前に出してあった台を、車輪をつけて組み立てる場所に持ってくる。電柱まで持ってきたら、車輪を抜いて横に倒す。横に倒す時に、台の所に足を挟んでけがをしないといけないので、人が入らないように注意する。そこで電柱にはしごをわたし、滑車を開いてロつける。



②倒した台に心木をさす。心木をさす時に、棒が刺さりやすい角度にするために、下に木のブロックを入れる。そのあとに「わっぱ」という金具を入れる。これは、ストッパー、位置決めなどになるものである。

写真 20. 心木をさしている様子



③田楽をさす。行燈を組み立てた後にこの中に大きなろうそくを入れる。

写真 21. 田楽をさしている様子



④おしめ(かさぼこ)をさす。かさぼこは神様として大切なもののため、地面につけてはならず、つけるまで人が持っていないといけない。

⑤どんぼと呼ばれる補強用の板を心木にさす。これに、あとでつりもんをぶら下げる。

写真 22. かさぼこを地面につけないように支えている様子



⑥山車をつける。山車はとても重く、これが一番重労働である。ここで滑車が役に立つ。このとき、屋根のうずが下になってつぶれないように気を付ける。また、山車の穴に心木を入れることもなかなか難しく、うまい角度で入れる必要がある。下敷きにならないように声をかけ合い行う。



写真 24. つりもんをぶら下げている様子

⑦つりもんをぶらさげる。少し場所を移動して、行燈をたててぶら下げる。上に二人がのってロープでつるし、下から二人が支えながらつるす。つりもんの高さはその年の若頭の好みで決める。この時、交通の邪魔にならないように気を付ける。この道はバスが通るが、そのバスがいつから始めたりと、とても気を使っている。山車をつけるまでは、色んな方の力を借りるが、つりもんからは若い衆と裁許前の人で行う。



写真 25. 御蔵町之行燈

⑧14 時に行燈のバッテリーが届いたら、それをつける。大行燈の場合、前後に 7 個ずつ合わせて 14 個、小行燈では 2 個、ちび行燈では 1 個である。以上、人力の組み立てを述べてきたが、御蔵町のみ、他町にはない組立ての工程がある。

御蔵町之行燈(写真 25)は、他町よりすこし細かい作りになっており、行燈の上の山車の部分にあたる所で、「花組み」と呼ばれる行程がある。もともと一つ一つ花と呼ばれる小さい部分に分かれておりその花は全部で 25 個ほどある。それをかごに刺して番線で縛る。電気配線を偏らせないようにすることに気を遣う。引き合いに参加しない御蔵町之行燈はほかの町之行燈よりも繊細に作られている。

### 3. 太鼓競演会、文久の大打燈、前夜祭

夜高祭が行われる前に、太鼓や笛などを使ったお囃子の腕を競う「太鼓競演会」が行われる。また、夜高祭前日には前夜祭が行われる。以下それらの様子を記していく。

#### 3-1. 太鼓競演会

太鼓競演会は夜高祭のお囃子に使われる夜高太鼓を保存する取り組みの一つとして行われている。約 30 年前までは祭りに参加する大人が夜高太鼓を叩いていたが、ほとんど祭りを見ているだけだった子どもたちが夜高祭に関わり、一緒に祭りを盛り上げていくきっかけとなるよう夜高太鼓を子どもたちに叩かせるようになった。当時は女子が太鼓や笛を演奏することはなかったが、現在では女子も積極的に演奏に参加している。これは、町の子ども数の減少に伴う変化であると考えられる。

2015年は4月29日に太鼓競演会が行われた。この競演会は2015年で38回目であり、大変伝統があるものである。アミューという福野町にあるショッピングセンターで行われ、参加対象は小学生から高校生くらいまでの福野町に暮らす子どもたちである。夜高祭に参加する7町以外にも松原本町と四区町という町が参加していて、それらの9町でお囃子の腕を競いあった。小学校低学年の部、同高学年の部、中学生の部の3つの部門に分かれてその腕を競い合う。9町の中でも松原本町が毎年優秀な成績を残している。午後1時から午後4時まで競技、その後審査が行われ、午後5時からその表彰式が行われた。



写真 26. 太鼓競演会の様子



写真 27. 笛や太鼓を演奏する子どもたち

夜高行燈の囃子である太鼓と笛は、各町内でそれぞれ継承されている。太鼓は、3拍子のリズムを基本としている。1曲は6題目まであり、演奏時間は2分程度である。2人1組でお互いに向き合うような体勢（カタカナのハの字）をとり、1人が小バチでリズムを刻み、もう一人が主題を力強く叩くこの演奏法を「そえ打ち」といい、この演奏の腕を子どもたちは競い合う。笛は横笛を使い、近年は小・中学校の女子が担当することが多い。その中には、2、3年で習得してしまう子もいる。

太鼓競演会に参加した辰巳町の子どもの話によると、1つの町から8~10のチームが競演会に参加する。各町の子供たちは4月になると太鼓のそえ打ちや笛の練習を日曜以外は毎日19時~21時まで裁許OBや若衆OBたちから指導を受けながら行っている。「そえ打ち」とは4人1組で2つの太鼓を2人ずつで叩く夜高祭では基本となる太鼓の叩き方である。小学1年生くらいになったらお囃子の太鼓の練習をどの子どももするようになるが太鼓を辞めるタイミングは人それぞれで、話を聞いた女の子のように高校生になっても夜高祭への情熱を持って練習している子もいる。既に小学生の子どもたちの太鼓の指導を任せられる立場になっていて責任がだんだん重くなっていると話していた。

子どもたちは、夜高祭に直接関わる裁許や若衆だけでなくいろいろな人たちから教わりながら太鼓や笛の技術を習得している。五線譜のあるようなきっちりとした楽譜ではなく耳で聴いて覚えるとのことである。皆、太鼓や笛に部活動のように真剣に取り組んでいて、練習を通じて太鼓や笛の技術だけでなく、礼儀や挨拶も学んでいる。

また、夜高太鼓はこの太鼓競演会だけでなく氷見市で 2 月ごろに行われる「伝統文化子ども教室発表会 in 富山」という県のイベントにも出場するなど福野だけでなく様々な場所でその音を響かせている。

### 3-2. 文久の大作燈<sup>12</sup>

文久の大作燈とは江戸時代の文久年間の夜高祭で練り回されていた大作燈のことである。明治期に電線ができ、高さ制限が課され文久年間以来の大作燈では制限にひっかかってしまうため、文久の大作燈が町内を練り回すことはなくなった。近年になって七津屋の故・晩田誠一さんがこの大作燈を復活させる取り組みを行い、2000 年には福野開町 350 周年事業として展示用に復活した。文久の大作燈を正確に再現しきることは出来なかったもののおおよその特徴をうつした大作燈が 2005 年から夜高祭前夜祭にて再び練り回されることとなった。

文久の大作燈の上部の山車のデザインはこれまでに「宝船」「牛若丸」「牛若丸と弁慶」「風神」と変化していて、2015 年のデザインは「風神」であった。また、大作燈は喧嘩をしたりして骨組が傷んだりすることもないので、夜高祭が終わるまでは駅前に置いておき、その後骨組が壊れないようにしてまた次の年も使えるように分解して保存される。

文久の大作燈は夜高祭連絡協議会から毎年 40 万円ほど支給され、その費用をもとに福野各町の人々や他の地域から来たボランティアの人々によって行われている。一度制作の様子を見学したが、制作を行っていたのは制作の経験が豊富な年配の人たちが中心で、人数も 4～5 人ほどであった。2015 年の文久の大作燈の組み立ては、4 月 30 日の午前中に福野駅前でクレーンを使って行われた。夜高祭に使われる各町の行燈の制作に女性が関わることは許されないが、この文久の大作燈の制作では例外的に認められている。それでも大作燈の作り手不足は深刻な問題で、大勢の町民に参加して欲しいという呼びかけが福野夜高保存会によって行われている。

### 3-3. 前夜祭

4 月 30 日 18 時から福野駅前において夜高祭の前夜祭が行われた。前夜祭では、福野町の子どもによる歌やダンスのパフォーマンスや、福野町婦人会による踊りや、そして今年初参加した毎年 8 月に行われるイベントのスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに参加しているブラジル音楽を奏でる楽団トゥーマラッカによるパフォーマンス、夜高節の大合唱、町民による夜高節の総踊り（写真 28）、そして文久の大作燈の練り回しが行われた。

福野夜高祭で最大の行燈である文久の大作燈の練り回しは前夜祭のメインイベントであり、19:30 に点灯式、20:00～21:00 に練り回し（写真 29）が行われ、22:00 には前夜祭が終了した。文久の大作燈が練り回されるのは、福野駅から大通りの 300 メートルくらいの範囲である。大作燈は高さ 15 メートルもあり、電線がある道を通ると引っかかって

---

<sup>12</sup>2000 年 5 月 1 日 北日本新聞 参照

しまうため、電線が少ない駅近くの大通りを練り回している。2015年の文久の大作燈の誘導係を担っていたのは主に七津屋の人々であり、七津屋の人が取る音頭に合わせて福野の町の人々は大作燈についている縄を引っ張って大作燈を動かしていた。また、文久の大作燈のお囃子の太鼓は各町の小学5年生以上の子どもたちが叩いていた。文久の大作燈の練り回しは、夜高祭当日の各町の人々がそれぞれの行燈の美しさや力強さを競い合う様子とは異なり、7町以外の近隣の福野町民もお囃子に参加して町全体の人々が一体となってその行事を盛り上げていた。



写真 28. 住民による夜高節の総踊り



写真 29. 文久の大作燈の練り回し

#### 4. 夜高祭当日の様子

##### 4-1. 祭りのスケジュール

ここでは2015年の福野夜高祭の大まかなスケジュールについて説明する（図4）。

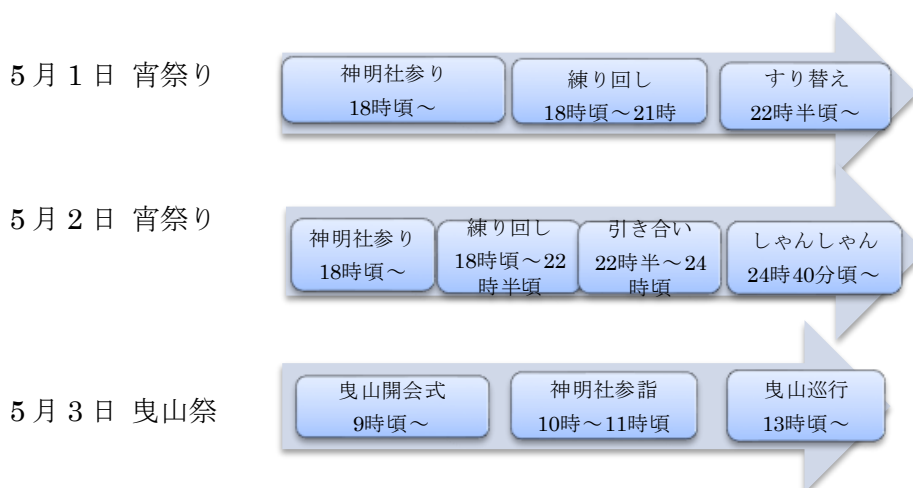


図 4. 2015年福野夜高祭のスケジュール



5月1日と2日の「宵祭り」はどちらも18時にスタートし、各町の行燈が自町を出発して行燈とともに神明社へ参拝した後に、他町の練り回しを行う（横町は自分の町に神明社があるため最後に参拝する）。練り回し後、1日は「すり替え」、2日は「引き合い」をする。さらに、2日に「引き合い」を行った後、自町の練り回しを行い、それぞれの会館へ戻り、行燈を解体をする。各町の裁許は指定された時間に銀行四つ角へ戻り、「しゃんしゃん」を行って宵祭りが終了する。

5月3日の「曳山祭」は9時頃にスタートし、銀行四つ角で開会式を行った後、神明社で儀式を行う。その後、13時からヤマをひいて町を練り歩く「曳山巡行」が行われる。曳山は行燈のように7つの町全てが個々に持っているのではない。「四町」がメインで持ち、「辰巳町」は「浦町」、「七津屋」は「上町」と組になっている。これは、辰巳町は浦町の分家、七津屋は上町の家という関係があり、本家である浦町、上町がヤマを保有しているということである。また、「御蔵町」は四町のどこにも属していないため、ヤマを持っておらず、曳山祭に参加していない。この「曳山祭」は神を乗せたヤマを曳いて町を歩くので、「神迎え」の行事である「宵祭り」を行わなければならないものとなっている。

表 5. 夜高祭についての用語説明

宵祭り	曳山祭の前に、福野夜高祭の起源である俱利伽羅峠へ伊勢神宮の御分霊を迎えに行く様子を模したもの。
曳山祭	宵祭りに対して本祭りと呼ばれる。伊勢神宮の御分霊を乗せた山を曳き、神明社参詣の後、町の練り歩きを行う。神様が福野の町中に参る様子を模している。
神明社参り	神明社の氏子である7つの町が練り回しの前に、行燈とともに福野神明社に参拝すること。
練り回し	神明社参りの後、行燈を引きながら町を回ること。先に他町を回り、すり替えや引き合いの後に自町を回る。
すり替え	自町が行燈と他町が行燈がすれ違うこと。このときは他町が行燈に手を出さない。
引き合い	自町が行燈と他町が行燈がすれ違うときに互いの行燈を壊し合うこと。
しゃんしゃん	祭りを無事に終えたことの報告や来年の当番裁許(祭りの総括のような役割)の引継ぎをすること。
曳山巡行	屋台を先頭に、四町（上町、新町、浦町、横町）が所有している山を裁許以上の人が曳いて神明社に参詣した後、山と共に町を練り歩く。

#### 4-2. 行燈の巡行ルート

福野にある七つの町がそれぞれに作った行燈が5月1日と2日の夜、福野の町を練りまわす。巡行ルートは町ごとや祭りの1日目と2日目によって異なり、同じ町でも大行燈とその他の中・小・ちび行燈ではルートが異なっている。練り回しはかつて夜高祭を行う際に費用を出資してくれたオヤッサマと呼ばれる地主の家に行燈を見せに行くことがそのルーツとされ、オヤッサマは上町に多かったと言われている。現在でもオヤッサマの家があったところは必ず練り回しが行われることになっている。

それぞれの行燈の巡行ルートを記述する前に、行燈はどのようなルートで練り回されるのか基本パターンを記述しておく(図5、表6)。

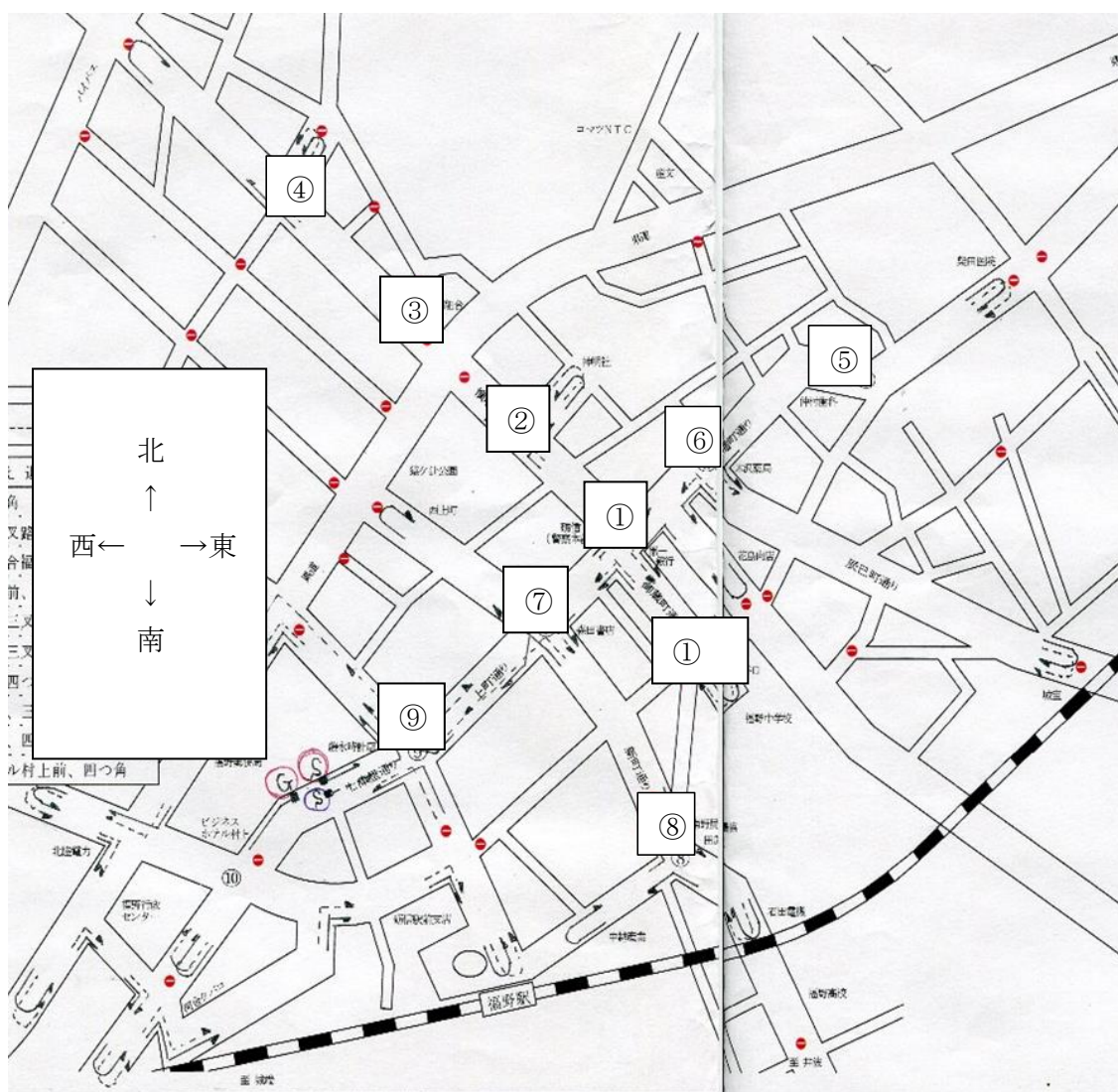


図5. 夜高祭大行燈の巡行ルート

(七津屋裁許・夜高祭巡行ルート地図より作成)

表 6. 地図中に記されている番号に対応する町・場所と巡行の基本パターン

①	銀行四つ角	行燈の各町練り回しが行われる前に全ての行燈はここに集合する。
①´	御蔵町	富山第一銀行の角で左折し、御蔵町通りを進み、福野中学校で引き返す。
②	神明社・三叉路	夜高祭は神明社の祭礼であるため全ての行燈はまず、この神明社を参拝する。
③、④	横町	③の富山県信用組合福野支店前を通り、④の旧中島荒物店前の四つ角で右折し、進んだ先の突き当りで引き返してから、バイパスまで進みまた引き返す。(2日目はバイパスまで進まず④まで進んだ後引き返す。)
⑤	浦町	⑤の浦町通りを進み、柴田医院で引き返す。
⑥	辰巳町	浦町通りで⑥の木沢薬局で左折し、辰巳町通りを進み、城宝で引き返した後、浦町通りに出て次の角で左折し、花鳥肉店まで進んで引き返す。(2日目は花鳥肉店の路地には入らない。)
⑦	上町	新町通りから栄光社のある路地を進み西上町にある猿ヶ辻公園で引き返す。
⑧	新町	上町通りを森田書店の角で左折し、新町通りを進み、石田産業で引き返した後、南野尻農協田原の向かいの角で左折し、中越産業まで進んでから引き返し、また新町通りを通って上町通りまで引き返す。
⑨	七津屋	上町通りを進み、藤永時計店の角で右折し、県道に沿って左折し、北陸電力の角で右折して引き返し、また県道に沿って福野行政センターの前を通過して、河合タバコがある路地を進み、砺波信用金庫駅前支店がある角を曲がり福野駅前まで進み引き返す。

上記の表の基本パターンに従って各町は大行燈を練り回す。

まず、上町・七津屋は、本家と分家の関係にあるため上町の後ろを七津屋が追うように練り回す。①(銀行四つ角)を出発し、②(神明社前・三叉路)へ向かい、神明社での参拝を行い、③、④(横町)を進み、銀行四つ角へ引き返し、⑤(浦町)と⑥(辰巳町)を抜け、①´(御蔵町)へ入り、銀行四つ角に戻る。そこで、1日目はすり合いが行われ、2日目は引き合いが行われる。それらが終わった後は⑦(上町)に進んで、⑨(七津屋)に入るというルートで練り回しが行われる。①(銀行四つ角)→②(神明社・三叉路)→③、④(横町)というルートは横町以外の各町に共通しているが、自分の町内は最後に練り回すことになっている。そのため、③、④(横町)を練り回した後は自分たちの町から遠い

町内の練り回しを先に行い、すり合いや引き合いが行われた後に自分の町内の練り回しを行う。

浦町・辰巳町も本家と分家の関係にあたり、練り回しは辰巳町が先行しその後を浦町が行く。①（銀行四つ角）→②（神明社前・三叉路）→③、④（横町）→⑧（新町）→⑦（上町）→⑨（七津屋）→①<sup>〃</sup>（御蔵町）→（すり合い、引き合い）→⑥（辰巳町）→⑤（浦町）のルートで練り回しが行われる。

横町は町内に神明社があるため横町の行燈は夜高祭が始まる前に参拝を済ませているので練り回しの際には神明社への参拝は行わない。そのため、銀行四つ角を出発すると神明社には向かわず、すぐに浦町に入る。④（銀行四つ角）→⑤（浦町）→⑥（辰巳町）→①<sup>〃</sup>（御蔵町）→⑧（新町）→⑦（上町）→⑨（七津屋）→（すり合い、引き合い）→③、④（横町）のルートで練り回しが行われる。

新町は、①（銀行四つ角）→②（神明社前・三叉路）→③、④（横町）→⑤（浦町）→⑥（辰巳町）→①<sup>〃</sup>（御蔵町）→⑦（上町）→⑨（七津屋）→（すり合い、引き合い）→⑧（新町）のルートで練り回しが行われる。

御蔵町…御蔵町は①（銀行四つ角）→②（神明社前・三叉路）→③、④（横町）→⑤（浦町）→⑥（辰巳町）→⑧（新町）→⑦（上町）→⑨（七津屋）→①<sup>〃</sup>（御蔵町）のルートで練り回しが行われる。

#### 【中行燈・小行燈・ちび行燈（子ども行燈）】

ここでは各町の子どもたちが主となって動かす行燈である中、小、ちび行燈（子ども行燈）の巡行ルートについて地元の人々からの聞き取りなどで得た情報を基づいて記述していく。記述では、大行燈の巡行ルートで触れた記述は省略する。

七津屋の中、小行燈は、神明社での参拝を行うと①（銀行四つ角）→⑥（浦町通り：仲村歯科のところで引き返すという道順が短縮されたルート）→⑦（上町）で進み、七津屋に入ると、七津屋にある藤永時計店で右折し、県道に沿って左折し、七津屋の行燈の待機場所へ向かうというというルートで町内巡行が行われる。ちび行燈は参拝が終わるとすぐに自分の町内に戻る。子ども行燈でも中、小行燈とちび行燈では行燈の動きに違いがあり、この違いは他町でも見られる。

新町の子ども行燈を見守っていた人に、子ども行燈の動きについて聞いてみたところ、中・小行燈は神明社の参拝が終わった後、大行燈と同じように他町を回ってから自分の町内に戻り、ちび行燈は参拝が終わるとすぐに自分の町内に戻るそうだ。

御蔵町の中、小行燈は、②（神明社）での参拝を終えると、③、④（横町）→⑤（浦町）→⑥（辰巳町）→⑧（新町）→⑦（上町）→⑨（七津屋）→①<sup>〃</sup>（御蔵町）と各町を練り回され、大行燈の各町の巡行ルートよりも短縮されたルートで行われている。ちび行燈においては、神明社を参拝した後の巡行ルートは特に決められておらず、自由にどこでも練り回すことが出来る。

辰巳町の中、小行燈は神明社での参拝を終えると、③、④（横町）→⑧（新町）→⑦（上町）→⑨（七津屋）→①（御蔵町）→⑤（浦町）→⑥（辰巳町）と練り回される。辰巳町の中、小行燈は自分の町である辰巳町の練り回しの際、大行燈も入らない細かいところまで丁寧に戻る。その理由として、大行燈よりも中、小行燈は小回りが利くということや、中、小行燈は福野町全体のものという要素よりも、その町の子どもたちのものという要素が大きいことが考えられる。つまり、大行燈と比べて、中、小、ちび行燈は他町より自町を中心にまわる傾向があり、とりわけちび行燈はその傾向が顕著である。

#### 4-3. 夜高祭当日の人々の役割

ここでは、夜高祭当日における重要な役割を持つ人々について記述していく。

##### 4-3-1. 裁許

夜高祭のとき、裁許長をはじめとする3~4人の裁許が各町に存在し、裁許を任されるのは42歳の厄年を迎えた夜高祭を知り尽くした男性である。町の行燈を取り仕切り、怪我人が出た場合やトラブルが起きた場合には裁許が責任を負う。

四町（新町、浦町、横町、上町）には当番という役割がつく年が4年ごとにある。当番となった町の裁許長並びにその裁許はその年の祭り全体を取り仕切り、裁許長会議・裁許会・道路許可・街灯許可などを行い、祭りを締めくくるしゃんしゃんの儀も当番裁許が中心となって行う。

夜高祭の3日目の曳山祭には40歳よりも若い人々はほとんど関わることはないが、42歳を迎え、町の裁許を任されると、曳山祭とも深く関わっていく。裁許は、曳山にちなんで「山裁許」とも呼ばれ、夜高祭に関わる福野町民としての節目の役である。これまで祭りの主役として若衆や若頭として活躍した人が42歳を迎え、裁許になると、夜高祭全体の責任者となる。そして裁許を終えた者は裁許OBとなり、祭りをバックアップする立場となる。

##### 4-3-2. 若衆・若衆頭

昔は18~24歳までの青年が若衆と呼ばれていたが、若い世代の減少などから現在では30歳くらいまでの男性たちも若衆として祭りを盛り上げるのに一役買っている。彼らは行燈に関する細かな仕事をこなし、行燈制作の際は制作に携わるだけでなく、行燈の予算を決めることにも関わる。祭り当日は、拍子木を持ち行燈を囲むように前から若衆頭、左右に若衆、後にも若衆がいて、行燈の進行に合わせて拍子木を鳴らし、担ぎ手に指示を送る。また、行燈が電線に引っかからないように行燈の様子を見て上に乗っている人に指示を出し、左右の障害物を避け、夜高節を唄うというマルチな役割を彼らは担っている。

新町の若衆頭が道の中心から行燈がずれていないかを確認しつつ拍子木を叩き行燈に指示を出す様子を近くで見た。大行燈の上に若衆が乗り、行燈が進行するのをスムーズに行うため電線をよけていた。新町の大行燈は他の町よりも小さめであまりたくさんの人が乗

れないため、上に乗るのは真面目でふざけたりしない人に任せているとのことである。  
なお、若衆で若衆頭を任された者はその後、若衆 OB となる。

#### 4-3-3. 誘導灯を持つ人

黄色い腕章をして誘導灯を持って行燈の先導を行っている人は、裁許 OB の人々であり、裁許よりも立場が上である。さらに、夜高祭における交通全体の仕切り役を担っており、各町の裁許は彼らの指示を見ながら行燈への指示を出すことになっている。

#### 4-4. 5月1日の夜高祭の様子

##### 4-4-1. 出陣式

各町が行燈が神明社参拝に行く前に各町で行燈の出陣式が行われる。観察した新町の出陣式の様子は、円陣を組んで気合を入れて全員で一声かけるというシンプルなものだった。出陣式が終わると小行燈、中行燈、大行燈の順に新町通りを抜け、行燈が集合する銀行四つ角に向かった。

##### 4-4-2. 神明社参拝

各町の小行燈、中行燈、大行燈は福野町内を練り回す前に必ず神明社を参拝する。神明社参拝の様子は夜高祭の最大の見どころの一つでもある。参拝の前に銀行四つ角に全ての行燈が集結するその様子からはこれから祭りが始まるという高揚感と緊張感が感じられた。集結した後、ちび行燈、小行燈、中行燈、大行燈の順に各町が行燈が神明社への参拝を行う。夜高祭における行燈の神明社への参拝は、神社の前で静かに手を合わせるような通常の参拝とは異なり、ある種のパフォーマンス性を帯びた独特な参拝で各町のそれぞれのやり方で行われている。ちび行燈や小行燈、中行燈はそれぞれの町の大行燈の参拝に倣ったやり方で参拝している。

以下、2015年5月1日夜高祭神明社参拝での各町大行燈の参拝の様子を記していく。



写真 30. 行燈を傾ける上町の人々



写真 31. 七津屋の大行燈の神明社参拝の様子

本家・分家の関係である上町と七津屋の代行燈は、上町の代行燈が先に神明社を参拝してから七津屋の代行燈が神明社を参拝した。七津屋の代行燈が参拝している間は神明社の前に2基が揃った状態になり、七津屋の代行燈の参拝が終わると同時に出発した。

上町と七津屋は同じ様式で参拝が行われ、代行燈の上に乗っていた人を全員下ろし、行燈の前方が地面にくっついてしまうほど行燈を大きく傾けて神社に向かって礼をするという形で行われていた。



写真 32. 辰巳町の裁許たち



写真 33. 酒を呑む浦町の若衆

浦町と辰巳町も本家と分家の関係にあるが、上町と七津屋の参拝の様子と異なる点は分家である辰巳町が浦町より先に参拝するという点である。

参拝は、裁許が代行燈の前に並んで立ち、鳥居と橋の間で地面に輪を描くようにしてお酒を撒いてから、誘導灯を持った人(かつての裁許)が神社の中に入り参拝する。そして参拝を終えると神社の両端に立ち神社を照らし、裁許たちが酒を呑む。



写真 34. 神明社の前にやってきた新町の代行燈



写真 35. 鳥居に近づく新町の代行燈

新町の大行燈は鳥居のすぐそばまで大行燈に近付け参拝を行う。そして行燈を一行で取り囲み、行燈の台の端にお酒をかけ順に礼をしてから、全員で一升瓶のお酒を回し飲みする。

横町は神明社は横町内にあり、祭りが始まる前に神明社へ参拝するため、祭りの当日には行わない。参拝の仕方は他の町内のように大行燈を傾けたり持ち上げたりするような派手なパフォーマンスは行わず、裁許と若衆頭が神明社で参拝するシンプルな参拝を行う。

御蔵町の大行燈は、一番に神明社を参拝した。御蔵町はすり替えや引き合いに参加しないものの、行燈を傾げるなどの力強い参拝が印象的だった。



写真 36. 御蔵町の大行燈の神明社参拝



写真 37. ちび行燈と小行燈の神明社参拝

小行燈や中行燈の参拝には各町の裁許が付いてその参拝を見守る。子供たちの「ヨイヤサー！ヨイヤサー！」と可愛らしい声が神明社に響き、大人たちの参拝をまねて行燈を傾けたりするパフォーマンスを行っていた。

#### 4-4-3. 行燈コンクール

夜高祭 1 日目には行燈の美しさを競う行燈コンクールが行われる。行燈コンクールは行燈が町内を練り回しているときに審査が行われ、それぞれの行燈の全体のバランス、色合い、蠟引き、練り回しが総合的に審査される。御蔵町はすり替えや引き合いに参加しないため、行燈の実用を考える必要がなく、繊細で芸術的な行燈を作ることに力を入れているため、毎年この行燈コンクールでは優秀な成績を残している。

2015 年の行燈コンクールは、大行燈の部では最優秀賞は上町、優秀賞は浦町、優良賞は横町で、小行燈の部では最優秀賞が浦町、優秀賞が辰巳町・新町、優良賞が新町・浦町・上町・七津屋という結果になった。

#### 4-4-4. 裁許会

すり替えや 2 日目の引き合いが行われる前に、石動証券の建物の裏で安全確認のために



必ず裁許会が行われることになっている。裁許会は安全が完全に確認されるまで続けられるため、すり替えや引き合いの際に何度も行われることが通常である。裁許会が行われな  
いまますり替えや引き合いが行われ、トラブルが起きて怪我人が出るようなことがあると、  
翌年からの祭りでは警察などの公的な監視下の範囲におけることしか出来なくなり、伝統  
的な祭りの形式を維持出来なくなる可能性が生じるため、すり替えや引き合いの前には頻  
繁に裁許会を行うことによって祭りの秩序を保っている。



写真 38. 裁許会を行う様子

#### 4-4-5. すり替え

夜高祭 1 日目は各町の行燈が上りと下りに分かれて行燈のすり替えが行われる。すり替  
えは上町通りで行われ、各町の大行燈は上り（大行燈の横をすり抜ける側）と下り（すり  
抜けられる側）に分かれて並ぶ。上りは上町・七津屋・新町で、下りは横町・浦町・辰巳  
町である。上りと下りが年によって変わることはないが、並ぶ順番は年によって異なる。  
2015 年のすり替えの際の上りの順番は前から新町・上町・七津屋で、下りの順番は前から  
辰巳町・浦町・横町であった。

すり替えは毎年 23 時 30 分頃から行われ、2015 年 5 月 1 日の夜高祭のすり替えは 23 時  
15 分くらいから行われた。年によっては 24 時を過ぎてから行われることもあるらしい。す  
り替えでは喧嘩を行わないことになっているが、酒が回っているためつい喧嘩になること  
もあるらしい。こうした事態を避けるため、前述した安全確認のための裁許会があり、2015  
年のすり替えの際も 2~3 回行われていた。裁許会が終わるまで各町の大行燈は銀行四つ角  
で待機する。待機している間は、その年に子供が生まれたり、結婚をした人を祝うために  
円陣を組み歌ったり踊ったり酒を飲んだりする。これはどの町でも行われている。めでた  
いことがあった人は大量のお酒を浴びせられて道路にお酒がこぼれるので、辺りは酒臭さ  
が漂っていた。

すり替えが始まる直前に、下り行燈である浦町と横町の裁許どうしの下り行燈の順番をめぐる口喧嘩が起こった。下り行燈の順番に関して横町が行燈は綺麗な状態で喧嘩を行うことが出来る先頭につき、列の一番後方で上りの行燈の進行を止めるという止め行燈は浦町が務めるという暗黙の了解があるのだが、2015年は巡行の際に辰巳町が行燈が新町通りでの順路をショートカットしたことによって辰巳町が一番に銀行四つ角に戻り、横町先頭の暗黙の了解を無視して下り行燈の先頭になった。辰巳町の後ろには必ず浦町がつくことになっているため、横町は止め行燈（下りの一番後ろの行燈）になってしまい、辰巳町・浦町が行燈の順番のルールを無視したことが喧嘩の理由だったようだ。夜高祭 1 日目で裁許会が行われた後にこのような喧嘩が起こるのは稀だそうだ。

すり替えは、夜高祭 2 日目の引き合いほど盛り上がらないが壮大で優美な大行燈どうしがすれ違う様子はとても見応えがあった。血の気が多いと言われている七津屋は他の町が行燈に軽くちょっかいをかけていて、2 日目の引き合いの盛り上がりを予感させていた。

表 7. 2015 年すり替えの行燈の順番

上り行燈	下り行燈
1. 新町	1. 辰巳町
2. 上町	2. 浦町
3. 七津屋	3. 横町

※御蔵町は参加しない。

上町と七津屋は本町と分町に関係にあるため、本町である上町が先で分町である七津屋は後のセットである。浦町と辰巳町もその関係にあるため、分町の辰巳町が先で本町の浦町が後のセットになっている。行燈の順番は 4 月上旬にある全体裁許会で決めることになっている。2015 年の当番である新町は先頭だった。

#### 4-4-6. 夜高祭を盛り上げる取り組み

夜高祭が行われている期間中、福野地域の若者が協力して祭りを盛り上げようと、商工会青年部福野支部のメンバーが祭りの 1, 2 日目に通常時は観光グッズやパンフレットを扱っている福野町の空き家を利用したギャラリー市の里 3 号館「ふれあいサロン」で飲み物店の出店や、福野町婦人会の人たちによるミニ行燈の展示が行われた。飲み物屋の出店には、訪れた観光客に気軽にくつろいでもらおうという狙いもある。福野支部の青年部員の 3 分の 1 程度は祭りに参加しない福野町の郊外に住んでいて、祭りの期間中は大型連休であることから祭りに参加せずに行楽に出かけるなどして過ごすことが多かったという。しかし、この取り組みが行われるようになって福野町中心部と郊外のメンバーが、役割は違うものの祭りを盛り上げるという共通の目的を持つようになった。このことは地域のつながりを深め、活性化につながると考えられる。

#### 4-5. 5月2日の夜高祭の様子

次いで、ここでは夜高祭り2日目の様子を記述する。

##### 4-5-1. 引き合いが始まるまで

基本的に2日目も1日目と同じ流れである。1日目と同様に練りまわしをした後に、銀行四つ角に集まり、裁許会で各行燈を確認した後で行われる。

ここでは、当日の裁許会を中心に記述する。

16時頃に一度銀行四つ角で裁許が集まって、すり替え(引き合い)前に集まる時間をいつにするのかを決める。とはいえ、練回しの進度により、すり替えの時間は前後する可能性がある。

すり替え前に、まず安全確認の裁許会を開く。集まった後に、それぞれの下り行燈が道の中心にある融雪装置よりはみ出していないか裁許たちが順々に確認する。このとき、裁許全員で確認しに行くのか、裁許長など少ない人数で行くのかは、その年の当番裁許の判断による。このとき、下り行燈の位置が融雪装置よりも出ていたら後ろに下がってもらう(図6)。こうした確認の後に、もう一度裁許で集まり、これでいいか確認をする。このとき、上り行燈の町から、下り行燈が融雪装置の線より十分に下がっていない、または出てきたなどの苦情があれば再度確認しに行った後にまた集まる。そうして、良しと判断されれば、引き合い開始時刻を決めて引き合い開始という流れになる。

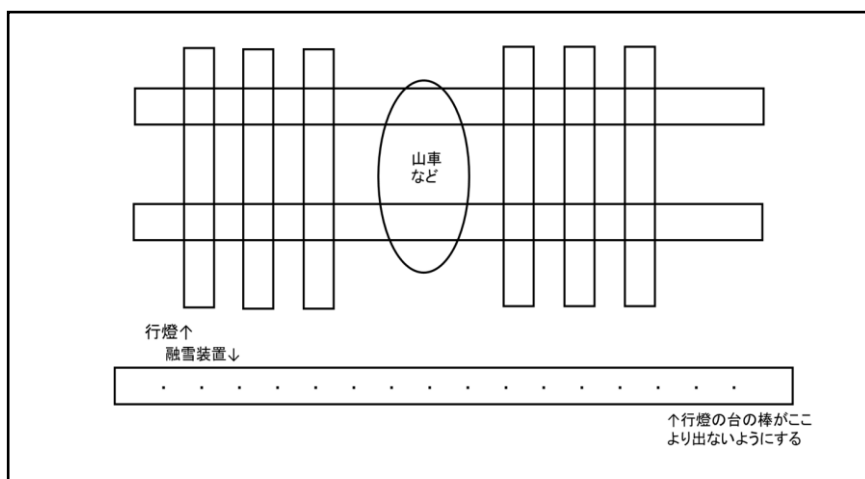


図6. 下り行燈の位置

##### 4-5-2. ひきあい (喧嘩)

夜高祭りのメインともいえるのが、ひきあい(喧嘩)である。二日目のすり替えの際に行われる。上りの行燈(新町・上町・七津屋)と下りの行燈(横町・浦町・辰巳町)で行われ、定位置で止まっている下り行燈の横を上りの行燈が通り抜けていく際に互いの行燈を壊しあう。

2015年は夜の11時ごろから始まった。開始の時刻は昔はもっと遅かったのに対し、年々観光客を意識して早くなってきている。2015年の引き合いの順番や並びは以下の図で説明するが、一つの各上行燈が三つの下行燈の横を抜け終わってから、次の上行燈が発するという流れである。2015年の並びは以下であった（図7）。

図中の上が、下行燈（抜けられる方）、その横に喧嘩をしない御蔵町の行燈が待機している。下が上行燈（すり抜ける方）である。今回は下行燈は辰巳町（浦町の分家）を先頭に、浦町（辰巳町の本家）、横町の順に並んでいる。一方上行燈は、新町からスタートし、その後に上町（七津屋の本家）、最後に七津屋（上町の分家）の順で抜けていった。

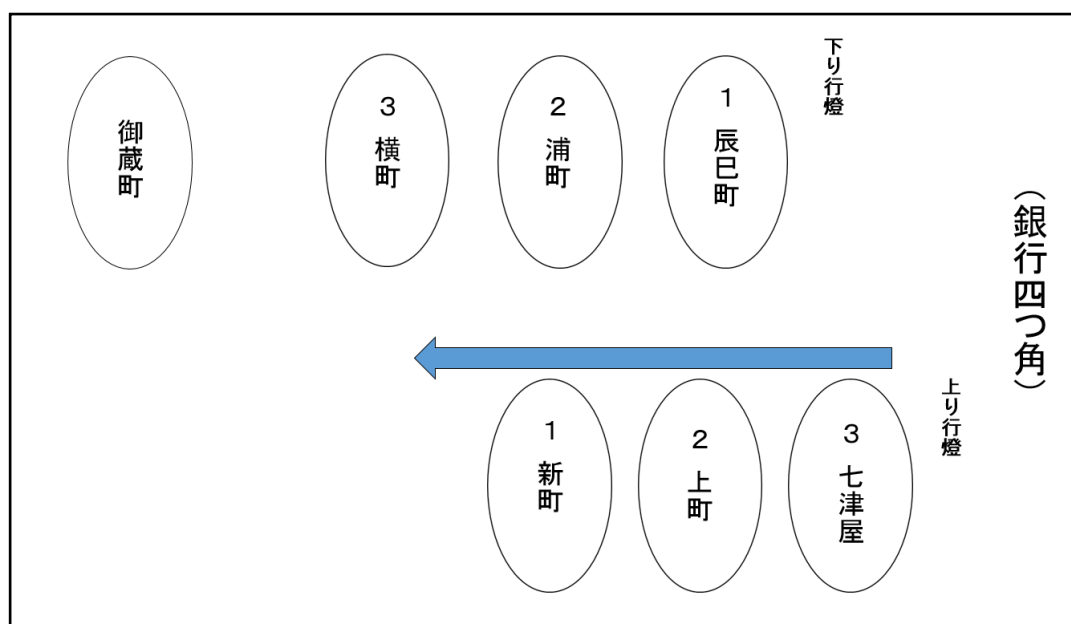


図7. 各町の順番の図

引き合いの様子は、写真39からも分かるように行燈の山車の部分に人がたくさん乗り、互いの行燈を壊し合うところが見どころである。2015年は見学客が行燈のすり抜ける道の中に入らないようテープが張られ、関係者や福野の人以外は中に入れないような安全策を講じてあった。筆者たちは特別にテープの中に入れてもらうことができたが、安全テープの内側にも人が大勢いて、行燈が動くたびに押され流され、とても危なかった。しかし、各町の人が喧嘩中に自分の町の喧嘩参加者にむかって「やれー」「〇〇がんばれー」などと掛け声をかけていてとても活気にあふれていた。

喧嘩中は、命綱をもって相手の行燈を足でけり壊す姿が多くみられた。時には相手の行燈に移ってまで壊しに行く人も見られた。主に相手の行燈を壊すことがメインであるが、どさくさにまぎれて人を蹴ったり蹴られたりしている人もいた。

つつい行燈の上の方を見てしまいがちになるが、実は一番喧嘩が激しいのは行燈の下（動かしている土台の所）の部分であつたりするらしい。下の方はあまり人目につかない

上、年配の人が多いため、ひと対ひとになりやすい。そのため下に引きずり下ろすということもするようである。

2015年は新町から始まったが、新町は喧嘩というよりも話に聞いていたように抜けることに専念したがっていた。筆者たちから見て一番積極的に行燈を壊しに行っていた上り行燈は七津屋であった。七津屋と横町の引き合いは一番長く、激しかった。

全ての引き合いが終わると、また各町自分の町への練りまわしを始める。喧嘩の後の練りまわしはとても疲労感の伝わってくるもので、無理やり元気を出して行燈を動かしていた。夜12時を過ぎているにもかかわらず、自分の家の前で行燈を迎える人達もいた。



写真 39. 七津屋（左）と横町（右）の喧嘩の様子

#### 4-5-3. 各町の喧嘩の特徴

上り行燈は、動く側であるので自身の判断で下りの行燈にぶつかりに行くか（喧嘩する）、そのまま横を抜けていくかを選べる。しかし近年は下り行燈が寄った位置にいたり、角度をずらして通せんぼしているため、上りの寄る寄らないの判断はあまり関係ない。また、行燈を動かす方に人員を割くため、喧嘩に参加する人数は下り行燈に比べてすこし不利になる傾向にある。

新町は喧嘩をするというよりは、ぬけることに重点を置いている。「三本抜け」という技がある。三本抜けとは、下り行燈の3つとも喧嘩をすることなく、上手く行燈の足の部分を上下させて、脇をすり抜けていくという技である。

上町は人が少ないため、翌年、行燈を作り直す手間を減らすためにどちらかというと抜けたがる。近年は砺波からの助っ人も加わって喧嘩する。

上町の分家である七津屋は、若い人が多く、派手であった。当日、行燈に「喧嘩上等」の垂れ幕をつるしたり、お揃いの服を身に着けたりしていた。喧嘩に積極的であった。

下り行燈は、引き合いの時は車輪をぬく。そのため引き合い中、行燈は動かない。一番最後に立つ行燈は「止め行燈」と呼ぶこともあるが、基本的には、まだ何も壊されていない綺麗な上り行燈を下り行燈の町は壊したが。そのため、練りまわしの段階から引き合い時の場所取り、つまり、毎年先頭に並ぼうとするための、下り行燈の並び順争いに似たものが行われる。

辰巳町は昔に比べれば、おちついたが、基本的に喧嘩においてはなんでもありだという。昔は上り行燈をとめるために木の棒を下に投げ入れたりしていたという話も聞いた。しかし、上下関係を重んじる所が他町に比べるとみられ、礼儀などを大切にしている。

浦町は辰巳町の本家であるが、当番の時はあまり喧嘩をしない。

大きな町である横町は、他町から見ても独特の雰囲気がある。自町が行燈を横にして止める。喧嘩には積極的である。

なお、上り行燈でも下り行燈でもない御蔵町は、喧嘩中、円陣を組んだり、行燈の上に乗って喧嘩の様子を見ている。2014年までは、下の方は喧嘩を見ている観客に注意を促したりしていたが、2015年から警備が厳しくなり、観客の前にテープが張られるようになったため特にはしていない。

#### 4-5-4. しゃんしゃんの儀

しゃんしゃんの儀は別名「手打ち式」とも言う。引き合い（喧嘩）であったことを全て清算して和解し、無事に祭りを終えましたと報告するものである。

喧嘩をして練りまわしをした後、銀行四つ角に集まり、中央の祭壇にむかって各町の裁許が自町を背にして円になる。当番の町の進行で行う。各町でやり方やしゃんしゃんの音頭が多少異なる。

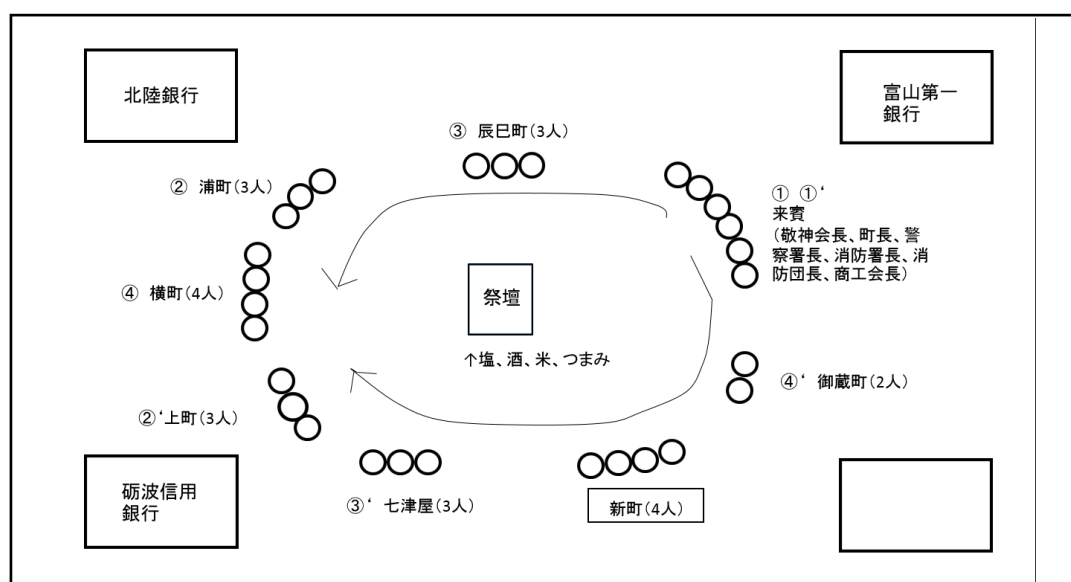


図 8. しゃんしゃんの儀の配置 (七津屋の方の資料より作成) ○の数は各町裁許の数を表す

2015年は5月3日の深夜1時40分から始まった。当番は新町であった。しゃんしゃんの儀の流れは以下である。

1. 若衆頭二人がお酒をもち、来賓の方の所へ移って順番にお清めのため円にお酒をまく  
 このとき、遅くまく人と早くまく人がいる。なにも知らない人は一見、「片方の人はあまり上手でないから遅いのだろうか?」と思ってしまうかもしれないが、これは来賓の所から二手に分かれて始まり、最後に自町で二人がちょうど落ち合って終わるようにするためである。ちなみに、ビンの中のお酒はすべてまききらなくても良い。このお酒まきは本番までに2, 3回の練習を今回はしたい。お酒は、まく用、配る用、おかわり用の三種類がある。
2. 当番裁許があいさつを述べる  
 毎年、決まった言い回しがあるわけではなく、毎年その年の当番裁許長が自分で考えてきたあいさつを述べる。自分の思っていることを言える場でもある。
3. 来賓があいさつを述べる  
 南砺市長、敬神会会長、警察署関係者、消防署関係者などが順にあいさつをする。
4. しゃんしゃんの音頭をとる  
 当番裁許の拍子木の音頭で全員が手を打つ。当番裁許が「お手を拝借ー」と言うと、「しゃんしゃんしゃん。しゃしゃんしゃん」とその場にいる全員で手をならす。  
 しゃんしゃんの音頭はその年の当番町のやり方に従う。ちなみに各町によって、しゃんしゃんが多少違う。各町のしゃんしゃんは以下の通りである。

上町・七津屋	しゃんしゃんしゃん。しゃしゃんしゃん。×3
新町	
浦町・辰巳町	しゃんしゃんしゃん。しゃしゃんしゃん。×3
横町	

つまり、上町七津屋だけが違っている。また、御蔵町は当番に当たらないため町のしゃんしゃんはない。

5. 乾杯する  
 当番町の若連中がそれぞれ湯呑をわたし、それにお酒を注いで、おつまみ(スルメ)を順々に配っていく。湯呑を配る人、お酒を注ぐ人、スルメを渡す人がいる。来賓の方から始まり、各町順番に裁許長、副裁許長とえらい人から順番になるように配っていく。各町ごとに人の並び方が決まっているが、ふいに並び方がかわっていたりすることもあるので、待っている間に誰が裁許長かを確認したりする。  
 渡し方は、礼、「どーぞ」の声かけ、礼、を、一人ずつ繰り返しながら配っていく。移動する際は、見苦しくないように小走りで配っていく。  
 配り終わったら、全体の方をむいて一礼する。「皆さん行き渡りましたでしょうか、

カンパニー」の一声で乾杯をし、お酒を飲んで、イカを食べる。

その後、二杯目(おかわり)も来賓を中心にくぼる。ちなみに、おかわりは、当番の町によって、あったりなかったりする。今回の当番である新町ではあった。

椀・お酒・おつまみを配る順番は図 3 を参考に、①～④(下り側)と、①'～④'(上り側)に分かれて配る。来賓をまず最優先し、そのあと近い町から配る。しかしこの時、本家分家のある所は例えば本家である浦町に配ってから辰巳町に配りに行くといったように、本家を優先したり、御蔵町は最後に回したり(当番をしない町であるため)する。そして最後に自町へ配る。

#### 6. 当番裁許を引継ぐ

来年の当番裁許である浦町・辰巳町が円になっている各町にあいさつをして回る。ちなみに、当番の順番は、「上町・七津屋」、「新町」、「浦町・辰巳町」、「横町」の順でまわり、また「上町・七津屋」へ戻る。

2時15分頃に2015年のしゃんしゃんの儀は終了した。所要時間約35分であった。

### 4-6. 5月3日の夜高祭

夜高祭3日目は、本祭でもある曳山祭が行われる。この曳山祭が夜高祭の本祭であり、この曳山が終わると夜高祭は終了する。以下、曳山祭に関連する事項やその様子について記していく。

#### 4-6-1. 曳山の概要<sup>13</sup>

福野の曳山祭がいつ始められたのかは明らかでないが、一説では元禄期に花開いた庶民文化が衰退の一途を辿った結果、享保期には経済不況に陥り、その打開のために人々が曳山を作って神を奉り、招福除災・町内繁栄を願ったことがその起源とされている。また、現存している最古の記録によると、文政3(1820)年の『山車家体併蔵普請入払帳』という古冊子に曳山とともに屋台も繰り出されていたが、昭和の戦争期にいずれも中断したが、夜高祭の本祭である曳山祭を元の姿に戻したいという思いは住民たちに受け継がれて、曳山4基のうちの2基は1970年代に復活した。2005年の春季祭礼時には、4基全てが復活したが屋台巡行は1952年を最後に途絶えたままであった。2014年の春季祭礼では、福野曳山保存協会が各町の屋台4台のうち最も保存状態が良かった上町・七津屋の屋台が復活したが、天候が悪く結局中止された。今後は全ての町の屋台を復活させることが課題である。伝統的な形を取り戻しつつある福野春季祭礼は、勇壮な行燈の引き合いである「動」の側面と、本祭りの「静」の側面を持つその地域の人々だけでなく、他の地域の人々にとっても魅力的なものとなっている。

文政・天保期に疫病の流行や天災は全て神の仕業であるとされ、神を鎮め日々の生活の

<sup>13</sup>この項の記述は、『北日本新聞(2013年4月26日刊行)』、パンフレット『福野の曳山』、『福野 夜高行燈・曳山』に基づくものである。



安泰と作物の豊穰、町内繁栄を祈る行いとして曳山は自然発生的に誕生した。曳山の一応の形態が出来あがった天保年間には四町の曳山が揃って曳き回されていたとされている。また、曳山が作られた時代は庶民文化が開いて芸術の水準も高かったことから、そこに施されている装飾や彫刻は素晴らしいものばかりである。福野の曳山は2004年に南砺市指定有形民俗文化財となっていて、2005年から四町全ての曳山が復活し、曳き回されている。



写真 40. 復活した屋台

#### 4-5-2. 各町の曳山

横町曳山 モチーフ：猩々の汲み酒

横町の曳山の制作がいつから行われているのかは定かでない。横町の曳山の特徴として、木座は猩々<sup>14</sup>で相座には絡繰り唐子の人形で、勾欄<sup>15</sup>は、一位勾欄腰重子彫、上段は神代小雲龍彫、中段は水浪、下段は如鱗牡丹彫、そして地山には巖石獅子彫とそれぞれの彫刻が施され、その威容は豪華絢爛な横町曳山として今日に継承されている。



写真 41. 横町の曳山



写真 42. 浦町・辰巳町の曳山

<sup>14</sup>古典書物に記された猿に似た架空の動物。

<sup>15</sup>曳山の手すりのところ。

#### 浦町・辰巳町曳山 モチーフ：素戔鳴尊の大蛇退治

浦町・辰巳町の曳山の御神像は日本神話に出てくる天照大神の弟であり、その構造は朱塗りの擬宝珠勾欄、白木の勾欄の二重造りで重厚な造りになっている。腰幕はラシャの朱色が使われていて、当時の最高級品であったとされている。現在曳山祭にて使われている腰幕は2005年に新調されたものであり、これまで使われていたものは大切に保存されている。

#### 新町曳山 モチーフ：橋弁慶牛若丸

新町の曳山は、文政3（1820）年頃に作られ、神明社の春季祭礼で曳きまわされたという記録が残っている。新町の曳山の視屏は文政期に栄えた井波彫刻による龍や虎、麒麟などの精巧な彫りに金箔が施されている。また、勾欄は漆塗りでホゾ構造による組み立て式となっている。山人形は祭神である牛若丸と弁慶であり、その特徴は弁慶の目に水晶玉が施されていて牛若丸に鋭い眼光が向けられていることである。

#### 上町・七津屋曳山 モチーフ：神功皇后の西征航海

上町・七津屋の曳山の御神像人形は神功皇后と陪従する竹内宿禰であり、二神像を乗せた独特な優美な雰囲気がある。曳山全体が船の形をしていて、船首には2.3メートルもの翼を広げた本彫りの『鷓<sup>げき</sup>』の波濤を睥睨する姿があり、また、船の入母屋造りの様式美に富んだ屋根がある。



写真 43. 新町の曳山



写真 44. 上町・七津屋の曳山

## 5. 福野夜高節

伝統的な祭りの後ろで流れている音楽は、その地域で古くからあったもので、その音楽

<sup>16</sup>水鳥の名。よく風に耐えて飛ぶ白い鳥で水難避けに飾る。

を聴くと何故か自然に祭りのことが想起される。また、その音楽には人々の気分を高揚させ、人々に一体感を与え、祭りを更に盛り上げる効果があると考えられる。夜高祭にも夜高節という音楽があり、夜高祭の重要な要素の一つになっている。

### 5-1.夜高節について<sup>17</sup>

夜高行燈は、太鼓を先頭に拍子木の合図で夜高節を歌いながら町内を練り回す。そのときに歌われる夜高節の行燈の唄には、上り、下り、途中、待つ間に歌う唄それぞれに違いがある。まず、上りの時に歌う唄は声を張り高い調子でゆっくり歌われるが、その他の唄は低い調子で歌う。また、歌詞も大人用と子供用に分かれている。上り唄でも低い調子で歌って下り唄として歌われることもあるし、下り唄を同様に高い調子で歌って上り唄として歌われていることもある。また、夜高節は郷土色が少ないと言われている。以下、どのような夜高節があるのか紹介していく。

#### 【上りうた(大人用)】

- ・富山名物 福野の夜高よ

競う万燈のささ 灯がともる(燃える)

ササドッコイサノサ ヨイヤサ ヨイヤサ<sup>18</sup> (囃子言葉)

- ・今年や 世が良うて 穂に穂が下がるよ<sup>19</sup>

升がいらいで ささ 箕で量る <古歌>

- ・瀬田の唐橋<sup>20</sup> 唐銅擬宝よ

水に影さす ささ 膳所の域 <古歌>

- ・東 山から 西 山までも

けぼ (蜘蛛) の糸かけ ささ 山けぼ (山蜘蛛<sup>21</sup>) か

<sup>17</sup>『夜高祭越中夜高太鼓保存会発足 30 周年記念誌』 参照

<sup>18</sup>ヨイヤサ「弥栄」(いやさかえ)という益々栄えることという意味の言葉に「良」という頭語をつけ、「良 弥栄」(よいやさかえ)という造語を作り出した。この言葉が縮まって「ヨイヤサ」となった。「ヨイヤサ」は行燈の町内練り回しや、すり替えや引き合いの際などの祭りにおける様々な場面における掛け声でもある。(『夜高祭越中夜高太鼓保存会発足 30 周年記念誌』を参照。以下、同資料を参照)

<sup>19</sup>「穂に穂が下がるよ」は米が豊作であるということを示し、この唄では農村地帯としての豊穰への願いが唄われている。この語句は他の豊穰を願う俗曲にもよく見られる。

<sup>20</sup>「瀬田の唐橋」は滋賀県大津市瀬田の瀬田川にかかる橋で全長 260 メートルの大橋である。宇治橋、山崎橋とならんで日本 3 名橋・日本 3 古橋の 1 つとされ、京都防衛の重要な場所であったことから「唐橋を制する者は天下を制す」との言われがある。この唄では、福野町民の代表者が伊勢大朝から御分霊を奉じ、福野へと帰りを急いだが俱利伽羅峠で日が暮れてしまったため暗くて帰れなくなり途方に暮れていたが、帰りが遅いことを心配した福野の人々が手に灯りを持ちその代表者を俱利伽羅峠まで迎えに来た出来事の所見が唄われている。

<sup>21</sup>「山蜘蛛」とは、戦国時代における北朝の軍府のことであり、この言葉から福野にいた北

【上りうた（子供用）】

- ・鯉の滝登り<sup>22</sup> どういうて登るよ  
山を河にしようと ささ 言うて登る <古歌>

【休みうた（主に上り）】

- ・からす鳶んびは 底なし空をよ  
笛や 太鼓で ささ 飛び回る <野口雨情作<sup>23</sup>>
- ・声はすれども 姿は見えずよ  
姿 草葉の ささ きりぎりす <野口雨情作>
- ・安居山から 見下ろす福野はよ  
森の木立に ささ さらさらと <野口雨情作>

【下りうた】

- ・主の心と お囃子山(林山) いつも青々<sup>24</sup>  
ささ 待つ(松)ばかり<sup>25</sup> <古歌>

【待ちうた】

- ・なあな 追分の町<sup>26</sup> よ しゃあれ しゃあれ  
真田帯の巾 ある町よ
- ・なあな 追分けの松よ しゃあれ しゃあれ  
男女の花(御馬の端) 男女の松よ(御馬の松)<sup>27</sup>

## 5-2. 人々と夜高節

男性は高校生くらいになると行燈制作に携わるようになり、若衆や若衆頭、裁許となり、祭りと深く関わっていくため夜高節を覚えて歌えることが必須である。町の人たちから聞いた話によると、男性たちは行燈を制作しているときに各町の会館で先輩たちから夜高節

---

朝軍の武将が福光地方の南朝軍に対抗していたという歴史的な背景が窺える。

<sup>22</sup>中国の支那に竜門の滝登りの故事があり、鯉が竜門という黄河の急流に登ることに成功すると龍になれるという意味がある。

<sup>23</sup>野口雨情は、大正から昭和にかけて活躍した作詞家。代表作には「七つの子」「赤い靴」「シャボン玉」など現代まで歌い継がれる童謡・民謡がある。1932年（当時野口50歳）に福野を訪れ、夜高節新歌詞を5首作った。

<sup>24</sup>「いつも青々」のところにはお囃子山の青々と「逢う」という動詞と青色の3つの意味が掛けられている。

<sup>25</sup>「待つばかり」というところには、青い松ばかり山々に生えているということと女性が男性のことを待つばかりだということの2つの意味が掛けられている。

<sup>26</sup>「追分けの町」は、北海道にある町で福野縞の出荷先として福野と親交の深い町で、真田帯という着物の帯のように細長い町。

<sup>27</sup>「御馬の松」は、江戸時代には旅人が馬を休めるときに馬をつないでおくところとして使われ、かつては町の要所であった。昭和に入ると松に枯れ枝が目立つようになり、強風による倒木の恐れがあるという理由で木の付近に住む人々によって伐採された。現在では、かつて木があったところに小さめの松と史跡の印があり夜高祭の行灯が横町内の練り回しの際の一つのポイントとなっている。

を教わっており、さらに夜高祭が近づくと夜高節の講習会が行われるため、夜高祭に参加する男性はきっちりと夜高節を唄えるようだ。

現在唄われている夜高節は、かつてから唄い継がれているものだけでなく、新しい唄も作られたものも唄われている。祭りに参加し行燈と直接関わる男性たちが町ごとのオリジナルの唄を作ることもあれば、関わらない町民が唄を作ることもある。戦後になってからは福野町の人々だけでなく、他の地域の人々からの夜高節の募集も行なわれるようになった。夜高節の自由度の高さと多様性が窺える一方、近年若者たちに唄われているのは下りの唄が多く、上りの唄を唄えない若衆が多いため、下りの唄を上り調子で歌うことによって祭り当日は唄が調整されている。地元の年配の人々は、受け継がれる唄が少なくなっていくのは寂しいと話していた。

## 6. 祭りの変遷

### 6-1. 「夜鷹」から「夜高」へ<sup>28</sup>

夜高の「高」という字はいつから使われたのか。

一般的に夜高行燈の「夜高」という言葉の由来は「夜に出される高い出し物」からきており、かつては「夜鷹」であったと認識している。ここでは「夜鷹」から「夜高」へ変化したきっかけと理由を紹介する。

そのきっかけは、大正5（1925）年5月2日と大正14（1916）年5月2日の高岡新報の新聞記事に遡る。そこには、当時の福野夜高祭について「夜鷹見物」「福野町の夜鷹行燈祭」と表記されており、「夜高」は「夜鷹」であったことを示している。また、昭和22（1947）年5月1日の北日本新聞の記事も同じく「福野の夜鷹まつり」と表記されている。ところがその翌年の昭和23（1948）年5月2日の富山新聞の記事で、「夜高行燈」と初めて表記された。こうした「夜鷹」から「夜高」へ変化した一つの理由として、戦後の国語政策が関係しているという説がある。昭和21（1986）年11月に常用漢字1850文字が発表され、その中に「鷹」の文字が含まれておらず、新聞での使用が制限を受けることとなった。これにより、「鷹」から「高」へ変換し、「夜高」という言葉が作られたとするものである。また、「高」という漢字が使われたのは、常用漢字の中で「タカ」と訓読みできる漢字が「高」のみであったことからきていとされる。

ただし、夜高祭は福野のみで行われてきているものではなく、砺波、庄川、津沢など、他でも同様の変化があったのかなど、この点についてはさらに調べる必要がある。

### 6-2. 行燈の形の変化<sup>29</sup>

<sup>28</sup>北野潔『夜鷹行燈と夜高行燈について—いつ、なぜ「鷹」が「高」に変わったか—』  
富山史壇 2004年3月 第142-143合併号

<sup>29</sup>福野夜高保存会『万燈』平成15年3月20日

現在の福野夜高行燈の形に至るまで、行燈は様々な形に変化してきた（図9）。

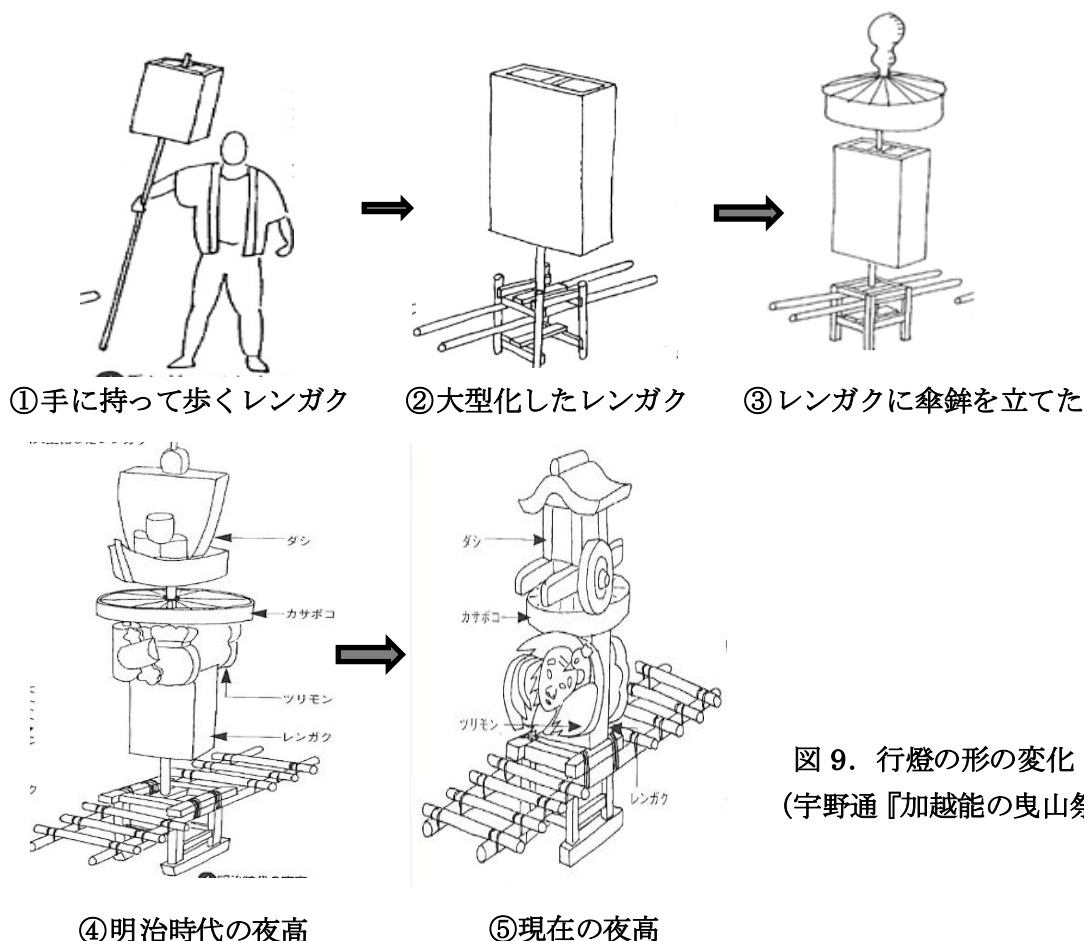


図9. 行燈の形の変化  
(宇野通『加越能の曳山祭』より)

最初の行燈はレンガクに人の身長より少し高めの手を刺しただけのシンプルな「田楽行燈」であり、人が手に持って歩ける大きさであった（図9の①）。この田楽行燈の時代は長かったと言われており、昭和の初めごろまで子供たちが「草行燈」と呼んで、田楽行燈の上にダシとして杉の小枝をつけて遊んでいた。そして徐々にレンガクが大型化し、行燈を担ぐためのダイや棒が取り付けられ（同②）、さらにレンガクの上に「神の依り代」として、カサボコが取り付けられた（同③）。このときのダシはカサボコの先についていた「小さな飾り」にすぎず、レンガクと一体化したものであった。その後、文久年間に入り、カサボコの上の小さな飾りが大きくなってダシとなり、レンガクの前後にツリモノが取り付けられるようになった。この頃の行燈の高さは、およそ11mであり、当時の民家の屋根よりも高く、町から少し離れた場所から眺めると、家の屋根が連なっている上に、行燈が突き出しているように見えたのだという。現在、福野夜高祭の期間に、福野駅前に置かれている「文久の大行燈」はこの文久年間の行燈を再現して建てられたものである。また、明治頃からは、大行燈以外に中行燈・小行燈など様々な形の行燈も作られるようになった。

この11mの行燈は明治の途中までで、明治25（1894）年からは、電線が町中に張られ

たことによって、高さが制限されることとなった。制限により高さは以前よりもおよそ 4m 小さい 7m57cm に規則が決められ、それ以上高いものを作ってはいけないこととなったが、実際は規則を守らない町も多かった。そのため、行燈の高さだけを規定するのではなく、行燈を担ぐ棒の長さ、レンガクの大きさなどにも細かい規定が作られ、規則を破った町の行燈は取り壊されるなどして、行燈に対する取り締まりが強化された。こうした取り締まり強化が進んでいくうちに、行燈の高さも徐々に低くなり、それに応じてレンガクの大きさも小さくなった(同④)。そして明治 43 (1912) 年から現在の行燈の高さである 6m36cm となった。

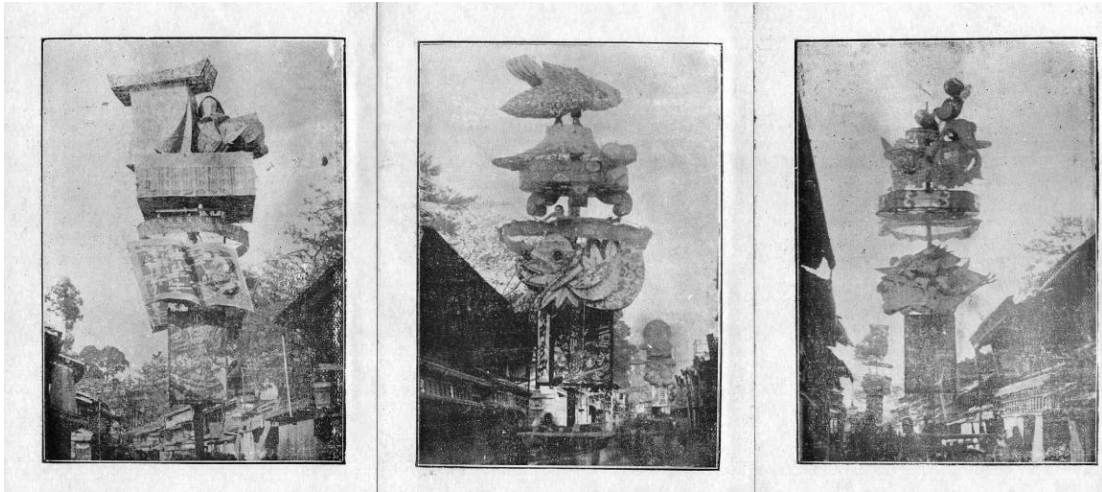
その後、浦町がダイを大型化し、同時にダシとツリモノも大型化したことをきっかけとして、他の町にもその動きが広まっていった。こうして小さくなったレンガクに、大型化したツリモノが重なった状態となり、レンガクに描かれている武者絵や文字が隠れることとなった。また、ダイが大型化する前に、車輪も取り付けられることとなった。大正末～昭和の初め頃に、新町が行燈のダイに車輪を付け初めたことをきっかけとして、他の町もダイに車輪を取り付けるようになった。それまで行燈を担いで動かしていたが、これをきっかけとして行燈を担ぐのではなく、前を持ち上げながら後ろから押して動かすようになった。車輪を付けず、行燈をかついでいた時代は、行燈の上に乗る人は前に 2、3 人、後ろに 2 人ほどで、多くの方は下でかつぐ側であった。下でかつぐ人は、力持ちでないと務まらず、みな汗だくで行燈を動かしていたという。しかし、車輪が付けられてからは、下でかつぐ人よりも上に乗る人の数が多くなるなど変化し、前の方が行燈を担ぎ、後の方が行燈を押して練り回す形になった (同⑤)。

以下は、戦前と戦後 (昭和 25 年～平成 10 年) までの行燈の変化を写真とともに紹介したものである。

写真 45～写真 49 は戦前の行燈の写真である。戦前のいつごろなのか詳細は不明である。写真を見ると、電線も張られておらず、家の屋根よりもはるかに行燈が高く作られていることがわかる。また、行燈の高さだけでなく、デンガクやダシも大きい。特にダシはかな



写真 44～49. 戦前の行燈  
(直井洋一様より堀部友一様所蔵写真提供。広報ふくの 2001 年 6 月号掲載)



り意匠を凝らしている様子が分かる。少し離れた場所から見ても、カサボコとダシの間に隙間があることが確認できるほど、行燈のパーツ同士に少し空間の余裕があったことが読み取れる。家の屋根も瓦ではなく、茅葺屋根のところが多い。瓦の屋根は一部のお金持ちの家だけだった時代である。

写真 50～写真 52 は昭和 25 年～30 年の行燈の写真である。戦後間もない頃で、道路も現在のようにアスファルトで舗装されておらず、砂利道、泥道である。ツリモノの大きさはそのままに、行燈の高さは低く、またデンガクは小さくなったため、デンガクが隠れて見えない状態になっている。また、ダシも戦前より小さくなっている。



写真 50. 御蔵町(昭和 25 年) 写真 51. 辰巳町(昭和 27 年) 写真 52. 七津屋(昭和 30 年)

写真 53～写真 55 は昭和 34 年から昭和 56 年の写真である。戦後からしばらくたち、道路もアスファルトに舗装されるところが多くなった。行燈も現在の行燈の大きさに近いものが多い。





写真 53. 浦町 (昭和 34 年) 写真 54. 新町 (昭和 48 年) 写真 55. 浦町 (昭和 56 年)  
写真 50~55. 戦後の行燈 (直井洋一様より提供)

### 6-3. レンガクにかかっている文字と武者絵について

レンガクは表に武者絵が描かれ、裏に特殊な用語、左横には「御神燈」、右横には「○○氏子」(○○は町の名前)と書かれている。まず、レンガクに書かれている文字がこのような書かれるようになったのはいつごろからなのかは定かではない。しかし、文久年間の行燈を再現した「文久の大行燈」にも同じ文字が書かれていることから、文久年間にはすでにこの形態が完成されていたと可能性がある。また武者絵については、文久年間や明治期の武者絵は誰が描いたものかわからないが、現在の武者絵は夜高行燈の絵師である塚本外茂氏(故人)に教えを受けた人たちによって描かれているものである。以前に福野の公民館で塚本氏による「田楽武者絵教室」が開かれ、武者絵を描く後継者が育成された。このとき武者絵を学んだ人たちによって、現在まで受け継がれている。また、直接教えを受けていなくても蠟引きができ、絵が上手な人であることが条件で、町で認められれば、武者絵を描くことができる。武者絵は、ダシやツリモノのように数人で描くのではなく、基本的に1人で描くため、蠟引きや色塗りなど一連の作業ができる人でないと描くことは難しい。



写真 56~58. レンガク

レンガクは神が宿るところであり、引き合いでも触れることが禁止されているため、あまり壊れることがなく、作り変えることも少ない。しかし、行燈をどんどん大きくしていった時代は、その度にレンガクも新しく作り変えていた。

#### 6-4. 行燈の制作期間の長期化と原因<sup>30</sup>

昔の行燈の制作期間は、祭りの始まるおよそ1ヶ月前の3月末頃から開始され、短期間で行燈を仕上げていた。現在の行燈の制作は最も早い町で、2月半ばから開始しており、行燈が仕上がるまでおよそ2カ月半かかるなど、制作期間が昔と比べて長い。

制作期間が長くなった一番の原因は、「人数不足、若者不足」である。現在の行燈制作は、その町内の人だけで行燈制作を行おうとする意識が強いが、戦前は多くの町がその町の人だけではなく、町の周辺の村の人を加えて行燈制作を行っていた。横町や上町はその中でも町を分割してそれぞれ行燈を作っていた。例えば、横町は町を6分割（1分割あたり10～30世帯）にし、そのそれぞれで行燈を制作していたため、町全体で計6本の行燈を出していた<sup>31</sup>。ところが、戦後から自分の町で行燈は自分の町の人たちだけで制作するという意識が生まれ、そこから現在のように主に町内の人だけで行燈制作を行うようになった。周辺の村の人を加えなくとも、戦後から数年経った頃はまだ、福野の中部地区全体で1学年におよそ150人の生徒がおり、人数は足りていた。その頃、例えば浦町では行燈を作る人数は40人ほどおり、そのうちの半分以上は若衆というくらい若者の人数も多かった。しかしその時代は長くは続かず、次第に若者の数は減っていった。さらに、若者が進学や就職のために町外へと離れることでますます若者不足が加速することとなった。また、行燈制作に関わるのは自由なので、町外へ出ていった若者を無理矢理参加させることはない。自主的に町で行燈に関わりたいという意識があることが前提条件である。「去る者は追わず」という意識と若者不足があいまって、現在のような人数不足の状況となった。こうした人数不足に対して、ほとんどの町では現在、町内出身で町外に住む者や、親戚、一般に公募をするなどして行燈制作者を募っている。どの町でも行燈制作に関わる人手や若者の少なさを嘆いている。町内の人だけを区別して行うやり方が始まったことが現在の状況を招く結果となったと言う人もいる。

2つ目の原因は、「外に出て働く人の増加」である。現在の行燈制作は、主に日中の仕事が終わった後の夜に、それぞれの町の会館に集まって行っている。また、祭りが近づいてくるとほとんどの町で、日曜日の日中から作業を行っている。行燈制作は全て自分たちで作るのではなく、ダイの木材や心棒、ダシやツリモノの骨組みは、大工さんに作業してもらっている。その後の、紙を貼り、蠟引きし、色を塗るという作業をメインに行っている。

戦後に上町通りが栄えていたころは、自営業の店が多く、町外へ働きに出るということも少なかったため、時間に比較的余裕があり、日中から作業を進めるなど行燈制作に長く

<sup>30</sup>行燈制作に関わる若衆やOGからの聞き取りに基づいて記述

<sup>31</sup>福野時の会『ふくの町立て散歩』1996年

時間をかけることができた。そのため、1カ月前に制作を始めても十分間に合ったのである。この頃は、行燈の部位それぞれに「専門の職人（蠟引き専門や行燈の骨組みの竹を作る専門の人など）」がいてそこへ若頭や若衆が頼みに行き、制作してもらっていた。また、自分たちで竹をそいで、ダシやツリモノの骨組みを作ることもあった。行燈制作に多く時間をかけることができたので、自分たちで作る範囲も広がったのである。ところが、経済が発展していくとともに、周辺に商業施設が建ち、それに押されて中心部の上町通りが衰退し、外へ働きに出る者が増えた。外へ働きに出る分、仕事の都合もつけにくくなり、時間の余裕がなくなった。そして、行燈制作にかけられる時間も限られたものとなり、自分たちで制作する範囲も昔と比較して狭くなったのである。

### 6-5. 行燈制作に関わる意識の変化<sup>32</sup>

福野の行燈制作は「去る者は追わず」の意識であり、行燈制作の参加は義務ではなく任意である。これは、行燈制作には町の行燈制作に関わりたい自主性が大切だという考えを重んじているためである。

若者が大勢いたときの行燈制作では、「年寄りの言うことややることに反抗したりしない」のが普通であった。その頃の年寄り、自分の町の行燈で気に入らないところがあると、制作途中である紙の貼った行燈に指で穴を開けることもあった。しかし、当時の若衆たちはそれについて怒ることもなく、黙って作り直していた。現在の行燈制作で同じことをすれば、問題となりかねない。

行燈制作は強制ではないので、町外へ出たきり戻ってこない若者、祭りの時期になると戻ってくる若者など様々である。また、せっかくボランティアで行燈制作を手伝いに来ていても、何らかの理由で叱られて腹を立て、制作を途中でやめて来ない者もいる。このときに人数がたくさんいれば、「叱り役」と「慰め役」という役の振り分けができるが、人数が少ないために「叱り役」ばかりが目立ってしまうという話もある。

「自分たちの町の行燈を自分たちの手で作り上げる」という意識が若者が大勢いたころは、現在よりも強く、現在は「ボランティアとして手伝いに来ている」という意識が少なくとも若者の一部にはあり、この意識の違いは、行燈制作の「人数の多さ」と「町内に住む者が多いかどうか」の2つが関係しているという。人数が多ければ年長者に行燈を悪戯されても（現在そのようなことはないが）、また、少し失敗してもそれに対してフォローをする者もおり、作り直すのにも人数が多くいるため時間がかからない。このような一連の流れと、同じ町内同士という意識があいまって、仲間意識というものが徐々に育まれていく。ところが、現在は人数が少なく、制作の1つ1つの作業を個人でやることが多い。失敗してもそれぞれに役割が振られているので、他の人がフォローすることは難しい。また、町外から来た者がほとんどで、その町に住む者が少ないため、自分たちが町を背負っているという意識が生まれにくいのかもかもしれない。

---

<sup>32</sup>行燈制作に関わる若衆やOGからの聞き取りに基づいて記述

## 6-6. 行燈は誰のものか「戦前～戦後」

現在（2015年）の行燈は作り上げた町のものであり、町にすむ「民衆のもの」という認識が強いが、こうした認識は戦後に生まれたものである。戦前まで行燈は民衆のものではなく、その町の「オヤッサマ」のものであるという認識が強かったのだ。

「オヤッサマ」は、町の地主のことで、お金持ちであり、行燈制作にかかる費用のほとんど（または全て）を負担していた。オヤッサマが費用を出して作り上げる行燈であったことから、行燈はその町のオヤッサマの威厳を示すようなものとなり、行燈の数を増やしたり、高さを高くしたり、豪華に飾り立てたりして、自分の行燈がいかによいものであるかをオヤッサマ同士で競うものとなっていた。

その頃町に住む者たちは、オヤッサマからの命令で行燈制作を行っていた。しかし、行燈が大きくなるにつれて町に住む者だけでは人数が足りず、町の周辺にいる「村」からもオヤッサマが人を呼んで制作を手伝わせていた。

祭当日は町中に行燈がひしめき合い、その間に大勢の見物人がいた。現在の祭りのメインは、「引き合い」であり激しい行燈の衝突を思い浮かべるが、行燈がオヤッサマのものであったこの頃は、引き合いの激しさは小さく、むしろ激しいように「演じたもの」であった。あまりに引き合いに夢中になって暴れていると、行燈の主役であるオヤッサマに目を付けられる心配があったためである。だからと言って、引き合いをしないのもよくなかったので民衆はオヤッサマのために引き合いを「演じていた」のである。「演じていた」とは言っても、その思いは人それぞれである。その中にはオヤッサマによる支配のうっぶんを晴らすように行燈の引き合いを行っていた者もいた。

ここまで威厳を放っていたオヤッサマであるが、戦後の「財閥解体」で日本の経済を支配していた財閥が解体されることとなり、町の経済基盤となっていたオヤッサマもまた、解体されることとなった。財閥解体によって戦後の民主化が進むとともに、町に住む者たちが少しずつ自分たちの町という意識が高まり、行燈に対しても自町のものだという認識が持たれるようになった。

## 6-7. 昔の引き合いの様子「戦前～戦後」<sup>33</sup>

### 6-7-1. 戦前の引き合い

戦前の行燈は費用の大半を出資していた「オヤッサマのもの」という認識であった。また、戦前の祭りは行燈がオヤッサマのものであり、町の民衆同士の競い合いではなかったのものでそれほど激しいものではなかったというのが通説である。ところが、資料<sup>34</sup>を調べると、現在よりも人身事故が頻繁に発生しており、激しい祭りが行われていた時期もあることがわかった。人身事故が頻発し始めた時期に注目すると、ちょうど「町に電線が張られるようになった」時期と同時期であった。また、その後には行燈に関するよ

<sup>33</sup>万燈や行燈制作に関わる若衆やOGからの聞き取りに基づいて記述

<sup>34</sup>福野夜高保存会 『万燈』 平成15年3月20日

り厳格な取り締まりの書類が警察から提示されている。このように人身事故が頻発するようになったのは、戦前の行燈がオヤッサマの威厳を示すものであったことと関係していると考えられる。電線が張られたからと言って、行燈の高さを低くするのはオヤッサマの威厳を小さくすることでもあったので、高さを守らない町がほとんどであった。そして、守らない町が多いことでより厳しい取り締りがなされるようになったのである（その取り締まりは現在まで裁許によって守られている）。相次ぐ警察からの規制とオヤッサマの威厳の間で民衆は板挟み状態となり、その競り合いの中で人身事故が起っていたとみられる。

### 6-7-2. 戦後の引き合い

戦後から行燈は「自町に住む民衆のもの」と認識されるようになった。行燈が町のものであるという意識は、戦後から年数が経つほど強まった。戦前の行燈は町に住む人以外に村の方からもオヤッサマが人を呼んで手伝わせていたが、戦後から行燈に関わるのは「その町に住む者」に限定することとなった。町内に住む者同士の意識が強まり、祭に対する思いも「町同士の誇り」をかけたものとなり、思い入れの大きなものとなった。

道路は戦前と変わらず砂利道や泥道で、地面の石や泥に行燈が詰まることもよくあり、電柱に滑車を付け、行燈と結び付けて再び動かすなどしていた。そうした動きづらく、狭い道での行燈同士のすれ違いは自然と町同士の争いの種を生むものであった。引き合いの際には、家の屋根にあった石を相手の行燈にぶついたり、拍子木を持って行燈に上り、頭を叩いたりすることもあり、場合によっては、行燈から落ちて体に竹が刺さったり、行燈に頭を挟まれて亡くなった人もいた。また、警察と取っ組みあいになって警察を川へ投げ入れたり、行燈同士が激しくぶつかって倒壊して焼けることはよくあることで、それに対して警察側が関与し、裁判になったり、傷害罪や暴行罪で逮捕されたりすることもあった。こうした激しい引き合いが行われているが、30年ほど前の上町と浦町の引き合いのときにこんな出来事があった。

上町と浦町の引き合いの時、先頭の辰巳町を上町が素早く通り抜け、浦町が態勢を整えていないうちに上町がやってきたため、その行燈が到達する直前、浦町が行燈はバランスを崩してしまい、上町が行燈の行く手を遮るように向かいの民家の二階に倒れてしまった。その時、浦町が行燈には若衆が大勢（10人ほど）乗っており、家屋と山車に挟まれてしまった人もいたが、民家の窓から家に入って転落を逃れた。そして、奇跡的に怪我人は出ず、倒れた行燈はその場にいた見物客や若衆がみんなで起こして元に戻ったという話である。当時は、行燈が道沿いの民家にぶつかったり、行燈が倒れたりすることもよくあったため、それに対して慌てることなく柔軟に対応するような雰囲気の人々の間であったのであろうと話す人もいる。

## 6-8. 行燈の資材と経費

行燈で使用される資材は、戦時中から戦後の 21、22 年ごろまで資材を調達するのにとても苦労していた。特に、行燈の中に入れる明かりであるローソクが不足していて、高岡まで買い出しに出かけたが、闇ルートであったため、非常に高価であった。戦争の前後は、資材不足であったため、数年間子供行燈のみだった年もある。現在ではローソクではなく、バッテリーが行燈の下に積まれ、電気で明かりが灯されているが、昔のローソクの明かりの方がよかったとも言われている。夜高行燈にかかる経費は、戦前までは町内の「オヤッサマ（お金持ち）」がその費用の大半を負担していた。戦後になって、町民が費用を負担するようになってからは、大行燈が家の前を通るかどうかが、資産や所得に応じて各戸の負担額を決めていた<sup>35</sup>。資産や所得に応じて負担額を決めるやり方は、現在（2015 年）から 20 年ほど前まで行われていた方法であった。現在は、個人情報の取り扱いが厳しくなり、各戸の所得や資産を知ることはできない。そのため、全ての家から一律に集めていたり、家の人数で決めていたり、どのように資金を集めるのかは町によって異なっている。一律に集める方のやり方は、お年寄りしかいない家からも一律に集めるのかなどの問題も浮上している。また、行燈に対してよく思わない人もいるので、資金集めも負担が大きい。時代とともに町の戸数が少なくなるにつれて、1つの家から徴収する金額も増え、また、行燈を制作するための費用も高くなっており、行燈制作の収支は厳しくなっている。

## 7. 福野夜高行燈を広める取り組み

### 7-1. リヨン遠征<sup>36</sup>

2011 年 12 月上旬に福野夜高祭の行燈 5 基が、フランス第 2 の都市であるリヨンで行われる「光の祭典」に参加した。この祭典には毎年約 300 万人もの人が訪れ、2011 年の祭典の器官は 12 月 8 日～11 日の 4 日間で、祭典期間中はリヨン市内の約 300 箇所以上がライトアップされ、光のアートの展示やパフォーマンスが行われた。

夜高行燈は 7 町のうち 4 町が渡仏し、新町と横町、上町が大行燈を 1 基ずつ、浦町は小行燈 2 基を持ち込んでリヨン市内を練り回した。リヨン遠征のための行燈は 8 月くらいから制作が進められ、新町と上町は練り回しのときにリヨン市の電線にぶつからないように、行燈に載せる山車を通常より低く作り、行燈の高さ 6 メートル以下になるように調整し、さらに、図柄やデザインも特別仕様になされた。横町は、通常の大行燈よりも高さを抑えるため、中行燈に使われる一回り小さい山車の米俵や千両箱の飾りで豪華で見応えのある

<sup>35</sup>福野夜高保存会 『万燈』 平成 15 年 3 月 20 日

福野夜高あんどん雑考 昭和 45 年 5 月 1 日発行 著 長岡一忠

<sup>36</sup>この項の記述は、『北日本新聞ウェブ webun（2011 年 8 月 2 日、8 月 8 日、9 月 2 日、9 月 21 日、9 月 24 日、9 月 28 日、10 月 16 日、11 月 23 日、11 月 30 日、12 月 3 日、12 月 4 日、12 月 5 日、12 月 8 日、12 月 9 日、12 月 13 日）』と『江戸川大学紀要 23：183-195』に基づくものである。

大行燈を作った。浦町は、東日本大震災からの復興を願って「がんばれ日本」の垂れ幕を本番で行燈に吊るすために制作した。9月中に完成された行燈は福野地域にある企業の倉庫でコンテナへ積み込まれて名古屋港まで輸送された後40～60日ほどかけ、船便で少しずつリヨンに輸送された。そして、12月にリヨン市で組み立てられ本番に臨んだ。

祭典が行われている間は、毎日夜高行燈の練り回しは毎日2時間ほどの練り回しが行われた。練り回しには、福野夜高遠征団を中心に現地の市民や大学生、高校生などのボランティア約160人が参加した。ボランティアには女性が多数参加し、男性と同じように行燈の上に立って拍子木を叩いた。福野では、大行燈を動かす際に女性に関与することはなく、日本で行われている夜高祭では、女性を排除することで町の男性の結束を高め、引き合いへ向けて雰囲気盛り上げて行事のクライマックスである暴力的な破壊に至るという構成になっているが、リヨン遠征は神事ではなく、交流と友好を重視して、福野の夜高祭の一番の目である引き合いも行われなかった。祭典の最終日には夜高祭での締めくくりに行われる「しゃんしゃんの儀」が再現された。

## 7-2. 日本各地への出張

先述したリヨン遠征のみならず、夜高行燈はその美しさと力強さを日本各地で披露している。各町の人々が協力して夜高行燈を日本各地に出張させる取り組みの成功を目指すことは福野の人々の一体感や仲間意識を生んでいるとみられる。また、取り組みの成功は翌年の夜高祭の集客につながり、祭りの盛り上がり直接関わっている。

表8 これまでの夜高行燈の対外的な取り組み(『万燈』をもとに作成)

1973年 10月	夜高行燈が東京の銀座祭りに出演する。テーマは「ふる里の祭りを銀座で見よう」。4町1基ずつ参加。町民250人の練り回しで賑わう。
1978年 10月	夜高太鼓が京都で開かれた民芸芸能大会に出演する。
1989年	夜高行燈、名古屋市制百年祭に参加する。
1991年 8月	姉妹都市多度津町町制百年記念「たどつまつり」に辰巳町・七津屋行燈が参加。記念に御蔵町中行燈を寄贈。
1996年	神戸祭りに横町参加。京都祭りに横町・浦町参加。
2002年 3月	夜高250年記念事業として、裁許・若連中他7町有志127名が伊勢へ崇敬参拝。宇治橋大鳥居横に文久の大行燈を早朝から飾り、点灯した。

## 8. 福野夜高祭の展望

ここでは、夜高祭の調査を終えてこの報告書の執筆にあたった今井、大間知、竹田がそれぞれ夜高祭の展望を述べていく。

今回、夜高祭の調査を行うにあたって、特に当日の夜高祭の様子で私が一番に感じたことは、夜高祭の観光化である。「福野の町のお祭り」という内向きなところも残しつつ、練りまわし中の小さなパフォーマンスや、前夜祭の代行燈など、外の観光客を意識した部分も感じられた。このことについて福野の夜高祭に携わる様々な方に聞くと、案外人によって違う答えが返ってきた。夜高祭の様子をネットの動画やブログや Facebook にあげて、積極的に外に発信することで夜高祭を有名にし、外からたくさんの方が来てくれることを望む人もいれば、特に外に向けたことはせず、昔ながらのままの形でこれからも夜高祭を続けていくことを望む人もいた。

しかし、人口の減少や高齢化などの影響で、昔の形のままで夜高祭を行うことが難しくなっている。町によって差があり、人の少ないところは祭りをを行うにあたっての組織が成り立たなくなっている町もある。今までのやり方を守ってあくまで「一つの町」として祭りに参加するのか、それとも合併や組織の形を変えてやっていくのかという葛藤が存在している。このことも踏まえて、「福野夜高祭」を存続させていくためのやり方や、これからの夜高祭の在り方についての考え方が人によって様々であった。しかし、人によって夜高祭のこれからの対する考え方やかかわり方は違うものの、祭への強い思いはどの方も同じであるということが感じられた。したがって、今後夜高祭の形がどんな風に変わっていくかが、このように夜高祭を思い続ける人々がいる限り福野の夜高祭はこれから何十年、何百年先も続いていくのではないだろうかと思う。

また、町の人々どうしのつながりを強く感じた。話を聞いていると、祭りがあることによって近所づきあいが密なものになり、休日に一緒に遊びに行ったり飲みに行ったりするようになったという方もいた。祭りを通して人と人とのつながりが保て、そこで信頼関係が築かれている。そのつながりは町の中だけではなく、他町をこえても広がっている。

福野の昔と今とこれから、そして人と人。「福野夜高祭り」は福野の人々にとって、様々なものを繋げる大切な祭りであると私は今回この調査を通じて感じた。(今井)

上でも述べられたように、福野夜高祭は続けていくのが年々難しくなっている。その原因は、町の人口減少、特に若者の減少である。福野町の中心は戦後の財閥解体によってオヤッサマがいなくなったことで、民主化が進み、福野町の中心から離れた郊外に移り住む人も多くなった。よって福野町の中心からドーナツ化現象が起き、人口減少とともに祭りの担い手となる若者の数も減少している。こうした少子高齢化が進んだ福野の夜高祭をどのようにして後世へ繋げていくか、祭りを思う人がそれぞれ真剣に考え、協力し合わなければならぬ。祭りにかける情熱、福野町を愛する思い、現実と向き合っの相互理解、これからのあると思われるいろいろな壁を乗り越え福野の夜高祭が続いていくことを願っている。

福野夜高祭を始めとし、今後福野町を活性化していくためには、観光産業に力を入れることが大切である。福野夜高祭を訪れる観光客も毎年増加している。観光客も祭を見ているだけではなく、何かしらの形で祭に参加してもらい、一緒になって楽しめるような祭に



できたらいいと思う。本来なら福野町の者だけで祭を行い、観光客を取り入れずに行えばいいのかもしれないが、人口減少からそれは実現が難しくなっている。もう一つは、行燈に女性も参加できるようにすることである。例えば、今は中行燈や大行燈の行燈を引いたり乗ったりすることができるのは男性のみで女性は禁止されているが、それを中行燈までは女性も引いたり乗ったりできるようにして、大行燈は男性限定にするなどである。男性のみでなく女性も行燈に参加できるようにすれば、今の人数不足の状況を和らげることもできるかもしれない。(大間知)

調査で夜高祭に関する聞き取りを行うなかで、町の人々の夜高祭に対する熱い思いがとも伝わってきた。その熱い語りから町の人々にとって夜高祭と、夜高祭のこれからについて考察していきたい。

現在の夜高太鼓は女の子も参加しその伝統的な音を響かせていることに一役買っている。彼女達の親世代が子どもの頃は、女の子が行燈を引き、太鼓を叩くことが許されていなかったが、福野町の人口減少に伴って少子化が進んだ結果、女の子にも祭りに参加することが求められ、現在ではちび・小行燈を引くことにも参加している。人口減少に伴う少子化は町の活力低下ということにおいてはマイナスの意味を持っているが、祭りに女兒も参加できるようになったということはプラスの意味を持つのではないか。福野小学校に通う女子児童は、「夜高祭を楽しみにしているし、大好き。だから今こうやって夜高祭に参加できることがとても嬉しい。夜高祭を行うためにたくさんの人が協力してくれていることをわすれてはいけない」、「行燈を引いたり、太鼓を叩いているだけの人が多いけど、祭りの意味をちゃんと知ってはいけません」と話している。これからは女性が「あんどん後家」と呼ばれる時代が終わり、男性のものだった夜高祭に女性がどんどん参加し、祭りにおける重要な役割を女性が担う時代が来るのではないかと考える。

夜高祭の調査を行う上でたくさんの人々に話を聞かせてもらった。少し怖いなという印象の人も夜高祭の話をするときは頬が緩み、こちらが一聞けば十返してくれる、まさにそんな感じで、皆夜高祭のことが本当に大好きなのだということが伝わった。夜高祭は2か月間かけて作った行燈を喧嘩によって壊しあうため、毎年多額の修繕費がかかり、さらに行燈にかかる諸々の経費を合わせるとかなり大きい額になる。その金額のほとんどは福野町の一般家庭からの協賛金によってまかなわれているが、福野町中心部の人口減少に伴う戸数の減少によって各家庭の負担が大きくなり、祭りの継続が危ぶまれたこともあったそう。それでも町の人々の夜高祭へかける熱い思いによって今日まで夜高祭は続けられてきたし、これからも続けられていくのだと思う。ある方に話を聞いているとき、「俺より、もっと詳しい人がいるからちょっと待って。その人呼ぶから」と言われ、そのとき私は町の人々の深い関わり合いを感じた。いくら同じ町内の幼馴染だといっても大人になるにつれて接点がなくなり疎遠になっていくものだと思うが、福野で生まれ育った生涯夜高祭に関わる人々は祭りを通して深くつながっている。夜高祭がこれからも続けられていくこと

は町の人々にとってはとても重要なことであり、福野町への観光や移住という面や、町の活性化にも夜高祭は大きな意味を持つ。一般的に、こうした地域の祭りを継承することは、国や県など大きな括りにおいてはさほど大きな意味を持たないのかもしれないが、その地域で暮らす人々にとって重要な社会的意味やその人の価値観に関わるため、継承を支援する取り組みの更なる必要性を感じる。(竹田)

## 9.まとめ・考察

福野夜高祭の聞き取り調査を通し、どの町でも祭りの担い手である若者の少なさを嘆いている様子が目立った。進学をきっかけに町外へ出たきりの者や、福野に住んでいても、福野の中心では新しく家を建てられないので郊外で家を建てて住むなど、福野の中心からの若者の流出が止まらない。祭りに参加するのは個人の自由であり、その人が戻って来なければ後追いすることはない。そのため、流出にさらに拍車がかかるようにして少なくなっている。現在は、そうした若者の少なさを補うためにその町の OB や、外に公募をかけて町内以外から人を呼ぶなどしている。

「行燈を作るのは町内の者」という戦後以来の福野夜高祭の伝統的な考え方に対し、相反するように町外からの参加者は増えている。このまま進めば、行燈制作者はみな町外出身者となってしまいう可能性すら考えられる。しかしながら、祭りを持続させるためには町外の人の手を借りるのはやむを得ない。伝統に従って町内だけで祭りを行いたいという思いと祭りを持続させるために町外から人を呼ぶというジレンマを抱えながら今日の福野夜高祭は行われているのだろう。オヤッサマが町外から人を呼んで行燈づくりを手伝わせていたという戦前の状況から、戦後、オヤッサマがいなるとともに、町内だけで行燈制作をするようになったのが今から見ればよくなかったという考えもある。しかし、行燈が電柱に制限されて小さくなったように、人においてもまた、オヤッサマがいなくなったことで町内意識が高まり、町内同士の競り合いが強まったことで、町内で行燈制作をしようとなったことも自然の流れと言えるのかもしれない。

また、夜高祭というと大行燈の激しい引き合い(ケンカ)に専ら関心が向けられるけれども、実際には町の住民が楽しむものでもある。それは今日、小行燈とちび行燈が全行燈22基の半分を占めていることにも表れている。地域の子供たちに祭りに参加してもらう方向に変化してきている。これは、太鼓や笛では女子にも参加してもらう形になってきていることにも表れている。こうした町の住民が楽しむための夜高も戦後盛んになってきている。このようにこれまで様々に変化し、世代を越えて人々に引き継がれてきた福野の夜高祭が今後も地域で継承され、発展していくことを願う。

## 謝辞

調査を行うにあたって、夜高祭連絡協議会の西様をはじめ、夜高祭保存会の河合様、曳山保存会の竹澤様、福野町観光協会の勢濃様、七津屋の円城様、横町の島田様、新町の大塚様、辰巳町の城宝様、浦町の飯田様、成瀬様、御蔵町の中川様、日吉社の神主の長岡様に夜高祭に関するたくさんの貴重なお話を聞かせていただき多大なご厚意を賜りました。さらに、夜高祭の調査にあたって福野各町の会館に行燈の制作の様子を観察させていただくにあたっては七津屋の宮嶋様、夜高祭当日には連絡協議会の西様、夜高祭に関するたくさんの資料を貸していただいた円城様には様々な便宜を図っていただいたおかげで調査を円滑に行うことが出来ました。

皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

## 参考資料

- 阿南透 2014年 『となみ夜高祭り』の成立 江戸川大学紀要 24  
阿南透・広部直子 2013年 『福野夜高行燈のリヨン遠征と「光の祭典」』『江戸川大学紀要』23：183-195  
越中夜高太鼓保存会 1996年 『夜高祭 越中夜高太鼓保存会発足 30周年記念誌』  
北野潔 『夜鷹行燈と夜高行燈について—いつ、なぜ「鷹」が「高」に変わったか—』  
富山史壇 2004年3月 第142—143合併号  
野原久仁 2003年 『船鉾』  
福野時の会 1996年 『ふくの町立て散歩』  
福野夜高保存会・福野夜高 350周年記念事業推進実行委員会 2003年 記念誌『万燈』南砺市  
長岡一忠 昭和45年5月1日 『福野夜高あんどん雑考』

北日本新聞ウェブ webun (2011年8月2日、8月8日、9月2日、9月21日、9月24日、9月28日、10月16日、11月23日、11月30日、12月3日、12月4日、12月5日、12月8日)

朝日新聞 (2015年5月9日) 第31面

北日本新聞 (2010年5月1日、2011年4月26日、2011年12月18日刊行)

パンフレット 『越中福野 夜高祭』、『福野の曳山』、『福野 夜高行燈・曳山』

## 参考にしたウェブサイト

「北海道沼田町」

(<http://www.town.numata.hokkaido.jp/> ; 2015年11月20日閲覧)

# 「市の里」福野の変化と朝市への取り組み

林 陽子

## はじめに

福野の中心である上町交差点、通称「銀行四つ角」で朝市が行われていることを知ったのは、実習の授業で池端さんや中沖さんの報告を聞いたときだった。元々、朝市には憧れのようなものがあり、2年生の夏合宿で訪れた岐阜県高山市の「宮川朝市」では観光客の多さとその賑わいに驚いた。しかし、福野の朝市に行ってみると、「宮川朝市」とは比べものにならないくらい小規模な朝市であることが分かった。それにも関わらず、今日に至るまで長く続いているのはなぜか、何か特別な理由や取り組みがあるのか不思議に思い、今回調査を行うことに決めた。

調査では、朝市の出店者と客、商工会<sup>37</sup>（主に女性部）、地域住民を対象に聞き取りを行った。また、地産地消という観点において類似する、旬菜市場「ふくの里」（福野農産物直売所）についても調査を行った。以下では、それらを報告するとともに、今昔の比較によって見えてきた現実と住民の想いについてまとめていく。

## 1. 朝市の開かれる場所

まず、朝市が行われている「銀行四つ角」について紹介する。銀行四つ角とは、福野地域に住む人が使う通称であり、砺波信用金庫・北陸銀行・富山第一銀行が集まる上町交差点のことである。城端線の福野駅から徒歩5分ほどの位置にあり、福野の各町の中央に位置し、福野商店街の中心にもなっている（地図1）。

銀行四つ角では、朝市の他にも、福野夜高祭の引き合いやシャンシャンの儀、歳の大市（後述）などが行われる。また、トラックの荷台を利用したステージが用意され、保育園児や地域住民が踊りを発表したりするイベント等も行われている。車の通行を制限することで広いスペースを確保することができるため、イベントの際に会場として利用されることが多い。日中の様子を見ていると、銀行を利用する人や他の町に行く人が利用するため、通行人や車の通行量も多い交差点である。

---

<sup>37</sup>南砺市商工会、福野支部のこと。地元では商工会と呼ばれており、この報告書においてもその名称で記す。



地図 1. 銀行四つ角の位置

## 2. 朝市のはじまり<sup>38</sup>

福野の朝市のはじまりは、福野が町立てされたときまで遡る。福野の町立ては、慶安 2 (1649) 年の 6 月に、本江村 (現在の南砺市本江) の阿曾三右衛門<sup>39</sup>が奉行所に町立てを願い出たことによる。当時、改作法<sup>40</sup>によって村から締め出される農民のために加賀藩が新田開発や町立てを推奨しており、このことが福野の町立てに繋がった。このとき、阿曾三右衛門 (写真 1) が出した町立ての願いの中に、市に関する以下のような記述がある。

一、新町には市を立て、近辺の市日と重ならないよう二・七の日の六斎市 (月 6 回の定期市) を開きたいので、藩から許可の市札を下付されたい。

慶安 3 (1650) 年の正月に町立ての許可が下りると、町立ての願い通りに六斎市が開かれた。先に町立てされていた福光・井波・杉木新・津沢の町々のほぼ中央に位置していた福野で始まった市は、近村の農民達の交易の場・砺波郡の物資集散の中心地として賑わっ

<sup>38</sup>出典：『ふくの町立て散歩』一、町立てと六斎市

<sup>39</sup>商品貨幣経済に興味と才能を持ち、福野だけではなく、杉木新町・福光新町・津沢などの町立てにも尽力した人物。

<sup>40</sup>加賀藩が行った政策。農民を統制することによって農業生産力を拡充し、年貢の増収をはかることを目的とした。

た。この町立てから約 350 年以上にわたって続いているのが、現在の福野の朝市である。

六齋市について、承応 4（1655）年に 21 カ条の規定が設けられたが、あまりに厳格すぎたため、寛文 8（1668）年に規定が改正された。この改正では、7 日と 17 日は横町、2 日と 12 日は浦町、22 日と 27 日は上町というように、公平を期すため市日ごとに場所を変え、市頭を置いて市を開くことが申し合わされた。つまり、この当時は、現在のように 1 か所で朝市が開かれていたわけではなく、日によって場所を移しながら 3 か所で開かれていた。



写真 1. 福野文化創造センターにある阿曾三右衛門像

### 3. 朝市

#### 3-1. 昔の朝市

町立て以来、福野で朝市は途切れることなく開かれてきたが、朝市に関する記録は少ない。このことは、福野の朝市が特定の組織によって管理されてこなかったことが理由であるように思う。『ふくの町立て散歩』によると、かつて、役場の小使が市毎に「市役」と称し、出店者から金銭や野菜を徴収したことがあったが、徴収する量の差で争いが起きたため、「市役」は廃止されている。住民に話を伺っても、「朝市は昔からやっている。販売したい農家さんが自由に集まっているだけで、誰かが管理しているわけではない」と口にする。また、日は昔から変わっていないが、以前はもっと早朝から行われていた。季節によって開始時間は異なり、行われている時間も現在より長い朝方の 3 時間半ほどであった。

出店者に話を伺ってみると、かつての出店者の数は現在よりかなり多く、銀行四つ角だけでなく、上町通りまで店が並んでいたそうだ。昔はもっと端の方で出店していたが、店の数が減ったため、銀行四つ角の近くに出店するようになったと語ってくれた人もいた。商品も、近隣の農家の野菜だけでなく、新湊の魚の移動販売や氷見の干物、呉羽の梨、城端のスイカなど、福野以外の地域からも様々な商品が出店されていた。このように、各地

から商品が集まる朝市では、市場にあまり出回らないような商品が販売されることもあった。そのような商品を、八百屋や他の朝市（砺波・福光など）で販売するために福野の朝市に買いに来る人もいた。以下の2つの表（表1-2）は、出店者と出店数・人出に関して、20年前の平成7（1995）年に調査されたものである。

表1. 平成7年10月27日の朝市（3:00~7:00AM）

	出店者住所	年齢	交通手段	商品
1	井波町山野	80代	自転車	小豆、芋の葉の干したもの、ネギ、カワトリ41、ほうずき、白豆、菊、カンナ
2	井波町安室	80代	自転車	ほうれん草、大根、つる豆、うぐいす豆、人参、里芋、大根菜
3	福野町寺家	70代	自転車	蕪、白菜、ネギ、キャベツ、里芋、ごぼう、ほうれん草、南瓜、柿
4	井波町山野	60代	バイク	里芋、ピーマン、小蕪、ユズ菜、大根、ほうれん草、つる豆
5	福野町上野	70代	自転車	ナス、しゅん菊、ほうれん草
6	井口村	50代	トラック	菊（2名）
7	福野町広安	70代	自転車	つる豆、はやと瓜、パセリ、いちぢく、ナス、野ぼたんの苗、しまがや42
8	福光町東太美	60代	トラック	つる豆、キュウリ、うぐいす豆、大根、ブロッコリー、ジャガイモ、柿
9	福野町八塚	80代	送ってもらう	大根、ネギ、小蕪、菊
10	福野町寺家	70代	自転車	ネギ、小蕪、キャベツ、つる豆、トマト、ブロッコリー、ハチミツ、菊
11	福野町広安	70代	自転車	柿 <sup>きかき</sup> 、朝鮮槇 <sup>ちょうせんまき</sup> 43、ネコ柳、ダリヤ、キリン草
12	福光町在房	50代	トラック	柿、うめもどき、紫式部、ほととぎす、花水木、ピラカンサス、ツワブキ、カリンの実、ユズの苗、シソの実
13	井波町山野	50代	トラック	ナス、キュウリ、トマト、つる豆、小蕪、ほうれん草、タマネギ、ニンニク、酢ずいき
14	砺波市	60代	トラック	大根、里芋、白菜、大根菜、千すじ菜44、にんにく、ずいき

41ずいきの干したもの。

42編萱。草葦の一種で、葉に斑が入ったもの。

43イヌガヤの園芸変種。庭木や生け花に用いる。

44水菜のこと。

15	井波町山見	50代	トラック	平たけ、なめこ、しいたけ、干芋、ほうきんの実 <sup>45</sup>
16	福野町年代	60代	自転車	里芋、つる豆、ナス、人参
17	福野町石田	60代	自転車	蕪、ほうれん草、小松菜、ナス、里芋、つる豆、大根菜、うぐいす豆、キャベツの苗、カワトリ、菊
18	福野町七津屋	商工会 婦人部	トラック	卵、ジャム、筍の水煮、大根、サラダ菜、白菜、キャベツ苗
19	井波町利屋	70代	自転車	きんじそ <sup>46</sup> 、ナス、小蕪、キャベツ、うぐいす豆、小松菜、白菜、つる豆、千すじ菜、大根菜
20	福野町八塚	70代	バイク	かすみ草の苗
21	福野町野尻野	80代	自転車	カブ、ずいき、大根菜、菊

(『ふくの町立て散歩』 p.82 より)

表 2. 朝市の出店数と人出 (平成 7 年 10 月 27 日)

時間	3時	3時半	4時	5時	6時	6時半
出店数	1	12	18	21	21	17
人出	0	2	19	32	23	14

(『同』 p.83 より)

朝市について、福野在住で 60 代の福江さんご夫妻からお話を聞くことができた。夫の明さんが福野の出身で、妻の和枝さんは昭和 54 (1979) 年に福野に嫁に来ている。明さんの母が駄菓子屋を経営しており、そのこともあって、和枝さんは商工会女性部の部長を 7 年間務めていた。現在も商工会の部員として朝市に関わっている。

明さんによると、昭和 30 年代 (1955~65) はもっと道が狭く、農家が小遣いを稼ぐために、商店の軒先を借りて野菜を売っていたそうである。商店の軒先を借りていたため、場所も決まっており、商店の邪魔にならないように早朝に販売を行っていた。このことが、福野の朝市が早朝に行われている理由の 1 つなのではないかと語っていた。また、昔は車がなかったため、1つの場所で様々なものを買うことができる朝市は、とても便利だったそう。朝ご飯の足りない食材や使いたい食材を買いに来たり、仕事の前にちょっと寄りしていただいようである。朝市は、買い物だけでなくおしゃべりを楽しむ場でもあり、「年寄りにとって、おしゃべりは元気の源だ」と語ってくれた。元気な人が顔を合わせ、楽しくおしゃべりができる朝市が続いてきたことは、福野が活性化していくために必要な人同士

<sup>45</sup>ホウキ草の黒い粒状の実。プチプチした食感が珍しい食べ物で、報恩講料理にも使われる。

<sup>46</sup>金時草のこと。



のつながりを構築するのに重要な役割を持っていたのではないだろうかと思った。

また、富山県立南砺福野高校<sup>47</sup>が朝市に出店していたという話も聞くことができた。十数年前までは、毎月 27 日に先生と生徒が出店しており、朝 5 時ごろからミニトマトやキュウリ、花などを販売していた。特にミニトマトは甘くておいしいと人気であり、また、子どもや孫の様子を見に親や祖父母が朝市を訪れて、賑わっていたそうだ。「若い人がいると朝市も活気があった。自分で作ったものを売るという経験ができるし、高齢者とのコミュニケーションの場にもなっていた」と明さんは語っていた。朝が早すぎるという保護者の意見により、朝市へは出店しなくなったが、現在でも福野高校は、歳の大市や里いもまつり<sup>48</sup>には出店している。

### 3-2. 現在の朝市

#### 3-2-1. 2・7の朝市

現在、福野の朝市は、4月～12月の2と7のつく日（2日、7日、12日、17日、22日、27日）の朝4時～6時まで行われている。12月27日にその年最後の「歳の大市」が行われると、1月～3月は雪が降るため朝市は開かれぬ。朝市の出店者は3時半ごろに銀行四つ角に来て準備を始める。朝市に出店している人は毎回ほぼ同じであるため、銀行四つ角のどの場所に店を出すかはおよそ決まっておき、場所を取り合うようなことはない。筆者は、7月27日、8月12日、9月22日の3回に朝市を訪れて調査を行った。主な出店者と出店数および人出は以下の表の通りである（表3、表4）。

表3. 平成27年7月27日の朝市

	出店者住所	年齢	交通手段	商品
1	津沢	60代	車	ずいき、どくだみ、卵、にしんの糍漬 <sup>こじ</sup> け
2	福野	50代	車	ナス、ピーマン、ジャガイモ
3	福野	70代	車	ずいき、トマト、つる豆、しいたけ、菓子、ユリ
4	旧井口村	2名	車	花
5	城端	50代	車	ナス、ジャガイモ、つる豆
6	福野	商工会 女性部	車	かまぼこ、味噌、うどん、しいたけ、卵、どじょうの蒲焼、漬物（手作り）

<sup>47</sup>福野高校の前身は、明治27（1894）年10月に発足した富山県簡易農学校である。かつては、農業科・畜産科・農業土木科・林業科・紡織科・染色科など様々な科があったが、平成22（2010）年より、普通科・農業環境科・福祉科を有する普通科高校になっている。

<sup>48</sup>毎年、勤労感謝の日（11月23日）に、里いもの収穫感謝祭として開催されている祭り。福野体育館で行われ、多彩な里いも料理やステージが楽しめる。贈答用や正月用の里いもを買い求める人も多く、市内外からの来客で賑わう。

表 4. 朝市の出店数と人出（平成 27 年 9 月 22 日）

時間	4 時	4 時半	5 時	5 時半	6 時
出店数	1	5	4	2	2
人出	1	4	4	4	2

出店者は、砺波信用金庫の前にあるコンクリートを机代わりにしたり、地面にシートや<sup>こ</sup>莫<sup>ろ</sup>座を敷いたりして商品を並べる。4時半までにはすべての店が出そろい、客もちらほらと来始める。客は自転車か歩きで来る高齢者がほとんどである。野菜やお供え用の花などを見て、出店者に値段や食べ方、保存方法などを聞きながら、購入するかどうかを吟味する（写真 2、写真 3）。出店者の方も、客の様子を見ながら他の商品を勧めたり、まとめて買う場合には値段を少し安くしたりして客との駆け引きを楽しんでいるようであった。



写真 2. 朝市の様子



写真 3. 出店者と客

また、商品に関する話をするだけでなく、朝市は世間話を通じて様々な情報を共有する場になっている。出店者と客の会話に耳を傾けてみると、朝起きられなかった話から始まり、足が痛いなどの体調の話、近所の人のお話、最近オープンした店の話、旅行に行ってきた話など様々な話題について話している。店で商品を購入した客はお金を払いつつ、出店者は商品を袋に入れつつも、おしゃべりが止まることはない。買い物自体は 10～15 分ほどであるが、買い物を終えてからも、次の客が来るまで時間の許す限りおしゃべりを楽しむ。家にいることが多いであろう高齢者にとって、朝市はおしゃべりができる貴重な時間であるようだ。また、小規模な朝市であるため、出店者も来る客も顔見知りの人が多いようである。そのような顔見知り会ったり、話したりするために朝市に来ている人も多いのではないと思われる。近所付き合いや昔からの知り合いを大切にする高齢者が客に多いことが、現在まで福野の朝市が続いてきた理由の 1 つだろう。

5 時を過ぎると客の数は多くなり、商品がすべて売れた店は、各自片付けをして帰っていく。5 時 55 分ごろにはすべての店が片付けを始め、6 時を過ぎるころには完全に元の銀行四つ角に戻る。

朝市が銀行四つ角で行われていることに関しては、長年続いている朝市であることや早朝に行われるものであること、自然発生的なものであることなどの理由から、どこかからクレームが出るようなことはない。朝4時～6時という早朝の時間帯に朝市が行われているのは、それよりも後の時間だと車が通って危険だからという理由が最も大きい。

雨の日も朝市は行われるが、銀行四つ角には雨をしのげるような場所がないため、雨の日は商品を車に乗せたまま、銀行の軒下を利用して販売を行う。客も少なくなるため、雨の場合は出店しないという出店者もいる。10年ほど前に、市議会で、朝市のためにテントを出す話が出たが、出店数が少ないため、結局行われなかった。また、屋根のある駅前やヘリオス・アミューなどに場所を移動するという話もあるが、実際に変わったことは現在まで一度もない。場所を変えた場合、かえって客が来なくなるのではないかと、という意見もある。

出店者に話を伺ってみると、ほとんどの方が10年以上前から朝市に参加している人であることが分かった。また、商品は、自分で栽培したものや作ったものを売っている人だけでなく、仕入れたものを売っている人もいることが分かった。自分で栽培している人の場合、家族で食べるために自家栽培している野菜を少し多めに作って売っていたり、市場には出せなくなった花を朝市に売りに来たりしている。仕入れを行っている人は、他の市にも出店している人や、自分の店で商店をしている人である。しかし、商店をしている人は、「仕入れたものよりも自分で作ったものの方が利益が出る」と語っていた。朝市では、損をしなければ良く、仕入れ値とほぼ同じ値段で販売を行っているようだ。実際に値段を見ると、トマトが3個で100円、しいたけが1パック50円など、スーパーよりもかなり安く、この安さを求めて朝市に来る客も多い。朝市の規模が縮小していることについて聞いてみると、高齢化で出店者・客の両方が減少していることや、スーパーや旬菜市場「ふくの里」（後述）ができたことが原因ではないかと語っていた。

次に、来ていたお客に話を伺うと、福野在住の人がほとんどであった。歩きや手押し車を押している高齢者の人が多いが、中には自転車で来ている人もいた。毎回来る80代の女性は、「車がないから、歩いていける朝市は助かる。スーパーにも行くが、遠いからつらい」と語っていた。90代の女性は、自分で野菜を栽培しており、朝市には花を買うために来るという。朝市以外の場所にもよく買い物に行くという50代の女性や60代の女性は、朝市の商品の安さを強調していた。特に、60代の女性は、「福野の朝市で買った花は長持ちする。売っている人の好みが出ておもしろいし、おいしい。子どもも良く食べる」と語ってくれた。銀行四つ角のそばに住む女性は、「近いから、散歩がてら朝市に行っている。商品は少なくなったが、昔から続いている朝市が絶えたらあかんと思って行っている」と語った。朝市に来る頻度や目的は様々であるが、福野の人々にとっての朝市は、手軽に買い物をすることができる身近な場所であることが分かる。

朝市に来ていない人にも話を聞きたいと思い、近くのスーパー（ショッピングセンターア・ミュー）で買い物客にインタビューを行った。福野の朝市を知っているかどうか、普

段野菜をどこで買っているかなどについて聞いてみた。40～70代の7人にインタビューを行ったところ、全員が福野で朝市が行われていることを知っていた。しかし、過去に行ったことはあるが、現在は行っていないという人が多く、現在も行っているという人は2人だけであった。朝市に行かなくなった理由を聞いてみると、「朝早すぎて起きることができない」「仕事をしていると朝は忙しい」「わざわざ朝市に行かなくても、スーパーや直売所で地元の野菜を買うことができる」などの意見があった。しかし、「時間が合えば行ってみたい」「朝市の野菜は新鮮だと思う」など、朝市に対して肯定的な意見もあった。また、普段の買い物はスーパーを利用しているという人でも、地元野菜を優先して買うようにしていたり、直売所に買いに行ったりするという人も多かった。値段が高くて地元野菜を食べたいと考えている人にとって、地元の野菜を安く買うことのできる朝市は買い物に最適な場所であるようだ。時間帯を変更し、出店数を増やすことができれば、福野の朝市にもっと多くの人が訪れる可能性はあると思った。

### 3-2-2. ぼんまえ朝市

平成27(2015)年に初めて行われた取り組みに、「ぼんまえ朝市」というものがある。これは、8月12日に通常の2・7の朝市と並行して開かれた朝市であり、商工会女性部が企画を行った。場所は銀行四つ角にある砺波信用金庫の駐車場で、時間は朝4時～7時であった。パンや菓子・お茶などの食品を扱う店の他に、花、キルト雑貨の店など計6店と、商工会女性部・青年部が出店していた。これらは商工会女性部の呼びかけによって集まった店であり、通常の2・7の朝市には参加していない。ぼんまえ朝市に出店した各店の住所と商品、その日の2・7の朝市の出店者、全体の出店数・人出は以下の表の通りである。

表5. 平成27年8月12日のぼんまえ朝市

店名	住所	商品
旬菜彩菓ラ・ナトゥーラ	砺波市	パン・焼き菓子・スープ
くじら堂(6時～)	滑川市	ベーグル
花工房みやび	福野	多肉植物・苔玉・花苗
twinkle smile	福野	布小物・バッグ
菓子工房ボヌール	旧井口村	シフォンケーキ・マフィン 自家製ブルーベリー
朝山精華堂	福野	朝茶(お菓子付)
商工会青年部	福野	パン
商工会女性部	福野	コーヒー・南相馬特産品 <sup>49</sup> ・うどん・かまぼこ・味噌・かぼやき他

<sup>49</sup>かつて、福野の人が南相馬に移住したことから、現在も交流がある。復興支援として、朝市やイベント等で特産品の販売を行っている。

表 6. 平成 27 年 8 月 12 日の通常 (2・7) の朝市

	出店者住所	年齢	交通手段	商品
1	津沢	60代	車	梅干し、どくだみ、卵、にしんの糍漬け
2	福野	50代	車	ナス、ピーマン、ジャガイモ、花
3	福野	70代	車	花、ナス、しいたけ、お菓子
4	旧井口村	2名	車	花
5	城端	50代	車	ナス、ピーマン、柿
6	福野	商工会 女性部	車	かまぼこ、味噌、うどん、しいたけ、卵、どじょうの蒲焼、漬け物(手作り)
7	福野	3名	車	花
8	福光	60代	車	しじみ、ジャガイモ、キュウリ、花

表 7. 朝市全体の出店数と人出 (平成 27 年 8 月 12 日)

時間	4時	4時半	5時	5時半	6時	6時半
出店数	13	14	12	13	11	6
人出	26	31	29	33	12	7

筆者が 4 時ごろに銀行四つ角に到着すると、すでにたくさんの人が準備を行っていた。出店者は自分でテントを建て、折り畳みの机などに商品を並べていた。朝市が始まってからの様子を観察していると、やはり高齢者が多いという印象を受けた。そのほとんどは通常の朝市にお供え用の花を買いに来た人であり、そのついでにぼんまえ朝市に寄っていくという感じであったが、野菜が中心であるいつもの朝市とは違った商品に興味を持っている様子であった (写真 4)。朝 4 時半という早朝で、まだ薄暗いにも関わらず、それぞれに買い物やおしゃべりを楽しんでいる様子が見受けられた。6 時からの販売を予定していたくじら堂が、早く到着したために 5 時過ぎから販売を始めると、瞬く間に売れて 5 時半には完売してしまった (写真 5)。1 人で 5 個以上ベーグルを買っていく人も多く、くじら堂を目当てにそのあとやって来た人は売り切れを知ってがっかりしていた。他の出店者の方に話を聞いてみると、くじら堂のベーグルは有名で、砺波のチューリップ朝市<sup>50</sup>でも早朝から並ぶ人がいるほど人気があると教えてくれた。6 時ごろに家族連れや若い客や増えたのはくじら堂の出店が影響しているのではないかと感じた。また、くじら堂のベーグルを買うことはできなかったが、他の店でパンなどを購入して帰るといった人もいた。6 時を過ぎると客

<sup>50</sup>4 月～10 月の第 2 日曜日の朝 6 時～10 時頃に、砺波チューリップ公園で開催されている朝市。平成 22 (2010) 年 10 月から開催されており、(公財) 砺波市花と緑と文化の財団、(一社) 砺波市観光協会、朝市実行委員会 (ラ・ナトゥーラ) が主催している。「体にいい朝、楽しい公園」を目指し、日曜の朝を有効に活用することを目的としている。会場ではラジオ体操が行われ、ベーグルやスープなどの朝ごはんを販売するお店が多く出店している。

は少なくなり、早く起きられなかった人が来たり、店や商工会の人同士がおしゃべりをしたりしていた。



写真 4. ぼんまえ朝市の様子



写真 5. くじら堂に並ぶ客

駐車場の奥や周辺には、机と椅子が置いてあり、購入したものをその場で食べられるようになっていた。これらは商工会女性部と青年部が前日の夕方に準備したものである。ぼんまえ朝市の商品は、パンやスープ・マフィンなど、朝ご飯としてそのまま食べられるものが多く、友人や知り合いと話をしながら購入したものを食べている客もいた。また、店の人も買い物を楽しんでいるようであった。少し客足が途絶えると、店番を他の人に任せ、交代で他の店の商品を見に行ったり購入したりしていた。財布を片手に手軽に買い物ができるのは、朝市の魅力のひとつだと思った。

ぼんまえ朝市を企画した商工会女性部の部長、山田さんに話を伺うと、今回ぼんまえ朝市を行ったのは、「もっと朝市を知ってもらいたい」からということだった。高齢化の影響もあり、朝市に来る人は年々少なくなっている。ぼんまえ朝市のように店を呼ぶことで、若い人がもっと朝市に来ることを期待している様子であった。そのために、町内にぼんまえ朝市のチラシを配ったり、ラジオで 20 分間の宣伝を行ったりしたという。当日も、地元のテレビ局が撮影していたり、山田さんをはじめとするピンクのポロシャツを着た 6~7 人ほどの商工会女性部のメンバーが交通整理をしたり、客や店の人と積極的に話したりして朝市を盛り上げようとしていた。

通常の 2・7 の朝市に関して、表 3 と表 6 を比べてみると、8 月 12 日はいつもより出店者が増えていることが分かる。表 3 にある出店者 6 店に加えて、この日は 2 店来ていた。また、野菜しか販売していなかった出店者も、この日は花を販売している人が多い。これは、8 月 12 日がお盆前で、お墓参り・仏壇・地蔵用の花が良く売れることが理由である。出店者や客に聞いたところ、8 月 12 日は例年、いつもより人が多く来て賑わうと話していた。福野から花を出店した 3 名は、花の生産者で、普段は市場や「ふくの里」(後述)に出荷している。しかし、盆前と歳の大市のおきのみ、朝市にも出店しているそうだ。大きなバケツで 4~5 種類の花を売っており、花を買いに来た人で人だかりができるほどであった。

### 3-3. 20年前との比較

ここで、平成7(1995)年の朝市と現在の朝市について比較してみたい。表1と表3を見比べてみると、店の数が大きく減少していることが分かる。平成7年には21店あったが、現在では3分の1以下の6店になってしまっている。出店者の住所は、福野が中心であり、その周辺(井波、福光、城端、井口など)の地域からの出店もあるという点で、あまり変化はない。規模が縮小しているにも関わらず、周辺地域からの出店は維持されていることから、福野は現在でも物資集散・交通の中心地としての役割を果たしていると考えられる。

交通手段を見ると、平成7年は自転車であって来る人がもっとも多く、次いでトラック・バイクである。また、福野から出店している人のほとんどは自転車であり、周辺地域から来る人がトラックを使用している。これに比べて、現在では出店者の全員が車を使用している。高齢者による車の使用がより一般的になったことが理由のひとつとして考えられるが、他にも、商業施設の整備などによって車が最も便利な移動手段になったことも考えられる。出店者の体力的な面で車を使用する人が増えた可能性もあるが、出店者の年齢は50~80代が中心であることに変わりはなく、年齢から体力の衰えを考えることは難しい。また、自転車やトラックを多く使用していた理由として、現在よりも農業が盛んであったことが考えられる。自宅の近くにある畑などに行く際に、自転車やトラックを使用していたのではないだろうか。商品の種類を見ると、平成7年は野菜の占める割合が圧倒的に多く、ついで花であった。現在の朝市の商品も野菜と花が中心ではあるが、仕入れたものを売っている人も多く、農業を行っている出店者が減少していることは明らかである。これらのことから、交通手段として車が一般化したのかもしれない。

次に、表2と表4を見比べてみると、出店数の減少と共に人出も大きく減少していることが分かる。少子高齢化によって福野の人口自体が減少していることや、朝市の規模が縮小したことで朝市に来る人が少なくなったことが要因であると考えられる。時間帯については、開始時間が遅くなり、終了時間が早くなったものの、朝5時頃が人出のピークであることは今も昔も変わらない。平成7年は朝3時から朝市を行っていたが、開始してから朝4時までの人出はわずかに2人である。このことを考えると、現在の朝市が朝4時から開始されるようになったのも納得がゆく。また、ピークである朝5時頃は、起床してから朝の支度などを始めるまでの時間帯に当たると考えられる。この束の間の時間を使って朝市に来る人が多いために、朝5時が人出のピークになっているのかもしれない。

ここまで、表を使って昔と現在の朝市について比較してみた。出店数や交通手段、出店者に占める農家の割合、人出、朝市を行っている時間帯に関して変化はあるものの、周辺地域からの出店があることや野菜や花が商品の中心であること、出店者の年齢が50~80代であること、朝5時が人出のピークであることに関してそれほど大きな変化はない。他にも、客は福野の人が中心で60~80代の女性が多いこと、その大半は歩いて来ること、顔見知りが多くおしゃべりが盛んであることは昔から変わっていない。朝市の規模は縮小しているものの、朝市の基本的な部分に関しては変化していないことが分かる。

福野在住の福江明さんは、昔の朝市について語ってくれる一方で、現在の朝市の衰退について心配しているようでもあった。車の普及によって、遠くのスーパーなどに買い物に行けるようになり、冷蔵庫の登場によって保存ができるようになったため、毎回朝市に行かなくても良くなった。また、高齢化によって農家の数は減少し、若い人は町の外に出て行ってしまふ。そのため、「福野の朝市のような昔ながらの朝市はなくなってもおかしくないし、本当ならばなくなっていくものだ」と語っていた。しかし、「そうだとしても、町立てのころから続いてきた朝市が今後も続いてほしい」と語っており、福野の朝市について新聞にも投稿している。明さんのように現在は朝市に行くことのない人にとっても、定期的に開かれている朝市は生活の一部に変わらないことが分かった。

出店数や人出が減少し、昔の賑わいはなくなったとしても、朝市を通じて築かれる人と人のつながりがなくなることはない。むしろ、以前よりも濃い関係性を築くことができるようになったのではないだろうか。朝市に来る客の様子を見ていると、どの人も必ず誰かと話をしてから帰る。朝市に会話は必要不可欠なものなのである。この会話こそが、昔と現在の朝市に共通する部分であり、朝市を存続させ続けている要因であると思った。

#### 4. 歳の大市<sup>51</sup>

歳の大市とは、12月27日に開かれるその年の最後の市であり、主に正月用品を売るためのものである。福野町の中心街（上町・横町・御蔵町・田中町・浦町）約500mが歩行者専用となり、朝早くから多くの買い物客で賑わう。文献によると、この日は毎年3万人以上もの人出があり<sup>52</sup>、終日、町全体が活気づく。売られているものは、庄川の木工品、白、杵、



写真 6. 昭和 28 年の歳の大市

(『福野町の軌跡』p.20 より)

蒸籠、正月用のしめ飾、切り花、松や梅の盆栽、葱や白菜、大根、蕪、里芋等の越冬野菜、鮮魚、衣料品、骨董品など様々であり、たい焼きや綿菓子・お面・風船等の香具師の店もある。出店者は、各自で警察に道路使用許可を取る。本来ならば、福光の警察署で手続きを行い、許可が出るまでに1週間ほど待たなければならない。しかし、歳の大市は毎年のものであるため、前日の26日に福野の交番で手続きを行えば良いことになっている。また、昭和60(1985)年に、商工会

<sup>51</sup>出典：『ふくの町立て散歩』三、歳の大市

<sup>52</sup>商工会によると、平成26(2014)年の人出は1万2千人となっている。



が中心となって作った「福野町まちおこし事業実行委員会」によって、イベント性を盛り込んだ大きなテコ入れがなされている（後述）。商工会は、上町や銀行の駐車場を借りて出店者を募集するという形で、現在も歳の大市に関わっているが、歳の大市の全体を管理しているわけではない。

実際に歳の大市を訪れてみると、朝市とは比べものにならないほどの人出であった。しかし、昔に比べると人出、出店数共に減少しているようである。上町通りと駐車場を中心に、花、おもちゃ、杵臼、干物、おせち料理、鮮魚（ブリやタコなど）、洋服、陶器、野菜（ネギや白菜など）、鮎焼き、焼き牡蠣、きのこ、餅、たい焼きやたこ焼きの出店などの様々な店が約 100 店出店していた。この



写真 7. 平成 27 年の歳の大市

他にも、福野中学校（おかき、募金活動）や福野高校（白菜、ブロッコリー、干し柿、米、リンゴジュース、シクラメンなど）、商工会青年部と女性部（おでん、うどんなど）が出店していた。店に関しては、昔は、正月用の野菜や海産物、しめ飾りの店がほとんどであったが、近年は、食べ物の店が増えてきているとのことであった。客層や目的に合わせて、出店される商品も変化してきていることが窺える。

また、小西邸<sup>53</sup>が無料の休憩所になっており、公民館のボランティアによって豚汁、甘酒、コーヒーなどの販売が行われていた。銀行四つ角の中心では、商工会によるチャリティー餅つきが行われ、つきたての餅が入ったぜんざいが無料で配られた。この日は雪が降っていたにもかかわらず、多くの人が集まり、みなおいしそうにぜんざいを食べている様子が印象的であった。

## 5. 商工会と女性部

平成 16（2004）年 11 月に 8 つの町村（城端町・平村・上平村・利賀村・井波町・井口村・福野町・福光町）が合併して南砺市が誕生し、その後、平成 21（2009）年 4 月に商工会も合併され、南砺市商工会となった。福野支部は、旧福野町の商工会が引き継がれた形になっている。

女性部は、商工業をしている人やその夫人および家族で構成され、かつては婦人部とも呼ばれていた。福野支部には、現在、約 80 名の女性が所属している。部長・副部長などの

<sup>53</sup>明治末から大正にかけて多く建てられた、贅を尽くした町屋の代表格的建屋。

役員と普通の部員がいて、部長は基本的に 2 年で交代するが、過去には 1 人の人が長く務めることが多かった。

### 5-1. 朝市との関わり

元女性部部長の福江さんの話によると、商工会女性部が朝市に関わり始めたのは、45 年ほど前から約 20 年間部長を務めた方の頃からである。この頃は、各家庭で野菜を栽培していた人が多く、農家と同じように販売したい人が複数人集まって販売していただけであり、女性部として出店していたわけではなかった。しかし、平成 4 (1992) 年に福野町商工会婦人部が行った調査により、出店数の減少や出店者の高齢化、後継者の不足が深刻化していることが分かり、同年 10 月から毎月 27 日に、婦人部が農産物等の店を出店するようになった。

当時、何を販売していたか不明だが、徐々に加工品も販売するようになった。女性部の店は、部長と役員が中心になって取りまとめているが、過去の部長の中には、野菜の他に、おはぎや漬物を作って販売した人や、お茶を習っている人に声をかけて朝茶を行っていた人もいる。販売する商品が野菜から加工品などに変化していった要因には、農家との折り合いもあるようだ。高齢化などの理由で買い手が減少したことによって、前から販売を行っていた農家の野菜が売れなくなっていった。そのため、「商工会は野菜以外のものを売ってほしい」という申し入れがあったようである。このことから、商工会は加工品を中心に販売するようになり、加工品の生産の負担などの理由から、現在のように商店で商品を仕入れるようになったと考えられる。現在、仕入れを行っている店は福野やその周辺地域であり、店の仕入れ値と同じ値段で分けてもらっている（主な商品は表 3 参照）。また、得られた利益は女性部の活動資金に充てられているようだ。

### 5-2. 市へのテコ入れ<sup>54</sup>

商工会は、歳の大市や朝市に関して何度かテコ入れを行っているが、次にその取り組みについて紹介する。

昭和 60 (1985) 年に、町の活性化を目指して、町商工会が中心となった「福野町まちおこし事業実行委員会」が組織された。実行委員会では、福野町の起こりが市であったことに注目し、町のキャッチフレーズに「市の里」を提唱した。町立て以来続いてきた「市」という伝統を町おこしの中心にすることで、地域に根ざした活性化につながると考えたからである。そこで、歳末の伝統行事であった歳の大市において、「人が集まり・催しが楽しい市の里」というキャッチフレーズを大々的に宣伝したところ、地元の商店街や商工会青年部・婦人部、高校生やカブスカウト<sup>55</sup>なども積極的に参加し、特産品の店やチャリティーバザーが開かれ、例年の 2 倍以上である 7 万人もの人出になったという。

<sup>54</sup>出典：『未来につながるまちづくり』 pp.26 - 41

<sup>55</sup>ボーイスカウトの中で、小学 2 年生から 5 年生までの少年少女を対象とする部門。

この歳の大市での成功を機に、平成 13（2001）年 8 月には 2・7 の朝市にもテコ入れを行った。広く出店者を募集し、スタンプラリーや YOSAKOI 模擬体験、ギャラリー市の里の早朝開館などを企画したところ、遠方からも客が来るようになり、出店者も 28 店増加し、野菜が中心であった市から大きく変化した。平成 15（2003）年 8 月には、商工会館が現在の場所に移転したことをきっかけに、初めて「昼市」が開催された。より多くの人に朝市の魅力を知ってもらうことを目的とし、銀行四つ角で通常の朝市が行われた後、町内 4 か所（商工会館横の駐車場や空き地、ア・ミュー広場など）で昼市が開催された。それぞれの場所で 10～20 店が出店し、旧盆に必要な商品を求める大勢の買い物客で賑わった。昼市は、夏から秋にかけて、月 1 回程度行われた。しかし、市と並行して行われたイベント等の準備の負担が大きかったため、継続して行うことは難しかったようである。



写真 8. にぎわう朝市



写真 9. 昼市の様子

（『未来につながるまちづくり』より）

### 5-3. 現在と今後の活動

かつては毎月 27 日に出店していた女性部であるが、近年はその出店回数が減少している。いつ出店するかは部長と当番の部員で相談して決めるが、平成 27 年度は 6 月 27 日、7 月 27 日、8 月 12 日、8 月 27 日、12 月 27 日の計 5 回のみであった。時間帯が極端に早朝であることや、出店者の減少によって客も減少していることから、出店回数の減少は避けられないようである。しかし、前述したぼんまえ朝市という新たな試みが成功していることを踏まえると、また新しい取り組みを行うことによって朝市に賑わいが戻る可能性はあると考えられる。来年以降の朝市に関する女性部の活動予定は未定であるが、女性部の活動を通じて、他の人や団体をもっと福野の朝市に興味を持ったならば、お互いに協力してより斬新な企画を行うことができるのではないかと思う。

以下では話題を大きく変え、近年設立をして大変賑わっている旬菜市場「ふくの里」を紹介する。

## 6. 旬菜市場「ふくの里」

### 6-1. 概要

ふくの里とは、福野駅から車で5分ほど南東方向へ行った場所（軸屋）にある農産物直売所であり（地図2）、平成12（2000）年8月に設立された「ふくの産地直売所運営協議会」が管理・運営を行っている。ふくの里ができたきっかけは、福野の焼野集落の農家が道沿いで直売所を始めたことである。焼野集落は、昔から野菜作りが盛んな集落であり、専業農家がたくさんいた。特に、里芋の産地として有名であり、特産物として加賀藩に上納されるほどであった。

平成27年9月現在、個人・法人合わせて計74名の会員がいる。会員になれるのは、主に南砺市福野地域の農家であるが、例外として福光や井波の農家も所属している。入会金3万円、年会費2千円が必要であり、年会費は年末に徴収される。会員数は、最初増加していたが、近年は高齢化の影響により減少してきている。会員の年齢は、50代以上の人が多いが、中には30代くらいの若い人もいる。営業時間は、1月～5月が8時～13時、6月～7月が6時半～13時、8月～12月が6時半～15時と季節ごとに異なっているが、年間を通じて営業しており、正月以外に休みはない。開店前に農家が商品を持ち込み、その日の営業時間が終わった後に売れ残った商品を取りに来るというシステムで、出品する農家が自由に価格を設定することができる。出品者は1日平均50～60人ほどであるが、いつ出品するかどうかに決まりはなく、特定の季節にのみ出品する会員もいる（例：梨農家）。売り上げは月ごとに集計され、販売手数料として15%がふくの里に入る。商品の種類は多様であり（表8）、同じ種類の商品でも大きさや量・価格が様々で、客は自分が欲しいものを欲しい分だけ購入することができる。客の数は1日平均200～300人ほどであり、早朝（6時半～）が最も多い。日曜日は開店前に並んでいる人もいう。早朝に客が多い理由は、開店直後が最も商品の種類が多いからである。客は、40～50代以上の人が多く、常連の人が多く（写真10-11）。



地図2. ふくの里の位置（ふくの里のパフレットより）

表 8. 旬菜市場「ふくの里」の商品

野菜	かぶ、大根、人参、しょうが、ごぼう、ラディッシュ、れんこん、トマト、きゅうり、なす、ピーマン、パプリカ、ししとう、青とうがらし、かぼちゃ、ゴーヤ、ズッキーニ、冬瓜、オクラ、とうもろこし、ヤングコーン、小松菜、ホウレンソウ、水菜、大根菜、春菊、しろな、チンゲンサイ、なばな、金時草、ツルムラサキ、モロヘイヤ、アスパラ菜、からしな、キャベツ、白菜、ねぎ、たまねぎ、ニラ、にんにく、ブロッコリー、カリフラワー、レタス、食用菊、ずいき、アスパラガス、青シソ、高菜、人参菜、ルッコラ、みょうが、サニーレタス、ベビーリーフ、インゲン豆、枝豆、さやえんどう、スナップえんどう、千石豆（ツル豆）、ソラ豆、落花生、うぐいす豆、里芋、さつまいも、じゃがいも、ながいも、やまいも、菊芋、シイタケ、マイタケ、なめこ、ハーブ、山菜、銀杏
果物	甘瓜、いちご、いちじく、梅、柿、かりん、キウイ、栗、スイカ、梨、ぶどう、ブルーベリー、メロン、桃、柚子、りんご
花き	切花、菊、榊、チューリップ、ドライフラワー、キキョウ、南天、パンジー、ビオラ、りんどう、花木（枝もの）、鉢花
苗物	野菜苗、花苗、果樹苗木
穀物	うるち米、コシヒカリ、てんたかく、てんこもり、もち米、古代米、米ぬか、小豆、大豆、黒豆、ふく豆
乾燥野菜	いもじ <sup>56</sup> 、唐辛子、干し柿、干ししその葉、干ししその実、干しずいき、干し大根、干しなす、干しほうきんの実、干しモロヘイヤ、薬草、干しかぶら、鷹の爪
加工品	梅干、漬物、惣菜、かぶら寿司、おからドーナツ、ジャム、ポン菓子、卵、にんにくソース、にんにくみそ、ふきのとうみそ、ほうばみそ、柚子みそ、梅しそ、切り餅、あられ、しその実ふりかけ、りんごジュース、牛乳、珈琲牛乳、みるくぷりん、ヨーグルト、らっきょう酢、漬物の素、となみ野カレー、かつおだし、食菜酢、米こうじ、ごまだれ、つゆ

(資料「グループ別品目一覧」より作成)

販売が行われている建物は、農家がお金を出し合って建てたものである。一方で、隣接する事務所と 2 つの加工研修室がある建物は、農業振興を目的とする市からの補助金で建てられている。そのため、加工研修室は、加工部（後述）が使用している午前中を除き、南砺市民であれば誰でも使用することができる。

<sup>56</sup>赤いも、里いもの葉を刻んで干したもの。



写真 10. ふくの里の外観



写真 11. 店内の様子

事務局員であり、里芋農家として出品も行っている<sup>しづやしゅういち</sup>澁谷秀一さんに話を伺ったところ、「ふくの里の特徴は、農家だけで運営を行っていることと、正月以外に休みがないこと」の2点を強調されていた。最近、全国的にふくの里のような農産物直売所が増えているが、その多くは役所やJAが運営を行っていることが多いという。また、正月以外に休みがないことは、農家・客の双方にとって大きなメリットになっていると言える。



写真 12. 補助金で建てられた部分

### いもがい餅



ねばりの強い特産の里芋を茹でてつぶし、炊きたてのもち米とうるち米で作ったおはぎです。小豆あん、きな粉、ごまの3色入り1パックになっています。手作り小豆あんは甘さひかえめに仕上げています。胃にやさしい里芋とうまい米によって職し出す味が好評です。

写真 13. いもがい餅

## 6-2. 加工部

ふくの里で売られている加工品の多くは、加工部が生産している。加工部も会員の1つであり、「加工部会」という団体で登録されている。加工部は、直売所の隣の建物にある加工研修室で惣菜や漬け物・菓子の生産を行っている。

加工部では、曜日ごとに異なった加工品を販売している（表9）が、いもがい餅は、夏と梅雨の時期以外（里いもが傷むため）毎日販売している。いもがい餅とは、かぶら寿司<sup>57</sup>・

<sup>57</sup>かぶに鰯や鯖などの切り身を挟み、細切りにした人参と一緒に麴で漬けた漬物。

よごし<sup>58</sup>と並ぶ南砺地域の郷土料理の1つであり、茹でてつぶした里芋ともち米、うるち米で作ったおはぎのことである（写真13）。NHKが製作した南砺市の紹介番組の取材でも取り上げられたこともあるそうだ。いもがい餅は、加工部が生産する商品の中でも特に人気が高い。澁谷さんによると、かつては各家庭で作っていたが、現在家庭で作ることは少なくなってしまったそうだ。近場では、ふくの里でしか販売されておらず、これも人気の理由と考えられる。筆者も調査のために数回ふくの里を訪れたが、午後にはすでに売り切れていることがほとんどであった。加工品の売り上げは全体の1割ほどであるが、いもがい餅だけでなく、加工部が生産する加工品は売り切れ必至の人気である。

表9. ふくの里加工品販売表

月曜日	金時おこわ	とちもち	いなり寿司・おにぎりサンド
火曜日	五目おこわ	豆もち	ちらし寿司
水曜日	黒豆おこわ	草もち	てまり寿司
木曜日	小豆おこわ	梅もち・小豆とり	
金曜日	金時おこわ	とちもち	いなり寿司・おにぎりサンド
土曜日	黒豆おこわ	豆もち	ちらし寿司
日曜日	五目おこわ	草もち	てまり寿司

※いもがい餅は毎日販売（夏・梅雨の時期を除く）

## 7. 朝市と「ふくの里」の比較

ここで、福野の朝市とふくの里について比較してみたい。野菜を中心に販売しているという点は同じであるが、その他の点は大きく異なっている。まず、販売が行われている期間であるが、朝市が4月~12月までの9ヵ月の間、月に6回開かれるのに対し、ふくの里は正月以外1年を通して毎日営業している。時間も、朝市は早朝の2時間あまりなのに対して、ふくの里は昼過ぎまで営業している。そのため、日時が限定されている朝市に比べ、ふくの里を利用する人は多い。しかし、場所を比べてみると、朝市が福野の中心で行われているのに対し、ふくの里は少し離れた場所にある。ふくの里へは車がないと行くことが難しく、車を運転しない高齢者にとっては、朝市の方が利用しやすい。また、朝市は外で行われるため、その日の天候に大きく左右されるが、ふくの里はその心配がない。

販売されている商品の種類や数を比べてみると、ふくの里の方が圧倒的に多い。ふくの里は会員制であるため、日によって商品の種類や数が偏ることはほとんどなく、売り切れの場合を除けば、欲しいものが確実に手に入る。これに対し、朝市は、出店者の数が少ないため、商品の数も少ない。また、同じような季節の野菜を育てている人が多いため、商

<sup>58</sup>大根やかぶらの菜っ葉を茹で、甘味噌で炒めた家庭料理。

品の種類もあまり豊富ではない。販売方法は、朝市が基本的に生産者による直接販売であるのに対し、ふくの里では生産者が対面販売するわけではない。そのため、ふくの里では、地元の野菜を買うことはできるが、生産者と直接会ったり話したりする機会はない。保存方法やおいしい食べ方などについて、生産者から直接聞くことができるのは、やはり朝市ならではの特徴である。新鮮さはどちらも同様であるが、価格は朝市の方が圧倒的に安い。ふくの里の出店者は、売上から販売手数料が引かれるため、その分を考慮して価格を設定していると考えられる。これに対し、朝市の出店者は、自分の利益のみを考えれば良いため、より自由に価格設定を行うことができる。

このように比較してみると、朝市・ふくの里の両方にメリットとデメリットがあるが、総合的に見ると、ふくの里の方が利用しやすいと言わざるを得ない。この結果には、福野の朝市が縮小していることも関係しているが、買い物が第一の目的で来る人の場合、商品の種類や数が充実していることを最も重視する客が多いためであると思う。この点において、朝市がふくの里に勝ることは難しく、朝市の客を増やすためには、買い物以外の目的を持ってもらうことがポイントになると思った。

## おわりに

福野の朝市は、約 350 年以上前から行われている歴史のある朝市であるが、時代の流れと共にその規模は縮小傾向にある。しかし、今と昔の朝市を比較してみると、福野の高齢の女性を中心であることやコミュニケーションの場になっていることなど、基本的な部分は変わらずに続いていることが分かる。このように、朝市が今日まで続いているのは、かつての商工会や地域住民の活動の成果である。少子高齢化・人口の減少によって朝市に来る人は大きく減少しているが、話を聞いた住民の多くが、「これからも続いてほしい」と言っていた。近年各地で見られる観光化された朝市ではなく、地域住民しか来ない昔ながらの朝市は、住民同士のつながりの場となっている。顔見知りと会って世間話をする、何気ないことのようなものであるが、人との付き合いが少なくなっている現代において、その重要さは高まってきているように思う。ぼんまえ朝市のように、若い人を朝市に呼ぼうという新たな取り組みも行われている。一度朝市に来てみれば、朝市で繰り広げられる会話の面白さを実感することができるだろう。朝市に出店している人はみな気さくで、おしゃべりが大好きである。その人たちの話に耳を傾ければ、おいしい調理法だけではなく、人生のアドバイスまで聞くことができるかもしれない。朝市は、買い物をする場であるというだけでなく、会話を楽しむ場であるということ強く感じた。

福野の朝市がかつてのような賑わいを取り戻すためには、時間帯や場所・出店者数など、たくさんの課題がある。しかし、現代の生活に合うように少しずつ改善していくことができたならば、歴史ある朝市はこれからも続いていくことだろう。そのためには、地域住民の関心と協力が不可欠であるが、今回の調査において、朝市の知名度の高さと出店者・



住民の想いを知ることができた。すぐに実現することは難しいかもしれないが、これからも新しい取り組みを積極的に行っていくことで、福野の朝市がいつまでも続いていくことを期待したい。

### 謝辞

今回調査を行うにあたって、たくさんの方から貴重なお話を聞かせていただきました。忙しいにも関わらず、聞き取りに協力してくださった皆様のおかげで、無事に報告書を書き上げることができました。特に、朝市の出店者の皆様、福江さんご夫婦、ふくの里の澁谷さん、商工会の皆様には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。

### 参考文献

福野町史編纂委員会 1964年 『福野町史』

福野時の会 1996年 『ふくの町立て散歩』

上田玲子 2008年 『未来につながるまちづくり』

福野町役場 1991年 『福野町の軌跡』

福野町まちおこし事業実行委員会 1986年 『地域小規模事業活性化推進事業報告書』

# 福野縞に関する保存と継承の現在—織物産業の歩みから見る—

島崎 遥

## はじめに

私が福野縞と出会ったのは、上町通りにあるギャラリー「市の里」で開かれていた夜高祭の武者絵展示会のときである。武者絵と共にいくつか福野土産が並ぶ中で、縞模様のネクタイが目にとまった。見ていると、ギャラリーの方が詳しく教えてくれた。「これは福野縞というもので福野に伝わる織物で、福野では織物業が盛んであったときから現在まで受け継がれてきたものだ。」と聞いた。私は伝統的な産業と特産品について興味を持っており、地域の中にどのように溶け込んでいたのかがとても気になっていた。また現在、福野縞は生産が途絶えつつあり、見る機会があまり無いという。そのことを聞いたときに、福野縞がこのまま存在が薄れていくのはもったいないと私は思った。そこで、かつて産業として福野の重要な位置を占めていた福野縞が、時代と共に、福野の人々の生活の中でどのように変わってきたのかを調べることで、福野縞の魅力を発見し、伝えることができればと思い、調査対象にすることを決めた。

福野縞はかつて町に根ざした特産品だったが、町の人に聞き取りをしたところ、戦後生まれの人々のほとんどは福野縞について詳しく知らないようであった。そこで、調査では主に70代以上の人々への聞き取りを行った。また、福野縞の復活を試みようとしている観光協会や、現在も福野縞を手織りしており、福野の織物産業への造詣が深い野原リヨ子さんたちから詳しく教えていただいた。

今回は、そのような文献や聞き取りから得られた情報をもとに、第1節では福野縞の概要を記し、第2節では福野縞の歴史・製造方法・用途・行事を中心にまとめ、第3、4節では、福野縞の現状、人々の取り組みや思いを中心にまとめる。

## 1. 福野縞の概要<sup>59</sup>

福野縞とは福野町で織られた藍染木綿織物である。福野で布が織られた当初は麻で織られていたが、福野西方寺の門徒である寺嶋屋源四郎が、加賀藩から命じられて幕用の布<sup>60</sup>を織り始めたことがきっかけとなり、麻織物から木綿織物へと移行した。それ以後、福野の町の特産品として盛んに生産されるようになる。

この織物の特徴は、草木染による藍や白や海老茶、青茶といった落ち着いた色を基調とした、細い縞模様にある。また、手触りがしつかりとしていて丈夫である。また、「縞」と

<sup>59</sup>出典：『福野町史—通史編一』（福野町史編纂委員会、昭和39年・平成3年度）

<sup>60</sup>加賀藩は幕府に麻布織の下命をされていて、布織りは福野に命じていた。

いう名前が付けられてはいるが縦縞だけではなく、格子や緋、斑模様など、模様の種類が多い。また、白地、紺地のような単色の織物も「縞」と呼ぶが、その理由については第 2 節で後述する。色合いも同様に赤や緑、山吹など鮮やかな色合いが使われており、時代と共に多様化した。なお呼び名については「棧留縞」、「菅大臣縞」、「双子縞」と変化してきた。菅大臣縞とは、福野の織物の発展に尽力した寺嶋屋源四郎が美濃（岐阜県）より伝え聞いた織物で、明治に入ってから盛んに製造された。地方で紡がれた綿糸を用いて製造したもので、比較的太めの糸で織られた。「双子縞」は双子<sup>そごし</sup><sup>61</sup>が使われており、明治から大正にかけて、機織りの技術も進歩したなかで大量に製造された。このような変遷を辿ってきたが、ここでは「福野で作り出された織物」という意味を込めて、これらをまとめて「福野縞」呼ぶことにする。福野縞の用途は、着物や帯、のれん、風呂敷、巾着といった日用品と衣服が多かった。したがって福野縞は福野の町での暮らしに溶け込んでいたものと言えるだろう。また、町の歴史について記している『福野町史』の装丁にも福野縞が用いられている（写真 1）。

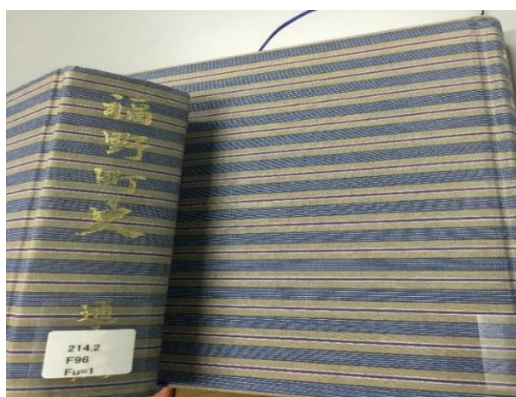


写真 1. 福野町史の装丁



写真 2. 福野縞の一覧『福野縞見本』

## 2. 福野縞の歴史<sup>62</sup>

福野の織物の歴史をたどりつつ、どのようにして「福野縞」が福野の産業を支えてきたのかを、時代ごとにふれていく。

### 2-1. 明治以前

福野縞の起源は、棧留縞（菅大臣縞）と呼ばれる木綿縞が寺嶋屋源四郎により伝えられ

<sup>61</sup>双子とは、精紡機でより掛けした 1 本の糸（撚糸）2 つをさらにより掛けて 1 本の糸にしたもの。より掛ける程、細くて頑丈な糸になる。

<sup>62</sup>出典：『福野町史一通史編一』（福野町史編纂委員会、昭和 39 年・平成 3 年度）、『杼の音』（2001 年、野原リヨ子著）および布袋和彦氏の草稿より。

たことに遡る。寛政 6 (1794) 年に寺嶋屋源四郎が越後(新潟県)の縮布ちぢみふの製織を視察し、職工を雇って福野へ帰り、土地の者に教え、普及・改良に努めた。さらに、寺嶋屋源四郎は、菅大臣縞の製造を美濃より伝え聞き、文政 3 (1820) 年、縞の製造を始めた。この頃までには、福野の町人や村々の農民には機織りの技術と慣習がかなり普及していたために良質な織物が製造できた。寺嶋屋源四郎が資本主となり、町や村の人たちの労働力によって織り出され、一手に集荷・販売が行われた福野の菅大臣縞は、藩の経済と福野の人々の生活を安定させていったのである。

## 2-2. 明治期・大正期

初期の頃にはまだ麻織物が多かったが、一般の需要に応じて次第に綿織物へと移行した。菅大臣縞は地方で紡いだ綿糸を経糸 680~700 本までの篋おき<sup>63</sup>に通し、座機いざりばた<sup>64</sup>で織ったもので、糸の太さも 10 番手<sup>65</sup>以下の太いものが大部分であった。染料も地方産の藍・丹殻・刈安・山漆みやうぼん<sup>66</sup>などを適当に使い、混色して色を出した。機屋は原糸を買い、染色場で染め、機織女工を雇い織っているところもあったが、大部分は農家の副業で、砺波・射水・婦負郡へ出機だしばた<sup>67</sup>として賃織りに出していた。販売先は日本全国に及んだ。そして明治 16 (1883) 年ごろから、紡績糸が用いられるようになり、手紡ぎの綿糸などは自家用糸になって市場から姿を消した。明治 19 (1886) 年頃から双子が用いられ、「双子縞」として生産が大いに伸びた。染料も輸入の化学染料に変わり、染色の能率が上がった。この頃、座機がなくなり手織機となったため、農家ではどんな嫁入りでも機具のつかない嫁はなく、農閑期にはどこの家からも機織りの音が聞こえた。明治期には緋織物(「福野緋」)も盛んで、経糸に緋を入れたものは特産として重宝された。

明治 35 (1902) 年頃から粗悪な織り方、染色のものが出来、福野織物の評判が落ち、販売に支障が出たのを受けて、明治 37 (1904) 年に福野織物同業組合が発足した。なお、明治末期には紡績糸ができて、織物が急速に進歩増産した。そして「越中双子縞」の生産地として名声を博し、その額が年々激増し、将来の特産品となることが期待されていた。

大正期に入ると、機械化の波が来て、機織りの方法も手織り機から足踏み機、動力織機が主流となる。大正年間を通じて、織物製造には織物消費税(間接国税として)が徴収されたが、いちいち税務署の品種査定を受け、納税印を押した後でないとも移動も販売も出来ない、織物業者にとっては不便な状況になっていた。福野縞のブランド力を維持するためであろう、福野縞として認められるためには商標や目印が必要であった(写真 3)。商標は、織られた会社を表している。また、無地の織物には耳に糸で印をつけて、織り元をしつ

<sup>63</sup>織機の付属用具で、竹または金属の薄片を櫛の歯のように並べ枠をつけたもの。経糸を整え緯糸を打ち込み、織り目の密度を決める道具。

<sup>64</sup>織り手が足を前に出し、床に座って織る原始的な織機。腰の力で糸の張りを調節する。

<sup>65</sup>糸の太さを表す単位。数字が増えるほど細くなる。

<sup>66</sup>丹殻は赤茶色、刈安は黄色染料(茶色)、山漆は黒、明礬は白に用いられた。

<sup>67</sup>出機とは、織物業者が原料を出して、下職などに織らせることである。

かりと表すことを徹底していた（写真4）。



写真3. 無地の布の耳に線状に縫われた印



写真4. 商標がついている縞織物

当時、地方は東西砺波・婦負・射水に加えて、県外では石川県河北郡にまで出機が進出していった。その数は約9000台にまで上った。ここから、明治期において、いかに機織りが盛んだったかがわかる。織物製作は福野の人々の生活の中に溶け込んでいたのである。菅大臣盆（後述）も菅大臣碑の前で盛大に行われた。大正期には、現在は残っていない福野<sup>かすり</sup> 68の生産量がピークを迎えており、町でも多くの人が所有していた。福野<sup>かすり</sup> 68はそもそも製作が難しく採算が合わないものであった。福野<sup>かすり</sup> 68に使用されている糸は単色ではなく、色がある部分と、染まらないようにした部分が決めており糸の入手が困難であった。加えて、縞模様にした糸を経糸と緯糸で組み方を決めねばならず、手間がかかるために多くは織ることが出来なかったため、姿を消してしまった。

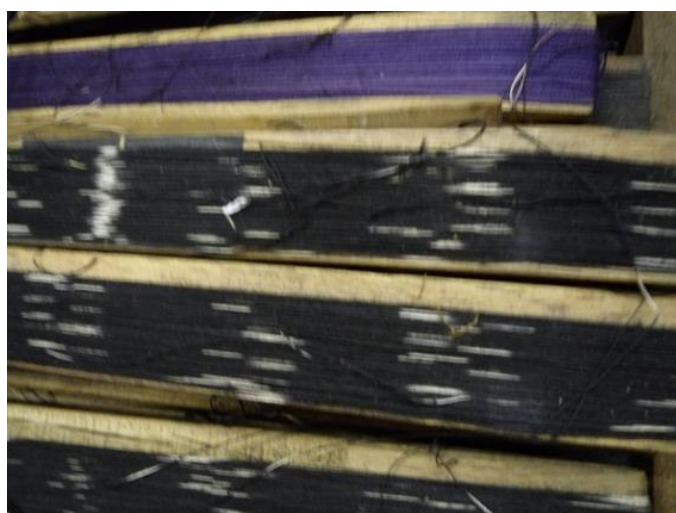


写真5. 縞に用いられる糸の束（筆者撮影）

68縞とは、白地や藍染め地に十字や細かい線などをちりばめた幾何学模様が特徴的な着物のこと。

## 2-4. 昭和期以降

昭和に入ると、福野は織物生産で日本有数の地域になり始め、知名度が上がった。戦時中では、双子縞の販売が少しずつ減っていった。また、石川・福井両県に流行していた人絹織物を、野尻の織物業者が織り始めたことで絹・人絹織物へ転換するものが多くなった。また、戦争による物資不足で、綿糸が国有のもののみなされ、綿織物に代わり人絹織物<sup>69</sup>に生産が集中した。そして、人絹織物が生産過多となり、国が織物の生産高を統制するという事態に発展した。また、戦争の激化で統制も厳重になり、組合の組織も全県全繊維組合が一本にまとめられ、糸量の割り当てが減ったため、複数の工場を休業、操業に振り分けて細々と仕事をしていた。戦時中の窮乏から、終戦と同時に必需品の綿織物の闇売買が目立つようになり、治安も乱れた。戦後の織物産業の隆盛を表す言葉で「ガチャ万、コラ千<sup>70</sup>」という独特な言い回しが流行った。機械がガチャンと動くと一万儲かる、監視員に「コラ」と叱られたら千円支払うことで許してもらう、ということを表していた。その後、昭和 22（1947）年には「ガチャ万、コラ千」時代も終わりに近づき、サイジング<sup>71</sup>工場の設置・広巾織機等の導入、白生地（白織）の製造を始めた。その後、綿花の輸入量が次第に豊富になって昭和 26（1951）年には統制が解かれた。

統制解除後は、綿花の輸入量が次第に豊富になり、綿織物の生産を再開した。終戦後の一般需要品は、小巾よりも広巾、着物よりも洋服の時代になり、広幅織物業者に転じたものが増えた。ここから、高度経済成長の波に乗り、工場や試験場の設備拡張がなされ、力織機や、作業用織機を導入し、機械化を図り生産を伸ばし、その結果、縞織物の生産は盛んに行われた。しかし、昭和 34（1959）年になると、綿の先染糸を用いた縞柄・格子織物は広幅布のプリント柄に押され、売り上げが減少し始めた。福野地方の機屋のほとんどが白生地機屋に転換したため、縞織物から白地織物へ生産が傾いていくようになった。そして後に、綿糸よりも、絹・人絹・ナイロンなどの細糸使用のものが好まれ、婦人の靴下・スカート・手袋などの生地が編織されるようになっていったため、縞織物は徐々に生産が衰退していった。そんな中、昭和 46（1971）年に、雑誌『週刊朝日』7月2日号に掲載された飯沢匡氏の「富山県の福野手縞」という記事が出て、福野縞が注目を浴びることになる。県内はもちろん、関西・四国から縞のことや緋の問い合わせが殺到した。しかし、その頃既に福野縞の生産は実質的に皆無の状況にあった。

## 3. 福野縞の生産、用途、行事

### 3-1. 生産

<sup>69</sup>人絹とは、人造絹糸の略で、天然の絹糸をまねて作った化学繊維である。レーヨンなど。

<sup>70</sup>織物を織れば儲かるという例えである。

<sup>71</sup>サイジング=sizing, のりづけ作業や繊維を詰めるなどの処理をすること。

### 3-1-1. 女性の労働<sup>72</sup>

明治期から大正期にかけて盛んであった、糸偏<sup>73</sup>で働く人たちの労働と生活の様子についてまとめる。明治 19 (1886) 年生まれの古老の話では、「女には教育は不要とされ、嫁入り前の娘は先ず、機織技術を身につけねば嫁になる資格がなかった」と語られており、町に住む女性は幼少期より祖母から機織りの手ほどきを受けていた。また、嫁入り道具として機織器械一式をつけられた。嫁が主に機織りをするのだが、織りは正月早々から始められて、1月14日までに10反織らなければならないという達成目標があった。しかも織るのが遅れると姑から「どこそこの嫁さんは、はや織ってしまったそうな」などの皮肉を言われてしまうので、機織りは嫁にとっては大変な仕事であった。

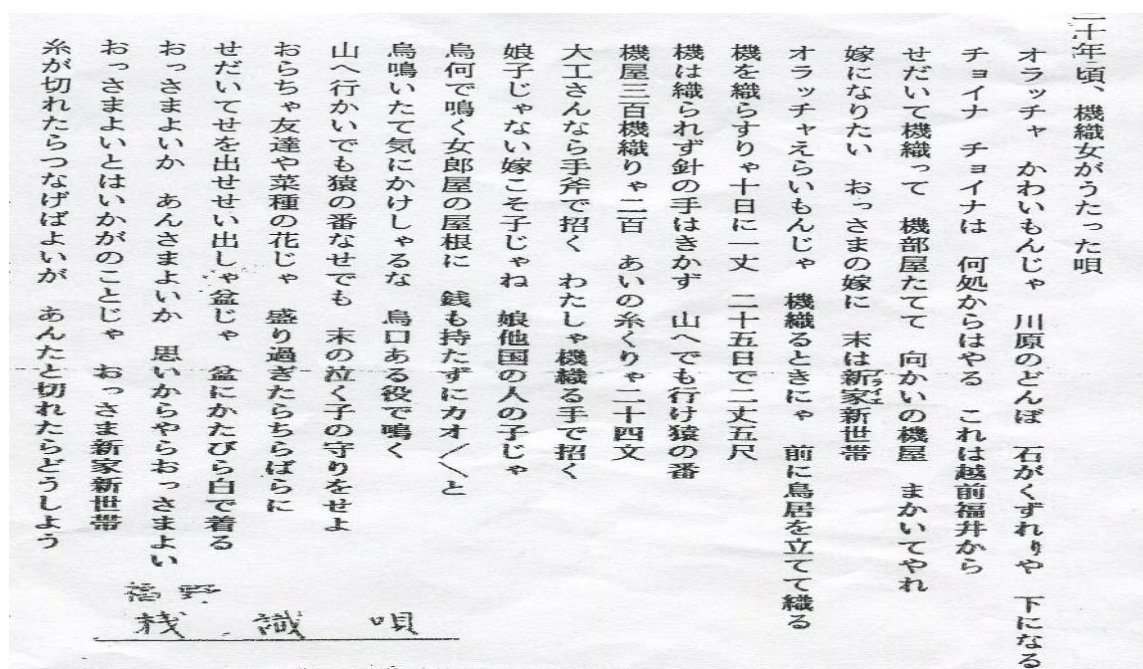


写真 6. 福野機織唄 (『杼の音』より)

また、明治 30 (1897) 年頃には「機織唄」という機織りをする女性たちが歌っていた歌がある。女性が人生について歌い、気分転換をしながら働いていたことが分かる。機織唄の歌詞の中の、機織りで布を作る日数が「機を織らすりゃ 10日に1丈 25日で2丈5尺<sup>74</sup>」と歌われており、10日織ってようやく3メートル程の長さになったこと、それくらい作るのに時間がかかったことが分かる。また、女性の人生については「おっさまよいか あんさまよいか 思いからやらおっさまよ」と、嫁いだ後の生活の心配をしている。「おっさま」とは、富山方言で次男のことで、次男の元に嫁げば夫婦二人で独立した生活を送るこ

<sup>72</sup>出典：『杼の音』(2001年,野原リヨ子著)

<sup>73</sup>織物や紡績といった糸を扱う産業の略称。

<sup>74</sup>1丈は約3.03メートル。1尺は30.3センチメートル。

とが出来る。一方、「あんさま」も同様に方言で長男のことで、長男と結婚すれば家督を継ぎ、姑達と共に暮らし家を守っていくことになる。つまり、この歌詞には女性の夫婦二人で新たに生活をしていきたいという思いが歌われている。女工たちは、機織り中も歌いながらそうなるように願っていたのではないか。「娘子じゃない嫁こそ子じゃね 娘他国の人の子じゃ」という歌詞は、当時は、嫁いできた女性こそ我が子のように大切にされ、他の家に嫁がせてしまう実の娘は、他人のように思われていたという意味である。

工場が出来て、女性が町工場へと働きに出るようになってからは女性の労働事情は変わった。手織では1日2反織って10銭稼ぐのは大変だったが、工場での見習工は1日8銭であり賃金が倍になっていた。就業時間は大体、朝の6時から夕方の6時ほどで12時間労働であった。なお、織物業界は景気に左右されやすかったので、不景気には1年間休業することもあった。

### 3-1-2. 染色

福野縞は染色の美しさが特徴的である。化学染料が利用されるようになるまで、地方産の樹皮を煮出して、糸を染める植物染料に依存して色出しをしていた。青・紺には藍を、赤色には丹殻<sup>75</sup>、茶色には刈安<sup>76</sup>などを用い、これらを混ぜ合わせて浸出液を使って染め上げていた。

中でも藍染は、福野縞の中で特に用いられてきた染色である。野良着や前掛けからのれんに至るまで、紺木綿は数多くの品物になり、人々に使い込まれている。福野では古くから藍甕<sup>あいがめ</sup>(写真7)を持つ家が多く紺屋がたくさんあったのも、藍染が盛んだった一因だろう。藍染をするときには「藍建て<sup>77</sup>」という他の草木染めとは違う手順を踏む必要があった。また温度や調合の具合によって色が微妙に変化してしまうために、管理が難しかった。藍染の布は、色が丈夫で汚れが目立たず、布が強くなる。そのうえ藍の匂いが虫よけに有効だったために野良着としても優秀だった。発色も染め上げた当初は鮮やかであるが、着古して洗濯するうちに色に渋みが出てくる。手触りも柔らかいものになるため、生活に馴染んだものとなっていた。しかし、大正に入ると化学染料が普及したため、工場の染色場でも藍甕は姿を消した。

化学染料が入ると色の種類が増え、発色も鮮やかになったのに加え、模様をプリントした布地の製作も活発になった(写真8)。そして、草木染めと違い一度に多く染色することが出来たために効率的で、瞬く間に普及した。

---

<sup>75</sup>丹殻とは、オヒルギの樹皮からとる染料。石灰水に通すと赤茶色に染まる。

<sup>76</sup>刈安とは、イネ科の多年草で、古くから黄色染料に使用する。

<sup>77</sup>藍甕の中に石灰を入れ、発酵させて藍色を発色させて色付けを安定させる。

出典:『杼の音(p.53)』(2001年,野原リヨ子著)





写真 7. 藍甕 (筆者撮影)



写真 8. 化染の布地色見本 (筆者撮影)

### 3-2. 用途

福野縞は概要でも述べたように着物やのれん、風呂敷といった馴染みの日用品である。次に、かつて使用されていた福野縞について話を聞いたものの一部を紹介する。また写真は、福野の町の人が実際に所有していた貴重な福野縞の品物の実物である。

#### 3-2-1. 布団縞

夜具、かいまきのことである。黄色と紺色の格子模様であり、布団の上に掛けて使っていた。大正～昭和 8 (1933) 年ごろからずっと変わらずに子供の頃から使われてきたものである。綿製で状態が良く、手触りが所々ツルツルとしていることから絹が織りこまれていると思われる。高級な品物である (写真 9-10)。

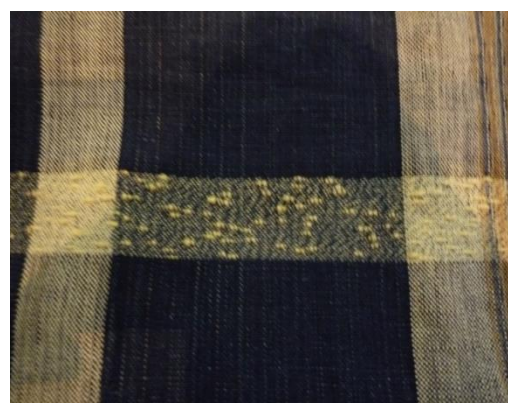


写真 9-10. 布団縞 (筆者撮影)

### 3-2-2. 花嫁のれん

婚礼に用いられる特別なのれんである。これは「花嫁のれん」という石川県を中心に北陸地方でみられる風習に用いられたものでその文化が福野にも影響したと思われる。花嫁が、嫁に行くときに、新婦の家紋のついているのれんを新郎の家に持っていき、婚礼当日に花嫁が婚家の仏間の入口に掛けられたのれんをくぐって仏壇参りをした後で、結婚式が行われる。花嫁が婿の家ののれんをくぐると、正式に婿の家に嫁いだことになる。一週間ほど飾って、そののれんは新婦の家から婚家への嫁入り道具として贈られる。

のれんは行事ごとに家紋の入っているものを軒先にかけておく。普段は無地である。

### 3-2-3. 祝い風呂敷（紺地に絵）（写真 11）

祝い事があるときに、親族に配る餅を包むなどといった用途をする。祝い事用であるために、鶴亀、松竹梅、笹があしらわれている。絵については、のりを絞り出して、色が付かないようにするという筒描きという手法で描かれているようだ。



写真 11. 祝い風呂敷（筆者撮影）



写真 12. 着物帯（筆者撮影）

### 3-2-4. 着物の帯（写真 12）

着物の上から巻きつけて着物と体を固定する帯も、福野縞で織られていた。着物も昔は福野縞で織られていたが、今は実物がほとんど残っていない。写真の帯は明治 18（1885）年生まれの祖母から贈られた福野縞の帯で、大正時代の品物である。着物やぼろ布を解いて、糸繰り機にかけて機織りしたものである。

## 3-3. 行事

織物に関する行事として、菅大臣盆がある。菅大臣盆とは、福野織物の生みの親である寺嶋屋源四郎の功績をたたえるための儀式で、毎年 7 月 15 日に西源寺で盛大な慰霊祭が行われていた。当日は、織物業者やその従業員たちは半ドン（午後から休み）になり、石碑の前で読経した（写真 13）。夜になると、菅大臣盆として境内に集まって浴衣を着て盆踊り

を踊った（写真 14）。この時は大人も子どもも一緒になって踊った。福野の町の人には、織物産業に携わる人の割合が多かったため、規模の大きな行事となっていた。なお、織物業者にとっては職業に関する神聖な儀礼でありながら、夜の盆踊りは、昼間に働きに出ている人たちの、男女混合で夜に騒げる娯楽としての働きもあったようだ。

当時の菅大臣盆の様子について、一人の女性に話を伺った。上町通りで店を営業している女性（70～80代）は、「自分は上町通りで店を営業しており、織物関係の職種ではなく、盆踊りには参加していなかった。子どもの祭りへ行く支度をするとき、浴衣を着せるために呉服屋へ浴衣を買いに行くとか、少し通りを子供と一緒に歩くことで町の賑わいを感じていて、そこで自分も間接的に祭りに行ったような気持ちになっていた。大体 40 年ほど前（1970 年代）のことだと思う」と話した。菅大臣盆は、織物関係の職種の人だけではなく、地域の夏の行事として親しまれていた。



写真 13. (左) 菅大臣織物祭（昼の様子）（『福野町史（平成 3 年度）』より）

写真 14. (右) 菅大臣盆（夜の様子）（『福野町史（平成 3 年度）』より）

#### 4. 福野縞を巡る取り組み

福野縞自体、今は生産量が極めて少なくなっているが、福野の人の中にも伝統の品としてその良さを再発見しようという動きがある。

##### 4-1. 「時の会」での活動

平成 5（1993）年 3 月 28 日、福野時の会（会長・林智雄氏）が発足した。町の文化について自由に話し合い、町の古くからの価値のある伝統的な建築物・祭り・民俗行事などを再発見し、本物を後世に引き継ぐことを目的として、文化の保存活動をしている。福野縞の復元、保存に関してもしばしば活動を行っていた。平成 7（1995）年には、時の会が中心となって、「郷土の文化を考える会」を発足し、福野縞の実物について所在や状態を調査し、『郷土の文化「織」続越中福野奇譚』という一冊の本にまとめた。平成 8（1996）年 5 月 7 日には、安田生命クオリティーオブライフ文化財団から福野縞生産の伝承と後継者育成が表彰され、助成金 40 万円が贈呈された。9 月には旧町の町人の生活を綴った『ふくの町立て散歩』を発刊した。福野縞の復元に関しては、上町旧小西邸での時の会の展示がある。平成 10（1998）年、同 11（1999）年に「福野の織物 縞・緋」「福野の織物—Ⅱ 縞」

という題名で歳の大市（12月27日）の日に開催された。この、時の会は、平成25（2013）年に解散した。

時の会では、福野縞のグッズとして福野縞の歴史を綴った豆本、ティッシュケース、ハンカチなども販売していた。また、平成15（2003）年に、時の会で布を織り、エプロン、シャツなどに仕立てて売っていた（写真15）。



写真 15. 福野縞のシャツ（筆者撮影）



写真 16. 福野縞ペンケース(筆者撮影)

#### 4-2. リッチモンドとの国際交流

福野縞の保存活動のうち、現在の取り組みについてまとめる。平成12（2000）年7月15日から20日までの6日間、アメリカ合衆国西部、オレゴン州ポートランド市にあるリッチモンド小学校日本語クラスの児童17名と引率者8名が福野町を訪れ、福野小学校の児童との交流を行った。この取り組みの目的は、「福野小学校の児童とリッチモンドの児童が互いに交流・意見交換をし、生活に根ざした視点から外国文化に触れると共に、日本の文化を見直すきっかけとする」ことであった。リッチモンドの小学生は日本語や、日本の作法に達者であり、学校の日常生活だけでなく、授業にもある程度参加できる。この交流はその後も続いており、福野町へ来町する児童も、平成13（2001）年には44名、翌14（2002）年は45名と増えており、平成27（2015）年も続いている。そして、福野へ訪れた学生へのプレゼントとして、このところ毎年福野縞のグッズを贈っている。そのきっかけとなったのが、留学生歓迎のためのウェルカムパーティである。福野は昔織物で栄えた町ということで機織りを実演した。そのときに、留学生の子ども、および保護者が興味をもち、福野縞の小物をプレゼントしたらどうだろう、という案が出たのである。なお、プレゼントは交流当初からではなく、10年くらい前からの取り組みである。当初は草履・ハンカチを贈っていた(写真16)。

プレゼント制作は、小学校のPTAから個人への依頼で開始される。流れとしては、1月くらいから、リッチモンドの小学生へのプレゼント作成に使用する布を織り始める。4月にPTAの役員から「今年は〇人が来る予定で～」と連絡が入る。そして、6月にリッチモンドの学生たちが実際に福野を訪れ、そのときにプレゼントを渡す。平成25（2013）年は、

表面が福野縞で、裏面が羽織の端切れを使って出来ているランチョンマットだった（写真17）。平成 27（2015）年は、日本風のレトロな柄の布と福野縞の組み合わせが新鮮なペンケースを贈った。これらのプレゼントは留学生に好評であるようだ。

#### 4-3. 小学校の総合学習での取り組み

2014年度福野小学校6年2組の学級の生徒が、平成 26（2014）年 12 月 24 日、同 27（2015）年 3 月 21 日の計 2 回、学外で福野縞の展示会「福野縞資料館」をア・ミューホールで開催した。このことは北日本新聞でも取り上げられた<sup>78</sup>。この活動について 6 年 2 組担任の水木先生と、講師として招かれた野原リヨ子さんに話を伺った。

##### 4-3-1. 福野縞の学習から福野縞資料館までの経緯

福野縞について総合学習で取り上げるまでの経緯をまとめる。総合学習で「福野で残していきたいもの」について子どもたちから色々なものが挙げられる中で、福野縞について調べてきた生徒がいた。昔だと、福野縞は町の内外でも良く知られたものであったが、今や町の人あまり知らず、しかも福野縞の織物を織れる人がほとんどいなくなっているということを知る。そこから、子どもたちが「自分たちが守っていかなければならない」という使命感を持ったことがきっかけとなった。授業で歴史を調べてまとめ、実際に福野縞を織っている野原さんを講師に招き、福野縞を織ったところ、発表の場を設けたいと考えるようになり、12 月と 3 月の計 2 回、「福野縞資料館」を開いた。なお、今までの総合学習の中で、このような学外で展示会を行ったのは初めてであるという。

##### 4-3-2. 福野縞資料館の内容

福野縞資料館を開くにあたり、子どもたちが自主的に準備・運営を役割分担しながら進めていた。グッズ製作やパンフレットやポスターなどの資料作成はもちろん、インタビューと PV（プロモーションビデオ）の製作も行っていった。

1 回目は 12 月 24 日の 12:30～14:00 にショッピングセンターア・ミューのホールにて、「福野縞を未来につなげよう」というテーマを掲げて開かれた。内容は授業風景・歴史などの概要に加え、コースターを展示する、パンフレットの配布や機織りの実演を行った。子どもたちは、チラシやポスターの配布、来場者への説明などを分担しながら行った。来場者数はおよそ 100 人ほどであった。

2 回目は、卒業式以降の展示会となった。それは、休日は来場者が増えるという見込みがあったため、3 月 21 日の 12:30～15:00 に前回と同じ場所で行われた。内容は前回のものに加え、ストラップやキーホルダーの販売（収益は保存活動や募金など）を行い、PV と講師へのインタビューの動画を会場で公開した。子どもたちは午前中から宣伝活動をし、午後から資料館の方で運営を行った。来場者数は前回の倍の 200 人ほどであった。なお、来場

---

<sup>78</sup> 『北日本新聞（朝刊）』2015 年 3 月 22 日記事

者数について、担任は「このくらい的人数が子どもたちのキャパシティの限界であった」と話している。



写真 17. ランチョンマット



写真 18. 福野縞資料館ポスター(3/21)

福野縞資料館は、なかなか好評であった。来場者のアンケートの回答で「子どもたちが地域の人たちの前に出で、一生懸命説明している姿は生き生きとしていた」、「子供たちにとっていい勉強になったと思うので、こうした活動を続けていってほしい」などといった声が寄せられた。

#### 4-3-3. 人びとの思い

担任の水木先生は、こうした活動について、「総合の学習は、地域の歴史だとか、伝統について考えるよい機会となった。子どもたちにとっては、自分のしたことに対して外から何か反響があるということは喜びであり、とても高度な学びで、頭だけではなく心の学びになった。子どもたち自身も、自分には何かを動かす行動力があるということに気付けたと思う」と話していた。また、福野縞の学習についても「福野縞に関することはときおり取り上げていけばいいのではないか」ということも話していた。

また、講師として招かれた野原さんは「小学校の授業の中で、自分が福野縞について学習する場に携わったことから、子どもたちが福野縞の保存活動をする事の背中を押してくれたように思えた。福野縞を織ることはあくまでも自分の趣味の範囲でやるものだと思っていたので、こうした活動に貢献できて良かった。」と語っていた。

この活動は、福野縞が福野の特産品であったと確認され、再び福野縞が知られるようになるための一歩となったと私は思う。実際に資料館に来て福野縞について新たに知った人もいれば、織物に長く関わってきた人たちもこの活動で、より福野縞を守ろうという意識が強まった人がいる。福野縞を様々な世代に伝えるよい働きかけが出来たように思われた。

#### 4-4. 福野観光協会

福野駅の駅舎内にある福野観光協会も、福野縞の保存と復元に向けて活動をしている。福野の町なかに点在するギャラリー「市の里」では、1号館で福野縞の掛け軸や、福野縞を模した紙袋などが置いてあり、福野縞を土産物として町を訪れた人に向けて展示してある。現在は製造しておらず、在庫を販売している。また、6号館では、明治時代に実際に使われていた木造織機を当時のままに展示していた（写真 19）。



この織機には不足している部品があるので、まだ動かすには至っていない。調整が済み次第、実際に機を動かして布を織り、その布を使用してキーホルダーなどの小物を作り土産物として出すようにしたいと考えている。ゆくゆくは12月27日の歳の大市で、市の里ガイドツアーという町歩きを行って、町の人や来訪者に機が動いているところを見てもらえるようにしようと計画している。

写真 19. 6号館に展示されている木造織機

#### 5. まとめと考察

本章では、福野縞と人々のつながりを、町の産業の隆盛と人々の取り組みからみてきた。かつて福野縞は福野町の特産品であり、町の誰もが知っている品物であった。しかし、現在60代以下の人達は存在を聞いたことがあるという程度に留まる。詳しく知っている人は、70～80代以上にならないとなかなかいない。また、福野縞についてのイメージも「かつては盛んに作られていた福野の特産品」で、このままだと忘れられたものになりそうだという意識はあることがわかった。そのため、本章で述べた福野時の会や観光協会によって、保存活動がしばしば行われてきた。

現在行われている活動では、観光協会がギャラリー「市の里」で福野縞の復元活動を進めていて、ゆくゆくは観光客に福野の土産物としてアピールしていこうとしている。福野縞の品物を作る環境を整えば、地元の人たちにも福野縞に目を向けてもらえるようになると思われる。まず福野縞の品物を実際に見るなどして「福野縞とはこういうものだ」という大体のイメージが必要になる。福野縞のことを詳しく知る人と相談しながら知識をつけていくことが大切だと思う。

また、福野縞のことを多くの人に伝えるためには、PRを積極的にしていかなければならない。そうすると、やはり「品物を売る」という手段が妥当である。PRに加え、実際にグッズなどで品物を売り、色々な人を買ってもらい、福野縞を知ってもらうことは外部に向

けて発信するときに考えなくてはならないことだろう。現在、福野縞を織っている人は極めて少数で個人の製作に限られている。一個人で福野縞を守っていくのには限界があるため、観光協会や町の人との協力・理解が求められるだろう。福野縞の保存に関わる人の数が増えると、以前から活動に携わってきた人達にも良い刺激になると思われる。

## おわりに

福野縞について聞き取りをしたときに、その品物についてお話をされる方が「福野縞のことを話すことで、昔のことを鮮明に思い出すことが出来て懐かしい」という声や、「顔なじみとの会話が弾むいいきっかけになりそうだ」とお話しされたのが印象に残った。福野縞は町の人たちの生活に寄り添っていたのだと感じ、そういった昔ながらの思い出の品というべきものがあることは素敵なことだと思った。また、福野縞の保存・復元活動が少しずつ進んでおり、グッズはもちろん機織り体験などの、福野縞の織物に直接関われる場が出来そうな様子である。福野縞が福野の土産物として、町の人および観光客の人々に親しまれるようになることを私は願う。

## 謝辞

最後に、今回の調査に当たり、お世話になった人々に心からお礼を申し上げます。特に、野原リヨ子さんには、福野縞の歴史から作り方や、生活との結びつきについてのたくさんのお話を頂き大変お世話になりました。また、お忙しい中お時間を割いて貴重なお話を聞かせてくださった福野小学校の水木先生、上町通りの皆様、ヘリオスの皆様、福野観光協会の皆様、市の里ギャラリーの皆様等たくさんの方々にご協力いただきました。拙い文章ですが、お世話になった福野町の皆様が、福野縞について改めて何か考えることのお手伝いが出来れば嬉しく思います。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- 野原リヨ子 2001年 『杼の音 資料に見る福野の織物』
- 福野時の会 1996年 『ふくの町立て散歩』
- 郷土の文化を考える会 1995年 『郷土の文化「織」 続越中福野奇譚』
- 北日本新聞 「福野縞の魅力伝えたい」 2015年3月22日付朝刊
- 福野町史編纂委員会 1964年 1991年 2005年 『福野町史』『続福野町史』
- 布袋和彦氏 未発表原稿より



# 福野商店街の活性化—空き店舗を活用した「市の里ギャラリー」—

池端 優佳

## はじめに

私はもともと、商店街における町おこしや地域活性化について興味を持っていた。かつての商店街はとても活気にあふれ、地域の人々の日常に根付いたものであった。しかし、人々のライフスタイルの変化とともに多くの商店街が衰退し、商店街離れという状況になっている。現在全国の様々な地域で、この事態に対応すべく、その土地の特色を活かした工夫で商店街に再び賑わいを取り戻すための取り組みが行われている。

初めて福野の商店街を訪れた時、その通りの静けさや店の少なさから、やはり他の地域と同じように衰退傾向にあると感じた。しかし商店街を歩き回っていたところ、閉店した店舗や古い建物が立ち並ぶ中に、通りに点在する「市の里ギャラリー」なるものを発見した。商店街にいくつもの小さなギャラリーがあるという光景は初めて目にしたので、その珍しさにとっても興味を覚えた。また、私は芸術にも昔から関心があったため、この「市の里ギャラリー」について詳しく調べることに決めた。

本稿ではまず、福野商店街の、とりわけ昔からその中心となっていた上町通りという区画について述べた後、市の里ギャラリーの取り組みの紹介と現状、それに携わる人々について聞き取りしたことをまとめ、最後に調査を通して感じたことや改善点などを私なりに考察する。

## 1. 福野商店街

### 1-1. 福野商店街の概要

福野には駅前の大通りと交差して商店街が並んでいる。福野の中心商店街は大きく分けて、駅前通り、七津屋通り、上町通り、新町通り、横町通り、浦町通り、辰巳町通り、御蔵町通りの8つの通りからなる（図1）。かつてはたくさんの商店が立ち並び、大きな賑わいを見せていた。その要因の一つとして、福野における交通の発展が挙げられる。福野は砺波、井波、福光などの中間に位置しており、他の地域との交通を繋いでいる。中でも上町通りは他の町を繋ぐバス路線として使われていたこともあり、交通がとても盛んであった。また福野駅はかつて、城端線<sup>79</sup>と加越線<sup>80</sup>がちょうど交差する駅であった。そのため多くの人々が福野を訪れ、たくさんのモノが流れてきた。こういったことにより、上町通り

<sup>79</sup>高岡市の高岡駅と南砺市の城端駅を結んでいる路線。

<sup>80</sup>小矢部市の石動駅と庄川町（現砺波市の一部）の庄川町駅を結んでいた。昭和47（1972）年9月16日に全線廃止。

は商売の町として栄えていた。

しかし現在、商店の数はとても少なく、大半が住宅や空き家、空き店舗となっている。私は今回、福野の商店街の通りの中でも、特に商売の中心地として賑わっていた上町通りの商店街について詳しく調べた。

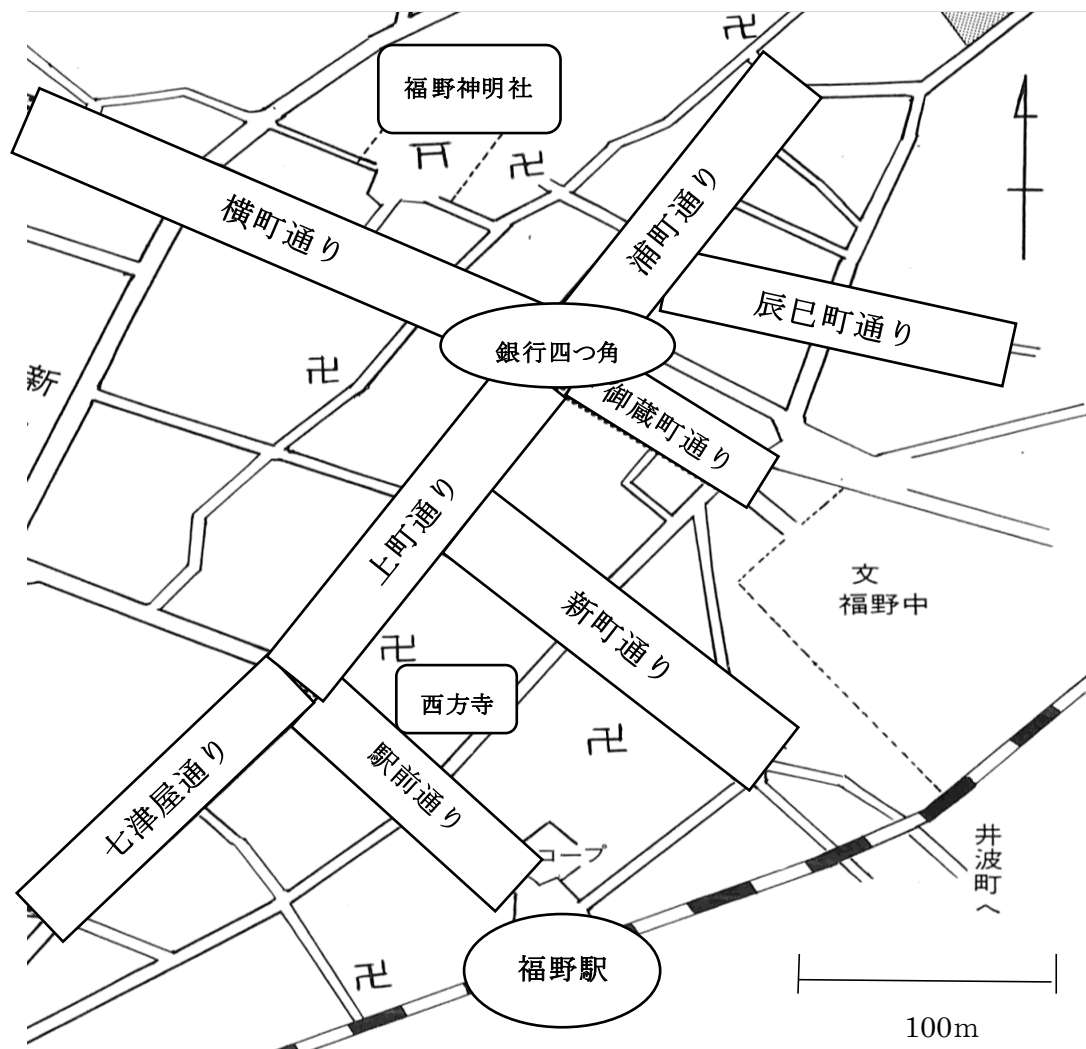


図 1. 福野商店街の主な通り  
(福野町教育センター発行『わたしたちの福野町』より作成)

### 1-2. かつての上町通り

戦後 10 年あまり経った昭和 30 (1955~1964) 年代、福野の商店街は大きな賑わいを見せていた。全国的に見ても、この頃は各地の商店街が賑わい、大きな発展を遂げていた時期である。先程述べたように福野の商店街にはいくつかの通りがあるが、上町通りが最も中心商店街として栄えており、その頃の上町通りを知っている方によると、その通りだけで商店数は 50 店舗以上に及んでいたそうだ。

上町通りに長く住んでいる野原久仁さん<sup>81</sup>（70代）と妻の富士子さん（70代）に、昔の上町通りの商店街の様子について話を伺った。富士子さんは昭和32（1957）年に久仁さんと結婚し、それを機に上町通りに移り住んだ。野原さん夫妻にいつ頃の上町通りの様子が強く印象に残っているか聞いたところ、「昭和35年から40年頃の上町通りが最も賑わっていて、その頃の通りの様子が今も記憶に残っている」と話された。その頃は、上町通りに店を構え、そこで商売をすることが福野の人々にとってとても立派なことであり、周囲の憧れであったようだ。しかし野原さん夫妻は当時商店を開いておらず、「店をしていないのは馬鹿でないか」といったことを言われたそうである。これは、上町通りで商売をすれば儲けられるのに、店を持たないなんてもったいないという意味であろう。また、上町通りに現在もある西方寺について、「商店街とは商店が並んでこそ成り立つものであり、商店の間にお寺があるのはその妨げになるため邪魔だ」という声まで上がったそうだ。それほど上町通りで商店を営むことは当たり前であると考えられ、発展した商店街として成り立っていた。また、上町通りはかつて福野の銀座街とも言われ、上町通りに住む人々の集まりである“銀座会”という組織まで存在した。



写真1. 昭和30年代の上町通りの様子  
（福野商工会作成の冊子「福のたねさがし」より）

さらに昭和35（1960）年頃の上町通りにはどんな商店が立ち並んでいたのか伺った。すると富士子さんは当時のことがとても印象に残っているようで、通りの端から端までどんな商店があったのか、思い出話を含みながら一つ一つ丁寧に教えてくださった。富士子さんの話をもとに上町通りの当時の商店の並び

を再現したのが図2である。

図2によると、上町通りのほとんどの建物が商店であったことが分かる。短い通りの間に、時計屋や呉服屋が3軒あり、履物屋にいたっては4軒も存在していた。そして八百屋や米屋、肉屋、魚屋などの食料品店から、履物屋、時計屋、金物屋、衣料品店など日用品を販売する商店まで幅広くあり、この通りだけで生活に必要なものがほとんどそろっていた。商店街の住民はわざわざ遠くへ買い物に出かける必要がなく、上町通りを歩くだけで日用品や食品の買い物は十分果たされた。

<sup>81</sup>子供の頃より上町通り在住。昭和49（1974）年に夜高祭りで裁許を務め、その後上町・七津屋曳山保存会発足記念誌である『船鉾』を平成15（2003）年に上梓された。

←至福野駅

駅前通り

至商工会館→



☆ 現在も続いている商店

◇ 現在は帽子屋として営業

◎ 現在はギャラリー市の里1号館

※カラツ屋…お茶碗や壺などの焼物を販売する店

図 2. 昭和 35 年頃の上町通りの商店街

### 1-3. 上町通りの衰退

たくさんの商店が立ち並びとても賑わっていた上町通りであったが、次第に商店の数は減少し、衰退傾向が見られるようになった。その理由の一つとして、人々の生活様式の変化がある。昭和 45（1970）年頃から全国的に自動車が普及し、一般家庭でも多くの人々が自家用車を持つようになった。そのため人々の行動範囲は拡大し、町外にも気軽に出かけることが多くなった。それまで商店街や町内にあるスーパーで買い物をしていた町の人々は、車の普及によって町外へ出るようになり、商店街を利用する人は減少していった。

商店街の衰退が進むと、商店の後継者がいなくなるという問題が生まれた。上町通りで現在も店を構えている 80 歳男性の方は、「店が繁盛し子供たちがその仕事に魅力を感じることであれば後継者は自然と生まれるものだ」と語った。自分の子供に店を継がせようと思っても、多くの若者達は別の仕事に就いたり、町の外へ出て行ったりしてしまう。そのため、後継者が見つからないまま高齢になっても店を続けている人が多いが、次第にこの現状が厳しくなっている。

またかつては駅前に「A コープ」という組合マーケットがあり、町の人々はそのスーパーや商店街を利用していた。しかし平成 5（1993）年に大型ショッピングセンターの「ア・ミュー」が町の西側の郊外に完成した。このショッピングセンターは、商業施設、文化・スポーツ施設、宿泊施設の 3 つのゾーンで形成されており、地域住民にとって利用しやすい施設となった。そして翌平成 6（1994）年には駅前の組合マーケットが「エレナ A コープ福野店」としてア・ミューの向かいに移転した。消費者のニーズの多様化や自動車の一般家庭への普及によって消費者一人一人の行動がより自由で幅広いものとなり、町の人々の行動範囲が拡大した。ア・ミュー周辺において商業が発展し、客の流れはどんどん商店街の外へと移っていった。



写真 2. 現在の上町通りの様子  
(2015.10.26 撮影)

このような人々の生活様式の変化や後継者不足の問題により、昭和の終わりから平成にかけて、上町通りでは閉店する店が増えていった。しかし、福野は昔から織物の町として繁栄し、加えて上町通りは商店街がとても繁盛していたため裕福な家が多く、商売を辞めても住人たちがそこには長く留まる傾向があった。そのため昭和の栄えていた時期から現在まで、上町通りの住民はほとんど変わっておらず、住民の多くは平成に入って商店街が衰退した頃に家を建て替えることでそこに留まっている。他の通りにはすでに廃業した店が入ったままの古い建物が多く残っている中、店を畳

んで建て替えられた家が立ち並ぶ上町通りは、かつて中心商店街としてひと際賑わい、財を成した人々が現在もそこに住み続けていることが窺える。しかしそういった家の建て替えの増加により、上町通りには現在 8、9 店舗の商店しか残っていない（図 2 を参照）。

#### 1-4. 現在も商店を営んでいる方の声

現在も上町通りで店を営んでいる方に、現在の町通りの印象や商店街の衰退についての思いを伺った。お酒やワインなどの販売店を営む 70 代女性の方は、「昔はお客さんがとてもたくさん来ており、夜高祭や歳の大市などのイベント時は通りが人ばかりでとても混雑していた。しかし現在は人通りが少なく、客の流れはア・ミュー周辺へと移ってしまった。ショッピングセンターは値引きや品揃えの多さ、広い駐車場の完備など有利な点が多いため、大きいところには勝てない」と話された。

また衣料品店を営む 70 代男性の方は、「昭和 30～50 年頃はとても賑やかな商店街だったが、年が経つにつれて営業者は歳をとり、廃業する店が増えていった。昔は店側が客に合う服を選びアドバイスをしていたが、最近は客の方が知識を持っており、自分の好みで服を選ぶようになってしまった。個人経営では卸屋を通して商品を仕入れているため手間がかかり、営業が厳しくなっている」と話された。

後継者の問題についてどう思っているかについても伺ったところ、「自分の子供や孫が店を継いでくれると嬉しいが、今の時代に専業として店を続けていくのは厳しい」、「生活がかかっているので自分の職を継がせることは薦められない」、といった意見が多かった。人々の生活様式の変化により、個人商店が立ち並ぶ商店街を維持していくことが今の時代には難しくなっている。

それでもずっと上町通りに住み続けている野原さん夫妻は、現在の町通りについて、「店の数はとても少なくなり賑わいもなくなってしまったが、静かな町通りもありだと思う。店の営業者はどんどん変わるものだからあまり寂しいとは思わない」と話された。このように町通りを中心に商店街の衰退が進む中、建物が立ち並ぶ間に「市の里ギャラリー」という新たな施設が誕生した。

## 2. 市の里ギャラリー<sup>82</sup>

市の里ギャラリーとは、町通りを中心とした福野の商店街やその周辺にある、1 号館から 10 号館までの 10 店舗のミニギャラリーのことである。洋風や和風のギャラリー、喫茶店のギャラリー、切り絵や造形盆栽の体験ができるギャラリーなど、その活動内容は多彩である。これらは商店街の空き家や空き店舗を活用して建てられたものであり、福野の芸術文化を発信する施設として、各ギャラリーがそれぞれユニークな特徴を持っている。

---

<sup>82</sup>福野町史などの文献では「ギャラリー市の里」と記述されているが、ギャラリーの関係者や町の人々の間では「市の里ギャラリー」の名称で親しまれている。本稿では後者で記述する。

## 2-1. 市の里ギャラリーの誕生

平成8(1996)年、福野町商工会(現南砺市商工会福野支部)会長に西能孜<sup>さいのうつむ</sup>さん(故人)が就任した。そして翌平成9(1997)年に、21世紀に最も求められるものとして「芸術・文化」といったテーマが選ばれ、町の観光を振興する政策である地方・都市交流推進事業<sup>83</sup>と空き店舗対策事業の2つの事業の中に、このテーマが取り入れられることとなった。同年6月から始まった地方・都市交流推進事業では、東京都の多摩美術大学が福野町との交流事業のパートナーに選ばれ、10月には同大学の学生20名と教職員4名が訪れた。ここでは街角デザインのスケッチや小学生との写生会、町民との座談会などが行われ、交流と理解を深めた。

また平成10(1998)年4月、福野町や町商工会などで組織された空き店舗対策事業実行委員会の企画で、上町通りの空き店舗を活用したミニギャラリー「サロン・Do・ギャラリー『市の里』1号館」が開設された。そしてこれを記念し、町内の作家による彫刻、書、絵画、陶芸などの作品をはじめ、多摩美術大学学生のリトグラフ、岩彩画など44点の作品が1号館に展示された。もともと福野には観光施設が少なかったことや、新たな福野の観光テーマとして芸術・文化が挙げられたことから、芸術・文化を発信するギャラリーを新たな観光施設として作ろうということに決まった。ちなみに、このギャラリーの名称である「市の里」の由来は、福野町の町立ての経緯によるものである。福野の町立て時に2と7のつく日に朝市を開くことが許可され、それが現在まで続いていることから、朝市の町という意味合いで「市の里ギャラリー」と名づけられた。

## 2-2. 商店街における空き家・空き店舗の利用

中心商店街に市の里ギャラリーを開設するという提案が生まれた背景には、1-3で述べたように商店街の衰退という問題がある。平成に入り、福野町の中心商店街ではシャッターが閉まったままの店舗や、郊外への転居による空き家や空き地が目立つようになった。さらに、買い物客の流れが中心商店街から郊外のア・ミュー周辺へと変化していき、客の流れを失った福野商店街は商店街としての機能を失い、商業の衰退が進んでいった。

このような商店街の衰退によって発生した空き家や空き店舗の増加を解決するために、商工会による中心商店街活性化事業として、空き店舗や古い町家の土蔵を改装してギャラリーを作り、10年間で10店舗作ることが提案された。この提案には、西能会長の「ギャラリーの町としてアーティストが集い、腕を振るう町にしたい」という思いが込められていた。まず上町通りにギャラリーが立て続けに開設され、そこから横町へと広がり、10年以内に10号館までが作られた。また商店街の空き地は、銀行や商店がそれぞれ土地所有者と契約し、駐車場として利用されるようになった。

---

<sup>83</sup>都市生活者との交流により、都市生活者の地方に対する理解と関心を深めるとともに、地方が観光・芸術・文化などの地域経済振興についての提言を受けることで、地方の活性化を図っていく事業。平成9年度事業として、全国8か所のうちの一つに福野町が選ばれた。

## 2-3. 観光としてのギャラリー

市の里ギャラリーは空き店舗対策の他に、観光事業としての機能も果たしている。商工会では「ギャラリー市の里散策マップ」を作成し、各ギャラリーの所在地や展示内容が一目で分かるように工夫を凝らした。また平成 11（1999）年には、中心市街地を活性化するために立案された基本計画の中で、町外からの人の流れを作り出すために駅前を再開発し、市の里ギャラリーを交えて商店街を回遊できるような構想が練られた。

平成 14（2002）年 3 月には、中心市街地にある 85 店舗の商店を示した「ふくのまち散策ロードマップ」が、商工会によって新たに作成され、福野の観光マップとして町の至るところに置かれた。ここでは福野町観光モデルコースとして、芸術・文化コース、歴史・自然コース、芝井川散策コース、二十一世紀へ残したい富山 100 選コースの 4 つのコースが紹介されている<sup>84</sup>。その一つの芸術・文化コースは、主に各ギャラリーを順に回ることができるルートとなっている。

## 3. 市の里ギャラリーの活動

### 3-1. 各ギャラリーの概要

2-2 で述べたように、市の里ギャラリーは商店街を中心として 1 号館から 10 号館まで開設された。各ギャラリーの大まかな概要は次の通りである（表 1）。

表 1. 市の里ギャラリーの一覧

館名	オープン日・場所	活動内容
サロン・Do・ギャラリー『市の里』 1 号館	平成 10 年 3 月 31 日 上町通り	作品の展示・販売のための貸しスペース
ギャラリー市の里 2 号館	平成 10 年 10 月 20 日 上町通り	企画展示（3 年程前に持ち主により取り壊された）
ギャラリー市の里 3 号館 輸入雑貨「楊（ヤン）」	平成 12 年 3 月 31 日 上町通り	ギャラリー管理者自身の絵画と他の作家の作品の展示・販売

<sup>84</sup>4 つのコースは以下のルートである。

- ① 芸術文化コース…福野駅→ギャラリー市の里 1 号館→ギャラリー市の里 2 号館→ギャラリー市の里 3 号館「楊」→ギャラリー市の里 4 号館・喫茶「椿」→銀行四ツ角・夜高の壁画→ギャラリー 5 号館「kichi-ya」→ギャラリー市の里 6 号館→福野文化創造センター「ヘリオス」
- ② 歴史・自然コース…福野高校の巖浄閣→福野神明社→安居寺→安居寺公園→福野町園芸植物園（フローラルパーク）→ショールーム HOW'S（福野の特産品・福野織製品の展示）
- ③ 芝井川散策コース…猿が辻公園→本福寺→横町の森田邸、石島邸の土蔵→福野神明社→教願寺→恩光寺→円城寺→西方寺→西源寺
- ④ 21 世紀へ残したい富山 100 選コース…福野高校の巖浄閣、安居寺、夜高祭り（5/1,2）、歳の大市（12/27）など、時期に応じて選んで巡る



ギャラリー市の里 4 号館 喫茶「椿」(その後「檉亭」)	平成 12 年 5 月 1 日 上町通り	喫茶ギャラリー (その後、茶室の ギャラリー)
ギャラリー市の里 5 号館 「kichi-ya」	平成 13 年 3 月 26 日 横町通り	アンテナショップ (その後、絵の 展示)、ヘリオスの分館
ギャラリー市の里 6 号館 「蔵」にて「古布小物作りの 会」(その後「Twinkle Smile」)	平成 14 年 3 月 20 日 横町通り	屋敷の蔵を利用したギャラリー 作品の展示・販売
ギャラリー市の里 7 号館 「花工房くらぶ」	平成 14 年 11 月 1 日 七津屋通り	造形盆栽やフラワーアレンジメ ント教室 (現在は活動していな い)
ギャラリー市の里 8 号館 「ほっこり空間」	平成 15 年 3 月 7 日 横町	切り絵や日本画などの体験教室 (現在は外部で活動)
ギャラリー市の里 9 号館 「ア・ミューミニギャラリー」	平成 16 年 11 月 1 日 ア・ミュー	絵画の展示
ギャラリー市の里 10 号館 「商工会ギャラリー」	平成 16 年 11 月 1 日 商工会	館内の壁に作品の展示 (現在は活 動していない)

表 1 を見て分かるように、開館当初からずっとギャラリーを展開し続けているところもあれば (1, 3, 9 号館)、現在は活動停止していたり (7, 10 号館)、別の用途で利用したり (4, 5, 6, 8 号館)、土地の持ち主や管理者の事情により取り壊されたところ (2 号館) までである。このように、当初に比べて活動の規模は小さくなっているギャラリーがほとんどであり、活動を維持していくことが難しくなっていることが窺える。全体的に市の里ギャラリーは衰退傾向にあり、このことについては後ほど詳しく記述する。

図 3 にあるように、まず福野商店街の中でメイン通りであり、特に空き店舗が多く残っていると商店街として成り立たないという意見が多かった上町通りに作られ、その後横町通りへと広がり、ア・ミューや商工会を含めて、福野駅から福野商店街とその付近を巡ることができるような立地となっている。

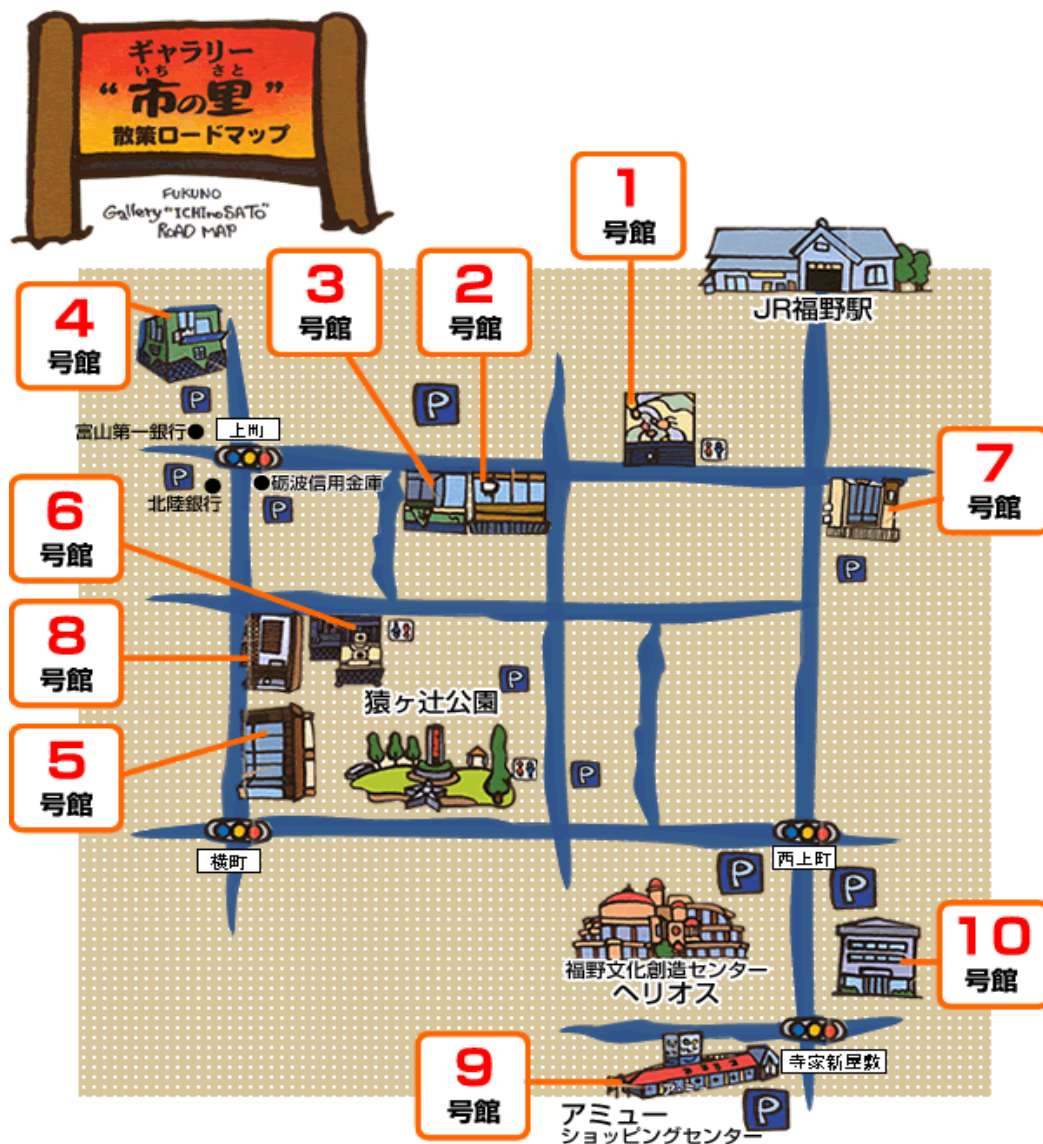


図 3. 市の里ギャラリーの各館の位置  
 (ウェブサイト「福野ものがたり」の散策ロードマップより)

### 3-2. ふくの『市の里』アートフェスタ

町民自らが日常的に芸術文化に触れることができるようにと、商工会や観光協会により「ふくの『市の里』アートフェスタ '98」が平成 10 (1998) 年に開催された。このアートフェスタはギャラリー市の里 2 号館がオープンした 10 月 20 日から始まり、11 月 29 日まで行われた。このイベントでは、ストリート (大衆性)、コンテンポラリー (現代性)、ワールド (世界性) をコンセプトとして、町全体が一つの大きなアートワールドとなることが目指された。

主なイベントの内容は、「国際ミニ版画トリエンナーレ」という風景や人物をモチーフにした世界のミニ版画の国際公募展の作品を、商店街の 110 店舗のウィンドウなどに飾ると

いうものである（写真3）。またギャラリー1号館と2号館では、日本現代作家の美術品の展示・販売や多摩美術大学附属美術館所蔵の「ルオー版画展」が同時に開催された。さらに、多摩美術大学の学生による絵画教室や、ギャラリー市の里1号館と、相次いでオープンした2号館に壁画を描いてもらうといったワークショップも行われた。

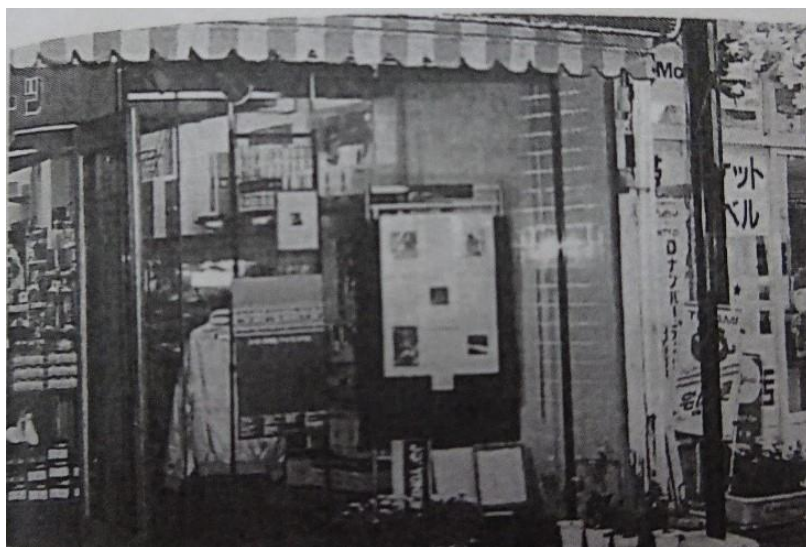


写真3. 商店街のウィンドウに飾られたミニ版画  
（『広報ふくの』1998年12月号より）

続けて平成12（2000）年10月には、芸術・文化の町づくりを推進する町商工会と商店街等活性化推進事業実行委員会の主催により、「ふくの『市の里』アートフェスタ2000」が中心商店街で開催された。この開会式で、福野町の溝口進町長（当時）は「この事業を通じて市の街として栄えた福野商店街を活性化させたい」と挨拶した。そして前回のアートフェスタと同様に、商店街のショーウィンドウや店先に版画作品が展示され、商店街を美術展さながらに見立てた飾りつけとなった。またこの商店街美術展に先立ち、同年9月にアートフェスタの音楽の部会によって、市街地に点在するお寺をステージに見立てた「街中お寺コンサート」が新町にある西源寺で開かれた。さらに、俳優であり水彩画家でもある榎木孝明さんを招いて絵画展と公開制作が行われ、大変な人気を集めた。その他年度末までに、食・音楽・芸術などのテーマで約30の事業が繰り広げられた。

その後、次々と商店街に市の里ギャラリーが開設されていき、現在では全部で10館の市の里ギャラリーが存在している。このように、観光による町づくりの始まりである市の里ギャラリーの開設を皮切りに、福野町では商店街を中心に様々な芸術文化をテーマとする交流やイベントが行われた。しかし、「ふくの『市の里』アートフェスタ」は3年ほど前から、予算不足や人員不足の問題により廃止された。現在、市の里ギャラリーは福野観光協会が中心となって管理しており、その観光協会については以下に記述する。

### 3-3. 福野観光協会

#### 3-3-1. 観光協会の概要

現代では人々のライフスタイルの変化や価値観の多様化により、観光やイベントの形態も、「観る」観光から「参加・体験・ふれあい」型の交流を主とした観光志向へと変化している。このことから人々の観光ニーズが、心の豊かさや癒し、満足感を追求する方向に変化し、ますます多様なものになっていることが分かる。こういった傾向を受け、観光による町づくりを目指して観光協会を一新することが決定された。それまでは福野の観光については町と商工会が個別に対応してきたが、平成10（1998）年4月1日に設立総会が開かれ、福野町観光協会として独立することとなった。

観光協会の主な活動は、インターネットのホームページの開設により町内・町外両方に向けて福野町の歴史、文化、祭りなどの観光情報を発信すること、「芸術・文化の福野町」を目指して町在住のアーティストと一体となって活動すること、様々なイベントの開催によって芸術・文化交流を活発化し、心豊かな町づくりを目指すことなどが挙げられる。

#### 3-3-2. 現在の観光協会

現在、市の里ギャラリーの管理は主に観光協会が行っている。観光協会の事務所は福野駅に内設されており、観光案内所として開かれている。本調査ではそこで案内人として働いている勢濃さん（60代男性）に話を伺った。

平成16（2004）年の南砺市合併により、福野町観光協会は南砺市観光協会福野支部として、現在まで活動を続けている。現観光協会会長は栗山支部長であるが、観光案内所は勢濃さんが事務局長として一人で運営されている。勢濃さんはもともと別の仕事に就いていたが、西能さんと勢濃さんの父が知り合いで、2人に誘われて観光協会に働くことになったそうだ。勢濃さんは市の里ギャラリーについて、「福野の芸術・文化をいろいろな人に広めたい。ギャラリーを通して特に若い人々に芸術・文化に触れる機会を得てもらい、より関心を持ってもらいたい」と話された。

しかし、市の里ギャラリーを運営し続けることは大変なことで、ここでも人員不足や予算不足といった問題が発生している。勢濃さんは数年前に定年に達したためこの仕事を辞めようと考えたが、後継者がいなかったためそのまま続けることとなった。なかなか後を継いでくれる人がおらず、後継者が見つかるまでは辞められないそうである。

## 4. 現在も活動続ける市の里ギャラリー

### 4-1. ギャラリーの衰退

オープン当初はどのギャラリーも商店街の活性化や空き店舗の活用、観光促進に向けて活発的に活動し、たくさんの方が訪れていた。しかしだんだんとその活動は停滞していき、現在では小規模化しながらも活動を続けているところと全く活動していないところに二極

化している。

その原因の一つとして、勢濃さんは福野町の南砺市合併を挙げた。複数の町や村が一つの市として合併したことにより、観光事業の組織自体が拡大し、福野町単独での活動が難しくなった。さらにギャラリーの維持管理が大変になり、商工会の管理を離れてギャラリーを閉鎖し個人的に利用する運営者の増加や、ギャラリーの取り壊し、小規模での運営が目立つようになってしまった。勢濃さんは、「ギャラリーの運営自体が大変であるので、これ以上ギャラリーが増えることはないだろう。今はとりあえず残っているギャラリーを維持していこうと思う」と話された。

このように市の里ギャラリーにかつてのような活気は見られなくなってしまった。しかし、そういった状況の中でも活動を続けているギャラリーは存在している。現在も活動を続けているギャラリーの中で特に私が関心を持ったのは、1号館、4号館、6号館である。次からはこの3つのギャラリーについて詳しく述べていく。

#### 4-2. ギャラリー市の里 1号館

2-1 で述べたように、故西能孜商工会会長の提案によって、上町通りにある空き店舗の一面がギャラリー市の里 1号館としてオープンした。現在は観光協会による管理の下、主に地元の作家たちの作品発表の場として使われている。また、作品の展示だけでなく販売も可能である。展示は基本的に1週間から1か月の期間で交代し、入館料は無料で何度も自由に入出入りすることが可能なので、気軽に立ち寄りやすいギャラリーとなっている。観光協会の勢濃さんの話によると、1号館が開設される前はもともと家具屋が営まれており、そこが店仕舞いをしたためギャラリー1号館として開館したそうである。その家具屋を営んでいた方は、現在もギャラリーの奥で生活している。

開館当初はギャラリー1号館にたくさんの人が訪れた。空き店舗をギャラリーとして活用するという取り組み自体が全国的に見て福野が初めてだったため、新聞やテレビなどの報道も多かった。展示会の関係者や地元の人々だけでなく福野町外からもたくさんの人が訪れ、ギャラリーでの作品展示を楽しんだ。主な展示内容は、夜高祭の写真展や武者絵展、地元のアーティストによる書道展や絵手紙教室作品展、シルバー人材センターなどの地元の施設の方の作品展など、福野地域で活動している人々を中心に作品展が行われた。しかし、時を経るとともに来館者が減少していき、現在では展示を見にギャラリー1号館を訪れるのは作品創作者の知り合いの方がほとんどである。勢濃さんはこの傾向について、「ずっと同じように作品展示を続けているため、マンネリ化してきてしまっていることが問題である」と話された。

1号館の最大の特徴は、10館あるギャラリーの中で最も開館当初と変わらない形で活動を続けている、ということである。現在に至るまでに、約2週間毎の企画展示が当初からずっと続けられており、かなりたくさんの作品展が行われたことになる。平成27(2015)年の夜高祭の際には、町の絵画教室の生徒の作品である行燈の武者絵が展示されていた。

また毎年 3 月には、福野中学校の芸術部（一般的な美術部と同じ）の生徒の作品発表が行われている。



写真 4. 1号館の外観



写真 5. 1号館の内観、展示の様子

#### 4-3. ギャラリー市の里 4号館

ギャラリー4号館は、平成12（2000）年の開館当初は上町通りにある喫茶「椿」というところであった。しかしそこが閉館してしまっただけで、上町通りから外れた場所に4号館を移し、その古民家を活用した“樾亭”というギャラリーが新たな4号館となった。本調査では樾亭で活動している河合基行さん（男性、造園業）に話を伺った。

樾亭が開かれる以前は、篠塚六郎さんという方の住居として使われていた。しかし篠塚さんが亡くなった後、その古民家を引き取る人が誰もいなかった。そこで篠塚さんの親戚であった河合さんが買い取り、古民家を現代に残そうと考え、ボロボロだった建物や庭をなるべくそのまま残すように工夫を凝らしながら改築し、平成18（2006）年頃からそこに住んでいる。特に、もともとあった茶室と庭園（写真7）の手入れには試行錯誤を重ね、なるべく当初の形を残しつつ補強を加えたそうである。

樾亭はギャラリーとして活動しているわけではなく、外部の人に場所を提供することがほとんどである。茶室ではよくお茶会が開かれ、そこには町内だけでなく富山市や金沢市から訪れる方もいる。部屋はあまり広くないので、身内や知り合い同士でのお茶会が多い。また、毎月“懐石秘密箱”という富山市の料理人による懐石料理の講習会も行われている。場所の提供だけでなく河合さん自身がこの古民家に住んでおり、河合さんの本業である造園業の事務所としても使われている。

さらに河合さん自身が知り合いを呼び、縁側や庭で飲み会やバーベキュー、夏には流しそうめんなどをよく企画しているらしい。最大で30～40人程入ることが可能なので、大人数を集めて様々なイベントを開いている。河合さんは樾亭について、「ギャラリーと言うよ

りは、大人数で、特に若い人々に食べたり飲んだりしてわいわい楽しんでもらう“交流の場”として提供したい」と話された。いろいろな人が、気軽に大人数で集まることができるきっかけとなる場を、ギャラリー4号館が提供しているのである。ただし、4号館はギャラリーであると同時に河合さんの住居であり、造園業の事務所でもあるため、ほとんど宣伝は行っていない。受け身の姿勢であるが、何かの縁でこの檜亭を知り利用したいという人を、積極的に受け入れているようである。

今後の活動について河合さんに伺うと、茶室や園芸付近に新たにトイレや台所を造り、より利用しやすいような環境づくりを考えていると前向きな活動を話された。

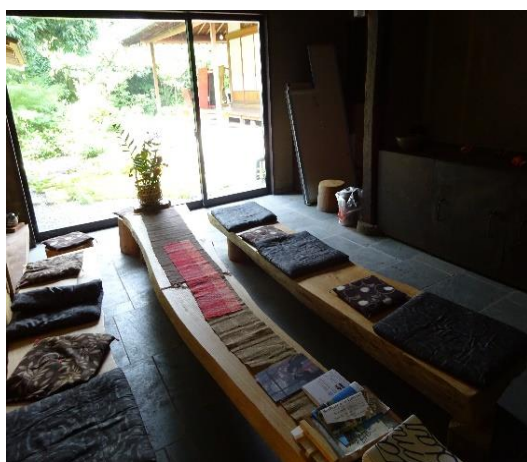


写真 6. 館内の様子

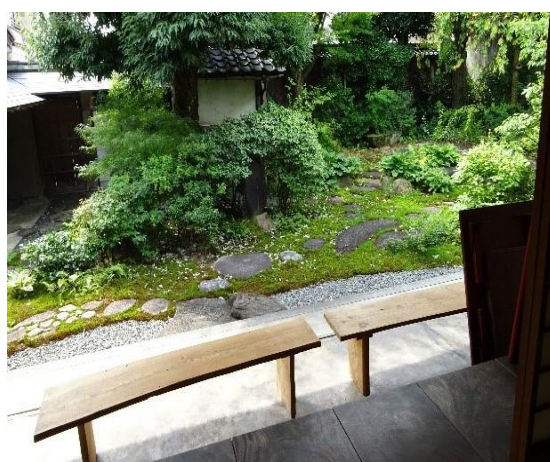


写真 7. 檜亭の庭園

#### 4-4. ギャラリー市の里 6号館

ギャラリー6号館は、横町にある使われなくなった屋敷の蔵を利用したギャラリーである。現在は焼田かおりさん（30代女性）が運営する、「twinkle smile」という手作りの小物雑貨の展示や販売が行われている。焼田さんが6号館を使い始めたのは平成27（2015）年4月からで、それ以前は「古布小物作りの会」が長年使用していた。私は焼田さんと古布小物作りの会代表の重原さち代さん（70代女性）にギャラリー6号館について話を伺った。

##### 4-4-1. 古布小物作りの会

先程述べたように、焼田さんが活動を始めの前は「古布小物作りの会」がギャラリー市の里6号館で活動していた。古布小物作りの会は、平成14（2002）年に重原さんを中心として結成された。そのきっかけは、町の人々が着なくなった着物や帯などの古布が商工会にたくさんあったため、観光協会から重原さんに「着物を使って何か作ったらどうか」という声が掛かったことである。結成に向けて町内で会員募集のチラシを配ったところ、20代から70代までの女性15人が集まった。その後町外からの会員も増え、平成17（2005）年には登録メンバーが約40名にまで及んだ。初めはギャラリー5号館「Kichi-ya」を拠点

に活動していたが、平成 15（2003）年に 5 号館が町の建物として寄付され福野文化創造センターヘリオスの分館となったため、観光協会による管理ではなくなり、古布小物作りの会は 6 号館へ移ることとなった（写真 8）。

古布小物作りの会の主な活動は、町民から寄付された古布を材料として、お互いに教え合いながら各々が自分の好きなものを好きなように作り、展示や販売を行うといった内容である。古布を使った小物作品には、のれんやテーブル掛け、ポーチ、マスコットなどがあり、作品の種類は様々でメンバー達が思い思いの作品を作った（写真 9）。また体験教室を開いたこともあり、たくさんの人が参加したそうである。



写真 8. 古布小物作りの会に関する新聞記事（北日本新聞夕刊 2005 年 10 月 31 日）





写真 9. 古布小物作りの会の作品

6号館で活動を始めた当初は、商工会のホームページでギャラリーが宣伝されていたこともあり、町内だけでなく町外からもたくさんの方が訪れた。また作品の注文を受けることもあり、古布小物づくりの会の活動はとても活発であった。6号館を訪れてくれた人には、お茶を出してゆっくりできるサービスを提供したことで、町内に住む年配の方々がよく集まり、一緒に休憩したり談笑したりしていたそうである。作品を展示するためのギャラリーというだけでなく、町の人々の交流の場となる空間としての役割も担っていた。

その後少しずつギャラリーが衰退傾向に向かっていったが、それでも6号館を利用する人は多かったようだ。しかし平成26(2014)年12月、重原さんが足を悪くしてしばらく入院すると、メンバー達から「重原さんの代わりは誰にもできない」、「みんなもいい歳やし、そろそろやめようか」という意見が挙がり、古布小物作りの会は解散することとなった。しかし現在でもメンバー同士の交流は続いており、重原さんは「よく作品を作ってメンバーにプレゼントしたり、家に遊びに行ってみんなで作品作りをしたりして楽しんでいる」と話された。

#### 4-4-2. twinkle smile

古布小物作りの会が解散して約3か月が過ぎたのち、焼田さんが6号館を引き継ぐことに決まった。福野で毎年行われる夜高祭(5月1日~3日)に向けてギャラリー6号館「twinkle smile」をオープンし、普段は週3日ギャラリーを開いている。活動内容は、主に子供向けのハンドメイド雑貨の展示や販売である。焼田さんは元々井波の縫製工場に勤めており、裁縫やミシンに携わる仕事をしていた。結婚後は仕事を辞め、息子が生まれた後はパートやアルバイトをしながら生活を支えていた。

そんな焼田さんがハンドメイドの手芸作品に興味を持つきっかけとなったのが、息子の幼稚園入園である。入園グッズとして本を入れるためのカバンを買ったが、その大きさが足りなかったため、布を切って縫い合わせることで新たに作り直したそうである。このことがきっかけで焼田さんはいろいろなハンドメイド作品を作り始めた。その後、保育園の先生から「高岡市にあるお店で、作品を持っていくとそこで売ってくれるところがある」と紹介を受け、実際に持って行ったところいくつか売れたため、その嬉しさから本格的にハンドメイドの手芸作品を作るようになったそうだ。しばらくは自宅で注文を受けて作品を作るオーダーメイドやイベントに参加して活動を行っていたが、6号館が空いたためギ

ギャラリーとして活動を始めることとなった。現在は6号館で、子供用のカバンやポーチ、ティッシュケースなどの通園グッズ（写真10）と、焼田さんの夫の作品である木を使った小物やマグネット、子供用の椅子など（写真11）を展示している。



写真10. 焼田さんの作品



写真11. 焼田さんの夫の作品

平成27（2015）年10月には「消しゴムハンコを作ろう」というワークショップが行われた。また観光協会による提案で、南砺市の生活工学研究所に保管されていた、福野の伝統産業の一つである福野縞の機織り機を6号館に移して稼働させようという計画が、同年1月頃から進んでいる。福野縞の技術を現在も活かし続けている野原リヨコさん（70代女性、福野在住）の指導のもと、機織り機の使い方を焼田さんにも学んでもらい、焼田さんに福野縞を取り入れた作品を作ってもらおうことが計画されている。同年9月末に6号館に機織り機が置かれたが（写真12）、11月の時点ではまだほとんど使われておらず、館内の廊下にそのまま展示してある状態である。焼田さんによると、「いつ使い方の講習を受けるか未定、機織り機自体も相当古いので実際に作れるのか心配。でも、いずれ福野縞をワンポイントに取り入れた手芸作品を作りたい」と話された。今後少しずつこの計画が進み、ギャラリー6号館が伝統ある福野縞を将来に残していくという役割を担うことが期待される。



写真12. 6号館にある福野縞の機織り機

焼田さんは現在、週3日、1日3時間程ギャラリーを開いている。しかしギャラリーの来館者は少なく、小規模活動となっている。焼田さん自身、家族の生活や息子のこれからのためにも他に仕事を始めようか悩んでおり、ギャラリーでの活動日を減らしていくことも考えているそうである。焼田さんは、「人がたくさん訪れるギャラリーにしたいというより、何となくでもいいので少しでも6号館に興味を持ってくれた人が、ふらっと立ち寄ってくれ

るだけで今は十分。小物を作って自分の個性を表現した作品を、見てくれた人が興味を持ち好きになってくれることがとても嬉しい。また外部のイベントにも出店したいので、ギャラリーでの活動は少なくなるかもしれないが、これからもギャラリーは開き続けていきたい」と語った。また、「いつか夫と、自分たちが作ったインテリアや小物を使って店を構え、手作りの作品を展示・販売し、ちょっとした喫茶店も設けたい」そうである。

昔は住人の蔵であった 6 号館は、これまでギャラリーとしてたくさんの作品を人々に伝える空間であり続けてきた。そして現在、焼田さんが自分の作品をいろいろな人に知ってもらうきっかけとなる場であるとともに、福野の古き伝統である福野織の保存活動を行う場ともなりつつある。

## 5. まとめと考察

福野商店街は上町通りを中心に、昭和 30（1955）年頃たいへん賑わっており、上町通りだけで 50 店舗以上の商店が軒を連ねていた。しかし、現在福野商店街には空き家や空き店舗が多く存在し、かつて栄えていた頃の商店街の様子とは全く違ったものになっている。今回調査を行ってきた中で、かつての活気あふれる福野商店街と現在の商店街の様子を比較して、商店街を維持し続けていくことの難しさを改めて知った。商店街の衰退は全国的に当てはまることであり、それぞれの地域が独自のやり方でこの問題をどうにか解決しようと改善策を編み出している。福野商店街における空き店舗を活用したギャラリーは、そういった空き店舗対策の一つであるとともに、福野の新しい観光施設としての役割も担ってきた。市の里ギャラリーが立て続けに作られた当初は、空き店舗がギャラリーとして再利用されることの珍しさと斬新さから多くの人々やメディアの注目を浴び、たくさんの人がギャラリーを訪れた。しかしその市の里ギャラリーも活動開始から 20 年近くが経ち、現在は商店街同様、衰退傾向にある。

こうした市の里ギャラリーの衰退の中で、商店街における市の里ギャラリーの役割に変化が見られた。かつては観光施設として町外からたくさんの人がギャラリーを訪れていたが、次第にその客足が減少し、ギャラリーの活動に落ち着きが見えたことがあってか、町の人々、特に高齢者がギャラリーを訪れるようになった。そしてその利用目的も、展示作品を見ることに加えて、町の人々がギャラリーに入ってひと休みしたり、他人と触れ合ったりすることへと変化しているように思う。いずれにしても、市の里ギャラリーは衰退し小規模になりつつも活動を続けており、これからも商店街に役立つ施設として存在し続けていくだろう。

上に述べた市の里ギャラリーの利用目的の変化から、空き店舗を、ギャラリーに加えて地域の人々の交流の場として活用できないかと私は考える。福野商店街では高齢化が進んでおり、年配の方が住みやすい町づくりを展開することが求められている。そこで市の里ギャラリーのように空き店舗に改装を施し、ちょっとした喫茶店や談話コーナーを設ける

ことで、町の人々が気軽に立ち寄り他人と談笑することができる機会が得られる。さらに、幅広い年齢の人がゆっくり楽しむことができる将棋や囲碁などのボードゲームを設けた、サロンのような趣味・娯楽施設として空き店舗を活用することも可能ではないだろうか。

またギャラリーを観光施設として活用するという面では、福野の伝統を発信するギャラリーを作るということも一つの案として挙げられる。福野には福野縞や夜高祭、2・7の朝市、歳の大市、菊、里芋など、福野独特の歴史ある伝統行事や特産品がたくさんある。しかしそういったものをアピールするための博物館や資料館のような施設が福野にはない。そこで市の里ギャラリーのように、これらの福野の伝統をいくつかに分けて、それらをテーマとしたミニ博物館のような施設や特産品を販売する土産物のお店を作ることで、福野の魅力を外部の人々にもっと伝えることができるだろう。福野ならではの魅力を発信しより深く知ってもらうことは、町の人々の福野への親しみの深まりや、福野への観光客の増加に繋がっていくはずである。

しかしこういった空き店舗の活用には、たくさんの労力や経費、時間などが必要となる。また、人々のライフスタイルがどんどん変化しており、商店街はその流れに取り残されつつある。かつて、商工会や観光協会を中心に町の人々が一丸となって盛り上げた市の里ギャラリーが衰退している今、再びギャラリーでの活動を活発化させ商店街に活気を取り戻すには、地域住民一人一人の力が必要となるだろう。私はこの調査の中で、現在も福野商店街に暮らす人々や市の里ギャラリーに関わる人々に話を聞き、かつての商店街は活気にあふれ町の人々が生き生きと暮らしていたことを知った。市の里ギャラリーのように、福野独自の活動によって商店街が再び活気を取り戻し、子供からお年寄りまで地域の人々が明るく過ごせる町であり続けることを願っている。

## 謝辞

今回の調査を行うにあたり、多くの方々にお時間をいただき貴重なお話をお聞かせいただきました。特に、野原さん夫妻、福野観光協会の勢濃さん、各市の里ギャラリーの方々には何度もお世話になりました。皆様のご協力のおかげで、このような形で報告書をまとめることができました。本当にありがとうございました。

## 参考文献

- 福野町商工会 2000年 『福野町商工会 創立80周年 法施行40周年 記念誌』  
福野町史編纂委員会 1964年 『福野町史』  
同上 2005年 『続福野町史』

## 参考にしたウェブサイト

「福野ものがたり」(<http://www.nanto-fukuno.com/>; 2016年1月25日閲覧)

# 市民が生み出す新たな文化—スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド—

中沖 祥子

## はじめに

「福野ではスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドという、ワールドミュージックのフェスティバルが開かれている」。調査テーマを探すなか初めてそう聞いたとき、強いインパクトを覚えた。スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドという個性的な名前。ワールドミュージックという聞き慣れないジャンルの音楽。私は幼少期から音楽にかかわる機会が多く、コンサートや音楽フェスティバルに以前から関心があったこともあり、すぐにこのイベントに興味を持った。住民への聞き取りを進めると、「近所の小学校の子供たちも出ている」「リオのカーニバルのようなパレードがある」といった一風変わった音楽フェスティバルであることがわかった。またインターネットでは映像で市民楽団が楽しげに演奏する様子や、その近くで身体を揺らして楽しむ観客の様子、カラフルな旗で彩られ賑わった会場の様子を見ることができ、ますます興味がわいた。「どのようなイベントなのかもっと知りたい」「このイベントに関わる人たちのことを知りたい」と思い、本格的に調査を始めた。

調査では企画・運営の会議の見学や、市民楽団「トゥーマラッカ」の活動への参加を行った。フェスティバル当日はトゥーマラッカの一員としてコンサートやパレードに出演し、会場警備のボランティア・スタッフとしても参加した。またイベントを企画・運営するスタッフの方々やイベントに参加する市民楽団の方々を中心に、聞き取り調査を行った。

## 1. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドとは

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドとは、毎年8月のお盆過ぎの金・土・日の3日間、福野文化創造センター「ヘリオス」を主会場として行われる、ワールドミュージック・フェスティバルである。2015年で25回目を迎えるこのフェスティバルでは、プロのアーティストのコンサートをはじめ、演奏パレード、アマチュアによるステージ、ワークショップ（体験教室）、シンポジウムなどの様々なプログラムが用意され、町が多くの人で賑わう。ワールドミュージック・フェスティバルとして国内最大規模を誇る。

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの最大の特徴は、市民がアーティストから直接演奏の指導を受けることができるワークショップや、アーティストが福野で共同生活を送り、交流を深めながらパフォーマンスを完成させる「レジデンス・プログラム」など、「音楽を通しての異文化交流」をテーマにした活動をフェスティバルの開催に先駆けて行っている点である。ワークショップは8月の初め頃から1週間～10日間ほどにわたって開催される。

また、そのワークショップがきっかけとなって市民楽団が次々と誕生してきていることも重要である。2015年までに、各ワークショップ参加者で構成された市民楽団が6組誕生している。スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドでは、その市民楽団や地元の人々が出演するプログラムがいくつもある。

もう一つの大きな特徴は、県内外から集まったボランティア・スタッフによって企画・運営が行われているという点である。ボランティア・スタッフによって構成されたスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員会が中心となり、ヘリオスの事務局とともに、1年間かけてフェスティバルを作り上げていく。

それらを述べる前にまず2015年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドについて記す。

## 2. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2015

### 2-1. 3日間のプログラム

2015年8月21日～23日の3日間、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2015 が開催された。福野文化創造センター「ヘリオス」を中心に、JR 福野駅や南砺市園芸植物園（フローラルパーク）を会場として行われた（図 1）。福野駅前からフローラルパークに続く道にカラフルなフラッグが立てられ、ヘリオスにはスキヤキバージョンのミニ行燈やフラッグの飾り付けがされて（写真 1）、福野の町がどこか日本とは違うお祭りムードに包まれていた。エキゾチックな色彩の飾り付けではあるが、行燈が使われているところが福野らしい。ヘリオス前庭には様々な国の食べ物や雑貨を売る屋台やインフォメーションブース等が並び（フード・マーケット、グッズ・マーケット）（写真 2）、大きなテントの飲食スペースとその横にガーデンステージが設置された。2日目からは手作りの作品を展示・販売するテント（アートマルシェ）もヘリオスの前にずらりと立ち並び、さらに賑わいを見せた。



写真 1. フラッグで彩られた会場



写真 2. フード・マーケット

国内外から招致された 12 組のアーティストと、アマチュアアーティスト 9 組や DJ6 名、

スキヤキから生まれた市民楽団 6 組や地元の人々等が 3 日間で出演した (表 1)。このうちプロのアーティストが出演したのは 1, 2 日目の深夜にかけて行われるクラブステージ、2 日目の夜のフローラルステージ、3 日目のヘリオスステージで、これはいずれも有料のコンサートである。日本ではあまり知られていないものの世界から注目されているアーティストが数多く出演し、観客を魅了していた。アマチュアアーティストや DJ が活躍したのは 2, 3 日目のガーデンステージである (写真 3)。ガーデンステージの出演者は公募により選考される。2015 年は日本各地から 18 組の出演希望が寄せられ、その中から選考された 9 組が出演した。歌や楽器の演奏、ダンス等様々なジャンルのステージがあり、観客はフード・マーケットでの食事とともにステージを楽しんでいた。3 日間で入場者数は延べ 1 万 2 千人で、前年を上回る集客となった。

以下では市民楽団や地元住民が数多く出演した 1 日目のオープニングステージと 2 日目のスキヤキ・パレードについて詳しく記述する。



写真 3. ガーデンステージの様子



図 1. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの会場の地図

(スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2015 パンフレットより)

表 1. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2015 プログラム

8月21日(金)

時間	場所	内容
14:00~20:00	アートスペース	展示「ティンガティンガ/TINGATINGA」
14:00~24:00	ヘリオス前庭	フード・マーケット&グッズ・マーケット
19:00~21:00	フローラルパーク	オープニングステージ(無料) *市民楽団5組 プロアーティスト3組出演
22:00~24:00	ヘリオス喫茶店	クラブステージ(有料) *プロ2組出演

8月22日(土)

10:00~20:00	アートスペース	展示「ティンガティンガ/TINGATINGA」
10:00~24:00	ヘリオス前庭	フード・マーケット&グッズ・マーケット アートマルシェ(オリジナル作品展示・販売)
12:00~17:00	ヘリオス前庭	ガーデンステージ・DJ *アマチュアアーティスト5組 ゲスト1組
13:00~14:30	アートスペース	シンポジウム 「6年間のレジデンス企画~新しい音楽文化の創造」
15:00~16:00	アートスペース	作品解説「ティンガティンガの世界」
16:30~16:50	JR 福野駅前	EKIMAE ミニステージ *中学校吹奏楽部等3組出演
17:00~18:00	JR 福野駅前~フ ローラルパーク	スキヤキ・パレード *市民楽団等10組出演
18:00~21:30	フローラルパーク	フローラルステージ(有料) *プロ3組出演
22:00~24:00	ヘリオス喫茶店	クラブステージ(有料) *プロ2組出演

8月23日(日)

10:00~11:30	アートスペース	ワークショップ「マリのリズム」
10:00~18:30	アートスペース	展示「ティンガティンガ/TINGATINGA」
10:00~18:30	ヘリオス前庭	フード・マーケット&グッズ・マーケット アートマルシェ(オリジナル作品展示・販売)
12:00~18:00	ヘリオス前庭	ガーデンステージ・DJ *アマチュアアーティスト4組 ゲスト1組
12:30~14:00	アートスペース	ワークショップ「ガリフナ音楽と文化」
14:30~18:00	ヘリオス	ヘリオスステージ(有料) *プロ3組出演
18:00~18:30	ヘリオス前庭	スキヤキ・フィナーレ

(スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2015 パンフレットより作成)



## 2-2. オープニングステージ

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド初日の8月21日は、19時から南砺市園芸植物園「フローラルパーク」でオープニングステージが行われた。会場には焼きそば、から揚げなどの屋台がたち並んだ「福野ビック夏の市」と称したスペースが設けられ、子どもからお年寄りまで様々な年齢層の観客が集まり、賑わいを見せていた。その様子は縁日のような雰囲気であった。会場の一番奥には色鮮やかなステージが設置され、すぐ前に立ち見のスペース、その後ろには座ってステージを見られるテントの席が用意されていた。テントでは、観客が屋台で買った食べ物を食べたりビールを飲んだりしながらコンサートを楽しんでいた（写真4）。

オープニングステージでは、最初に一般市民が普段の練習や会期前のワークショップの成果を発表する。マラカトゥ<sup>85</sup>を演奏する市民楽団「トゥーマラッカ」がマラカトゥのアーティスト「BAQUEBA（バッキバ）」<sup>86</sup>とともにマラカトゥ、バリ島のケチャ、日本の応援を組み合わせたパフォーマンスを披露したり（写真5）、子供達がマラカトゥを演奏したり、スキヤキ25周年を記念して新たに誕生した「四半世紀楽団」が韓国打楽器・親指ピアノ<sup>87</sup>・合唱での楽曲を演奏したりと、2015年度に行われた各ワークショップでの成果が披露された。トゥーマラッカとBAQUEBAはステージだけではなく、同年のワークショップで新しく製作された巨大人形とともに観客の目の前でマラカトゥの演奏を行い、会場を盛り上げた。またその後には2、3日目の有料ステージに出演するアーティストが4組登場し、ヘリオスステージやフローラルステージに先駆けて演奏を披露した。



写真4. (左) オープニングステージを楽しむ観客

写真5. (右) オープニングステージで演奏するトゥーマラッカ（撮影：林陽子）

<sup>85</sup>ブラジル北東部ペルナンブッコ州の音楽文化。ジレトールと呼ばれる指揮者の合図に従い、アルファイア（大太鼓）、カイシャ（小太鼓）、アベ（ひょうたんの振りもの）、アゴゴ（2個付きのカウベル）等を演奏するリズム音楽。

<sup>86</sup>東京・世田谷で活動するマラカトゥのアーティスト集団で、トゥーマラッカの親元となった団体。詳しくは第6項に記述。

<sup>87</sup>広くアフリカ各地で親しまれている、サンザ・ムビラなどとも呼ばれる鍵盤楽器。木その他の台の上に弾力性のある薄い金属片などをいくつも縦に並べて上方を横にとめ、下方を指ではじくもの（龍村あや子1988年「アフリカの音楽」『音と映像による世界民族音楽大系 II』p.190、平凡社）。

### 2-3. EKIMAE ミニステージ、スキヤキ・パレード

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2日目の8月22日16時30分からJR福野駅前で、スキヤキ・パレードの皮きりに「EKIMAE ミニステージ」が行われた。出演は吉江中学校、福野中学校の吹奏楽部、トゥーマラッカ、BAQUEBA とスキヤキ巨大人形隊であった。観客のなかに、中学生の子供たちの応援にビデオや写真を撮りながらステージを楽しむ親や家族の姿が多く見られた。

表 2. スキヤキ・パレードの出演団体  
(パレード出演順)

夜高あんどん (浦町)
田楽あんどん隊 (福野の子供たち)
福野小学校スティールドラムクラブ 「気分はカリビアン」
富山スカウトバンド
安居神楽太鼓
吉江中学校吹奏楽部
おらっちゃん人生桜歌隊 (チンドン)
福野小学校管楽器クラブ
福野中学校吹奏楽部
BAQUEBA・トゥーマラッカ・ スキヤキ巨大人形隊

(スキヤキ・パレード  
パレード班の資料より作成)

その後17時から、夜高行燈を先頭にパレードがスタートし、駅前からフローラルパークまでの約1kmを、10団体・約600名の出演者が練り歩いた(表2)。各団体に先立って団体名が書かれたフラッグを持つのは、高岡商業高校吹奏楽部と南砺福野高校吹奏楽部の高校生たちである。このスキヤキ・パレードは、出演者が日本の、しかもほぼ地元の団体という、3日間で唯一のローカル色の強いプログラムである。特に小・中学校のクラブ活動・部活動からの出演や(写真6)、福野の公民館の活動の



写真 6. 福野小学校スティールドラムクラブ  
「気分はカリビアン」



写真 7. 手作りの行燈を持って歩く子供たち  
(田楽あんどん隊)



写真 8. 沿道の観客に向けてパフォーマンス  
する BAQUEBA・トゥーマラッカ  
(撮影：野澤豊一先生)

「ミニ行燈をつくってスキヤキ・パレードに出よう」という企画に参加した子供たちの出演など（写真 7）、地元の子供たちの活躍が目立っていた。周辺住民と思われる人々が数多く沿道に立ち、パレードを楽しんでいた。

また市民楽団「トゥーマラッカ」は BAQUEBA とともにマラカトゥを奏でながら最後尾を練り歩いた（写真 8）。50 人を超える参加者で、太鼓の大きな音を響かせた。

### 3. 企画および運営

#### 3-1. ボランティア・スタッフ

この大きなフェスティバルを企画・運営しているのは、ボランティア・スタッフである。スタッフは、富山県内を中心に様々な地域からの 10 代～60 代の幅広い世代の人々からなる。スタッフは毎年一般募集されていて、誰でも参加することができる。募集は主に公式ホームページから行われている。準備の時期が近づくと、町の田んぼや空き地にスタッフ募集の看板をたてたり、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの PR でイベントに参加したときにスタッフ募集を呼びかけたりしている。すでに前年にスタッフ登録したことのある人には時期が近づくと登録を呼びかけるお知らせが届くため、リピーターも数多い。知り合いの勧めでボランティア登録している人も多く、口コミの影響も大きいようだ。

このような形で集まった 2015 年のボランティア・スタッフ登録者は 254 名であった。南砺市に住むスタッフ登録者は多く存在するが、それだけでなく、富山県内の他の地域や県外のスタッフ登録者が半分以上を占めていて、もはや南砺市民だけのフェスティバルではないことがわかる（表 3）。

表 3. 2015 年のボランティア・スタッフ登録者の居住地

居住地	南砺市	富山県内 (南砺市以外)	石川県	その他	住所未登録	計
人数	92 名	93 名	21 名	7 名	41 名	254 名

（ヘリオス事務局の方からのお話より作成）

一般募集のボランティア・スタッフのほかにも、市民楽団、インターンシップ参加者、授業の一環として参加している富山情報ビジネス専門学校（ボランティアと PR ビデオ制作）、南砺市商工会青年部（パレード運営）、高岡商業高校吹奏楽部及び南砺福野高校吹奏楽部（パレード旗持ち誘導）といった団体がスタッフとして参加している。またヘリオスが 1994 年から常時募集している、ボランティアでヘリオスでの催し物の際ステージの裏方の仕事の手伝いをする「ステージクルー」という人たちと、コンサートなどの受付や案内を担当する「ヘリオスフェイス」という人たちも、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドのスタッフとして参加する。

ボランティア・スタッフは担当する仕事別に班に分かれて活動している。コンサート部会としてヘリオス班、フローラルパーク班、クラブ班、ガーデン班、ワークショップ班、パレード班、ランナー班、警備班の7班、そしてアメニティ部会としてカフェ・マーケット班、ケータリング班、インフォ班の3班、合計11班である(表4)。各班には班長と副班長が存在し、彼らが班をまとめ、運営を進めている。しかし、楽器や機材の運搬をする裏方の仕事は人手が足りておらず、班にかかわらず協力して行っている。またクラブ班のように人数の少ない班もあり、手が空いている他の班の人がチケットのもぎりや観客の誘導の仕事を手伝う。

表4. ボランティア・スタッフの班の担当と人数<sup>88</sup>

	班	担当	人数
コンサート部会	ヘリオス	ヘリオスステージ	14
	フローラルパーク	オープニングステージ、フローラルステージ、福野ビック夏の市	18
	クラブ	クラブステージ	5
	ガーデン	ガーデンステージ・DJ	6
	ワークショップ	会期中のワークショップ・シンポジウム	14
	パレード	スキヤキパレード・EKIMAE ミニステージ	12
	ランナー	アーティストの会場間移動・宿泊プランニング	12
	警備	ヘリオス・フローラルパーク・クラブの警備	7
アメニティ部会	カフェ・マーケット	カフェ・グッズマーケット・フードマーケット・アートマルシェ・NPO ブース	28
	ケータリング	アーティストとスタッフ用のミールステーション・ケータリング (まかない)	23
	インフォ	総合案内・インフォブース運営・臨時バス	26

(ヘリオス事務局の方からのお話より作成)

### 3-2. スキヤキ実行委員会

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを企画・運営するにあたり主体となるのが、ボランティアスタッフ登録者から構成されている、「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員会」である。実行委員長の橋本正俊さんをリーダーに、副実行委員長、顧問、アドバイザー、広報担当、各班の班長・副班長の計36名で構成されている。「実行委員会に参加している人は、昔から長い間スキヤキに携わってきた人や、苦労しながらも頑張っってスタッフを続けてきた人が多い」と橋本実行委員長は語る。

<sup>88</sup>実行委員長(1名)、副実行委員長(4名)は班登録していない。また市民楽団(スキヤキ・スティール・オーケストラ、サラマレクム、トゥーマラッカ、スキヤキ巨大人形隊)と情報ビジネス専門学校は各団体としてスタッフ登録しているため表4には含まれていない。

実行委員会は毎年組み直されるが、歴任している人も多い。今まで副班長だった人が班長になったり、前年とは別の班の班長になったりという変化もよくある。2015年に新しく実行委員会に入った人は10人である。また、実行委員会の構成も毎年やりやすいように変わる。例えば警備班は各班での警備の仕事の負担を減らすために、2015年に新設された班である。

### 3-3. ヘリオス事務局

スキヤキのボランティア・スタッフたちを支えるのがヘリオス事務局である。事務局のスタッフは普段、南砺市福野文化創造センターの運営を行っている。南砺市福野文化創造センターには、円形劇場ヘリオス、アートのスペース、一般学習室（セミナールーム、ミーティングルーム、控室）、専門学習室（スタジオM、スタジオD、茶室、アトリエA、アトリエC）があり、コンサートやアート展示、音楽やダンスの練習、書道、陶芸、会議などを目的とした利用者への貸し出しを行っている。また福野文化創造センター主催の美術展やコンサートを年2回程度行っている。

福野文化創造センターは、元々は南砺市の文化事業によって運営されていたが、2015年から文化創造南砺合同会社による指定管理に切り替わった。これは、市の職員だと3年ごとに職場が変わってしまい、人材が育たないということを考えて行われた。事務局には11名のスタッフが所属し、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド開催にあたって、事務的手続き等をはじめとしたサポートを行っている。

### 3-4. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2015 までにいたる準備

#### 3-4-1. プロジェクト会議

スキヤキを企画・運営するにあたり、1年を通して行われるのが「プロジェクト会議」である。参加するのは主に実行委員会のメンバーとヘリオス事務局の方々である。この「プロジェクト会議」では、イベント製作に関わるすべてのことが話し合われ、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが作り上げられていく。

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの企画が動き出すのは、イベントが終わって間もない時期である。例年、イベントが終わった翌月の9月ごろ反省会が行われ、イベントの反省点をまとめた報告書をもとに、何が問題だったかを話し合う。そして、そこで出た意見を踏まえて、翌年の企画を話し合う第一回目のプロジェクト会議が行われる。2015年開催のイベントに向けた第一回プロジェクト会議は、ヘリオスの指定管理への切り替えのため年が明けた2015年1月22日に行われたが、例年は年が明ける前に第一回が開かれる。前年2014年開催へ向けた第一回プロジェクト会議は10月に行われていた。その後、月に約1回のペースで行われ、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドは一年かけて準備されていく。筆者はこのうち、第6回と第12回のプロジェクト会議の様子を見学した。

2015年4月9日、福野文化創造センターの事務室で、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド

2015 第 6 回プロジェクト会議が行われた。この日はヘリオスが指定管理になって初めてのプロジェクト会議であり、たくさんの方が参加していた。20 時からの会議には、それぞれの仕事を終えたスタッフの方々が次々と集まってくる。この日は参加者全員の自己紹介から始まり、出演者交渉や各ステージプランの企画等の進捗状況の報告、ワークショップの内容や広報計画、ケータリング業者の提案等の協議事項、今後の予定などが話された。

2015 年 7 月 30 日には第 12 回プロジェクト会議が開かれた。この日は本番前最後のプロジェクト会議であり、スタッフの方々は引き締まった様子で会議に参加していた。主に今後の日程や広報活動などの確認がされたあと、観客によるステージの撮影行為や小型無人航空機「ドローン」の使用についてなど、アーティストやお客さんが気持ちよく安全にフェスティバルを楽しめるよう、注意点をよく話し合っていた。

### 3-4-2. 新人スタッフ研修会・スタッフ全体会

2015 年 6 月 28 日、新人スタッフ研修会が行われた。これは今年新しくボランティア・スタッフの登録をした人向けの研修会である。内容は、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドとはどんなものか、スタッフの仕事についての説明、スタッフ班の説明、スキヤキのこれまでの歩みについてである。20 名ほどの新人スタッフが参加し、真剣に耳を傾けていた。研修会のなかで、「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドのテーマは『音楽を通しての異文化交流』である。『音楽を通して』というところがミソだ。」「スキヤキは『新しい音楽文化の創造』を行い、それを『南砺市の文化として発信』することを目指している。」と橋本実行委員長は語った。

その後新人スタッフに常連組も加わり、ボランティア・スタッフたちが集う「第一回スタッフ全体会」が続けて行われた。内容は、今年が目玉となる活動の紹介、タイムテーブル、出演アーティスト紹介、今後のスケジュール、ヘリオス事務局や正副班長の紹介などで、全員で今年のスキヤキについての情報を共有する。その後、班ごとに分かれての詳細な打ち合わせが行われ、会場は活気に包まれていた。

新人スタッフ研修会とスタッフ全体会は例年続けて 2 度行われる。8 月 9 日には第 2 回新人スタッフ研修会とスタッフ全体会が同じく続けて行われ、第 1 回目に来られなかった人も含めてより多くのスタッフが集まり、フェスティバルに向けて準備を進めていた。

## 4. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの歴史

ここまでは現在のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドがどのようにして行われているかについて記述してきた。ここではスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドはどのように生まれ、続いてきたのか、その歴史について記述する。以下、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが始まった当時、福野町の文化事業課に勤めていて、長年スキヤキ事業に関わっている米田聡さんからの聞き取りを中心に記していく。

#### 4-1. スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドのはじまり

スキヤキを始めるきっかけになったのは福野文化創造センター（ヘリオス）の設立である。1990年12月ごろ、翌年3月のヘリオスのオープンに向け、コンセプトづくりが進められた。そこで福野周辺の文化事業を考慮してみると、利賀村は SCOT（スコット）という国際的な演劇祭を行っていて、井波は国際木彫刻キャンプをはじめたところだった。そこで、演劇・美術に続くものとして、「福野は音楽をしよう」という発想が生まれた。また、ヘリオスは丸い形の劇場が特徴的な設計であった。米田さんは、はっきり演奏者と客席が分かっている西洋の舞台芸術ではなくて、もっと丸い劇場を活かした、演奏者とお客さんの距離が近くなれるものを作りたいと考えた。そこで、「西洋からできるだけ遠い音楽文化はなんだろう」と考えたとき、アフリカやアジア、ラテンの音楽があがってきた。そして、「ワールドミュージック」「異文化交流」というコンセプトに行き着いた。

ヘリオスのコンセプトづくりと同時期に、それまで個別に活動を続けてきた、となみ青年会議所ふくのコミュニティ、町商工会青年部、町農協青壮年部、町連合青年団、福朋会といった福野の若手の団体 5 団体で横の連携をして街づくりをしようという、ネットワークづくりが行われていた。このネットワークづくりは、一つの団体ではできないこともみんなですれば大きなことができるのではないかという思惑から始まったものである。彼らはネットワークを作るにあたって、自分たちはどういう事業をやっていくべきかを議論した。有名な歌手を呼んでコンサートを開くことや、山の中にゴーカートのコースを作ること等様々な案がでたが、福野町に何が残るかを重視して考えると、「自分たちのやるべきことはそれではないのではないかと、どの案も却下された。そんな時、ヘリオスのコンセプトを考えていた福野町側から声がかかり、両者が協力してワールドミュージックでの異文化交流事業を行うことが決まった。

この時できたネットワークには、「どうせなら世界に発信するくらいのことをしていこう」という考えから、坂本九の世界的ヒットソングである『上を向いて歩こう』の別名『スキヤキソング』にあやかり、「スキヤキ・ネットワーク」という名がついた。またフェスティバルの名前を、世界と出会えるフェスティバルを目指そう、という意味を込めて、「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」とした。「スキヤキ・“ミート”・ザ・ワールド」ではすき焼きの肉を食べるお祭りのようであるため、“ミーツ”になった。

しかし、いざワールドミュージックのイベントをやろうと思っても、どんなアーティストがいて、どのように呼べばいいのか、初めは何も情報がなかった。しかし、当時東京の世田谷美術館でサマーフェスティバルというイベントが行われていて、1990年にブルンジのドラマーズ・オブ・ブルンジとセネガルのドゥドゥ・ニジャエ・ローズというアーティストが出演していたことがわかった。そこで、世田谷美術館にワールドミュージックのアーティストを招聘する会社を教えてもらい、その会社を通じてドラマーズ・オブ・ブルンジに出演交渉を行った。またワールドミュージックの本場であるフランス・アングレム市のフェスティバル「ミュージック・メティス」の運営手法も手本にした。こうして、第 1

回のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが1991年8月に開催された。

第1回目のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドについて、米田さんは次のように語った。「西洋も本来異文化ではあるが、私たちは西洋の文化に浸りきっている状態。小説を読んでも起承転結があるし、音楽もクラシックのように第一楽章、第二楽章とあって、最後にダーン！と盛り上がってはじめて拍手があるという流れがあり、そういう起承転結があるものに慣れ親しんでいる。そんななか1番最初に招聘したアフリカの『ドラマーズ・オブ・ブルンジ』は30kgくらいある太鼓を頭にのせて叩きながら出てきて、お客さんはまさに目が点の状態になった。ドラマーズ・オブ・ブルンジは登場した後ステージ上で半円に並び、順にソロをするのだが、ずっと同じ演奏を繰り返していた。最後の人までずっと同じ演奏で、お客さんはだんだん飽きていった。でもじつは人が生まれて大きくなって結婚して子供が生まれて年老いて、という生命の循環が彼らの生活を支えているわけで、ずっと同じことをやっているのもそれが彼らの文化なんだ、とわかればもっと彼らの表現することに近づけたはず。そういう意味で、遠い異文化に出会うためにはワールドミュージックはとても良いツールで、新しい文化を引き出す可能性に満ちたものだったと思う」。

第1回の出演アーティストは1団体、ヘリオスでの1ステージのみの規模の小さいフェスティバルであったが、その後回数を重ね徐々に規模は拡大していった。1999年の第9回開催の際には、福野のショッピングセンター「ア・ミュー」の広場や安居寺など、会場を福野町全体に広げた。会場がア・ミュー広場から園芸植物園に移ったのは2007年開催の第17回で、この年から「オープニングステージ」「フローラルステージ」というスタイルが定番となった。(スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員会「日本が誇るワールドミュージック・フェスティバル！スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」より)

#### 4-2. 独特かつ自立したイベントへの変化

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの運営方法も徐々に変化していった。ここからはスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員長の橋本さんからの聞き取りによるものである。橋本さんは1991年からアマチュアバンドのコンサートの企画を自ら行っていて、ステージの裏方の仕事への興味からヘリオスのステージクルーに登録、1994年にクルーとしてスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに参加し、翌年からボランティア・スタッフを始めた方である。第8回からは副実行委員長、第17回からは実行委員長を務めている。

1995年の第5回からは、スキヤキ・ネットワーク中心だった運営が個人参加のボランティア中心のものになった。というのも、ネットワークの人々の一部から「なんでこんなことやらなければいけないんだ」「他にやりたい取り組みができない」などの不満が徐々に出てきたからである。行政から離れ、ボランティアたちの「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが好き」という気持ちから動く運営になり、その頃から出演アーティストの長期滞在を実現するなど、交流を大事にした活動をさらに行うようになった。

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの歴史の中でもう1つの大きな転機となったのは、2000



年の第10回目である。その年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに、当時日本で大人気だったキューバの「ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ」というアーティストが出演し、約1,200人の集客で大盛況を収めた。しかし翌年の集客は思うように伸びず、集客は半分以下になった。そこで橋本さんは「前年の観客たちはスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを見に来たのではなく、人気のアーティストを見に来ただけだった」と気づいたという。これではだめだと思い、集客力が高いアーティストよりも、地域と交流したいアーティスト、町に何かを残してくれるアーティストを呼ぶべきだと方向転換した。また、出演アーティストを決める際にも、招聘会社を通すとどうしても利益が絡んだ交渉になってしまう。そこで、招聘会社を通さずに交渉を行うことを目指した。手続きなどが容易ではなかったため、はじめは1組から挑戦し、その方法を学んでいった。そして2004年の第14回では、はじめて1組のアーティストを、民間会社を通さずに直接交渉によって招聘した。直接交渉は、2000年に通訳としてスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドにかかわり、その後ヘリオスの嘱託職員として働き、スキヤキの総合プロデューサーを務めるリバレ・ニコラさんが行った。2004年からはじめた単独招聘は2006年の第16回にはすべてのアーティストと行えるようになり、アーティストとの交流がより深くなっていった。

#### 4-3. スキヤキ・パレードのはじまり

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの目玉のプログラムの1つとなっているスキヤキ・パレードだが、これは最初から行われていたのではない。スキヤキ・パレードが初めて行われたのは、2008年開催の第18回目である。そのことについて、2015年のスキヤキ実行委員会で副実行委員長を務める定司清一郎さんと、同じく副実行委員長とパレード班の班長を兼任している橋爪央樹さんから話を伺った。

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドでパレードを始めたのは、2008年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを企画している時期、スティールドラムの本場であるトリニダード・トバゴでトラックの荷台の上でスティールドラムを演奏しながらパレードしている映像を定司さんが見て、「かっこいい！ これやりたい！」と提案したことがきっかけである。

パレードを行うに至るまでにはたくさんの苦労があった。まず、パレードを実施するには、福野駅前から園芸植物園までの大通りを通行止めにしなければならない。またトラックの荷台に大勢の人を乗せて通行しながら演奏することなど、通常では認められない行為であった。はじめに警察に相談した時は「日本の道路交通法、知ってますか？」と注意された。しかし諦めずにパレード運営の案を何度も警察に持っていき、相談を重ねた。荷台の警備バリケードを厳重にすること、時速10km以上は出さないこと、トラックのドライバーはプロの業者に依頼すること等の条件を出したり、交通整備員の配置やパレード中の信号機の操作について計画した案を提示したりすることで、初めてのスキヤキ・パレードの開催に漕ぎ着けた。定司さんは当時も副実行委員長をしていて兼任は難しかったため、橋爪さんに頼み、パレード班長になってもらった。橋爪さんは前年2007年にはインフォ班

で活動していたが、以前から他の福野の地域おこしの団体「七転び八起き塾」に参加していたこともあり、パレード班長を任されることとなった。綿密な打ち合わせの甲斐あって初のパレードはスムーズにでき、その後も毎年無事故で大きな問題もなく、スキヤキ・パレードは人気の高いプログラムとして恒例のものとなった。

このスキヤキ・パレードの出演者はほぼ地元の人々、特に地元の子供たちによって構成されている。その理由については「地元の人にもスキヤキを見に来てもらおう、という試み。子供を応援するついでに、他のステージも見に行ってみようという人がいたらいいなと思う」と橋爪さんは話した。また2014年からスキヤキ・パレードの皮切りとして新たに始まったEKIMAE ミニステージは、「福野駅前パレードのスタート地点なのに毎年お客さんが少なく寂しい」という理由から始められた。EKIMAE ステージでの子供たちの演奏を見にくる家族たちが多く、にぎやかなスタートができるようになった。

## 5. 事前会期プログラム

### 5-1. 長期型ワークショップの成立と発展

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの核となる活動の一つに、長期型ワークショップがある。これは毎年8月の初め頃から1週間～10日間ほどかけて、プロのアーティストから市民が直接演奏指導を受けるという企画である。そしてワークショップ参加者は、最終的に会期中のオープニングステージやパレードに出演することができる。ワークショップは毎年違うラインナップではなく、2, 3年連続して同じものが開催される。というのも、ワークショップから市民楽団が発足し、育っていくことが目標の一つだからである。2, 3年のワークショップを経て、楽団はどんどん大きくなり、レベルアップしていくのである。

この長期型ワークショップというスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの特徴的な活動も最初からあったわけではない。長期型ワークショップの先駆けとなったのが、1992年にスキヤキ実行委員会が福野小学校の子供たちとともに行ったスティールドラム作りである。スティールドラムとは、トリニダード・トバゴ共和国で発明されたドラム缶から作られた打楽器である。音階があり、独特の倍音の響きを持った音色が特徴である。そのスティールドラムのみで演奏するトリニダード・トバゴのアーティストである「レネゲイズ・スティール・オーケストラ」が1992年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに出演した。当時日本ではスティールドラムは未知のものであり、ドラム缶が楽器になるということ自体が衝撃的だった。そこで、「ドラム缶を凹ませたらいい音が出るらしいぞ」という程度の知識のみで、独学で作り始めた。約1ヶ月間製作したが、いい音は鳴らず楽器作りは大失敗だった。

その後、1993年と1994年にスティールドラムのワークショップ開催の募集をかけたが、人数が集まらず開催できなかった。レネゲイズ・スティール・オーケストラが2年続けてスキヤキに出演し認知度が徐々にあがったこともあり、ようやく1995年に第一回目の本格的な長期型のスティールドラムのワークショップ開催に至った。「レネゲイズ・スティー

ル・オーケストラ」のブライアン・ブルーマント氏を講師に招き、1か月間開催された。楽器は25個程度しかないのに受講者が30～35人になってしまい、練習は楽器の取り合いのような状況だった。

ワークショップ参加者は前夜祭でその成果を披露した。その後、参加者の「楽しかった！もっと続けたい！」という声から活動が継続し、市民楽団「スキヤキ・スティール・オーケストラ」が誕生した。その年、レネゲイズ・スティール・オーケストラがスティールドラムを福野の旅川会館<sup>89</sup>に1年間預けており、その楽器を自由に使うことができたことも楽団発足に大きく貢献した。

ワークショップを開始した意図として、米田聡さんは次のように語った。「1年に3日間イベントをただけでは、文化として地域に根付きにくい。一年中活動している現場があれば、認識が変わってくるのではないかと思い、5年目にはじめて本格的なワークショップを開催した。市民団体は夏だけでなくずっと練習しているし、様々なイベントでの演奏オフアールもあるので、だんだん地域の人に知られていった。町の人にとって、『スキヤキ』といえば最初はネットワークを指していたものが、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを指すようになり、スキヤキ・スティール・オーケストラを指すようになっていった。自分達としては年中活躍するスティールバンドをつくるつもりでワークショップを考案していたが、彼らはその気にならなくては続かないので、そのようなことはひとことも伝えずにいた」。

その後、1998年に打楽器チーム「サラマレクム！」、2003年に韓国打楽器チーム「サムルノリ・シグ！」、2009年に親指ピアノチーム「スキヤキ親指ポロリンズ」、2013年にマラカトゥチーム「トゥーマラッカ」、2014年にモザンビーク巨大人形チーム「スキヤキ巨大人形隊」と、長期型ワークショップを経ていくつもの市民楽団が誕生することとなる。結果的に今のスタイルが確立されたのであって、長期型ワークショップをはじめた当初は、市民音楽団体の育成がスキヤキの活動の目玉になるとは主催者側も想像もしていなかったことだった。

以下では、マラカトゥチームの「トゥーマラッカ」及び筆者も参加したそのワークショップについて記述する。

## 5-2. マラカトゥチーム「トゥーマラッカ」

マラカトゥとは、ブラジル北東部ペルナンブッコ州の文化で、ジレトールと呼ばれる指揮者の合図に従い、アルファイア（大太鼓）、カイシャ（小太鼓）、アベ（ひょうたんの振りもの）、アゴゴ（2個付きのカウベル）を演奏する、パワフルなリズム音楽である。このマラカトゥを演奏するチームが、ワールドミュージック楽団「キウイとパパイヤ、マンゴーズ」の座長であり、東京都世田谷区で活動するマラカトゥチーム「BAQUEBA（バッキバ）」に参加している廣瀬拓音さんを講師に迎えたワークショップから発足した、「トゥーマラッカ」である。

<sup>89</sup> ヘリオスが設立されるまで福野で中心的に利用されていた公共ホール。

マラカトゥのワークショップを開催するきっかけとなったのは 2012 年に BAQUEBA がスキヤキのパレードに初参加したことである。トゥーマラッカの代表を務める小山晃弘さんは、「当時パレードの誘導係をしていたとき、BAQUEBA の旗を持ちながら赤ちゃんを抱っこしているメンバーの女性を気遣って『旗を持ちましょうか?』ときいたら『赤ちゃんを抱っこして』と言われた。そんなバッキバの牧歌的な暖かさや楽しさに魅了された。こんなチームがスキヤキで誕生したら音楽の楽しさをたくさんの人に伝えることができるなと確信した瞬間でもある」と語った。

小山さんは 1995 年のスティールドラムのワークショップから参加し続けていて、ワークショップから誕生したいくつもの市民各段の代表を歴任している。その実績もあり、実行委員会のメンバーもその考えに共感し、その翌年にマラカトゥのワークショップを開催し、トゥーマラッカが誕生した。

トゥーマラッカの主な活動は、ヘリオス内のスタジオ M で週に 1 回行われる練習と、年間を通しての様々なイベント参加である。2015 年には、はじめて福野夜高祭からもオファーを受け、前夜祭に参加した。メンバーは 20~50 代の社会人が中心で、現在約 40 人が所属している。トゥーマラッカのメンバーは、友達を新しく練習に誘ってきたり、時には偶然居合わせた人を誘ったりと、初心者歓迎で自由に和気あいあいと活動している。

### 5-3. 2015 年度ワークショップ (マラカトゥワークショップ)

2015 年のマラカトゥワークショップは初心者向け、子供向け、トゥーマラッカ向けの 3 種類が行われた。はじめに行われたのが、マラカトゥのビギナー向けワークショップである。6 月 20 日から 8 月 1 日まで、毎週土曜の 19 時~21 時に全 6 回の日程で開催された。ここでは、トゥーマラッカのメンバーが講師となり、公募して集まった初心者にマラカトゥの基礎を教えた。このワークショップ参加者はスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド 2 日目に行われるパレードに出演することを目標とする。また、トゥーマラッカのメンバーとして、引き続き行われる廣瀬さんを講師として迎えたワークショップへの参加と、オープニングステージへの出演を目指す初めのステップとすることを目標とする。ビギナー向けワークショップの受講者は 7 人だった。受講の理由を尋ねると、「ワークショップの新聞記事を見て面白そうだった」「毎年スキヤキを見に来ていた」「音楽の趣味・面白い趣味を

持ちたい」「友人に誘われた」等様々な答えが返ってきた。

受講者たちは、はじめにアルファイアを叩く手法を学び、その後 6 回の日程の中で基本となるリズムパターンやアベやアゴゴの演奏法等を順に学んでいった (写真 9)。



写真 9. アルファイアを叩く手法を教える様子

次に子供向けワークショップについてである。廣瀬さんが講師となり、小学4年生から高校生を対象に、8月12日から8月20日まで、15、16日を除いた7日間の18時～19時に行われた。オープニングステージと、パレードへの出演を目指しながら、マラカトゥの楽しさを学ぶ。このワークショップへの参加者は小学生5人だった。先生から演奏を教わる一生懸命な姿が見られた(写真10)。また、見に来ているお母さん方や小さな兄弟も参加し、全員でマラカトゥを楽しんでいた。

受講者の女の子は「学校からもらったチラシをみてやろうと思った。参加して楽しかった。マラカトゥは初めて知った」と話す。またある受講者の母親は、「学校からチラシを配られ、音楽が好きな息子にやってみるかきいたところ、やりたいと言ったので参加した。私は一度スキヤキを見に来たことはあるが、目の前で演奏を見たり、マラカトゥを体験したりは初めての経験。私も本格的にはじめてみたくなった」と話した。



写真 10. (左) 子ども向けワークショップの様子

写真 11. (右) トゥーマラッカとスキヤキ巨大人形隊のパレード合同練習の様子

三つ目に、廣瀬さんが講師の、トゥーマラッカのメンバーが受講するワークショップである。8月8日から8月20日まで、15、16日を除いた全11回、毎晩19時半～21時半に開催された。

ワークショップ初日の8月8日は、フローラルパークで行われた「ゆかた DE ダンス」というイベントの出演オファーがあり、廣瀬さんも参加してのステージとなった。その後すぐにヘリオスのスタジオMで一回目のワークショップがはじまった。はじめに廣瀬さんから、今年のワークショップの目標とコンセプトの説明があった。

このワークショップの目標は大きくわけて三つある。一つ目は、よりレベルアップしたパレードをすることである。今までトゥーマラッカはユニゾン演奏(全員で同じリズムを同時に叩く演奏法)のみをしてきたが、アルファイアのパートを3つにわけ、アンサンブルの重厚化を図る。また、演奏のバリエーションも増やす。二つ目は、マラカトゥとバリ島の音楽のケチャと日本の応援団の演奏法を組み合わせた創作演目にチャレンジすること

である。これはトゥーマラッカが今後独自の発展を遂げるためのきっかけづくりにする意味で取り組む。三つ目は歌を歌うことである。ブラジルの歌を歌うことで、南北アメリカ大陸独自のリズムの特徴を感じる練習になるという。

ワークショップ全日程で、パレードの練習と創作演目の練習を中心に指導が行われた。パレードの練習では、全員が同じノリを感じることを意識することが特に指導されていた。国が違えば音楽のノリも違う。日本人がもっていないノリを全員で感じるために、全員でステップを踏みながらの演奏練習をすべてのワークショップの日を通して繰り返し行った。ワークショップの日程が終盤に差し掛かると、パレードとともに練り歩くスキヤキ巨大人形隊のメンバーとの合同練習を行い、本番に向けて息を揃えていった（写真 11）。

また創作演目の練習では、はじめにケチャの演奏法を練習した。このワークショップで行うケチャは、まず全員で円になって座って体を左右に揺らしながら、決められた 1 人がテンポにあわせて「ナーン」と言い続けるところからはじまる。その後他の人たちが 5 つのパートにわかれて「チャッ」と発声する。それに慣れると、廣瀬さんが作曲した楽曲の練習にはいった。楽曲の途中で自由に応援の言葉を叫ぶところがあり、参加者それぞれが学生時代の部活動でどんな応援をしていたかを話し合っ、どんな言葉を叫んだら楽しいパフォーマンスになるかを考え、受講者みんなで楽曲を作り上げていった。

またこの演目でのケチャの「ナーン」と「チャッ」という発声は、富山弁で否定の意味で用いられる「なーん」と会話中語尾につけられる「～ちゃ」に似ていることから、演目を発表する前に「なーん」と「～ちゃ」を多用した富山弁の漫談を披露することが提案され、インドネシア出身のトゥーマラッカのメンバーの女性 2 名がその役を託された。彼女たちは慣れない富山弁を一生懸命練習していた。

ワークショップ最終日、全日程を終えたあと、本番にむけて代表の小山さんは「僕たちの役割は『音の楽しさを伝えること』。失敗してもいいから、まずは自分たちが楽しもう」と語りかけた。また講師の廣瀬さんは「スキヤキのテーマは『音楽を通じた交流』。オープンな気持ちで臨みましょう」と語り、翌日の本番への士気を高めた。

#### 5-4. ワークショップ参加者の声

トゥーマラッカのメンバーに、2015 年のワークショップやスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを終えての感想、トゥーマラッカの活動についての思いをきいた。

まずは、トゥーマラッカに参加している友人の誘いで 2015 年に初めてワークショップに参加した女性の感想である。「全くブラジル音楽は知らずに参加したので、自分に操れるものなのだろうか？ と最初は戸惑った。しかしワークショップやトゥーマラッカとしてのスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの出演はとても楽しかった。一度この楽しさを体験してしまうとお客さんでは物足りないだろうし、もし来年富山を離れることになったとしても 7・8 月は富山に帰ってきて参加したい」。

続いて、マラカトゥのワークショップは初参加で、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが

大好きで何年も前から毎年訪れているという女性の感想である。「出演者として出たほうが、出ない年よりも密度がとても濃かった。トゥーマラッカはスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの市民楽団のなかで目立った存在になっている。目立てて楽しかったけど、スキヤキとしては、もっとたくさん新しいチームができれば楽しいなと思った。また、遠くからワークショップに来られる人もいたのが驚いた」。

また、2014年から2年続けてワークショップに参加した女性は、「見ているよりもやるほうが楽しいから参加した。今回のワークショップで取り組んだケチャも見ているのと実際にやるのでは印象が違った。また、手作りした揃いの衣装を身につけての演奏というのも楽しいところ」と話した。

ここで共通しているのは、「客として参加するよりも出演者として参加する方が楽しい」という思いである。スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの醍醐味は誰でも深く参加できることなのである。もちろん観客としても楽しめるが、たくさんの人とともに演奏し、交流し、フェスティバルを作る立場になれることがスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの魅力なのであろう。

また代表の小山さんはトゥーマラッカの今後について「夢は大きく、100人の集団にしたい。また今はまだまだ素人集団なので、アーティスト的な集団になるように。色々なお祭りでよさこいが踊っているように、トゥーマラッカも色々なお祭りに出られたら良いと思う。富山県の公式応援団を狙います！」と語った。今後トゥーマラッカはスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドや南砺市にとどまらない、大きな楽団となって活躍の場を広げていこう。

## 6. スタッフの声

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを企画・運営するスタッフの方々にその思いをきいた。まずはヘリオス事務局で働く西頭美緒さんの語りである。西頭さんは2005年からボランティア・スタッフとして毎年スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに参加し、ヘリオスが指定管理に切り替わった2015年からヘリオスの事務局に勤めている方である。

西頭さんは、自身がスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに参加する理由について「もともとのきっかけは2004年にヘリオスにインターンシップに来たこと。インターンシップのときはあまりスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを楽しむことができなかったが、でも周りはずごく楽しそうだったので、来年は私も楽しみたい！と思い、翌年からも参加した。2005年から2014年はボランティア・スタッフとしてランナー班で活動した。2011年くらいからはスキヤキ実行委員会に入り、広報担当やランナー班の班長をしていた。楽しいからという理由が一番だが、うまくできなかった、悔しい、もっとよくしたい、という気持ちが毎年あるから今までずっと続けてきている」と話した。

また、2015年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドについて「今年ヘリオスが指定管理に

なるタイミングで、事務局側の人間になった。今まで近くでがんばってきたが、仕事を事務局の方に頼んで、『できたよ』といわれるまでに、事務局はどのような仕事をしているのか、実際は全然知らなかったことがわかった。今年初めての事務局の仕事で、無事に終わってよかったと思っている。また、スキヤキのボランティア・スタッフたちはすごいなと改めて感じた」と語った。

副実行委員長兼パレード班長の橋爪さんは、「スタッフの仕事はとても大変だが、自己満足で自分が楽しむというより、出演者とお客さんに楽しかったといわれるのが目的であり、やりがいでもある。福野小学校のスティールドラムクラブ「気分はカリビアン」や地元の中学校の子たちはスキヤキ・パレードを楽しみにその活動を頑張っている子も多いそうだ。スキヤキ・パレードに参加して、福野に生まれてよかったと思ってもらえたらいいと思う」と話した。

そして 2015 年のスキヤキ・パレードを終えて、「スキヤキ・パレードでは出演者約 600 名に高校生が担当するフラッグ持ちや交通整理員、警察などのスタッフを合わせて約 650 名が会場にいる。この人数を少人数のパレード班員で仕切って、集合してからパレードが始まるまでの 30 分以内に動かし、スムーズにパレードを進めなくてはいけない。この緊張感はものすごいものだ。無事に終わって良かった」と話した。

次にフローラル班の副班長の北野祥吾さんの話である。北野さんは小学生 5 年生のときに初めて子供向けの韓国打楽器のワークショップに参加し、それ以来韓国打楽器の市民楽団「サラムレクム！」に参加したり、2010 年くらいからフローラル班のスタッフとしても活動したりしている方である。2015 年にはじめてフローラル班の副班長としてスキヤキ実行委員になった。

北野さんはスタッフをする理由について「スタッフをしてみようと思ったのはアーティストともっと交流してみたいと思ったから。ワークショップに参加しているだけだと、オープニングステージの演奏が終わってからは一般のお客さんと同様になってしまう。ワークショップの講師のアーティストとは交流できたがそれ以外のアーティストとは接する機会がなく、スタッフとして参加すれば自分からアーティストに近寄って行って交流ができると思った。スタッフを続けるモチベーションは、単純だがスキヤキというお祭りが好きだということ。福野という小さい町、全国でも知名度の低い富山県のなかでもさらにマイナーともいえる町で、各国の代表の有名なアーティストが一堂に会して 3 日間音楽をやり続けるというのは本当にすごい事だと思う。そういうところが大好き。また、音楽を通してその国の他の文化も吸収することができる。音楽にはその国の文化が色濃くでている。韓国打楽器を演奏していたら韓国の神聖な雰囲気を感じられる。言葉がなくても異文化にふれることができるのが楽しい。初めてワークショップに参加した小学 5 年のときに『なんでこんな楽しい事を知らなかったんだ！』と思った」と語った。

またフローラル班の副班長をした 2015 年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに関して「ステージ上の楽器の運搬や配置は班長がやってくれて、自分は会場の警備やゴミの管理など



をメインにやっていた。人に指示を出すことになれていなくて思うように仕事が出来なかったり、無駄な動きばかりして注意されたりしてとても難しかった。今回初めて実行委員会としてプロジェクト会議に参加して、ゼロから今年のスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが作られていく過程を見たので、その分思い入れは今までより違った」と語った。

最後にスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員長の橋本さんの話である。橋本さんは自身がスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに参加し続ける理由について、「以前から日本一になりたいという思いがある。日本一になる過程では様々な苦労があるはず。日本一を目指すことで、日本一になったひとにしかわからない苦労や努力が見えてくるのじゃないかと思っている。今は自分自身ではなく、スキヤキを日本一にしたいという思いが強い。今はまだまだ認めてもらっていないし、まだまだ認知度も低い。なにをもってして日本一というかは難しいところだが、とにかくスキヤキを日本一に導いていきたいと思う」と語った。

また、「何百年も続く古い伝統が日本にはたくさんあるが、それも誰かが作りあげて続けてきたものである。その誰かになりたい。時代とともにそれは変化していくのは当然で、むしろどんどん変化するべきだと思うが、福野に伝わる音楽文化のもととなるのがスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドであれたらいいなと思う。それが私たちの言う音楽文化の創造。文化事業は人づくりである。人が育って、文化をつくる。なので、人を育てて、文化を作って、それが地域に根差して、南砺市が元気になる、そういうことをしたいと思っている」と、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドに対する思いを語ってくれた。

## 7. まとめ・考察

ここまで、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドでの市民の活躍に焦点を当てて調査を進めてきた。福野の文化事業として始まったこのフェスティバルは、有志で集まったボランティア・スタッフたちが中心となり企画・運営を行っていた。またその内容も、市民がアーティストから直接演奏の指導を受けることができるワークショップ、市民楽団の育成、その市民楽団や地元の人々のフェスティバルへの出演など、まさに「市民参加型」といえるフェスティバルであった。

現在日本で行われている多くの音楽フェスティバルは、業者によって営利目的で行われている商業主義のもの、あるいは自治体が主体となって実施されているものが大半となっている。しかしスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの一番の目的は「新しい文化の創造」であり、市民によって市民のためにつくられる、市民主体の音楽フェスティバルである。話を伺ったスタッフの方々はそれぞれ「スキヤキをより良くしたい」「福野の子ども達に楽しんでもらいたい」「海外のアーティストともっと交流したい」など、スタッフをするにあたり様々な思いを持っていた。誰かから命令されるのではなく、それぞれのスタッフが意志を持ってフェスティバルを作りあげるからこそ、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドは福野の新しい文化の1つとして成長を続けているのである。また、その市民が中心となっ

るところが南砺市民のみならず富山県内の人々や全国の人々を惹きつけ、その事業が拡大し続けているのである。

調査を進めるなかでスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドの「新しい文化の創造」という面で重要になっていると筆者が思ったのは、会期前のワークショップとそこから育つ市民楽団の存在である。新しい文化を生み出すには、まず外から新しいものを取り入れることが必要だ。そのため、時間をかけて異文化をじっくり学ぶことができる長期型ワークショップは、外の文化を取り入れるには非常に良い方法である。そして学んだものから新しい文化を生み出すのは市民楽団の人々である。マラカトゥの市民楽団「トゥーマラッカ」のメンバーの方々は、夏の活動の打ち上げで、今後トゥーマラッカの演奏に何を取り入れていきたいか、新しくどんなことをしたいか、どんな団体にしていきたいかなどを熱心に語り合っていた。ワークショップで異文化を学び、新しい楽曲に取り組み、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドで披露したのは彼らにとってほんの通過点である。マラカトゥにケチャや応援の要素を取り入れたり、ケチャの発音と富山弁をつなげて考えたりしたワークショップでの経験を踏まえ、福野に古くから根付いた文化や、他の異文化をさらに取り入れながら、トゥーマラッカは新たな福野の音楽文化を作り上げていくだろう。

また筆者自身がワークショップに参加してみて印象に残ったのは、生き生きとしたワークショップ参加者の姿である。実際参加する前は、仕事終わりに毎日集まっていた練習はメンバーにとって大変なものではないかと思っていた。しかし、来た人から楽器を手に取り、マラカトゥのリズムが自然発生的にはじまる様子や、ワークショップ中、皆で汗をかきながらより良い演奏を目指す様子からは、ワークショップを心から楽しんでいること、真剣に取り組んでいるということが伝わってきた。まるで学校の部活動のようなこの時間が、ワークショップ参加者たちのモチベーションにつながり、長期型ワークショップや市民楽団の育成がスキヤキの活動の目玉となって続いているのだろうと思った。

会期中、オープニングステージを見ているお客さんに話を伺った。そのなかに、近所から小さな子供をつれて見に来た女性がいた。その女性は「特に目当てのアーティストはいないけれど、近所だから、音楽をききにきた」と話してくれた。他にもスキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドを見に来た理由を「近所からなんとなく」と話した観客は多かった。特定のアーティストを目当てにした音楽ファンだけではなく、近隣住民がなんとなくコンサートを見に来るとするのは、スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールドが新たな福野の文化として確かに根付きだしている証拠といえるのではないかと。

スタッフ、出演者、観客のすべてに市民が関わる音楽フェスティバル「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド」は、福野の人々にとってより身近な文化となって今後も発展していくだろう。

## 謝辞

本調査を進めるにあたり、関わって下さったすべての皆様に御礼申し上げます。快く調査を受け入れて下さったスキヤキ実行委員会の皆様、ヘリオス事務局の皆様、お話を聞かせて下さった皆様、本当にありがとうございました。

また、トゥーマラッカの皆様には大変お世話になりました。大変貴重な体験をさせて頂き、円滑に調査を進めることができました。私自身にとっても忘れられない夏の思い出となりました。本当にありがとうございました。そして今後ともよろしくお願い致します。

## 参考文献

龍村あや子 1988年 『アフリカの音楽』『音と映像による世界民族音楽大系 II』 平凡社

スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員会資料 『日本が誇るワールドミュージック・フェスティバル！スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド』

## 第 2 部 井波の調査報告

## 井波彫刻の伝統の現状と継承

河西 朋子

### はじめに

信仰と木彫りの里と呼ばれるように井波彫刻は井波の町に深くかかわっている。初めて井波を訪れたとき、多くの木彫刻の工房が軒を連ねていること、また道のあちこちに木彫りの看板や置物などの木彫刻にあふれていることに目を引かれた。井波彫刻は井波の町を代表する伝統工芸であることや、そこには長い歴史と伝統があることを知り、井波彫刻にかかわる職人の方に話を聞いてみたいと思った。そこで私は井波彫刻について調査することに決めた。

調査では伝統工芸士として彫刻をしている職人や井波彫刻協同組合の職員の方を中心に井波彫刻について聞き取りを行った。彫刻の需要低迷により職人の数が減少しているなど、井波彫刻は昔のほうが発達だったという話をいくつも聞いた。そこで、変わりつつある井波彫刻の伝統とは何か、また今後の井波彫刻の継承について職人の思いなどを中心にまとめていきたい。



写真 1. 三日町通りの家の表札



写真 2. 交通広場に置いてある猫の彫刻

## 1. 井波彫刻の概要

井波彫刻の歴史について、『井波町史上巻』（井波町史編纂委員会、1970年）、『井波彫刻協同組合公式ホームページ』を参考に以下述べていく。

井波彫刻は、欄間・獅子頭・天神様などの伝統工芸品を生み出し、彫刻産業で全国最大規模の伝統工芸である。その井波彫刻には230年余の歴史があるといわれる。まず、井波は明徳元（1390）年本願寺五代綽如上人がその地に瑞泉寺を建立したことに始まり、以来、井波は瑞泉寺の門前町として栄えてきた。瑞泉寺は幾度か焼失し、その都度再建された。その火災で焼失した瑞泉寺再建のおり、本堂彫刻のために、本願寺より派遣された前川三四郎から彫刻の技法を習ったのが井波彫刻の始まりといわれている。このとき技法を習ったのは、井波の地元にもとから住んでいた大工たちであり、特に番匠屋九代七左衛門が有名である。井波の彫刻は専業ではなく、大工との兼業で行われていたのであるが、その大工たちが技術を受け継いで進化させ、今日の井波彫刻の基礎を築いた。堂塔建築の大工はノミで渦を彫るが、それはそのまま荒彫りの彫刻にも通じていたようである。寛政4（1792）年の瑞泉寺勅使門菊野門扉、両脇に彫刻した「獅子の子落とし」は、番匠屋七左衛門の代表作で、狩野派風の図柄で浮き彫りの技法が駆使され、日本彫刻史上の傑作とされている。以後、その門流が江戸時代末期頃まで主に寺社仏閣彫刻などの技法を競っていた。

明治時代に入ってから寺院欄間に工夫をこらして、新しい住宅用の井波欄間の形態が整えられた。昭和に入ってから寺社仏閣の彫刻は活発で、東本願寺・東京築地本願寺・日光東照宮など全国各地の寺社・仏閣の彫刻が数多く手がけたが、それと並行して一般住宅欄間・獅子頭・置物などにも力が注がれた。こうして、名工らの子孫によって受け継がれてきた「井波彫刻」は時代のながれとともに豪華さを誇った寺社彫刻から民家の室内彫刻へと移り変わっていった。なかでも住宅欄間は一時期主力となっていた。

昭和22（1947）年には井波彫刻協同組合が結成され、昭和50（1975）年には通産大臣より伝統工芸品の指定を受けた。そして現在では伝統工芸だけでなく、日展などへの作家活動も盛んである。

過去250年ほどにわたって培われてきた技術の集積がいま、伝統となって欄間をはじめ獅子頭・天神様・衝立・パネルなどにうかがえる。現在、井波の町には300名近く彫刻師が居住し、通りには彫刻工房が軒を連ね、槌音を響かせている。

## 2. 井波彫刻の伝統工芸士

井波には日展や中央・地方展にも出品せずに、ただひたすら伝統ある彫法を守り続ける彫刻士がいる。彼らは井波彫刻の伝統である寺社彫刻のほか、住宅欄間・天神様に技能を発揮している。

『伝統工芸士とは』（井波彫刻伝統工芸士会パンフレット）によると、伝統工芸士のこと

が以下のように説明されている。伝統的工芸品は、その主要工程が手づくりで、高度の伝統的技術によるものであるため、その習得には長い年月が必要とされる。しかし生活様式の変化に伴って、伝統的工芸品の需要が低迷していることから、後継者の確保育成が難しいことが、業界全体の大きな課題となっている。この課題に対処するため、伝統的工芸品産業振興協会では「若者にやりがいと目標を与える制度」の一環として、経済産業大臣指定伝統的工芸品及び工芸用具又は工芸材料の製造に従事する者を対象に「伝統工芸士認定試験」を実施した。合格した者を「伝統工芸士」として認定し、その社会的地位を高めることにより、後継者対策・伝統的工芸品の質的向上に励むことを期待している。同時に、優れた伝統的技術・技法を伝える指導者としての役割を果たし、産地復興にも役立つことも期待されている。

一般的な伝統工芸士になるための応募資格は、12年の職人歴があることが目安であるが、井波彫刻の伝統工芸士として認定されるには、井波の地で彫刻の技術を身につけ井波の彫刻組合に入り、20年以上の職人歴が必要である。

写真3の伝統マークを使った伝統証紙が貼られている井波彫刻は、経済産業大臣指定の伝統的工芸品である。お話をうかがった中には、井波彫刻はお客からの需要で成り立っているため、伝統工芸士という称号がお客に宣伝やアピールになるという声がかかれた。そのため外から見える位置にこのマークを置いてある工房も少なくない。また、観光客が欲しいがるような手軽なお土産品とは違って、井波彫刻は大量生産のできない、一品生産であり、たとえ同じようなデザインの欄間だとしても寸法を変えたり、一度図案を書きなおしたりしてつくるため同じ形の作品はない。一品一品、伝統工芸士であるというプライドを持って一生懸命つくっているため、手軽なお土産品のようなものにはつくりたくないという人の声も聞くことができた。井波彫刻の伝統工芸士という称号にみな、誇りとプライドをもっておられるように感じた。

井波には現在29名の伝統工芸士がいるが、私はこの伝統工芸士を中心に聞き取り調査を行った。その結果を以下でまとめていく。

### 3. 職人の道具

井波の彫刻師はみな、とても多くのノミをもっている。道具について、井波の地で40年彫刻刀などの道具の注文・販売を行っている店主の方から話をうかがった。井波の彫刻師は、研いでもいなければ柄もついていない状態の刃物を購入して、自分で研いで使用している。柄の材料も自分で調達して自分で調節し、グリップの部分などを自分の好みに合わせてつくる場合がほとんどである。刃には多くの種類があることに加え、同じ刃であって



写真3. 伝統のマーク

も研ぎ方を変えることにより使い道がずいぶん違ってくるようで、結局何本もの彫刻刀を使い分け、大量のノミを所有することになるという。たとえば、写真 2 のように、同じ形の刃でも、その刃の内側がくぼんでいるか、外側がくぼんでいるかによってそれぞれ、内丸、外丸と区別される。また、同じ 4 分 (12 ミリ) というサイズの刃でも、7 種類の刃の深さ (極々浅丸、極浅丸、中浅丸、浅丸、中深丸、深丸、極深丸) × 2 種類 (内丸、外丸) × 2 種類 (仕上げノミ、たたきノミ) で、合計すると 28 種類になる。仕上げノミとは仕上げの段階で使う主に削る細かい作業をするノミで、たたきノミとは、トンカチを使ってたたきながら荒彫りをするときに主に使うノミである。サイズは 3 厘から 1 寸 5 分まで 19 個あり、それぞれのサイズに 28 種類ずつあるため、すべてをそろえている人はそういないが、それでもとても多くの数になることがわかった。



写真 4. 内丸 (左) と外丸 (右) のノミ



写真 5. 匠雲堂に店先にあるノミの一部



写真 6. ある職人のノミの引き出しのうちの一段



写真 7. 作業中の机の上

私のような素人からしたら少しくらいの刃の違いなど彫る上で変わらないのではないかと思われるが、「実際に職人としてやってみると違うものなのだよ」と言われ、職人のすごさを感じた。また、同じ一本のノミでも使い続けると刃の長さが短くなってしまっていて、新しくすることもあるようで、何十年もやっている人は同じ種類の刃物を何本かもっていることもあるそうだ。つくる作品や、その時々によって使うノミを使い分けており、普段はたたきノミと仕上げノミで分けたりなど、職人がわかりやすい分け方で分けて保管



している。さらに、全国的に通る名前のほかに、井波の職人に特徴的な道具の呼び方があるらしい。例をあげると、三角ノミを「ヤハズ」と呼んだり、小道具の内丸ノミを「ウスマル」と呼ぶ。弟子になって最初に行う仕事は自分の道具をつくることだという。その中でも小道具ノミと呼ばれる仕上げノミを初めにつくることが多いという。

一つの作品に対して使う道具の数や、もっている道具の数は職人によって人それぞれ違うらしいが、200本近くのノミを所有しているそうだ。ベテランになるにつれて所有するノミの数が増えていくそうで、作品をつくるときにもっているノミの中から使うものを選び出して使い分けている。

#### 4. 弟子の生活

井波彫刻には井波彫刻協同組合があり、弟子入りと同時に組合に入る。5年を基本の年季として弟子入りする。同時に後述する井波木彫刻工芸高等職業訓練校（以下、訓練校）に入学し、親方の工房だけでは学べない技術や知識などを身につける。かつては弟子は親方のもとに住み込んで働き、寝食を共に過ごす。親方の身の回りの手伝いをしながら親方からの仕事を手伝い、仕上げ作業などの作品を彫る作業を親方などに指導してもらいながら行っていた。一日の中できちんと時間が決められきびきびと行動し、夜の自由時間に自らの意志で技術の向上のために、弟子同士でもお互いに研究や指導などを行っていた。今では弟子の数が少ないが、昔は弟子をとる金銭的余裕があったため、一人の親方に何人も弟子がいることも少なくなく、多い人で合計42人の弟子をとった人もいたという。また、昔は弟子の年季が5年であったが、5年たったあとももう少し親方の仕事を手伝うという、「お礼奉公」という制度がしばしばみられた。

次は、ある職人の弟子時代の一日の例である。この生活を親方がいるとき毎日ずっと行っていたそうだ（表1）。

表1. ある職人の弟子時代の一日

時間	活動
5時	起床 親方の机、書斎、トイレ、玄関等すべての掃除
7時20分ころ	朝食
7時30分ころ	仕事場にて用意をし、今日どこまでやるかなど予定の確認
8時～	作業（親方からの仕事や作品の仕上げなど）
12時～	昼食
13時～	作業（午前と同じく作業）
17時30分	作業終了 掃除
18時	夕食
～21時	技術や作品などの研究・勉強 作業がある場合は21時以降もしてもよい

自らの弟子時代を振り返りながら、「これくらいしないと5年たって、独立してから役に立たない。今の弟子は雇用されているという意識が強いので、18時まで仕事をしたら自由だし、朝もそんなに早くない。一緒に住まない人も多い。自分たちの時代とだいぶ変わってきている。だけど、弟子の時間をどう使うかがとても大切。独立してから勉強するのは生活もあるし、なかなか難しくて時間がとれない。独立してから後悔することも多くあると思うから、弟子の間の時期にいかに勉強に時間を割くかが大事だな」と話してくださった。ほかにも80代の職人の方からも、自分も5年で独立して職人と言えるようにはなったが、実際に一人前になったと感じるまで、さらに10年ほどもかかったという話を聞いた。また、日々勉強であり、どのくらい若いときに頑張るかが大事だと語られ、自分が職人として人に見られても大丈夫だと腕に一番自信があったのは60代のころだなおっしゃるほど、勉強することがたくさんあるとおっしゃっていた。

## 5. 職人の語りから見る井波彫刻

次に、伝統工芸士の前田孝太郎さん（昭和6年生まれ、南砺市旧城端町出身、元井波彫刻協同組合理事、84歳、職人歴60年以上）による、井波彫刻が変わってきているという語りを紹介する。

前田さんは、父の前田太次郎氏に師事した。職人の父の影響で彫刻に興味をもち、17、18歳のころに弟子入りしたそうだ。このころはとても忙しく、多いときは一度に2、300件の注文があり、毎日夜の12時くらいまで仕事をしていた。「昔は本当に欄間の注文もたくさんあり忙しかったが、今では時代も変わってしまって、注文もないし、天神様などは副業的にやっていたのにだんだん本職になってきてしまった。今では注文も少なく、20時ころまで仕事をするような必要もない。これからの若い職人は職人として生活していくのがなかなか厳しいと思う。お客さんからの需要が減少しているから。自分たちの世代が井波彫刻として一番いい時期を過ごしたのだと思う。これからは厳しいな」という話を繰り返しておられた。そして、時代は変わったなと何度も口にされた。また、継承問題について親方世代も「弟子を入れたほうがいいと思うけれど、お金のことを考えるとなかなか簡単にできない。ただ、伝統を守っていくためには弟子がいなくなるのも困るし問題である」と語られた。お客からの注文の減少が井波彫刻の売り上げにも影響しており、弟子をとるのが金銭的に厳しいという継承問題にまでつながっていることがわかった。

もうひとつ、井波彫刻でつくられている作品にも、時代の変化があらわれている。井波彫刻の伝統的作品といえば、欄間・獅子頭・天神様などの寺社仏閣が代表であった。ところが、最近では日展に出されている作品のほかに、ギターや動物を彫った作品、置物などの、今までつくられてきたものとは違った作品が多くみられるようになった。私は井波彫刻の伝統は欄間や獅子頭などを作ることだと思っていたので、伝統が変わってきているのではないかと感じていた。だが、伝統工芸士の中でも日展作品をつくれる方もいたり、

現代の住宅や生活に調和したデザインのパネルや置物などをつくられる方もたくさんいたので、私は何が伝統であるのか、井波彫刻では伝統がきちんと守られて、継承されているのだろうかという疑問に感じた。そこで、職人の方たちに作品が変化してきていることについてどのように思っているのかについて聞いてみた。

## 6. 井波彫刻の伝統とは

伝統工芸士のひとり、藤崎秀胤（しゅういん）さん（50代）に尋ねてみた。彼は父の秀一さんに弟子入りし、今では弟子も抱えている職人である。彼の父である秀一さんは欄間の最盛期の時代の職人であったため、仕事があふれていた。だが、秀胤さんは「高校を卒業して親の元で働き始めた頃から、『今まで欄間でやってきたのは俺の時代だ。お前はお前でこれからの時代はどうかかわらんから自分の道を歩んでいかんとならん』と言われた。少しショックを受けたけど、その言葉は身に染みて自分のやりたいことをやろうと思った。欄間は井波彫刻の代表的な作品なんだけど、僕は仏像に興味があったからそっちに行こうと思って、苦勞も多かったけど今ではそれで良かった気がする。ノミで彫ることが井波彫刻の伝統的な技術。伝統というものは技術の継承であるからつくる作品が変わることは自然なことであると思う。むしろ今の時代はグローバルに情報も交換できる時代だから、新しい技術を取り入れることも次の伝統に繋がるのではないかなと思ってやっている。昔と同じスタイルのものを彫っていたらつまらんし、売れんし、先が暗くなるよ。だから俺が彫るとる仏像も昔からと同じようなもんじゃなかないかといわれることもあるんだけど、自分は海外の人たちと関わって、そういう作家の人たちのいいところを自分の作品に取り入れて自分なりのスタイルにして仏像を作っていければ、それは新しくて、自分の中では同じものを行っているようでも、違うものをつくっていると思う。ずっと昔のままだと廃れる一方だから伝統と新しいものの両立が大事だと思う」と語ってくださった。

秀胤さんの弟子の森田綾乃さん（20代）も、「井波彫刻の伝統は何かと考えてみると、やっぱり…技術なのかなと思ったことはあります。それは、以前行われた木彫刻キャンプで気付いたんですけど…。組合の職人で約2週間で大きな龍を仕上げるということをやったときに、ひとつの図案があって、組合の職人全員参加だったので約120人ほどの職人が携わって日替わりで作業をして仕上げていくんです。能力の差こそあれ、一つの図案を見て日替わりでも最後まで仕上げることができる、図案の読み取りであるとか、このように彫るとこのように見せることができるなどといったベースとしての見せ方の共通認識が井波彫刻の技術としてあり、弟子の時代に勉強するので、120人ほどの職人が携わってもある一定のクオリティーのものを仕上げることができる。そういうところが井波の技術が受け継がれているということになるのかな」と語ってくださり、大変おもしろい話だと感じた。

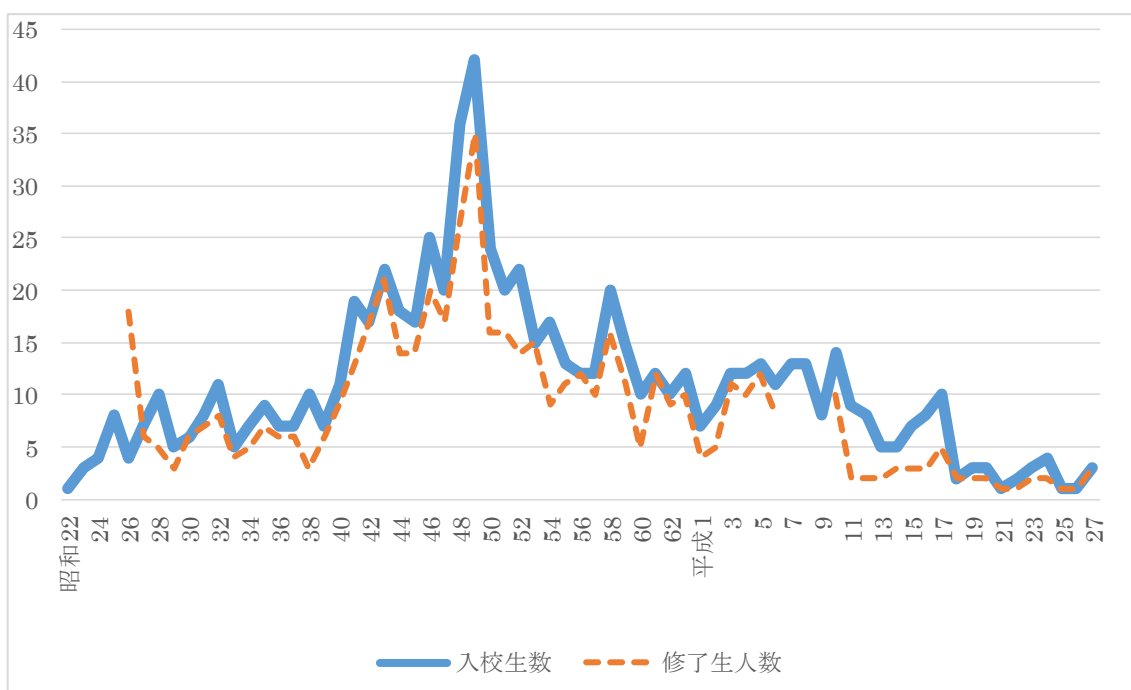
他にもさまざまな職人の方に話をきいてみたが、みな井波彫刻における伝統とは技術のことであるため、作る作品が変化していることは問題ではなく、むしろこれからの時代に

あったものをつくる必要があるということを述べておられた。また、日本に彫刻の産地は大阪を含めいくつかあるけれども、技術的にはどこにも負けないという井波彫刻への誇りとプライドがあると話してくださる方がたくさんいた。つまり、井波彫刻における伝統とは作られる作品のことではなく、技術であるということがわかった。そしてそれには、井波彫刻組合が訓練校を運営し、組合全体として弟子を育てていることが大きいことも理解できた。伝統を継承していくためにはその伝統を守っていく後継者が必要であることから、以下では後継者問題に目を向ける。

## 7. 井波彫刻の後継者問題

先ほど述べたように、井波の伝統的技術を継承させるためには弟子をとり、その弟子たちが技術を身につけて、また次の世代につないでいくことが必要不可欠である。しかし、今では弟子をとりたい気持ちはあっても、金銭的余裕がないため弟子をとることができないと語る職人が多く、弟子の数が少なくなっているのが現状である。弟子は、親方に弟子入りし井波彫刻組合に入ると同時に、訓練校にも入学することになっている。だが、入学したからといって必ずしも卒業して独立できるとは限らない。甘い世界ではないため、中には途中でやめてしまう人もいる。図1は、訓練校の毎年の入校生数と入校年度の修了生人数である。

図1. 訓練校の入校生数と入校年度の修了生人数



平成27年4月現在調べ（井波彫刻協同組合の資料より作成）

この表を見ると、昭和 40~50 年代の井波彫刻最盛期に入校生が多く、毎年 20 人前後の入校生がいた。最も入校生が多かった年は、1 年で 42 人もの入校生がいた。その後は入校生は減って、この 10 年は毎年 5 名以下となっており、現在の弟子は全部で 9 人しかいない。また、昔は井波町や周辺の南砺市出身の人が多かったのに対して、最近では県外から井波の地にやってくる人が多くなっている。県外から来た人は独立した後に地元に戻ってしまう人も多くいるので、井波に残って井波彫刻を担っていく人がどのくらいいるのかということも気がかりである。

弟子の数が少なくなってきた原因としてあげられることの大きな原因としては、先ほどから述べている、彫刻の需要の低下による金銭的な面が大きいと、組合の職員や職人の方は語る。「青年部はみんな自分の生活で金銭的にいっぱいいっぱい、弟子の面倒を見れないのでほとんど弟子をとっていない」、「本当はもっと弟子を増やして育てていかないといけないが、生活するのに大変なのでとれる余裕がない」、「弟子入りしたいという人は井波に毎年来るし、弟子としてとってあげたいのはやまやまだが、なかなか面倒を見られる人がいない」、「弟子をとることは金銭的にきついが、いなくなると伝統がつなげないという問題を自覚はしている」などの声がきかれた。

井波彫刻の全盛期といわれる時代を過ごしてきた職人の方々から、これから職人として生活していくのはなかなか大変と言われている井波彫刻であるが、伝統を絶やしたくないという気持ちは誰もがもっておられる。井波彫刻の伝統をつなぎ、井波彫刻がこれからも続いていくために、どのようにしていかなければならないのか、考える必要があると思う。このあと、組合として弟子を育てている訓練校について記し、ついで、井波彫刻を担っていくことになるであろう弟子や、20 代の若い職人の方の意識や考えをまとめていきたい。

## 8. 井波木彫刻工芸高等職業訓練校

訓練校の歴史について『井波木彫刻工芸高等職業訓練校創立 50 周年記念誌』（長谷川総一郎著）を参考に以下に述べていく。

訓練校の運営母体は井波木彫刻共同彫刻組合である。昭和 22（1947）年に、訓練を目的とした制度として、彫刻組合のもとで集合養成<sup>90</sup>の訓練校が始まったとされている。

訓練校は昭和 22（1947）年に設立されたと述べたが、新聞などには戦前から勉強会のようなものがあつたと記されていた。大正 5~6 年から昭和初期に生まれた彫刻師によると、昭和 5（1930）年から 15（1940）年ころまで、毎月 14 日の夜に図案講習会が行われていたことがわかった。年季中の門下生が出席し、講師は富山県工業試験場から派遣されていた。教習内容はほとんど鉛筆写生が多く、欄間のモチーフには花や鳥の羽などが取り上げ

---

<sup>90</sup>集合養成とは、事業主が各事業所の労働過程において労働者に実技を取得させるという、今日言う企業内教育（OJT）の形をとりながら、定期的に事業組合など傘下の労働者を集めて共通の関連学科を教えること。

られた。門下生が各工房で習う内容は彫りやノミ研ぎに関することが主であり、絵に関する経験があっても工房に伝わる絵の図面を毛筆で写すという手法がとられることが多かった。このため門下生にとって講習会で実物を観察して鉛筆で写生するという教習は新鮮であり、大変効果的で勉強になったという。図案講習会という名の定期的な出張指導は戦前で終了し、戦後の昭和 22（1947）年に再開されたが、その伝統が今日の訓練校の集合教習（訓練）の授業として 70 年間連綿と受け継がれている。そこには 2つの系統がみられ、ひとつは図案や美術系であり、他は戦後の養成所で始まった木工系である。前者は今日いうデッサン、基礎デッサンであり、木工系を含めて井波彫刻の工房内の訓練システムでは習得しがたい教習内容であった。

ただし、訓練校における授業内容も時代により変化がみられた。昭和 33（1958）年までは門下生のすべてが中学卒であったので、昭和 48（1973）年まで高校定時制と連携しながら普通教科を取り入れて高校に近い課程を図るため、体育、社会、英語、数学など一般普通教科が取り入れられた時代があった。次第に模写の授業が増え、毛筆や墨絵も加わり、獅子頭や天神様が授業に導入されるなど伝統色のある教習内容が取り入れられた。ほかにもカリキュラムが改定されていき、絵画や彫刻、木工芸、製図に加え、デザインに堂塔大工などの知識を教える工芸概論や、同じく仏像についてや彫刻を総合的にとらえる彫刻概論、木材理学や室内計画論、書道などといった科目も行われていた。

現在の訓練校の授業内容は、写生、木彫刻、塑像だけである。井波彫刻をするために必要な、描く、彫る、造るということに凝縮して教えている。写生Ⅰは鉛筆デッサン（素描）、植物写生（模写）、毛筆（筆づかい）。写生Ⅱはデッサン。塑像ⅠとⅡは前半後半での分かれ方。この授業のほかに、入校式、いなみ国際木彫刻キャンプ、スケッチ旅行、訓練校展、進級・卒業試験、修了式などを行う。時間は基本的に金曜日午後 1 時～5 時であり、5 年生まで設けられている。



写真 8. 井波彫刻工芸高等職業訓練校



写真 9. 先生からアドバイスを受けている様子

美大を卒業してから井波彫刻の世界に入ってくる人は多いが、「美大では芸術やアイデアを重視している面があり、それと比べ井波彫刻は職人の世界という感じで技術を学んでいるという意識が強い」という話や「工房での仕事で技術を身に着けているのがほとんどだが、彫刻の基礎の基礎は訓練校で学んだ」という話をしてくださった方もいる。井波彫刻の職人のすべてが通ったことのある訓練校なので、共通の基礎を学ぶことができる場所という木彫刻の意識がある。

私は10月9日（金）に一度、訓練校の授業風景を見学させていただいた。この日は「木彫刻」の授業を行っていた。訓練校は2階建てであり、1階には事務室や工作室、彫塑室、機械室、木材置場などがある。工作室ではこのとき、名古屋城の欄間の復元作業を組合の職人の方たちが交代で行っていた。2階には第一教室、第二教室、デッサン室、図書室、塗装室があったがほとんど使われておらず、第一教室が訓練生の修業場所になっていた。

学年ごとに作る作品が違い、この日は1年生が雲、3年生がパネル、4、5年生が立体の作品を彫っていた。まわりの人と相談をしたり、先生にこういう風に彫ったらいいよというアドバイスをうけながら個人で彫っていた。



写真 10. 授業中の風景

授業を通してつくった作品を、1~3年生は市展に、4、5年生は県展にだす。去年は2つ賞をもらった。写真11は、森田綾乃さんが去年賞をとった作品である。



写真 11. 森田綾乃さんの作品



写真 12. 進級課題の作品（牡丹の花）

また、技術を向上させるために3年生から進級・卒業試験がある。8時から17時までの間にパネルを仕上げるというものである。毎年題材が変わり、去年の3年生の課題は牡丹の花で、5年生は菊の花であり、作品を拝見させていただいた。訓練校の指導をする職人方で採点を行い、100点中60点以上で合格。本来は不合格だったら留年になるが、今は人が少ないから追試にしているとうかがった。

作品を並べて見ると、同じ図案を用いているはずなのに彫り方などによって作品の様子が違いがでることがわかりとてもおもしろく感じた(写真13)。実際に作品を並べて見ると、同じ図案の作品であるが、素人の私でも違いを感じて見ることができた。彫る深さや、彫る方向や、ひとつの花の細かい部分など少しずつ細かいところを見るととくに違いが分かった。全体で見ても、繊細さを感じられたり、雄大さを感じたり違いを感じた。その人が弟子入りしている工房によって作品のちがいがあったりする。訓練校ではそうした一つの工房のやり方だけでなく、それ以外のやり方を教えてあげて一つの工房だけでなく組合全体で5年かけて独立に向けて修業させるのが訓練校の役割であると職員の方は述べられた。



写真13. ある年の進級試験の作品の3つが並べてある様子

ほかにも生徒たちが描いたデッサンや写生の作品を見せていただいた。こうした授業や試験でつくったものは訓練校に保管してあるものが多いそうだ。模写では筆の使い方を勉強する。色の濃淡や一本ですっと長い線の描き方などを学ぶ。将来職人になったときにお客との注文のやり取りの時に、和紙にデザインを描いてこのような感じでよいかと見せるために必要な技術であるらしい。初めは難しく苦戦するが、上達するとだんだんと細かい部分までうまく描けるようになるそうだ。

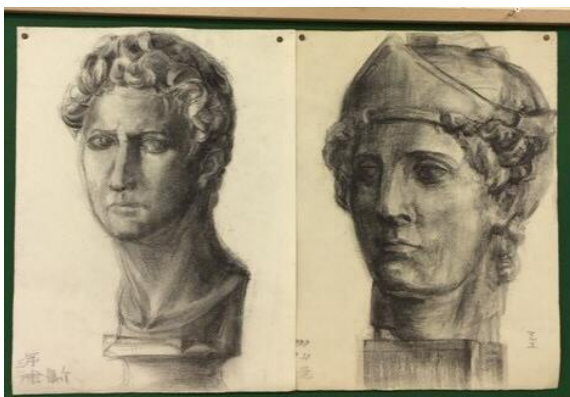


写真14. 第一教室にある生徒の描いたデッサン



こうして育てられた若い職人は今後の井波彫刻についてどう考え、どのようにしていこうと考えているのだろうか。弟子や20代の若い職人の方に考えや気持ちを聞き、まとめていこうと思う。

## 9. 若い職人の方の語り

まずは弟子の森田綾乃さんにお話をきいた。森田綾乃さん（27歳、静岡県沼津市出身、5年目）は、藤崎秀胤さんに師事している。美大に通い絵画の版画の勉強をしていたところに、15～20年くらい前に井波彫刻を勉強してから地元に帰って来たという、彫刻の職人の方と知り合い、その方から井波彫刻のことを聞いて興味をもった。それがきっかけとなり、井波彫刻を勉強しようと、大学を卒業してから22歳で井波に来たそうである。現在、藤崎さんの工房では9割は仏像をつくっておられるので、森田さんは小さい仏像の顔を彫っておられる。また、年間5体から7体ほど天神様もつくっており、その際は親方のつくられたものの仕上げを行っている。

親方である藤崎さんは伝統工芸士だが、森田さんにも井波の伝統工芸士を目指したり、井波彫刻を担っていったりする気持ちがあるのか、今後のことについて尋ねてみたところ、森田さんは「純粋に井波彫刻の技術を学びたくて井波の地に来た。伝統工芸士というものも来た時には知らなくて、なるためには20年井波でやらなければいけない。今後はここに残るかもしれないし、地元の静岡に帰るかもしれないし未定である。特に伝統工芸士にこだわってはいないし、本当に技術がすばらしく、学べるものがたくさんなので今はそれだけを考えてやっています」と語られた。

また、さまざまな60, 70, 80代の職人の方に話をきいた際、「今の若い職人は職人として生活していくのも苦しいだろうし、これからの井波彫刻はなかなか厳しいのではないかな」ということを言われたが、そのことについて実際にどのように感じているのかについても聞いてみた。森田さんは私の予想とは違い、「私はそこまで暗くは思っていなかった」と述べられた。親方の藤崎さんも、「彼女はまだ若いから昔のことをあまり知らないからね。確かに昔と比べたら変化もしてきて昔の人からしたら苦しいかもしれないけど、神社とかがある限り必要な寺社仏閣などは残っていくし、新しいものを受け入れてこれからのニーズに合った作品づくりを明るい気持ちでやっていかなきゃいけないね」と加えて述べていただいた。

渡邊文矢さん（29歳、岩手県出身、8年目）は、二代目井口琇月さんに師事している。彼は、京都の伝統工芸専門学校に通い、そこで彫刻をやっていた。卒業後に2年ほど独立していたが、まだまだだと思ひ、もう少し学びたいと思って井波彫刻に出会い、22歳で井波を訪れた。親方は伝統工芸士であるが、彼はそれを目指しているわけではない。井波彫刻の技術を学びに来たのであって、井波に残って井波彫刻を継いでいく気はない。京都の方にまた戻って活動できたらいいなと思っているし、最終的には地元に帰りたいと考えて

おり、もともとそういう風に決めて来た。あと一年か二年で出ようと考えているそうだ。ただ、「井波彫刻がどうであるというのはそこまで意識してはいないが、井波彫刻自体はやはり素晴らしいものだなとやっていると。これだけ人が集まって彫刻屋がいっぱいあってやっているのはなかなかない。環境もとても整っている」と述べられた。

井波彫刻の今後について、「大変なのはどこの伝統産業も同じ。これから伝統的なものをいかに今の時代に合わせて何をつくっていけるかということが課題であって、これからのことはやっぱりこれからの人で考えていかなければならない。多くの方が言うように、今のままやっていったらたぶんなくなってしまうだろう。残る気がないのに偉そうだけど、だからこそ客観的に見ると、変えていくということが必要だと思う。昔からあるものをまるっきり変えていく必要はない。その昔からあるものを今の形にあったものに少し変化させていくのがいいのかなと。それを若い人たちは考えてやっていかないといけないね」と、渡邊さんは考えを話してくださった。

また、職人の方だけでなく、八日町通りを下ったところにある匠雲堂という彫刻刀などの道具を売っておられるお店の方からもお話をうかがった。このお店は今年の7月20日に40周年を迎え、日本全国だけでなく、中国や台湾などからも注文が来るらしいが、彫刻と言えば井波が中心であると思って井波に店を置いている。また、毎年新しく入門してくる人が多く道具を買いに来ているお店でもあり、井波彫刻に詳しい方であった。

この方は井波彫刻の伝統について「伝統というものは変化していつているものなので、本当に必要がなくなれば消滅するかもしれないけれど、少なくとも必要なものは残っていくものである。だから、残る方向を模索しながらみんなやっている。昔つくっていた欄間などは少なくなってきているが、寺社の欄間の修復というものは引き続きやっていくし、技術という伝統が続いていくから、それを守っていくべき。その技術が続いていくことが伝統だと考えると、弟子が絶えず必要になってくる。昔のように仕事がどんどん入ってきている状況ではないので、一人の弟子をとると多額のお金がかかるのに加え、井波の職人は弟子が修行が終わったあとも自立してやっていけるところまで面倒をみようとする責任感がある。なので、そのようなことを考えるとなかなか難しいのが現状だが、弟子をつなげていくことが伝統をつなげることという自覚はあるので、みななんとかしたいという気持ちはもっている」と、語った。若い職人の方だけでなく、井波彫刻に昔からかかわる方も、これからの井波彫刻がただ暗くなっていくだけでなく、なんとかしていきたいという気持ちを持っていることを感じた。

最後に、井野辰弥さん（27歳、南砺市福野町出身、6年目、半分お礼奉公中、澤香斧さんに師事）にお話をきいた。彼は、最近職人の多くが県外出身者になってきている中で、地元出身者である。もともとのづくりをすることが好きであり、県外の美大に行っていたが、地元で工芸的なものをやりたくて井波彫刻をしようと思い、地元に戻ってきたそうだ。22歳で井波彫刻に入って来た。弟子時代に工房を移動するということはほとんどないことなのだが、ほかに珍しく井野さんは別の工房から澤さんの工房に移って来た。職人歴

は6年なので、もう独立できる年ではあるが、今の工房に移ってきてまだ4年目なので、半分お礼奉公のようなものだが、もう少しよくなかなと思っていると語ってくださった。澤さんの工房では、親方の澤さんがすべての図案を描いているが、けっこう仕事を任せてくれる親方なので、井野さんは親方がときどき確認をしながらも最初から最後まで仕事をやらせてもらえることがあるらしい。

今後井野さん自身がどのように活動していこうと思っているか尋ねたところ、「最終的には井波で基盤を作って活動をできたらいいなと思っている。最近地元出身でやっている人が少なくなっているから…。もしかしたらラストサムライになるかもしれないけど」と井波彫刻に残ろうとしている人が少なくなっている現実を話しながら、「自分が井波彫刻の伝統を受け継いでいこうと思っている気持ちはある。伝統工芸士を目指すかどうかはまだまだ先のことなのでわからないが、一応1つの目標としてはある」と井波彫刻を自分が担っていくということと、井波の地で活動をしていくという気持ちを素直に語ってくださった。若い職人の方にお話をきいてきたが、このような意思を話してくださった方がなかなかいなかった分、井野さんの語りに井波彫刻の伝統は続いていくのだという安心のようなものを感じた。

また、今後の井波彫刻が暗いのではないのかと思われることも多いと思うが、どう思っているかということに話が広がった。彼は「暗いかどうかというのは考え方しだいな気がする」と悩むことなく答えてくださった。「例えば、今の時代には、昔にはあまり普及していなかったインターネットだとかSNSだとか新しいものがある。なくなっているものもあるかもしれないけれども、新しいものもどんどんできてきているので、それをうまく活かせるかどうかということじゃないかなと思う。楽観的過ぎるかもしれないが、考え次第でなんとでもなるんじゃないのかな。あとは、どうやって今の時代になじんでいくかということを考える必要があると思う」と話し、冷静に将来のことを考えながら決して悲観的になることなく井波彫刻について考えている様子であった。

さらに、井波彫刻の伝統とは何であるかという話についてもきいたところ、「伝統というものは技術が続いていくことをいう」という前提のもとに「時代が変われば彫るものも変わっていくだろうし、つくる作品が変化していくことは必然的なことだと思う。でも、昔から続くものでいいものもあるから変わってはいけないものもあるわけで、そうしたものを大事にしつつ今の時代になじませていくのがこの先の正当な行き方なのではないかなと思う。何でもありということになったらただの作家になってしまうので、大事なものは残していくことが大事。やっぱり寺社仏閣などについてはお寺さんもあるし、そうした部分は残していけると思うし、残していくことが大事。残すものは残しつつ、新しいものを模索していく必要がある」と井波彫刻の伝統が守られて続いていくために、井波彫刻がどのようにしていかなくてはいけないのかを考えておられた。また、「井波の技術はやっぱり途絶えてほしくない。井波の彫刻の需要というものと弟子を増やすということとは少なからず関係はあるので、伝統のためにも、井波彫刻の需要がもっと増加するためにも、お客さ

んのニーズに合うものをつくっていけるようになりたい」と話してくださった。

このように今後井波彫刻を担うという意識をもって職人として日々努力している若い職人の方もいることを知り、とてもうれしくなった。同時に多くの職人の方が井波彫刻の先を暗いと悲観的になるのではなく、今後どのようにして行くべきなのか考えていたり行動をしていたりしていることもわかり、明るい気持ちをもちつつ伝統が継承されよりよくなっていくことを期待したいと感じた。

## 10. まとめと考察

井波彫刻は 230 年以上続く伝統工芸であるが、長い歴史の中で形を変えながら続いてきた。欄間や天神様を中心に作ってきた井波彫刻が、最近では欄間はあまり作られず、置物やパネルなど作られる作品も変わっていることが多い。需要の低下に加え、職人の数も減っており、これからの井波彫刻は暗いのではないかと不安視する声もたびたび聞かれた。また私は、作られる作品が変化しているということが、伝統が正しく継承されていないということを意味するのではないかという懸念を抱いていた。

だが、調査をしてさまざまな人から話をきいていく中で、伝統とは何であるかということがわかってきた。私は調査をする前に抱いていた、井波彫刻の伝統とは欄間や天神様など、昔からつくられているものを変わずにつくることにあると考えていたがそれはまちがいであった。どの方も、伝統は井波彫刻の技術にあるもので、つくられる作品が変化していくことは仕方のないことで、むしろ時代に合ったものをつくっていかねばならないと考えていた。昔から続いているもので大事に残していく大切な部分を残していきつつ、時代やお客のニーズに合ったものを模索して新しく変化をしていくことが必要であるということがわかった。また、彫刻協同組合全体で若い世代の職人を育てようとしていたり、伝統の技術を守り継承していこうとしていたりする努力がみられた。職人の数は昔に比べて減少しているかもしれないが、それでも井波彫刻の伝統を受け継いでいきたいと考えている人も多くいることもわかった。

また、現在職人として仕事をしている方や、これから職人として独立していこうと思っている若い方のなかで、井波彫刻のこれからを悲観しておられる人は少ないということ、むしろなんとかしていきたいという強い気持ちをもって生活をしていることを、調査を通じて感じられた。これからの井波彫刻について、「まだ知名度が低い。今までの販売ルートはお客さんと直でやっていて、中間業者がないことも関係して PR も少なかったから知名度も低いと思う。だからこれからインターネットや SNS などでも発信もしつつ、さまざまな技術やニーズを受け入れてそれに対応した作品作りをしなきゃいけないな」と前向きに考えつとめようとしている様子が何度もみられた。

調査を終えて感じたことは、彫刻の需要の低下や伝統の継承の希薄化に伴う課題と向き合いながら今までの良いものを維持していきつつ、今後のニーズにあうように変化や改良

をしていけば、今後も必ず井波彫刻の伝統は継承されていくのではないかということである。組合全体としても、井波彫刻の継承に向けて努力を行っているし、職人の方たちも変化を受け入れながら今後の活動について模索をしており、井波の地だけでなく、富山県にもまた全国にも井波彫刻の作品が出回っていることはまだまだ井波彫刻が伝統工芸という存在であることを示唆している。今後さらに井波彫刻を井波の名物として継承・発展させていくためには、井波彫刻の核となる伝統的な部分などはしっかり残しつつ、古い形式にとられることでなく柔軟な姿勢で取り組み、その魅力を井波の町内外の人々へ最大限に伝えていくことが重要ではないかと、私は考える。多くの職人の方が「もっと井波彫刻について知って、実際に見にきてほしい」と述べていたように、多くの人に井波彫刻の良さを知ってもらい、井波彫刻に触れる機会をもってもらえるようにアピールしていくことが大切であり、そのために組合全体としても活動していくべきであると考えている。

## 謝辞

最後に、今回の井波彫刻についての調査にご協力いただいたすべての方々に、深くお礼申し上げます。私自身本格的なフィールドワークは初めてのことで苦戦しましたが、お忙しい中にもかかわらずお時間をいただき丁寧に対応してくださり、貴重なお話を数多く聞かせていただきました。初めはあまり井波彫刻について知識がなかった私でしたが、多くの方からお話をきかせていただき、井波彫刻の素晴らしさや職人の方の素晴らしさを感じることができ、非常にいい経験になりました。今後も井波彫刻の伝統の継承と発展を期待しております。

拙い文章ですが、皆さまのおかげで無事に調査を終えることができました。お世話になった皆さま、本当にありがとうございました。

## 参考文献

- 長谷川総一郎 1999年 『井波木彫刻工芸高等職業訓練校創立 50周年記念誌』  
千秋謙治 1990年 『井波——歴史のうねり六〇〇年』 井波町開町六〇〇年記念委員会  
井波町史編纂委員会 1970年 『井波町史上巻』  
井波彫刻伝統工芸士会パンフレット 『伝統工芸士会とは』

## 参考にしたウェブサイト

「井波彫刻協同組合公式ホームページ」

(<http://inamichoukoku.com/> ; 2015年12月10日閲覧)

# 時代に合わせて変化してゆく井波彫刻

青山 千暁

## はじめに

今回調査を行った井波は私の住んでいる砺波市に地理的にとても近く、訪れる機会も多かった。そのため、井波彫刻という存在が比較的身近であった。井波は彫刻で有名だが、伝統工芸品の売り上げが落ちてきている現代に、職人の方たちはどのようにして時代の変化を乗り越えようとしているのかについて興味を持った。そこで時代に合わせて変化してゆく井波彫刻というテーマで調査しようと考えた。その中でも井波彫刻のストラップというものを店先で見つけ、とても小さなストラップの中に井波彫刻の技術が詰め込まれていることに感動した。そうしたこともあり、井波彫刻の中でも特におみやげ、というジャンルについて詳しく調査することにした。

## 1. 井波彫刻について

井波彫刻は彫刻の伝統工芸としては全国的に見ても最大規模のものである。井波彫刻協同組合に所属する組合事業者は 119 名にも及ぶ（2014 年 11 月 15 日現在）。また、他の多くの伝統工芸とは違い、一つの作品を最初から最後まで一人の職人が仕上げるため、他の伝統工芸と比べると作れる作品の自由度が高い。具体的には、伝統的な欄間から現代的な彫刻まで彫れる。これは、井波彫刻の技術が根底にあるため、井波彫刻の職人は彫刻作品ならなんでも作れるからである。一方で「木製の彫刻作品」という制約が付きまとう。彫刻作品ならなんでも作れるが、使える材料は木材に限られる。そのような制約があるため、絵画などの彫刻ではないジャンルの作品を井波彫刻家というネームバリューを利用して売る人もいる。

### 1-1. 井波彫刻の歴史<sup>91</sup>

現在の井波彫刻について説明する前に、現在に至るまでの井波彫刻の歴史を概観したい。本節では井波彫刻における制作物の変化について述べるため、主に制作物に関する歴史に注目しながら説明していく。

井波彫刻の起りは拝領地大工の兼業とされている。これは、堂塔建築の大工がノミで

---

<sup>91</sup>この項の記述は以下の文献に基づくものである。

千秋謙治 1990 『井波：歴史のうねり六〇〇年』 井波町開町六〇〇年記念委員会  
井波町史編纂委員会編 『井波町史』 井波町 1970.2-5

虹梁<sup>92</sup>の渦を彫る技術がそのまま荒彫りの彫刻にも通じるためである。井波彫刻は大工から派生分化したものであるため、大工でないものが彫刻をすることや彫刻を専業とするものはいなかった。これは寺社の彫刻以外、今日のように彫刻の範囲が広くなかった時代において彫刻専業で生きることは難しかったため、ほとんどの者が大工と彫刻家の兼業によって彫刻の技を明治まで伝えたとされる。

初期の井波彫刻は寺の欄間である唐狭間<sup>93</sup>を作っていた。この唐狭間では天国の様子を地上に再現しており、迦陵頻伽<sup>なりとうびんが</sup><sup>94</sup>などの優美な彫刻が施された。井波大工の最盛期は明治 44 (1911) 年から始まり、大正 7 (1918) 年に完成した、太子堂再建時である。しかし明治中頃になると、これまでのような職人たちの仕事がなくなり、新たな需要を求めてそれまで一般的ではなかった家庭用の欄間 (写真 1) を一般家庭に広めるようになった。この家庭用欄間では松竹梅など唐狭間とは違う現実的なものをモチーフとした。昭和になると、寺社彫刻に並行して民間からの受注が増加するようになった。その後井波彫刻は家庭用欄間を主に制作することによって明治・大正・昭和を過ごすことができた。昭和 50 (1975) 年には欄間、獅子頭 (写真 2)、天神様の置物 (写真 3) が伝統的工芸品指定を受けた。しかし、戦後の彫刻就業者は美術工芸に対する新しい感覚をやしない、科学的に訓練を受けねば新時代の工芸作家といえなくなってきた。また、現代の暮らしの中で欄間は必要とされる機会が減ってきたため、生活のためには新しい需要を構築しなければいけない時代へと変化した。



写真 1. 欄間

<sup>92</sup>社寺建築における梁（はり）の一種。虹形に上方に反り返っている。

<sup>93</sup>寺の本堂の欄間のこと。庫裡や一般家庭のものは欄間と呼び区別される。唐狭間という呼称は、井波彫刻独特のものである。

<sup>94</sup>想像上の鳥。雪山または極楽にいて、美しい声で鳴くという。上半身は美女、下半身は鳥の姿をしている。その美声を仏の声の形容とする。



写真 2. 獅子頭



写真 3. 天神様

## 1-2. 現在の井波彫刻

現在では、井波の街中で見かけることができる木彫り看板や表札、壁掛けレリーフなどが制作されている。仏閣彫刻よりも民需に主力を向け、一般家庭向けに欄間以外に衝立、置物、屏風、パネルなどを制作している。特に壁掛けレリーフ（写真 4）は井波彫刻に近代性を加え、古い伝統の美を損なうことなく一段と水準を高く引き上げたとされている。全国的に見ても伝統工芸の売り

上げが落ちている現在では井波彫刻もまた、苦境に立たされている。かつての若い彫刻家たちは日展へ出品し、名を高めたがった。つまり、作家としての道を見つけたのである。内国勸業博覧会への出品に始まり、井波彫刻は多くの博覧会へ出品している。その結果、井波の工芸が国際的評価



写真 4. 壁掛けレリーフ作品

を受けることになった。今なお、多くの展示会が存在するにも関わらず、多くの彫刻家が日展へ出品したがるのには、日展への出展によって自身の技術力を日展出展作家という肩書によって知らしめることができるからなのかもしれない。その一方で、日展へ出品せずに在野展<sup>95</sup>などに出品する彫刻家も少数ではあるが存在する。

<sup>95</sup>民間で行われる展示会。



### 1-3. パブリックアートとしての井波彫刻

日本では、一般的な木彫刻作品は屋内で作業し、床の間や座敷などの屋内展示が主な使用用途であるが、ハンガリーでは木彫刻を屋外で彫る。また、その作品を屋外展示することに中欧の人々はなんら躊躇をもたない。この屋外の木彫刻の設置は他の国々でも確認されている。

井波では平成3（1991）年の第一回いなみ国際木彫刻キャンプの完成作品設置以降、急激に木彫刻の野外設置が定着している。しかし、これらの木彫刻の野外設置に際しては北陸の気候が最大のネックとなる。高温多湿や雪解けの季節まで残る根雪は木にはなじまない。木が腐ることの対策として、腐りにくい木材を選択する、頭に小さい銅葺き小屋根をつける、作品を地面から持ち上げる、定期的に防腐剤を塗布するなどが行われている。



写真5.（左）と写真6.（右）屋根が取り付けられている井波交通広場の彫刻と屋外に展示される彫刻作品（彫刻作品の方には防腐剤も塗られている）

## 2. 伝統工芸が抱える問題

多くの伝統工芸と同じように、井波彫刻もいくつかの問題を抱えている。この節では井波彫刻の職人や、井波彫刻に携わる人たちが抱える問題点についてまとめる。また、そのような問題を解決するためのアイデアや、伝統工芸としての技術を変えることなく、現代社会の中で生き残るための工夫もまとめていく。

### 2-1. 現代生活の中での伝統工芸

ホームセンターに行けばそれなりの質のものが安価で買える現代、伝統工芸は実生活に必要とされていない。これまでは受注されたものを作れば安泰だったが、今では作ったものが売れるかどうか分からない。そのような状況下では弟子も取れず、弟子も先の見えな

い状況に焦りを感じてやめてしまうのかもしれない。一方で普段の生活では味わえない、ハングリーな世界にあこがれを感じて、若い人たちは職人の世界へ弟子入りしてくることもある。井波彫刻では、昔は受注生産では需要量に追いつかないため、一般的な図柄の欄間をあらかじめ作っておく「はんこもん」と呼ばれる作り置きをしていたが、今は作り置きをしても売れるかわからない作り置きはない。そのため、商品は受注生産となっている。サンプルは無いのかと聞かれることもあるが、その場合は写真で我慢してもらっている。欄間の彫刻は昔からあるモチーフに職人のアレンジを加えることもあるが、新しいモチーフは作っても売れないため、昔ながらのモチーフがメインとなっている。

今まで井波彫刻を支えてきた欄間などの伝統工芸品の売り上げが落ちてきた現代では、上記にもある通り、壁掛けレリーフや木彫り看板、表札などの新たな需要の開拓や、キーホルダーや置物などのおみやげ品という低価格の商品を制作するなど、時代のニーズにあった作品作りが求められている。しかし、一万円以下の低価格の商品では利益がほとんど出ず、彫刻作品を作る際に出た端材のリサイクルという側面が強い。そのため、注文がない時には20万円から50万円程度で比較的良好に売れる天神様の置物を彫るといった人が多い。

## 2-2. 伝統的工芸品

井波彫刻としての歴史は100年ほどと、歴史が必ずしも長いわけではなく、伝統的なものという意識があまりない人もいる。そのような意識を持つ職人は、伝統的なものだけではなく色々なものを作れる。しかし、新しいジャンルの彫刻作品を作ってもネームバリューがなければ使ってもらえない。そこで、茶道具という井波彫刻では例を見ないジャンルを開拓した青山三郎さんに聞き取りを行った。聞き取りの中で、井波彫刻というのは伝統工芸品として認知されているが、前述したように、井波彫刻の歴史自体が他の伝統工芸品と比較すると歴史が短いため、まだ本当の伝統工芸品ではなく、伝統的工芸品であると思っている、と述べられていた。また、伝統工芸品と名乗れるような歴史が井波彫刻にはないという思いが、伝統的という文字にこめられていると思われる。しかし、伝統工芸品になると、作れるものも決まりきったものだけになってしまうため、むしろ新しいジャンルを開拓できる伝統的工芸品もよいのではないだろうか。

青山さんによると、彫刻の入った茶道具は珍しくおもしろいものとして使ってもらえるが、正統な道具ではないため、格式の高い場では使われない。しかし、それ以外の場では珍しいものとして使ってもらえる。また、道具の見せ合いの際に制作者にネームバリューがなければ紹介できないため、ネームバリューは大切であると述べられた。珍しい彫刻の入った茶道具として認識されてはいるが、格式の高い場では使ってもらえないことから、新しい分野への需要の開拓は、容易でないことがわかる。

なお、この伝統工芸としての意識は彫刻家によって様々であり、井波彫刻では伝統意識が強い彫刻家が比較的少ないように感じられるが、その一方で伝統工芸品以外一切作らないという職人も存在する。

### 2-3. 付加価値としての伝統工芸

井波彫刻は素材ではなく、付加価値をつける伝統工芸である。井波彫刻とは異なる、素材としての伝統工芸の例に印伝があげられる。印伝とは印伝皮の略称であり、羊や鹿の皮をなめしたものである。つまり、印伝皮を使ったものであれば、伝統工芸品の印伝として売ることができ、作れる作品の自由度が高い。そのことによって、幅広い商品のラインナップを展開できる。財布やバッグから名刺入れ、スマホケース、キーホルダーのように多くの種類の商品が売られている。

しかし、井波彫刻は木材を職人が彫刻しなければならず、井波彫刻として売り出せるものは彫刻作品だけに限られる。そのため、大量生産によるおみやげ品は作れない。これは、井波彫刻が素材ではなく付加価値をつける伝統工芸であるため、1つのものを仕上げるのに2~3日かけなければならず、販売価格が高くなりがちだからである。他にも、後述するように職人がおみやげのような大量生産品を作りたいがらないということもある。しかし一方で、大量生産に向かない、一つ一つが職人の手作りの品であることは、井波彫刻ならではの強みにもなりうる。

## 3. 観光と井波彫刻

井波には井波彫刻の他に瑞泉寺や八日町通りといった観光資源がある。八日町通りには人通りも多く、通りに面する工房も数多く存在する。また、後述する伝統工芸では珍しい井波彫刻の販売方式から、井波彫刻と観光は密接に関連していると思われる。今回の調査では、実際に井波観光に訪れた人や、八日町通りに店を構えている人たちへの聞き取り調査を通じて、観光という視点から見た、井波彫刻について述べていく。

### 3-1. 井波と観光

井波を訪れる観光バスを県内、県外別に集計すると（表1）、大型、中型バスともに県外からやってきたバスのほうが入り込み台数が多い。しかし、自家用車になると、平成25年の8月の例外を除くと県内からの入り込み台数が多くなっている。このことから、井波はバスを用いるようなツアーでは県内からの観光客はあまりいないことがわかる。だが自家用車で訪れる観光客は県内の人が多く、次の項目で述べるように何回か井波を訪れている、リピーターや近場の人が多いことが分かる。

表1. 年度・月別来訪者数

年度別入り込み台数・入り込み数

	年度	大型バス			中型バス			バス計	自家用車(レンタカー含む)			外国人		総入り込み数
		県内	県外	小計	県内	県外	小計		県内	県外	合計	IB	個人	
4月	24年						83							
	25年	10	37	47	3	19	22	69	454	368	822	4	16	4327
	26年	10	44	54	2	16	18	72	513	394	907	3	32	4718
5月	24年						144							
	25年	15	45	60	12	40	52	112	1927	736	2663	1	9	10584
	26年	8	72	80	8	34	42	122	2011	783	2794	4	26	11543
6月	24年						192							
	25年	11	71	82	11	50	61	143	446	353	799	0	25	5772
	26年	14	76	90	11	49	60	150	448	331	779	0	5	5942
7月	24年						129							
	25年	6	90	96	6	35	41	137	1146	373	1519	1	0	8067
	26年	7	66	73	13	28	41	114	919	290	1209	0	2	6434
8月	24年						57							
	25年	4	28	32	3	14	17	49	377	459	836	3	3	3771
	26年	5	20	25	3	12	15	40	486	397	883	1	0	3639
9月	24年						186							
	25年	16	96	112	7	30	37	149	2568	397	2965	3	13	12868
	26年	6	83	89	9	19	28	117	3135	295	3430	0	0	13380
10月	24年						240							
	25年	24	100	124	11	57	68	192	1537	519	2056	3	19	11002
	26年	19	89	108	14	48	62	170	519	436	955	0	10	7045
11月	24年						189							
	25年	11	112	123	14	52	66	189	504	408	912	3	2	7508
	26年	2	123	125	14	45	59	186	518	328	846	2	8	7241
12月	24年						75							
	25年	4	59	63	0	12	12	75	207	70	277	0	3	2904
	26年	1	51	52	3	6	9	61	176	42	218	0	8	2357
1月	24年						47							
	25年	2	35	37	3	7	10	47	202	98	300	2	0	2220
	26年	3	28	31	0	3	3	34	225	72	297	0	0	1868
2月	24年						77							
	25年	8	49	57	2	18	20	77	282	102	384	3	0	3252
	26年	2	67	69	4	9	13	82	298	99	397	0	8	3464
3月	24年						74							
	25年	1	46	47	1	26	27	74	405	193	598	2	3	3672
	26年	1	60	61	2	10	12	73	508	225	733	2	6	4245
年間数	24年						1313							
	25年	112	768	880	73	360	433	1313	10055	4076	14131	25	83	75947
	26年	78	779	857	83	279	362	1219	9756	3692	13448	12	105	71874

外国人(個人)及び総入り込み数の単位は人数で記載  
 クラツネなど旅行会社がJR又はAIRで入り込み、県内のバスを利用した場合は県内の台数で計上

(南砺市観光協会井波支部より)

### 3-2. 観光客から見た井波彫刻

観光と井波彫刻について述べる前に観光客は井波についてどのようなことを知っているか、思っているかを述べておく。まず、何を目的に観光に来たかと尋ねると、瑞泉寺観光が目的と答える人が大多数だった。瑞泉寺を見学し、そのあとに八日町通りや道の駅井波、併設された彫刻会館を訪ねるといった人が多かった。このことから、井波彫刻自体を目当てに井波を訪れる人は少ないことがわかる。また、観光のメインとなる瑞泉寺に関してもあまり知名度がなく、高岡の瑞龍寺と混じってしまう、という声もあった。厳しい意見として、連休にも関わらず通りが閑散としており、道の駅にも魅力があまり感じられないとい

う声もあった。

次に井波について知っていることも尋ねたが、下調べが無ければ何も知らず、調べた結果、木彫りが有名であること、田舎まんじゅうがみやげとして人気ということがようやくわかったというように観光客への認知度もあまり高くないように思われた。

一方で以前も井波を訪れたことがあり、今回再び瑞泉寺の観光に新潟県から訪れたという観光客もいた。井波では職人の方が作業している姿を見られるのが良く、日本の音風景100選にも載っている、木を彫っている音がとても好きだという声もあった。

しかし、おみやげという観点で井波の観光を見ると、瑞泉寺や町並みを見るだけの人が多く、おみやげを買っている人は少なかった。また、おみやげを買っていてもお菓子ばかりで彫刻を買っている人の姿は見られなかった。

### 3-3. 行政から見た八日町通り

行政は井波の観光の要である、八日町通りをどのように捉えているのか、行政センター長の川原忠史さんにお話しを伺った。彫刻家が八日町通りに多いが、観光をメインにしているため八日町通りに集めたのかと尋ねたところ、おみやげ屋にも声をかけていたが、彫刻家が宣伝のために入ってきたということだった。八日町通りには希望してやって来た彫刻家が集まっているため、職人の中でも比較的客と話すことが苦ではない人たちが通りに集まっている。

井波彫刻の経済効果について、井波の経済の活性化のために井波彫刻の売り上げは増えてほしいが、井波彫刻というブランドの高い水準は保ってほしい、と述べていた。これは昭和5～60年ごろ、台湾欄間などの廉価品が井波に大量に入ってきた結果、品質の低い彫刻が出回った。このことからブランドとしての井波彫刻を保ちたいという思いにつながったと思われる。

最後に井波彫刻のおみやげについてどう思うかを尋ねた。井波に長く住んでいる人の視点で、井波彫刻のおみやげ品をよく見ていないため詳しくは分からないが、大量生産のどこにでもあるおみやげと本場ものである井波彫刻のおみやげ品は別のものであると思っている、と述べてられていた。

### 3-4. おみやげとしての井波彫刻

井波彫刻協同組合で聞き取りを行ったところ、3万円以下のものをおみやげとしていると伺った。ただ、この基準は便宜的な暗黙のものであり、おみやげ品の明確な基準はないとのことである。井波彫刻は上記にもあるように、素材ではなく付加価値をつける伝統工芸であるため、一つのを仕上げるのに時間がかかる。そのため、他の伝統工芸のように大量生産によるおみやげ品は作れない。おみやげ品の制作を依頼しようとする、大量に用意するようになってしまうため職人に依頼しても断られてしまう。よって、結果的に少数の限定販売となってしまう。

また職人にとっても、おみやげ品は小さな仕事とみられており、メインの仕事とはならない。おみやげ品の仕事を受けておみやげ品ばかり作っていると大きな仕事がこなくなってしまうため、大きな仕事をメインとし、おみやげ品は手が空いた時間に片手間に作る職人が多い。社寺の仕事をメインとしている澤さんは一個仕事を受注すると半年から2年ほどの仕事になるため、空き時間がない。また、空き時間があってもおみやげは作らないと述べていた。おみやげ品を売るためには飾るためのスペースが必要だが、そのようなスペースはないためである。また、おみやげ品のような大量に作らなければいけないものを作りたくないとも述べていた。おみやげ品は作っても売れるか分からず、小銭にしかならないという理由もある。

次に、実際におみやげを売っている、井波木彫工芸館と木彫樹楽の2店で聞き取りを行った。八日町通りには他に、田舎まんじゅうを売っている店やよいとこ井波というまちの駅といったおみやげ品店がある。

### 3-5. 木彫樹楽におけるおみやげ品

木彫樹楽は井波彫刻の職人が4人で運営している彫刻、木彫りおみやげ屋である。(写真7、8) メインとして売っているものは彫刻である。元々は彫刻作品のみを取り扱っていたが、観光客に気軽に入ってもらうためにおみやげ品を置くようになり、店に置いてある彫刻と木彫りおみやげ品は4人の職人が作ったものと他の職人に依頼したものがある。また、少量ではあるが、既製のおみやげ品も置かれている。これは、高山の土産物屋から商品を置いてほしいと頼まれたため置いており、売り上げは家賃の足しにしていると述べていた。



写真7. 木彫樹楽の商品（商品の値札に製作者の名前も入っている）



写真 8. 木彫樹楽の店内の様子

中央右に店番をしている職人の作業スペースがあり、店を訪れた客と会話するシーンが見られた。また左のショーケースの奥にも作業スペースがある。店舗入り口近くにはおみやげのような比較的安価な商品が陳列されており、店内奥に行くにつれて高額な彫刻作品が多くなっていく。

木彫樹楽は井波彫刻の職人たちが運営している店で、聞き取りの際には店番だった藤井満さんに、木彫りおみやげ品を作ることにどう思うかを尋ねてみた。まず、おみやげは彫刻とは違い「これを作ろう」として作ったものではなく、おみやげを作るのは“遊び”、“気分転換”であり、仕事としてはとらえていない。また、おみやげは価格のわりに手間がかかるため採算は取れないし、大量生産が必要で企業のようなものであるという。このように、おみやげ品に関しては藤井さんに限らず消極的な意見が多かった。次に、なぜそのような採算が取れないものを置いているのか尋ねたところ、おみやげは宣伝のためのものでこうしたものも彫れるというアピールのために置いている、とのことだった。最後に、木彫りおみやげ品について、職人としての立場からどう思うかを尋ねたところ、「井波彫刻において、おみやげの分野の拡大は望んでいない。職人がおみやげを作ることに個人は自由だと思う。しかし、井波彫刻としての技術低下は避けなければならない。自分自身はおみやげを作ることに自体には抵抗は感じない。あくまで息抜きにすぎない。」と述べられた。木彫樹楽は八日町通りに面しており、観光客の人通りが多く、他の店舗と比較すると立ち寄って商品を眺めていく観光客は多かった。しかし、商品を購入する人の姿は私がある間には、見られなかった。

### 3-6. 井波木彫工芸会館におけるおみやげ品

次に井波木彫工芸会館で聞き取りを行った。こちらも彫刻とおみやげを置いているが、やはり彫刻をメインとしている。店に置いてある商品のうち、おみやげは主に仕入れ、彫刻は職人が作ったものである。つまり、木彫刻工芸会館においてあるおみやげ品は木彫樹楽のような木彫りのおみやげ品ではなく、大量生産による既製品のものである。

35～6年前までは観光客が少なく、特に1～2月の冬はまったくと言っていいほどいなかったが、現在は一年中通して観光客が来ている。これは、NHKの旅番組や映画、テレビドラマによる彫刻の宣伝による影響であり、以前は瑞泉寺が観光目的の人ばかりだったがこれらの影響で井波彫刻が観光の目的という人が増えた。群馬から井波彫刻を買いにやってきた客もいたとのことである。また、八尾や高岡の瑞龍寺周辺はイベントがあるときのみにぎわっているが、井波はイベントがなくても観光客が訪れる。しかし、観光客が増えてもおみやげは売れず、バスが何十台と来てもおみやげを買う人はごくわずかである。また、おみやげ業は経済の影響が遅れてやってくるため、バブル前は彫刻もよく売れたがバブル以降は売れなくなった。

次に、職人がおみやげを作ることに关してどう思うかを尋ねてみた。井波木彫工芸館では、ご主人と息子さんが職人、奥さんが店番という形をとっている。今回は奥さんに聞き取りを行ったため井波彫刻に携わる、職人以外の立場の人からの意見である。職人がおみやげを作ることに关してはいいのではないかと思っている。しかし、工芸館ではメインの仕事（聞き取り時には10月中に納品する欄間）が忙しく、おみやげを作るひまは現在ないため、おみやげは制作していない、とのことである。



写真9. 井波木彫工芸会館の商品

二つの店舗にしばらく滞在したが、木彫樹楽では軒先においてあるおみやげ品に興味を示し、手に取る人は多かった。しかし、奥にある彫刻作品まで興味があるようでなく、どの人も、すぐに店外へ出て行った。木彫工芸館の方も同じように、手前側に置いてあるおみやげ品を眺め、奥に置いてある彫刻作品はさっと眺めるだけにとどまっていた。



#### 4. 井波彫刻の販売方式

井波彫刻の伝統的な販売方式は 1 軒の工房内での一貫生産販売体制で、問屋を経由しない直接販売方式が慣習である。この販売方式は作り手と買い手が直接コミュニケーションをとれ、井波ではこのようなスタイルが一般的だが、他のところでは珍しいと思うと木彫樹楽の中田さんは述べていた。客と職人が気軽にコミュニケーションをとれるため、商品についての詳しい説明も可能である。さらに、買い手のニーズを直接知ることできる。聞き取りを行っている際に訪れた客と職人の会話を聞いていると、商品の原材料から制作過程の話など、委託販売方式ではできない、直接販売方式ならではの会話が目立った。また、作品を称賛する声も多く、これも職人のモチベーションにつながっているのではないかと思われる。直接販売方式は販路拡大が困難というデメリットがあるものの、手作りで付加価値が高い井波彫刻は安価な大量生産品と比べると、販路拡大の必要性が低いいため直接販売方式で成り立っていると考えられる。

また直接販売方式には、売れない場合在庫を抱えるリスクがあるが、一つ一つの商品価値が高い井波彫刻では受注生産が一般的となっているため、在庫を抱えることに対するリスクは低い。2-1 で述べたように、かつてははんこもんと呼ばれる作り置きをしていたが、今では作り置きは無く、作品例を見せるときも写真で間に合わせてしまう。直接販売方式は、一般的にある程度の販売量や市場シェアがある場合に有利になる傾向があるが、市場シェアという面では井波彫刻は問題ないと思われる。しかし、販売量を見ると現在はかつてのような販売量は無く、新たな分野を開拓していかなければ先細りしてゆく一方である。

八日町通りには彫刻家が多いと前述したが、これは井波彫刻の販売方式と関係していると思われる。八日町通りの店舗は 5~10 年くらいで入れ替わることがあるが、入れ替わる店舗はおみやげ店のような商売だけの店舗の入れ替わりが多い。しかし、彫刻家の工房のように商売と仕事場所の兼用の店舗の場合は長く続くことが多いと中田さんは述べられていた。観光客が訪れる八日町通りに工房を構えることは、客とのコミュニケーションを大切にす井波彫刻家にとって、多くのメリットがあるため八日町通りに多くの彫刻家が集まると思われる。

#### 5. 木彫樹楽の商品から見る井波彫刻の販売方法

表 2 と図 1 は木彫樹楽の商品を項目や価格別に表に表わしたものである。木彫樹楽に置かれている商品の個数を項目別にみると、日用品が一番多く、二番目に置物が多い。日用品が多いのは、項目別平均値を見るとわかるように一つ一つの単価が低く、また商品の大きさも彫刻作品と比較するとコンパクトなため、陳列しやすいという理由からだと思う。置物が多いのは彫刻作品としてポピュラーなもので、大きく高額なものから小さく手頃な価格のものまで作品に幅を持たせやすいことから、商品として店に置きやすいか

らだと思われる。壁掛けも 28 点と商品数としては多い。これは 1-2 で述べたような壁掛けレリーフの需要が多いことや、写真 6 の中央に壁掛け作品が映っているが、陳列として非常に見栄えが良く、かつ平均価格も比較的低くなっており、そのような点から商品数が多くなっていると思われる。しかし、一方で土産物が 16 点と少ない。だがその中では彫刻ストラップは陳列棚に平置きにされ、数多く並べられており目立つようになっていた。

表 2. 木彫樹楽の商品個数、平均価格、最高価格、最安価格の一覧

	壁掛け	置物	衝立	日用品	材木	土産物
商品個数	28	46	1	74	4	16
平均価格	160000	276713	1150000	9129	38775	25559
最高価格	1200000	1100000	1150000	58000	150000	8000
最安価格	15000	1800	1150000	380	100	500

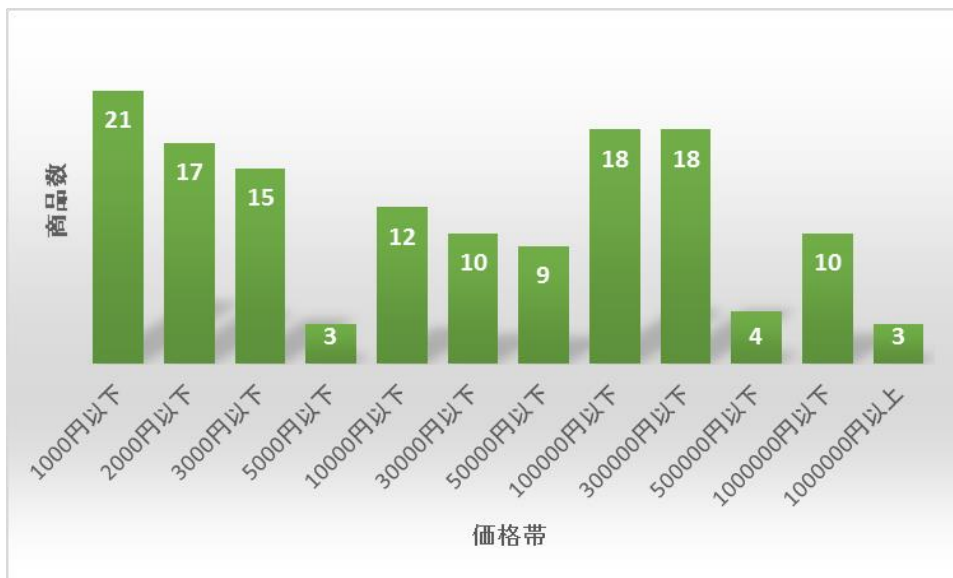


図 1. 木彫樹楽の価格帯別商品数

次に木彫樹楽に置かれている商品の価格帯を見てみると、高額商品の存在が目立つ。価格帯別商品数を見ると、低価格帯から高価格帯までまんべんなく商品があることがわかる。おみやげ品は 3 万円前後という暗黙の了解があると前述したが、3 万円以上の商品も多数置かれている。特に注目したいのは 10 万円以上というおみやげ品としては高額な商品が合計で 35 点もあることである。これらの商品が店に多数並んでいるのには、井波彫刻ならではの工房兼販売店という販売方式も影響していると思われる。これらの高額商品は、商品として販売をしているが同時に展示としても利用されているように感じた。写真 6 にあるように、壁掛けがまるで美術館のように展示されている。また、大きな彫刻作品も見栄えがよいように置かれており、工房兼販売店兼個展会場としての役割を果たしているのではないだろうか。おみやげを作ることの意義ということで、宣伝と答える職人がいたが、おみ

やげ品を見るためだけに入ったと思われる客も店内を一周し彫刻作品を眺めていく人が多く、このことによる宣伝効果が見込まれると思われる。3-2でおみやげ品を作らない理由として、飾るためのスペースがないため作らない、と述べられていたが“飾らない”という表現が用いられているように、井波彫刻では作品を売るとは陳列し、人に見せるという意味も含んでいると思われる。おみやげ品を売るということならば、他の店舗に販売を委託することもできるが、そのようなことをしない理由として、商品であると同時に展示品でもあるため、自分の手で管理できる、工房や販売店でないと売りにたくないという思いがあるとされる。

## 6. まとめと考察

井波彫刻は井波彫刻の歴史、現代の井波彫刻で述べたように成り立ちから現代にいたるまで、時代に合わせるように主な制作物が変化してきている。唐狭間から始まり欄間や獅子頭、現代では木彫看板や、壁掛けレリーフ、さらにはギターや車の内装など枠にとられない発想で様々な種類の作品が制作されている。これらは全て、井波彫刻の優れた技術があるからこそ成せることである。

井波彫刻は作品に関しては常に時代の需要に合わせて変化していつているが、一方で販売方法は問屋を経由しない直接販売方式が今にまで続く慣習となっている。直接客とコミュニケーションがとれる直接販売方式によって井波彫刻の職人は伝統的な彫刻だけでなく新しい発想を作品として形にできると思われる。

直接販売方式をとる職人が多い井波彫刻では、工房が作業場兼販売店となっている店舗が見受けられる。特に八日町通りでは通りに面している工房の多くがこのような形をとっている。多くの観光客が訪れる八日町通りにはコミュニケーションをとることに積極的な職人が集まっていることから、作業スペースにいながらにして客とコミュニケーションがとりやすいような構造にしていると考えられる。

さらに、工房を店舗として利用しているということは商品を陳列する必要もある。この商品の陳列スペースは店舗によって大きさは様々だが、決して大きいとは言えないスペースにも高額な彫刻作品が置かれていることが多い。限られたスペースにそのような、観光客に需要があるとは思えない商品が置かれるのは陳列スペースが展示スペースとしての役割を果たしているからだと思われる。客の目に入りやすい軒先には比較的安価なおみやげ品が並べられ、店内奥には高額な彫刻作品が配置されており、店に入った客は店内を一周してから店を出ていく。これは、まるで美術館や博物館のようである。実際に店内を見渡した客の中には彫刻に対してすごいねーなどといった感想を口にする人が少なくなかった。

自分の工房を店舗として利用しているため、商品の陳列も自在に配置できる。利益だけを考えるならば、売れ行きの良い商品や安価なおみやげ品を置けばよいが、そうしないのには店舗としてだけでなく、個展会場や展示会のような役割も果たしているからではなか

ろうか。商品として多く売れることは見込めなくとも、彫刻家として自らの力量を宣伝するために高額な彫刻作品を陳列しているのだろう。

### 謝辞

今回の調査を行うにあたって、大勢の方々にお世話になった。忙しい中聞き取りに応じてくださった職人の方、井波彫刻について多くの助言をいただいた井波彫刻総合会館の方、八日町通りについて詳しい説明を行ってくださった井波観光協会の方、行政センターの方、井波の方々に感謝の意を表します。

### 参考文献

千秋謙治 1990年 『井波——歴史のうねり六〇〇年』 井波町開町六〇〇年記念委員会  
井波町史編纂委員会 1970年 『井波町史上巻』

### 参考にしたウェブサイト

法雨山「甘露寺」

(<http://www.k2.dion.ne.jp/~kanroji/index.htm> ; 2016年1月5日閲覧)

## 現代的彫刻からみる井波彫刻の現在とこれから

伊藤 芽依

### はじめに

現代的彫刻と聞いて皆さんは何を思い浮かべるだろうか。井波彫刻総合会館に展示されていた彫刻の施されたギターを初めて見た時、私はこれが現代的な彫刻だと感じた。「ギター」と「木彫刻」の2つが繋がるのは非常に意外に思われて、これは今までにない新しい試みなのではないかと考えたからである。その後、実習で八日町通りを訪れた際、女の子の立体彫刻を見て、私が思い描いていた木彫刻と現在井波で作られている木彫刻にはかなりズレがあることに気づいた。これがきっかけで、現在井波ではどのような現代的彫刻が、どのような思いで作られているのかについて関心を抱くようになり、井波の現代的彫刻を調査対象にしようと決めた。

調査では、職人の方が個人で彫っている現代的彫刻と、井波彫刻組合が企画し進めている現代的彫刻の二つについて、職人の方5名と組合の事務員の方1名にお話を伺った。本章では、井波の現代的彫刻の現状とそれを彫る職人についてまず記述する。そしてそれらを比較して見えてきたことを基に、今後の井波彫刻も視野に入れながら、井波の現代的彫刻について考察していく。

### 1. 現代的彫刻とは？

現代的彫刻と一言で言っても、それを明確に定義することは難しい。どういった彫刻を現代的とみなすかは個人によって異なるものであり、私自身が現代的彫刻だと感じて、他の人や彫った職人の方にとっては必ずしも新しいと限らないことが多々あるからである。しかし、調査対象の定義なしには、これをまとめ、考察することはできない。そこで、まずは現代的彫刻とは何かについて記し、本章で扱う井波の現代的彫刻がどのようなものであるかについて明確化するという作業を行う。

井波彫刻はこれまで、時代に応じて消費者に求められる物を彫ることで、約250年もの間技術を継承してきた。

宝暦13(1763)年の火災による瑞泉寺の再建以来、寺社彫刻や祭りの曳山彫刻、屋台欄間と、様々な彫刻が井波の職人により彫られるようになる。江戸期に生まれた屋台欄間をベースとして明治期に住宅欄間が発展し、これが大正2(1913)年に開催された共進会をきっかけに富山県外にも広がり、昭和に入ると住宅欄間と寺社彫刻が井波彫刻の仕事の二本柱となっていった。戦後、商品開発の機運が高まり、衝立、置物など様々な彫刻が作られるようになる。高度経済成長により北陸を中心に住宅欄間需要が大きく伸び、昭和40

(1965)年の時点で、井波彫刻の生産額の6割が住宅欄間、残りの4割が獅子頭、天神様、衝立、パネル、屏風などといった彫刻になった。1980年代末のバブル崩壊後、住宅欄間の需要が減少してからは、インテリアを始めとする様々な彫刻が制作されるようになり、今日の井波に至っている。<sup>96</sup>

本章では、この住宅欄間の衰退を一つの区切りとし、その後に作られ始めた新しい彫刻を「現代的彫刻」として呼ぼうと思う。ここを区切りとするのは、それまで井波を支えていた欄間が、井波にとって非常に大きなものだったと考えるからである。欄間の注文が減少し、欄間に頼ることができなくなった井波の職人たちが、現代の人びとに買ってもらえるような彫刻を模索し、試行錯誤した末に生まれたものこそが井波の現代的彫刻と言えるのではないだろうか。

したがって本章における現代的彫刻とは、住宅欄間の需要が減少した後に職人個人または彫刻組合の企画により作られた彫刻とし、今までの井波がそうしてきたように、今日のライフスタイルや消費者のニーズを意識して作られたものであるとする。また、近年見られるようになった職人個人による作家的要素の強い彫刻のことも、現代的彫刻として考える。

以下では、現代的彫刻の作り手である職人の思いや彫るに至った経緯、販売について触れながら、彫刻のタイプごとにまとめていく。

## 2. 動物彫刻

まずは、動物彫刻を取り上げる。動物彫刻というジャンル自体は現代的彫刻ではない。動物というモチーフ自体は古くから使われており、寺社彫刻や曳山彫刻、欄間にも動物は彫られている。井波の歴史的建造物であり井波彫刻と深く関わりのある瑞泉寺にも、至る所に動物彫刻が見られる。井波彫刻で彫られる動物は実に多種多様であるためすべてを挙げることは難しいが、寺社彫刻には獅子、猿、麒麟、龍などの伝説上の動物がモチーフとしてよく見受けられる。他にも鳥であれば鶴や鶏、魚であれば鯉など、実在する動物でも様々なものが挙げられる。

### 2-1. 民芸品としての動物彫刻

調査では、三重県出身の職人である野中願児さん<sup>のなかがんじ</sup>（41歳）に動物彫刻について詳しく話を伺った。野中さんは18歳の時から6年間親方の下で修行し、24歳で独立した。普段彫っている物は、メイン（全体の6割）は民芸品やお土産品などの小さな動物彫刻と植物彫刻、3割は社寺仏閣彫刻、残りの1割としてペット彫刻、衝立、パネルなどがあり、時期によっては干支の置物も含まれる。

---

<sup>96</sup>「南砺の真髄 井波彫刻」p.33-42を参照。

現在野中さんが彫っている動物彫刻は、比較的小さく、部屋に小物として置けるようなものが多い。主にフェア<sup>97</sup>や展示会<sup>98</sup>で販売し、民芸品として不特定多数の人々に買ってもらっている。



写真 1. フクロウの動物彫刻



写真 2. 犬の動物彫刻

本節では、以下野中さんが彫っている動物彫刻のうち、民芸品として彫られている小さなサイズのを主に取り上げる。野中さんは大きな動物彫刻の仕事も請け負っているが、それは民芸品としての彫刻ではないため、ここでは取り上げない。これより取り上げる「動物彫刻」とは、野中さんが彫る民芸品としての動物彫刻を指すものであり、井波全体で作られている動物彫刻を指すのではないことを断っておきたい。

## 2-2. 野中さんの語りから

先ほども述べたように、野中さんの動物彫刻は、民芸品として買ってもらうことが目的であるため、井波彫刻としては小さなサイズで値段も比較的安価である。野中さんの彫る動物彫刻の特徴として、目がくりくりとしているなど、どれも愛嬌のある顔で、以前の井波ではあまり見られなかった癒し系の作風であることが挙げられる。また、しばしば着色を施していることも特徴として挙げられる。これまでの井波彫刻は着色をしない白木彫りが多かったが、野中さんくらいの年代の職人から着色を施した作品を作る職人が増えた。

<sup>97</sup>物品を販売することを第一の目的に行うもので、百貨店などで行われることが多い。

<sup>98</sup>ギャラリーなどを借りて作品を展示するもので、ここから作品が売れたり、新たに注文が入ることもある。展示会と一括りに言っても、職人の人数や作品のジャンル、展示のコンセプトなどにより、様々なタイプのものがあり、展示会を開催・参加する目的や動機も職人によって様々である。

野中さんが普段モチーフとしてよく彫る動物はフクロウ、猫、犬で、彫る数量は多い順にフクロウ>猫>犬である。単価では高い順に犬>猫>フクロウである（写真 1-2）。高いものほど彫るのに時間がかかる分、数も少なくなるのだと言える。フクロウは、無難であるし、縁起物としてプレゼントにされることが多いので、最も彫ることが多い動物である。猫はその多くが似た形をしており、猫好きの人は三毛猫、黒猫など、どんな柄の猫であっても好きなことが多いため、客層が広い。そのため、彫りやすく、売しやすい。それと比較すると、犬は様々な犬種があり、それぞれが特徴的な外見をしているため、客の好みも顕著に分かれる。例えば、ダックスフントが好きな客はダックスフントの彫刻を買っていき、柴犬が好きな客は柴犬の彫刻を買っていき、ダックスフントが好きな客が進んで柴犬の彫刻を買っていきはあまりない。このように、様々な犬種がある分、ターゲットも狭いので、売ることが難しいのだそうだ。野中さんが得意な動物は猫で、苦手かつ難しいのは日本犬だそうである。これは、日本犬はダックスフントなどに比べて外見に目立った特徴がないため、なんの変哲もない犬ほど実は彫るのが難しいのだそうだ。

### 2-3. フェアと販売・交流の場としての展示会

野中さんはこれらの動物彫刻を主にフェアや展示会で販売している。個展<sup>99</sup>や井波彫刻の職人同士でのグループ展<sup>100</sup>では、「販売すること」を第一の目的として行っていた。作品で自分自身を表現するという側面も確かにあるが、野中さんにとっての第一の目的は、自分自身の名を多くの人にアピールし、最終的に展示した彫刻を売る・注文を取ることだという。

とはいえ、野中さんの開催、参加したすべての展示会が、販売が第一目的だったわけではない。野中さんはこれまでに「Ring<sup>3</sup>（リング・リング・リング）」というグループ展を5回行っているが、これは友人たちと一緒に「楽しむこと」が第一の目的だったという。このグループ展は、高校の同級生で、油絵や写真など創作活動を行なっている5、6人の友人と一緒に、趣味の延長で開催したことがきっかけで、参加人数は回数を重ねるごとに増えていった。野中さんは、彫刻は趣味ではなく仕事であるため、売れば良いなという気持ちもあったが、友人に会って交流を深めたり、制作過程の意見交換をしたりするのが何より楽しかった、と語る。

### 2-4. 野中さんの動物彫刻にかける思い

野中さんはもともと動物を彫ることが好きだったらしく、訓練校展<sup>101</sup>でもしばしば動物彫刻を彫っていた。野中さんは、4年目の訓練校展で猿を彫ったあたりから、仕事として動

<sup>99</sup>ある個人の作品のみを展示する展示会のこと。

<sup>100</sup>複数人の作品を展示する展示会のこと。

<sup>101</sup>井波木彫刻工芸高等職業訓練校（通称、訓練校）に通う訓練生が年に一度出品する展示会で、訓練生はこの訓練校展で自身の一年間の成長を彫刻という形で発表する。彫刻のモチーフなどは訓練生の自由である。



物彫刻を扱っていくことを意識し始めた。その他にも野中さんが意識しているものに高村光雲の「老猿」という作品があり、素晴らしい技術が詰め込まれていると言う。井波の職人はみなまずこの作品に憧れ、意識するのではないかと語っていた。

野中さんが民芸品としての動物彫刻を彫るようになった理由・動機は、大きく二つに分けられる。まず一つは、野中さん自身が民芸品が好き、ということである。野中さんによると、お土産品や民芸品は喋りも動きもしないが、ずっと見ても飽きず、そのこじんまりとした雰囲気がいいのだそうだ。民芸品のような比較的小さなサイズの彫刻は、単価が安く儲けを出すためには多く売なければならないため、これまで井波ではあまり作られてこなかった。それでも野中さんが民芸品として動物彫刻を彫るのは、民芸品と動物彫刻が好きだ、という思いが強いからである。家で使うコップや箸や茶碗が常に自分のものでないと落ち着かないように、民芸品は私たちの日常生活になじんでいるものであり、ずっと置いていても飽きがこないものをこれからも彫っていきたい、と語っていた。

二つ目は、井波彫刻を好きな人が気軽に買えるものを作りたい、という思いがあったからである。野中さんは、自分自身が高いものを買えないのに高い彫刻を作ってそれをお客さんに買ってこれというのを失礼なのではないかと考えており、買い手の感覚で彫刻を彫っているのだと語った。実際に、木彫刻フェアといった場に彫刻を持って行って、お客さんがその場で買ってくれるものは高くても2〜3万円、よく売れるのは5000円以下の価格のものだそうである。

野中さんにとって動物彫刻の販売ノルマは、彫る物の大きさや動物の種類によって変わり、そこには野中さん自身が損をせずに済むようにする商売上の計算がある。例えば、ある置物をフェアで3500円の値段をつけて売るとする。そこから手数料<sup>102</sup>を引くと野中さんの手元に残るのは1800円ほどで、一日に1万円稼ごうとすると一日のノルマは5、6個となる。このように、彫刻の値段から逆算して制作日数を決めるのである。彫る際は、効率的に短時間でできるだけ多く彫るために、この部分はこのノミを使う、ということまで細かく決めて彫る。

このように、一日のノルマがあることや、効率を重視し速く多く彫ろうとしていることを考えると、これは収入を得るための仕事であり、「職人的」な作業だと言える。実際に、野中さんは、この動物たち（民芸品の動物彫刻）は確かに自らの手で生み出したものだが、そこに自分を表現しようという気持ちはなく、生活していくための仕事として彫っている、また、職人は客に言われたものを作るのが基本だが、こういった民芸品のような小さなものを作るのも職人の仕事だと思う、と語っていた。

このように、野中さんの中で動物彫刻は、受注生産による彫刻とは明確に区別されている。しかし、野中さんはそれだけでなく、こういった動物彫刻は正統な木彫り彫刻ではない、むしろそれ以下ではないか、という思いも持っているそうだ。これは、大きなサイズ

---

<sup>102</sup>場を貸している百貨店などに支払われるもの。場の貸し手によって割合は様々だが、大体が3〜4割、多いところだと5割ほどである。

の彫刻であれば存分に活かすことのできる井波彫刻の「技術」が、小さなサイズの彫刻では大きさやノルマなどの制約によって活かすことができないため、欄間のような彫刻とこの動物彫刻を同列の「井波彫刻」として並べることができない、という意味である。こうした理由から、民芸品やお土産品は木彫刻ではない、という意見を持つ職人は井波には多い。野中さん自身も、木彫刻フェアなどで動物彫刻を販売する際には「井波」の名を前面には出さないそうだ。野中さん自身が井波の職人だと言うものの、その彫刻は「井波彫刻」ではなく「木彫刻」といって売るそうである。

そうは言っても、先ほども述べたように、野中さんは動物彫刻を仕事と割り切っており、もともと民芸品が好きだという思いもあるので、小さい彫刻を作らないほうがいいとか、生活のために嫌々作っているとか、そういった思いはないそうだ。小さな彫刻を専門に作っていると組合からまわってくる注文も小さなものばかりになってしまうので、大口の注文が入りにくいという葛藤もあるが、自分が好きでやっていることだからいいのだと野中さんは語った。

### 3. ペット彫刻

本節では、ペット彫刻について取り上げる。ペット彫刻とは、ペットの動物そっくりに似せて彫った動物彫刻のことである。飼い主が自身の飼っていたペットが死んでしまったことをきっかけに、メモリアルとしてペットそっくりの彫刻を彫ってほしいと職人に依頼することが多い。

以下では、動物彫刻でも取りあげた野中願児さんに話を伺った。



写真 3. 犬のペット彫刻

#### 3-1. 野中さんの語りから

野中さんはもともと動物を彫ることが好きだったが、ペット彫刻を仕事として意識し始めたのは10年ほど前からで、猫の写真作家の方に撮っている猫の彫刻を彫ってほしいと言われたことがきっかけである。この写真作家は「ブサカワ猫」の「平太」という猫をモデルに写真を撮っていて、「Ring<sup>3</sup>」（「2. 動物彫刻」にて記述）にこの方も参加したことで知り合った。「平太」の他にも、親方のペットであった犬の「ドン」や、モデル猫としてたくさんの写真集が出版されている猫の「はっちゃん」の写真を見ながら彫ったりしていると、「はっちゃん」を撮っている写真作家がその「はっちゃん」の彫刻を買ってくれたことがあり、そういった人との繋がりから徐々に仕事としてペット彫刻を意識し始めたと言う。

ペット彫刻のモデルに関して、お客の住所が井波の近くで、かつペットが生きていれば見に行くが、遠かったりすでにペットが死んでしまっている場合はモデルの写真から作る。

依頼はペットが死んでしまった後の方が多い。

ペット彫刻を作る際、デフォルメして彫るかリアルに彫るか、着色するか否か、どのようなポーズにするか、木の材質はどうするかなどは、費用やお客の希望によるため、彫刻を彫る前に念入りに打ち合わせをする。白木彫りを希望する人もいるが、色も動物の特徴、個性の一つなので、着色することを希望するお客のほうが多い。また、色を付けたほうが白木彫りよりも似せられるため、野中さんにとってはありがたいという。こういった打ち合わせのいる注文とは別に、野中さんの作風が好きだからすべてお任せしますというお客もいるようで、そういう注文は野中さんにとっては気持ちがまだ楽なのだそう。また、小さなサイズのペット彫刻だと、4つほど彫ってこの中から似ているものを選んでくださいという形式で売ることもある。

ペット彫刻の注文数は年に8件～10件ほどで、彫るのにかかる日数や費用は彫刻によって様々だそう。例えば3寸版(一寸=約3cm、よって高さ約9cm)の置物だと6万円ほどで1週間かかり、そこから大きさと複雑さによって価格も変わってくる。彫るだけで1週間かかったとしても、注文についての打ち合わせの時間やどのように彫ろうかと考えたり、材料探しをしたり、ポーズを決めたりするためすぐには彫れず、実際には完成までに1週間以上かかるようである。

ペット彫刻はなかなか理解が得られないものだ、と野中さんは言う。ペットが本当に好きな人やお金に余裕がある人ならばともかく、そうでない多くの人々が20万～30万円のお金を出すとは考えにくい。その代わりに、ペット彫刻はかなりの確率でお客に喜ばれるようである。野中さんは、ペットはただの動物ではなくお客にとってはかけがえのないパートナーなので、真剣に似せようとして彫っているのが買い手にも伝わるのではないかと、言っていた。また、近年は3Dプリンターでペットの形を取って人形を作る業者もあるが、それにはない手作り感、あたたかみが彫刻にはある、それがペット彫刻の良い点だと話してくれた。

### 3-2. ペット彫刻のリスク

ペット彫刻は、野中さんが井波に来た23年前にも行われていたが、かつては今も一般的な彫刻だとは言えない。今日の井波では、野中さん以外にもペット彫刻を請け負っている職人はいるが、その数は少なく、誰も主たる仕事としては彫っていないし、野中さん自身もメインではやってはいない。

このように、井波の職人はペット彫刻をあまりやりたがらない。どの職人も技術はあるし、やろうと思えばできるが、やりたがらないのである。その理由はいくつかあるが、第一に挙げられるのは、本物に「似せなければならぬ」という、ペット彫刻の持つリスクだ。ペット彫刻は、モデルの動物に似ているかどうかがお客さんの満足度に直結するため、職人は慎重に彫る必要がある。より本物に近づけるために、木を彫る前に粘土原型を作り、それを客に見せて確認してから実際に木を彫り始めるそうだが、そうすると粘土原型を作

る段階と実際に木を彫る段階の 2 つの工程で気を使わなければならないため、手間がかかる。こうして手間をかけて完成した彫刻であっても、飼い主としてのペットへのこだわりから、この部分はもうちょっとこうしてほしい、と注文を付ける客もいる。自分の彫刻を客側から似ていない、こうじゃない、と言われるのは、多くの職人は嫌がるものであり、そういった点が、職人がペット彫刻をやりたがらない理由の一つとして挙げられる。

また、時間がかかることも理由として挙げられる。今日では、注文に関するやり取りには電子メールが使われることも少なくないが、お年寄りのお客のなかには電子メールなどのやり取りができない人が多く、その場合は写真を郵送することになる。多くの人は、似ているかどうか、注文内容はこれでいいかどうかなどを熟考し、吟味して返事をするため、返事は 1、2 日かかることが多い。そうすると、その間の作業がストップしてしまうため、予定が組みづらく、時間がかかってしまうのだ。

### 3-3. 職人と客とのやり取り

ペット彫刻の場合、20～30 万円ほどのものになれば、たとえ完成した後だったとしても、彫刻に納得のいかない部分や直してほしい部分があると、お客さんは彫刻を野中さんのところに送り返してくる。野中さんにしてみれば、できることなら完成する前に直したいが、お客さんも完成してからでないかと似ているかどうかわからないことが多いようだ。そういった注文は修正できるなら直すし、直せなかったら最初から作り直すしかない、しかしそう言ったことはまだない、と言っていた。

事例を挙げると、ダックスフントのペット彫刻を彫ったときに、木目がわかる程度に色を塗ったが、もっとはっきり色を塗ってほしいと送り返されたことがあり、野中さんは木目もわからないぐらいにはっきりと色を塗り直して再び送ったそうである（写真 4）。このお客は、一度はこのように納得がいらず送り返してきたものの、そのペット彫刻を気に入ったらしく、もう 1 体注文してくれたそうだ（写真 5）。もし、1 体目の注文のときにやり直しを断っていたら 2 体目の注文はなかっただろう、と野中さんは言う。



写真 4. (左) 着色し直した 1 体目のペット彫刻



写真 5. (右) 二度目の注文の際に作られたペット彫刻

こういった事例からわかるように、客への対応は商売をしていくうえで重要なことである。これはペット彫刻に限らずどんな彫刻でも言えることだが、どんな注文でも値段が高くなればなるほど、失敗がないよう慎重に進めるため、キャンセルややり直しは少なくなるようで、逆に野中さんのホームページを見てからネット注文してきた人はキャンセルが多く、やはりお客さんとのコミュニケーションは大切だ、と野中さんは言っていた。

#### 4. ストラップ彫刻

次に、ストラップ彫刻について取り上げる（写真 6）。ストラップ彫刻自体は井波で作られているものの、その数は他の彫刻に比べるとごくわずかである。前節でも述べたが、井波では今まで小さなサイズの彫刻は積極的に作られてこなかった。かつては欄間のような大口の注文が多く、一度にまとまった収入を得ることができたため、ストラップ彫刻のような小さな彫刻を作る必要性がなかった。そういった大口の注文が減った今でも、ストラップ彫刻が井波であまり作られないのは、小さなサイズの彫刻では欄間を作る井波彫刻の技術を表現しきることができないという井波彫刻のプライドや、小さなサイズの彫刻では儲けを出すことが難しいという職人たちの現実的な問題が理由と考えられる。現在、井波彫刻総合会館に獅子頭のストラップ彫刻のカプセルトイが設置されているが、それに関して、そのストラップを得ただけで井波彫刻を手にしたような気になれるのは違うと思う、という会館の方からの語りもあった。彫刻組合としては、観光客にその場で小さな商品を買ってもらおうというよりも、まず彫刻やその技術を見てもらい、いずれ井波彫刻を注文し手に入れたいと思わせるような観光のあり方を目指しているようである。

以下の本節では、そんななか個人でストラップ彫刻を作り、八日町通りの自身のお店で販売している西村<sup>にしむらのりしげ</sup>宜繁さんに話を伺った。

##### 4-1. 西村さんの語りから

西村さんは石川県出身の現在 43 歳の職人で、高校を卒業してから井波にやってきて弟子入りした。独立したのは 15、6 年前という。ストラップ彫刻を作り始めた正確な時期は覚えていないが、最初は作っていなかったそうだ。普段彫っているものはストラップ彫刻など観光客向けのお土産品を中心に、表札、マンガ彫刻、天神様、そして、時期によっては干支の置物も請け負っている。

西村さんがストラップ彫刻を彫り始めたのは、井波の観光業について危機感を抱いたからであった。西村さんは、井波に来た観光客が、木彫刻ではなく井波のお土産屋さんに売られているお饅頭を買っていくのを見て、このままではいけないと感じたそうで、せっかく井波にきたのだから、お饅頭ではなく木彫刻を持って帰ってほしいと思い、ストラップ彫刻を作るようになったそうである。なぜ小さな置物ではなくストラップだったかということ、置物だとどうしても井波で買うお土産品としては高く、ふらっと来て買ってほしいと

思う値段を超えてしまうからだそうだ。西村さんはこれまで、南砺市を舞台にしたアニメ『恋旅』の作中に出てくる蛙のストラップを聖地巡礼に来たアニメファンに向けて作ったり、他県からの観光客に向けておわら風の盆<sup>103</sup>（写真 6 左側）や椿祭り<sup>104</sup>のストラップ、井波でも多く彫られている天神様のストラップ（写真 6 右側）などを作ったりしてきた。

#### 4-2. ストラップ彫刻の困難

こうした西村さんの思いはあっても、ストラップ彫刻を作っていくには様々な困難がある。観光客に買ってもらうには価格を 1000 円程度に抑える必要がある。そうすると、西村さんが利益を得るためには一日で 10 個は作らなければならない。一日 10 個作るとなるとストラップ自体も非常に簡単で小さなものしか作れなくなってしまい、しかもそれが確実にすべて売れるとは限らない。小さなサイズのものはそういった部分がやはり難しいと西村さんは言う。また、ストラップや小さな商品を考えるのは面白いからやっちはいるが儲けはない、やはり価格が万単位のものでないと儲からない、とも話してくれた。

また、もう一つの困難として在庫の問題が挙げられる。ストラップのような観光客向けに売るものは在庫がどうしても必要で、量産できることが前提となってくる。しかし、本来、木彫刻は量産とは相いれないもので、ストラップを大量に作り在庫を確保するのは井波彫刻では難しい。機械を入れればもっとたくさん作れるだろうが、そうなるとお金がかかるし、井波彫刻と呼べるかどうか怪しくなってくるので難しいのだという。



写真 6. ストラップ彫刻



写真 7. 女の子のマンガ彫刻

<sup>103</sup>富山市八尾町で毎年 9 月 1 日～3 日にかけて行なわれる祭り。11 ある地区ごとに住民が輪踊りや踊り流しを行なう。

<sup>104</sup>南砺市井口カイニョと椿の森公園など計 4 か所で毎年 3 月末ごろに行なわれる祭り。切花や鉢植えを中心に、約 300 種・1000 本の椿を展示する。

## 5. マンガ彫刻

本節では、マンガ彫刻について取り上げる。マンガ彫刻とはアニメやマンガのキャラクターを彫ったもの、または、著作権モノでなくともアニメやマンガのような二次元のタッチで彫った彫刻のことを言う。私がこのテーマを調査しようと思ったきっかけの彫刻でもある。

マンガ彫刻については、ストラップ彫刻の節でもとりあげた西村宜繁さんに話を伺った。組合では過去に、井波彫刻はこのようなパネルも彫ることができる、という宣伝として、アニメ『恋旅〜True Tours Nanto』<sup>105</sup>の主人公たちのパネルを彫っているが、個人でマンガ彫刻を彫っているのは井波では西村さんのみである。

### 5-1. 西村さんの語りから

西村さんがマンガ彫刻を彫ることとなったのは、かつて仕事が入ってこず、職人をやめようとする考えた時期に、二次元風の女の子の彫刻（写真7）を彫ったことがきっかけだった。独立して店を構え始めた頃は欄間のような昔から井波で彫られてきた彫刻を彫ろうと思っており、マンガ彫刻を彫ろうとは全く考えていなかった。しかし、そういった普通の彫刻の仕事すらあまり入ってこなかった時期があった。彫らないと食べていけず、腕もなまるため、この悪循環を断ち切らねばならないと考えた西村さんは、自身の好きなマンガやアニメを彫刻にしよう、と思い立った。そうしてこれまでにないほど熱中して二次元風の女の子の彫刻をひたすら彫り、2か月ほどかかって彫刻を完成させた。西村さんはこの彫刻はあまり評価されないだろう、と思っていたが、その予想を裏切って、女の子の彫刻は好評だった。この時に、伝統的な彫刻でなくとも、何を彫ってもいいのだ、と西村さんの中で発見があり、これが転機となって、以来マンガ彫刻を彫っているのだと言う。

西村さんが初めてこの女の子の彫刻を彫ったのは8年前だが、当時は今以上にアニメやマンガが世間一般で受け入れられておらず、しかも井波の観光客は年配の方が多いので、マンガ彫刻は世間には受け入れられないと西村さんは思っていた。しかし、いざ彫ってみると予想外にいい評価をもらい、そこからマンガ彫刻の注文もあったようである。マンガ彫刻として初めて彫った二次元風の女の子の彫刻と同じものを彫ってくれないか、という注文もあったそうだが、西村さんはこの彫刻を遺作だと思いながら彫ったため、これを彫った時のモチベーションを再現することができず、仕方なく注文を断ってしまったこともあった。

マンガ彫刻を彫るまでは半立体の彫刻（パネル彫刻など）が苦手で、親方にもあまり教えてもらわなかったが、マンガ彫刻をするようになってからよく彫るようになり半立体彫刻を彫るのがうまくなったという。ここから、マンガ彫刻は西村さんにとって、技術的に

---

<sup>105</sup>南砺市がピーエーワークスに委託して製作を行い、2013年4月に公開された短編アニメ作品。南砺市が舞台であり、同市への観光客の誘致が目的。

も精神的にも大きな転機となったものだったことがわかる。

## 5-2. マンガ・アニメと工芸のコラボ

マンガやアニメと工芸のコラボ企画やコラボ商品には、今日では様々なものがあるが、西村さんが関わっているものに「高オタクラフト実行委員会」というグループがある。高オタクラフト実行委員会は、鋳物の産地である高岡市でアニメ・マンガ・ゲームなどが好きな若手職人が集まって結成した制作チームで、彫刻師、鋳物師、螺鈿職人など様々な職人が制作に関わっている。高オタクラフト実行委員会は第一弾商品としてアニメ『天元突破グレンラガン』<sup>106</sup>にでてくるロボットをモチーフにした五月人形兜飾りとドリルの飾りを制作し、西村さんもドリルの置物の形の原型を制作することでこれに参加した。アニメの公式ホームページでも「アニメ×工芸」として宣伝されており、2015年4月より販売開始、実際に注文もあったのだと言う。

この試みは、高オタクラフト実行委員会のメンバーの道具志朗<sup>どうくしろう</sup>氏が株式会社を経営しており、その会社を窓口としてアニメ『天元突破グレンラガン』を制作しているガイナックスにかけ合ったところ、許可が下りたのだという。もし個人でかけ合ったならば許可が下りず実現しなかっただろうと西村さんは語る。

## 5-3. マンガ彫刻の制約

マンガ彫刻について聞き取りを行うなかで西村さんの語りから見えてきたのは、マンガ彫刻を彫り販売していくには乗り越えるべき障壁が多い、ということだった。

まず一つ目は、彫刻を作り販売しようとしても、アニメやマンガなどの著作権モノは許可が下りづらいことである。先ほど「高オタクラフト」の部分でも述べたが、高オタクラフトは道具氏の会社を窓口にしたからこそ許可が下りたのであり、職人個人が掛け合っても許可が下りることはほとんどない。西村さんは、著作権モノのほうがウケるので彫りたいが、こういった著作権の問題があるため難しいと語った。とはいえ、オリジナルのものはデザインの段階でどうやったら売れるかを考えて作らなければならないが、著作権モノはそういったデザインについては考えずに彫ることができるため、西村さんにとっては気が楽なのだそう。

二つ目に、即売会と木彫刻の相性がよくないことが挙げられる。西村さんはマンガ彫刻を販売するため、しばしば模型即売会やアニメ・マンガの同人即売会<sup>107</sup>にマンガ彫刻を持っていくが、多くの即売会では展示・販売する物品を実行委員会や著作権元に提出する必要がある。在庫をたくさん作ることができない木彫刻の性質上、このサンプルの提出が痛手と

---

<sup>106</sup>ガイナックス・アニプレックス・コナミデジタルエンタテインメント製作のロボットアニメ作品。2007年4月1日から9月30日にかけて放送された。

<sup>107</sup>「即売会」とは、展示した物をその場で売買するもののこと。ここではアニメやマンガなどのサブカルチャーの即売会のことを指すが、一般的には、絵画や古本などジャンルによって様々な即売会が行われている。



なり、残った彫刻も提出した分だけ単価が上がるため、さらに売ることが難しくなってしまうという。また、その場で売り買いするという即売会の性質と、受注生産が基本である彫刻の性質が相反するものであることも考えられる。

三つ目に、木彫刻はアニメ商品としては高すぎる、ということである。マンガ彫刻の小さな置物を同人即売会で売るとすると、この彫刻を「木彫刻」というジャンルで考えれば、サイズも小さいため比較的安価だと言える。しかし、「アニメグッズ」として考えると、木彫刻は非常に高価なのである。安価で精巧なアニメグッズが市場にあふれているため、それらと同じ目線で見ると、マンガ彫刻はアニメファンにとって高いと感じてしまう。

西村さんは、マンガ彫刻の注文が少ないのは、やはりマンガ彫刻が物珍しい域をでないからか、それとも、井波彫刻は頼んでくれればマンガ彫刻も彫るのに、お客にとってはそうではなく、木彫刻ではマンガ・アニメはできないだろうという固定観念があるからか、とにかくもっと注文があってもいいと思うと語っていた。

#### 5-4. マンガ彫刻の今後

西村さんはこれまでマンガ彫刻として透かし彫りのパネルや大きな置物、また、デフォルメした小さな置物、マンガ・アニメをモチーフとしたストラップなどを彫ってきた。

西村さんによると、透かし彫りとアニメ・マンガなどの二次元とは相性がよく、比較的彫りやすい一方で、大きめの立体彫刻はそれに比べて彫るのが難しいそうだ。フィギュアを木彫刻で作ろうとすると、バランスなどを考えなければものによっては脚が折れてしまうため、モチーフやポーズが限られてくる。また、こういった技術的なことに加え、西村さんの中で、モチベーションが上がらない、こういった彫刻にどう値段をつけていいのかわからない、という気持ちがあるので、今後大きめの立体彫刻を売っていくことはないかもしれない、と語っていた。西村さんがマンガ彫刻を始めるきっかけとなった女の子の彫刻シリーズは現在 5 体目を制作中だが、大きめの立体彫刻はこういった懸念があることから、なかなか手が進まないのだそうだ。これからマンガ彫刻として売っていくとすれば、小さなフィギュア・置物、透かし彫りのパネル、マンガ・アニメをモチーフとしたストラップが中心になるだろう、と西村さんは言っていた。

## 6. 人形彫刻

本節では、人形彫刻について取り上げる。人形彫刻も動物彫刻と同様に、古くから作られてきたものであり、ジャンルとしては新しいとは言えない。「人形」という括り方だと、どのような彫刻までを「人形」の範囲とすればよいのか非常にあいまいであるが、今日の井波では、天神様の置物、五月人形やお雛様などの節句人形などがよく作られるほか、写真などから人物をそっくりに彫る肖像彫刻を作っている職人さんもいる。

本節では、職人の<sup>たなかこうめい</sup>田中孝明さん（36 歳）に話を伺った。田中さんは広島県出身で、高岡

工芸高校在学中に井波彫刻について担任教師に教えられ、高校を卒業してすぐ弟子入りし、12年前に独立した。普段はお雛様や五月人形などの節句人形を主に彫っており、女の子を主にモチーフとした人形彫刻も彫っている。仕事の割合は、節句人形が7割、女の子をモチーフとした人形彫刻は3割である。後に取り上げる、彫刻組合が進める現代的彫刻のギターのうち1本も、田中さんが彫ったものである。

本節では、この女の子をモチーフとした人形彫刻を詳しく取り上げる。便宜上、この人形彫刻を「女の子の彫刻」と呼ぶこととする。



写真 8. 人形彫刻の女の子の彫刻

#### 6-1. 田中さんの語りから

田中さんがこの人形を彫り始めたのは10年前からで、初めは田中さん自身のお子さんをモデルとして女の子の人形彫刻を彫っていたが、徐々にその人形を通じて自分を表現したいという気持ちに変わっていったようだ。こうした気持ちの変化もあって、今ではモデルを女の子だけに限定することはないが、女の子のほうが髪の毛で柔らかさを表現することができるため、よく女の子を彫っているそうである。女の子の彫刻は年に10体弱彫るようで、展示会に向けて彫ることが多い。

先ほども述べたように、田中さんは自分を表現したいという思いから女の子の彫刻を彫っており、そのことは聞き取りをしている間も感じる事ができた。田中さんによると、女の子の彫刻を彫る際は、値段は後付けで、彫る段階から具体的な金額を考へて作ることではないようだ。彫る段階では売ればいいな、という思いはあるが、大きさや値段を最初から考へて作ろうとすると、それが雑念のような感じになってしまっただけで作りやすく、とりあえずは作ろうという気持ちでただただ彫っているのだという。また、女の子の彫刻は、その根底には井波彫刻の技術があるものの、まったく同じ彫刻は1つもなく、すべて一点ものだ。こうした語りから、女の子の彫刻は職人的というよりも作家的活動によるものだと考えられる。

女の子の彫刻は、展示会で作品を見たお客から作品を譲ってほしいと言われた場合に売れるそうだが、展示会などがきっかけで田中さんの作品を知ったお客から注文が来る場合もある。これまでだと、趣味でトンボ玉を作っている方からトンボ玉を持たせるための女の子の彫刻を彫ってほしい、南砺市城端町にある中学校の交換交流先へ贈る記念品として人形を彫ってほしい、といった注文があった。女の子の彫刻は、節句人形とは違って明確な用途がないため、お客のほうからこういう用途で使いたいのだが作ってもらえないか、というように注文が来るそうで、田中さんはイメージを絵で描いて提案してから彫り始めるのだそうだ。

## 6-2. 展示会について

田中さんはこうした彫刻を通して自分自身を表現する場として、展示会を開催したり、参加したりしている。これまでに、個展を2回、漆職人である奥さんと二人で二人展を数回、グループ展を多数行っており、展示会以外にもアートイベントに何度か女の子の彫刻を出品している。展示会の具体例としては、ガラス、表具<sup>108</sup>、絹織物、お菓子、木彫刻の職人、作家で行なったグループ展が挙げられる。このグループ展では、お客はただ展示を見るだけでなく、ガラスの器にわらび餅を盛りつけ、お客自身が展示会で作った菓子切りでわらび餅を食べ、和紙の袋を帰りにプレゼントし菓子切りを入れて持って帰ってもらう、というお客も体験できるグループ展だった。こういった体験は木彫刻だけでなく様々なジャンルの職人、作家が集まったからこそできたものであり、面白い試みだった、と田中さんは語る。

展示会について話を伺った際に、大変なこととして挙げられたのが、在庫についてであった。ストラップ彫刻の節でも述べたが、井波彫刻はもともと受注生産が基本で、在庫を確保することは難しい。田中さんは、在庫は大体展示会を開く2ヶ月前に作り始めるが、その2ヶ月の間、在庫分の収入は入ってこない。そして、2ヵ月後の展示会でどれだけ実際に売れて利益がでるのかがわからず、不安に思うことが多いと、田中さんは言う。ちなみに、田中さんが在庫を作り始めるのは2ヶ月前だが、これは田中さんの目安であって他の職人も同じとは限らない。

## 7. ここまでのまとめ

ここまで職人が個人で彫っている現代的彫刻についてまとめてきたが、聞き取りをしていくうちに、職人たちはそれぞれ彫刻や職人自身に対して共通の認識を持っていることがわかってきた。ここでは、そういった語りをまとめ、井波彫刻と職人の分類を試みる。

### 7-1. 彫刻の分類

まず彫刻について、彫られる前の過程によって大きく3つに分類できると考えられる。

一つ目は、井波の伝統的な販売形態である受注生産のシステムで作られる彫刻である。受注生産はお客さんのほうからこういった彫刻がほしい、という注文があり、職人がそれを彫ることによって成り立つもので、こういった客が求め職人が応えるような「客→職人」の形式で成り立つ仕事は、「職人的」な活動だと言うことができる。こういった彫刻は、客が求めるものを彫るという意識が第一にあり、現在井波で彫られている大多数の彫刻はこれに分類されると考えられる。

二つ目は、職人の自分自身を表現したいという気持ちから彫られた彫刻である。これらの彫刻は一つ目に挙げた「客→職人」の彫刻とは逆に、「職人→客」の方向に働きかけられ

---

<sup>108</sup>布や紙などを張ることによって仕立てられた掛軸、屏風、巻物などのこと。

る。職人が自分自身を表現した作品を展示会・即売会、ネットなどで見せ、お客さんが受け手としてそれを見る。そこから、展示してある作品を譲ってほしい、新たに作品を彫ってほしい、と言ったようにお客さんから注文がくる。

職人はこれらの彫刻を彫る段階では、売れてほしいという気持ちを持ってはいるが、それよりも自分自身を表現したいという気持ちが優先している。このように、自らを表現することを第一の目的として彫られた彫刻は、「作家的」活動による物だと言える。こうした「作家的」活動による彫刻は、必ずしもお客からの注文がくるわけではなく、収入としては確実性に欠けるため、今日の井波で作られている数は少ない。一つ目に挙げた「職人的」彫刻を仕事のメインとして彫る一方で、時間やお金に余裕があれば彫るという職人が多いようである。

三つ目は、お土産品や民芸品といった、不特定多数に向けて作られる彫刻である。これは、観光客などに買ってもらうことを目的として作られた、比較的小さなサイズの彫刻で、値段も木彫刻としては安価である。この彫刻は、売ることを前提に考えて彫られており、必然的に一日に彫るノルマが発生するため、商業的であり、「作家的」か「職人的」のどちらか、と言われると「職人的」であると言える。しかし、一つ目に挙げた彫刻との相違点として、働きかけの方向が「職人→客」であることが挙げられる。一つ目の受注生産による彫刻が客の満足度を重要視するのに対し、このタイプの彫刻では職人自身の利益が追求される。

もともと井波では、商工会の企画により、仏間に置かれる数珠掛けの置物や爪楊枝を刺しておくサボテンの置物などといった小物、民芸品が作られていた。しかし、動物彫刻の節で既述したように、単価が安いために売れてもあまり儲けにならない、木彫刻が大量生産に不向きであるなどの理由で、徐々に生産数が減っていった。近年では、平成27年3月の北陸新幹線開通に向けて井波でも木彫刻のお土産品を作ろうという動きが見られたようだが、キーホルダーでは井波彫刻の技術を表すことはできないし井波彫刻の名はつけられない、という意見が多かったため、最終的にお土産品はあまり作られなかったようだ。今日の井波でも、こういった彫刻をメインとして彫っている職人は少ない。

これまで取り上げてきた彫刻では、一つ目の受注生産による彫刻はペット彫刻、二つ目の作家的な彫刻は人形彫刻、三つ目の不特定多数に向けて売られる彫刻は動物彫刻とストラップ彫刻および一部のマンガ彫刻（アニメやマンガをモチーフとしたストラップなど小さな彫刻）と分類することができる。しかし、井波で作られている彫刻は非常に多様であり、多くの職人がさまざまな意図や思いで作っているため、この3つのどれにも分類できなかったり、3つのうちの2つに当てはまったりする彫刻もある。

例として、人形彫刻について聞き取りを行った田中さんの事例を挙げる。前述した通り、田中さんは普段の仕事として節句人形を彫る一方で、自分自身を表現することを目的として女の子の彫刻を彫っている。私が先ほど述べた分類では、節句人形は一つ目に挙げた「職人的」な彫刻、女の子の彫刻は二つ目に挙げた「作家的」な彫刻に分類できる。しかし、

田中さんには、女の子の彫刻の作風で節句人形を彫ってくれないかという注文もあるようで、これは一つ目と二つ目の彫刻のどちらにも分類できると考えられる。田中さんは、最近はこの2つ（節句人形と女の子の彫刻）の差は埋まってきている気もする、と言っていた。

私は、聞き取り調査から、井波彫刻を3つに分類できると考えたが、こうした分類が生まれてきたのも、現代的彫刻が出現したためではないか。つまり、もともと井波では受注生産による彫刻、すなわち、一つ目の彫刻しかなかった。しかし、職人たちが、井波彫刻の伝統的な部分を活かしつつも、職人自身の感覚でもって自分たちが作りたいものや今の消費者に望まれると思うものを作っていた結果、そのスタイルやジャンルが多様化し、異なるタイプの彫刻が生まれたのである。様々なジャンルの彫刻が様々な販売方法、スタイルで作られるこの複雑な様相こそが、現代的彫刻がもたらした新たな展開と言えるのではないだろうか。

## 7-2. 職人の分類

次に、彫刻の作り手である職人についても分類を試みたい。私はこれまで彫刻の作り手のことを表す際に、深い意味をもたせず職人と呼んできた。意味としては「彫刻師」とほぼ同義である。しかし、聞き取りをしていくうちに、井波の職人には、彫っている彫刻や彫刻師自身の持つ意識から、さらに「職人」と「作家」の2つにおよそ分類できることがわかった。ここでは、井波彫刻の作り手である職人の分類と、このことに関して彫刻師たちが持つ自己意識についてまとめていく。

一般的に「職人」とは、自身の習得した技術によって手作業でモノを作ることを職業とする人を指し、「作家」とは、芸術作品を作ることを職業とする人のことを指す。井波では、受けた注文をできるだけお客の要望通りに作ろうとする人、また、民芸品のような買い手を選ばない小さな彫刻をたくさん作る人を「職人」、それに対して、彫刻を通して自分自身を表現しようとする人を「作家」と考えるようである。「作家」と一口に言っても、日展<sup>109</sup>に出品し、そこで入選、特選を受賞する人、いわゆる日展作家を指す場合と、そういった展覧会にとらわれず、純粹に自分の好きなものや作りたいものを彫る人のことを指す場合に分けられる。こういった「職人」「作家」という意識について、明確に意識していない職人もいた。聞き取りをした多くの職人は、自分は「職人」だという意識を持っていたが、いろんな彫刻を彫るのは自分の中でも、今の井波の中でも、当たり前なことすぎて考えたことがないのでわからない、と言う人もいたし、自分の中では職人か作家かは曖昧だ、と言う人もいた。

私は聞き取りを始めた当初、先ほど分類した「職人的」な彫刻を彫る人は「職人」、「作家的」な彫刻を彫る人は「作家」、というように、職人の分類は、彫る彫刻によって変わっ

---

<sup>109</sup>日本美術展覧会のこと。日本で代表的な美術展でおよそ100年の歴史があり、井波彫刻からも数多くの出品されている。

てくるのではないかと考えた。つまり、「職人」は「職人的」な彫刻のみを作り、「作家」は「作家的」な彫刻のみを作っているのではないかと考えていた。しかし、調査を進めていくと、必ずしもそうではないことがわかってきた。今日の井波では、決まった彫刻しか彫らないという人は少なく、一人の職人でも様々な彫刻を彫っている。よって、職人は自分は「職人」だ、という意識を持っていても「職人的」な彫刻の他にも「作家的」な彫刻も彫っている、つまり、「職人」の中で「職人的」側面と「作家的」側面のどちらも持っていることが多々あるのである。このことは今日の井波では多く見られる。

このことの例として、私が聞き取りを行った久保大樹<sup>くぼひろき</sup>さんを次で取り上げる。

### 7-2-1. 久保さんの語りから

久保さんは北海道出身で現在 40 歳である。新潟県の大学を卒業後、井波の職人に弟子入りし 13 年前に独立した。普段は天神様を中心に様々な彫刻を彫っている。

久保さんは、自分は職人であり、客が求めるものを作りたい、という意識を持っており、普段も先ほどの分類でいう一つの受注生産による彫刻を主に彫っている。職人は注文を受けたものを作るもので、もし独創的なものの注文を受ければそれをこなすまで、お客の要求に従って作ることが第一だ、と語る。

しかし、そういったお客の希望するものを彫ると同時に、久保さん自身が彫りたい、と思うものもある。例えば、久保さんの工房に置いてある豚の置物がそれである。これは、豚の背中に羽が生えている置物で、空想的なモチーフでありながらもリアルなタッチで彫られている。その他にも、井波総合彫刻会館には、タバコを吸っているカメレオンの彫刻が展示されている。



写真 9. 豚の彫刻



写真 10. カメレオンの彫刻

こういった彫刻は、久保さん自身が部屋にあればいいなと思うものであり、自身の想像にあるものをかたちにしたものでもある。はじめから売りたいと思って作っているのではないが、できれば売れてほしいと思って彫っているそうだ。家族もいるのに売れないと思うものばかり家に置いていてもどうしようもないし、彫りたいものを彫ってそれが商品として売れてくれればいい、と久保さんは語っていた。こういった彫刻は、先ほどの彫刻の分類としては二つ目の作家的な彫刻ではないかと考えられるが、久保さん自身はこういった彫刻について、見せ方が他の人とは違うだけで全く新しいものではない、この彫刻で自分自身を表現したいわけではない、と語っており、当事者の感覚としては、どの分類にも当てはまらないのかもしれない。こういった彫刻は、およそ一年に1つのペースで彫っており、仕事の合間に息抜きとして彫っているのだという。

仕事として彫刻を彫ることと自身が彫りたいものを彫ることの両立について、久保さんは、自分が彫りたいものだけ彫って生活できるのはとてもいいことだが、それだけでは食べていけないので、自分の中でうまく折り合いを付けていくのだ、と語っていた。

## 8. 彫刻組合での現代的彫刻

これまでは職人が個人で彫っている現代的彫刻についてまとめてきたが、ここでは彫刻組合で進める現代的彫刻について取り上げる。これらの彫刻のほとんどは、井波の技術をアピールするための、いわば新商品開発の取り組みとして生まれた彫刻である。このことについて話を伺ったのは、井波彫刻協同組合主任の崎田宗孝<sup>さきたむねたか</sup>さんで、後述する獅子ギターについては、それを彫った職人の大野勝人<sup>おおのまさと</sup>さんにも話を伺った。これより記述する彫刻はすべて井波彫刻総合会館に現在展示されているもので、崎田さんもそれらを見ながら一つずつ説明してくださった。一口に新商品といっても様々な彫刻があるため、ここでは崎田さんに説明されたいくつかのみ記述したいと思う。

### 8-1. 彫刻看板

まずは彫刻看板について取り上げる。彫刻組合では平面や半立体だけでなく、立体の看板の注文も受けており、井波彫刻総合会館にはカップ（写真 11）やアニメ『恋旅』の半立体の看板彫刻、龍や獅子の立体看板彫刻がガチャガチャの上に設置されている。この看板彫刻は今日井波の町の至る所に設置されているが、バス停の看板彫刻の設置は30年前から、商業看板の補助事業は10年前から始まった。当時、南砺市商工会の加盟店の商店であれば看板を井波彫刻にすると補助金が出たそうで、こういった商店の看板彫刻が増えていったそうである。これらは店主の希望やイメージを基に職人が制作するもので、今日の井波の町には150以上の彫刻看板を見ることができる。

## 8-2. デザイナーとのコラボ商品

次にデザイナーとのコラボ商品について見ていく。今日、伝統産業とデザイナーによる現代的なデザイン・コンセプトのコラボ商品が増えており、その動きは井波彫刻でも見られる。これはデザイナーが提示したデザイン案をもとに職人が彫るというもので、代表的なコラボ商品に「ここかしこ・雲棚」(写真 13) が挙げられる。「ここかしこ・雲棚」は Y2 (ワイツー) 110 が企画・デザインプロデュースしたもので、神棚の役割を果たすものだ。彫刻の中に強力なマグネットが入っているため、壁に画鋸を刺し、それにくっつけるだけで、簡単に壁に掛けることができる。神棚を置くスペースのないオフィスや賃貸暮らしの人から人気が高く、需要過多なため、現在はネット販売のみだそうだ。



写真 11. カップアの看板彫刻



写真 12. ギター彫刻



写真 13. ここかしこ・雲棚

## 8-3. 彫刻ギター

次に彫刻ギターについて見ていく。これらはギターのボディに井波彫刻を施したもので現在 4 本のギターが制作されている。どれもオーダーメイドの 1 点モノで、それぞれデザインがまったく異なる。人形彫刻について話を伺った田中さんが水面に浮かぶ月をモチーフにして彫った作品「水月」(写真 12 右側) もこのうちの 1 つである。彫刻ギターについては、主に 4 本目に制作された「獅子ギター」(写真 12 左側) について崎田さんと大野さんに詳しく話を伺った。

これらのギターは崎田さんが企画し、職人がデザイン・制作したもので、全国商工連合会の「地球資源∞全国展開プロジェクト」から補助金が出ていた。崎田さんはもともと音楽やギターが好きで、数人の同じ音楽好きの職人に企画が通ったらギターを彫ってください、とお願いしていた。特に獅子ギターは崎田さんの念願だったそうだ。崎田さんはなぜ井波彫刻は知名度が上がらないのか、という井波彫刻の課題に対し、欄間や天神様のよう

110 有限会社スタイル Y2 インターナショナル。有井ゆまさんと有井ユカさんの姉妹により 2005 年に設立された。プロジェクト企画やデザインワークなどを手がける。



な住宅内の彫刻では家に入った者しか見る機会がないため、もっと大衆が見るようなものに井波彫刻が使われていれば知名度が上がるのではないかと考えていた。彫刻ギターを企画したのも、音楽に関するものであれば井波彫刻に無縁の若い世代も目にしやすいのではないかと、という考えがあったからである。崎田さんのそういった思いもあってか、彫刻ギターを機に取材が増え、『Player』<sup>111</sup>にも4ページの特集が組まれた。

この中でも、獅子ギターは高岡漆器と金沢金箔とコラボしたギターである。獅子ギターを彫った大野さんは、平面のボディに獅子を立体的に彫ることが大変だったと語った。獅子頭は本来立体的なものであるため、それを平面に彫ることはなお難しい。しかもボディの中に機械を入れなければならないため、深く彫っていくことができない。ただの板に彫るのではなく、様々な制約がある中で彫らなければならないため、試行錯誤を繰り返した。

#### 8-4. 崎田さんの思い

崎田さんがこうした新商品の彫刻を通じて主張したいのが、井波彫刻はどんなものでも彫ることができるということである。例えば、彫刻看板であれば平面や半立体のものはもちろんのこと、立体のものも作るができるし、ギターであっても、希望するデザインやイメージがあれば、自分だけのギターを作ることができる。そういったことをより多くの人に知ってもらい、井波彫刻の知名度をもっと上げていきたい、と崎田さんは言う。

### 9. 技術の「魅せ方」と彫刻の「見せ方」

ここまで職人個人と彫刻組合による現代的彫刻について見てきたが、それらを通じて、私は今日の井波では2つの「みせ方」が重要ではないかと考えた。それは、井波彫刻の技術の「魅せ方」と、展示会などでの彫刻そのものの「見せ方」である。

#### 9-1. 技術の「魅せ方」

まず一つ目の技術の「魅せ方」であるが、これは現代の人々や暮らしのことを考えたデザインとコンセプトで、井波彫刻の技術を魅せる、ということである。彫刻組合の現代的彫刻で取り上げた「ここかしこ・雲棚」はまさにその例で、井波彫刻の技術と現代の人々に求められるデザイン、コンセプトが合わさることで今の時代に適合していると言える。こういった現代の人々の感覚に合ったものを作ることは、これまでの井波でもずっと行われてきたことであるし、今日の井波の職人の間でもこういった彫刻は多々見られる。井波彫刻が今後も続いていくためには、こういった試みの一つ一つが重要なのだと考えられる。

---

<sup>111</sup>プレイヤー・コーポレーションが発行する、ギターなどの楽器演奏者向けの全国紙。

## 9-2. 彫刻の「見せ方」

次に、彫刻の「見せ方」についてであるが、これは要するに、展示会など井波彫刻を見せる場を工夫する、ということである。展示会などを行う際、どのような展示ならば多くの人々が来場してくれるのか、どのような内容ならより深く井波彫刻のことを知ってもらえるのか、そういったことを考えるのは、彫刻をアピールする場では非常に重要なことである。彫刻組合の現代的彫刻の部分でも記述したが、井波彫刻がどんなものでも作れることを多くの人々が知らないのは、井波彫刻の知名度が低いことの理由の一つとして大いに考えられる。若い世代の人であれば特に、井波でどんなものが作られているのか知っている人は少ないだろう。また、木彫刻というジャンルは多岐にわたるため、こういったものが作られているのか逆に想像が付きにくいのではないだろうか。実際に私も調査を始める前は、木彫刻が具体的にどういったものを指すのかわからず、ぼんやりとしたイメージしか持っていなかった。井波彫刻をより知ってもらうためには、見せ方を工夫したアピールの仕方が必要だと考えられる。

今日の井波でも、見せ方を工夫した展示会や取り組みは多々行われている。その例として、「日々是彫刻」を取り上げる。

### 9-2-1. 「日々是彫刻」

これは、彫刻組合青年部と富山大学芸術文化学部の学生が共同で企画し行った取り組みで、2013年に富山グランドプラザで開催された。毎日自分の工房で彫刻を彫ることは、職人にとっては日常だが、傍から見たらそれ自体が面白いことなのではないかという考えから、職人の普段の作業風景を多くの人に見てもらう取り組みである。20ほどブースを横に並べ、それらのブースで職人が思い思いに自身の彫刻を彫っていく。職人1人だけで実演したり、複数の職人の彫刻が展示してあるだけならまだありそうだが、職人が集団で実演しているのは、あまり見ない光景である。

また、「日々是彫刻」はそれだけではなく、職人が10人ほど横に並び、みなで獅子頭の異なる工程の部分を一齐に彫るという実演もなされた。下絵や大彫り、小彫りなど異なる工程を一齐に彫ることで、ずっと見ていなくても獅子頭が完成する過程がわかるようになっている。

こういった見せ方は新鮮に思われ、ただ彫刻が展示してあるよりも彫刻に親しみを感じやすいと私は思う。来場者からも反響があったようで、今まで欄間や獅子頭しか知らなかったのが面白かった、カンカンという彫る音やクスのにおいがよかった、といった声があったようだ。職人の方からも、普段一人で仕事をしていて他の職人の仕事風景を見ることがないのでいい刺激になったし面白かった、という語りがあり、職人にもプラスの影響を与えていることがわかる。

## 10. まとめと考察

これまでのことを踏まえて井波の現代的彫刻についてまとめていく。井波では様々な彫刻が作られており、そのモチーフや用途、コンセプトなどは多岐にわたる。このように様々な彫刻が作られるのは、井波の職人がこれまで「職人は客が求める物を作る」という信念のもと、受注生産によって客の要望に応え続けてきたからである。私が現代的彫刻として挙げたものの中にも、野中さんの動物彫刻のように、受注生産という伝統的な販売システムで作られている物があった。しかし、今日の井波ではそういった「客→職人」の働きかけによる彫刻だけでなく、「職人→客」「井波→世間」の働きかけによる彫刻も多く生まれている。「職人→客」には、田中さんの女の子の人形彫刻や西村さんのマンガ彫刻が該当する。職人が自身の作りたいものを彫り、作品で自分を表現し、客がそれを見る。これまでの受注生産の「客→職人」とは逆で、職人が働きかけ、客が受け手となるのである。「井波→世間」は、彫刻組合が主体となって現代の人々の感覚やニーズにあった彫刻作りを進める。ここで受け手が客ではなく世間なのは、彫刻組合による彫刻は、その新しく開発した彫刻自体を売ることが最終目的なのではないからだ。その彫刻を通じて井波彫刻の高度な技術を木彫刻に関心のない人々に知ってもらい、井波彫刻を注文してもらうことが最終目的だからである。このような売り込み方から、技術で「魅せる」ことで知名度を上げようという彫刻組合の意図がうかがえる。また、こうした技術の高さを彫刻で「魅せる」ことの他に、もう一つ井波彫刻をアピールする手段として展示会がある。今日ではただ作品を見るだけでなく、来場者も体験できたり実演を見学できたり、工夫された展示会やイベントがしばしば行われている。このように彫刻そのものの「見せ方」を工夫することで、多くの人に井波彫刻の存在をアピールすることが出来るのである。

これまで井波彫刻は、技術はそのままに作るものを変化させることで、時代の流れに適応してきた。これまで取り上げてきた現代的彫刻も、今日の人々の感覚や求めるものに合わせて作られた彫刻であり、これまで井波彫刻が通ってきた道の延長線にあるものと言える。

しかし、井波彫刻がこれまでと異なるのは、注文が減少したことで職人の数が減り、技術の継承が困難になってきている、という現実的問題があることである。古いものに味を見出さない人が増えたこと、「高くて良い物」よりも「安く使い捨てていい物」を買いがちな今日の消費者志向、などといった様々な要因から、このことはかつてないほど現実的問題として井波に差し迫ってきている。こういったことがある以上、これまでのように技術の「魅せ方」だけでこの変化に対応していくことは難しいのかもしれない。そうすると、今後の井波彫刻でより重要になってくるのは、彫刻の「見せ方」のほうではないだろうか。「日々是彫刻」の獅子頭の各工程での同時実演のように、見せ方を工夫するだけで、受け手に何倍もの強い印象を残すことができ、井波彫刻の存在を多くの人にアピールすることができる。また、人形彫刻の節で取り上げた異なるジャンルとのグループ展のようなであ

れば、異なるジャンルの展示を見にきた来場者など、より多くの人に木彫刻の良さを知ってもらうことができる。このように、新しいアピールの仕方を模索していくことが、今後の井波彫刻にとって重要となってくると私は考える。

## 謝辞

今回調査を行うにあたり、職人の方、井波彫刻組合の方にお話を伺いました。ゴールデンウィークに初めて本格的に調査を行い、飛び込みで皆様のところにお邪魔した際に、皆様が快く聞き取りに応じてくださったからこそ、この調査を進めていくことができたと思います。崎田さん、大野さんは、急な申し出であったにも関わらず、お時間を取っていただき、本当に感謝しています。私はこの調査で初めて井波彫刻について深く知ることになりましたが、調査を重ねれば重ねるほど、扱う木のおいや彫る時の音、そして木彫刻そのものを、良いものだと思うようになりました。拙い文章ですが、この報告書をきっかけにして、多くの人に井波彫刻に親しんでもらえることを願っています。調査にご協力していただいた皆様、本当にありがとうございました。

## 参考文献

南砺市（制作） 2014年4月 『南砺の真髄 井波彫刻』

## 参考にしたウェブサイト

「南砺いのくち樫まつり」

([http://www.tabi-nanto.jp/event/post\\_14.html](http://www.tabi-nanto.jp/event/post_14.html) ; 2015年12月11日閲覧)

「越中八尾 おわら風の盆」

(<https://www.yatsuo.net/kazenobon/guide/guide03.html> ; 2015年12月11日閲覧)

「天元突破グレンラガン 五月人形兜飾り」

(<http://dougu-imono.com/glk/> ; 2015年12月11日閲覧)

「有限会社スタイル Y2 インターナショナル」

(<http://y2int.com/> ; 2015年12月11日閲覧)

# 南砺市井波八日町通りの町家と町並み 一息づく暮らし・守り伝えていくために―

布島 あか音

## はじめに

初めて井波の八日町通りを歩いたとき、優しさや懐かしさを感じ、心が安らいだのを覚えている。観光協会の川島さんは、八日町通りの歴史を語りながら通りを案内してくれた。そのとき、偶然一軒の家に入れていただいたのをきっかけに、町並みをつくっている町家そのものにも惹かれた。広々と開放的で重厚感のあるとても古い町家と、そこから眺めた大きく美しい日本庭園に感動し、心安らいだ。

歴史と文化の薫る八日町通りにたたずむ町家での生活や、住民の抱く思いに興味を掻き立てられ、わたしは八日町通りの町並みと町家を本格的に調査することに決めた。

調査では、八日町通りで生活をしている住民や彫刻師、観光協会の方をはじめとする多くの方にお話をうかがい、数軒の町家にも入れていただいた。この調査報告では、歴史ある八日町通りの町家での暮らしぶりや住民の思いを記し、その魅力を伝えたい。また、保存への様々な課題や取り組みを紹介するとともに、町並み・町家の今後の維持について考えていきたい。

## 1. 八日町通り

### 1-1. 八日町通りの歴史―瑞泉寺門前町井波八日町通り―<sup>112</sup>

瑞泉寺門前の石畳の通りが八日町である。井波は、本願寺 5 代綽如上人が明徳元（1390）年、この地に寺を建てたことに始まる。その後瑞泉寺は一向一揆の拠点として名を馳せるが、天正 9（1581）年、佐々成政の焼き払いにより井波の町はほとんど全焼する。慶長元（1596）年、瑞泉寺がようやく再建され、八日町、六日町、三日町を中心とした門前町的形態を基盤とした市場町として井波は徐々に発展していく。八日町の町名は 1658 年頃（明暦年間）、八のつく日に通りで市場が開かれていたことによる。

近代には輸出用の養蚕や紬などを商った商人が井波に集まり、1950 年代まで、砺波地方の商業中心地のひとつとして栄えた。また、門前町の中心であった八日町通りは昔から資産家や大地主の家が多く、「おやっさま通り」と呼ばれていた。彼らは戦後の農地改革が行われるまで広大な農地を持ち、家にいるだけで生活することができるほどだった。

また、大正 14（1925）年の大火で上新町から下手の旧井波町はほとんど焼失したが、八

---

<sup>112</sup> 『越中井波瑞泉寺門前八日町の歴史』（1991 年、八日町町内会）、『越中井波タウンガイド 伝統的町家と町並みの魅力』（井波わくわく塾、1996 年）、『富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成―観光の舞台・工業の舞台―』（須山聡、2003 年）を参考。

日町通りだけは類焼をまぬがれ、現在も歴史的な町家が何軒も残っている。

現在八日町通りの町家は 50 軒余りあるが、近代以降軒数に大きな変動はない。人の住まない店舗や彫刻工房は 15 軒余りで、使用されていない空き家（しもたや）が 8 軒ある。平成 27（2015）年の八日町通りの世帯数は 26、人口は 81 人、そのうち満 75 歳以上の住民のいる世帯数は 15、満 75 歳以上の人数は 21 人となっている。



図 1. 八日町通り周辺の略図  
上新町の下に、中新町、下新町と  
続く。上新町通り・中新町通り・  
下新町通りの三つを合わせて本町  
通りとよぶ。

（イベント「まちなみアート in い  
なみ」チラシ裏面より）

## 2. 八日町通りの伝統的な町家の特徴

### 2-1. 八日町通りの伝統的な町並み<sup>113</sup>（写真 1）

八日町通りの明治・大正期の典型的な建物は、木造 2 階建ての切妻屋根の商家であった。屋根は昭和 30 年ごろからしだいに瓦屋根にかわり現在はすべて瓦葺きであるが、それ以前は石置きの板葺きであった。瓦屋根工事は自費で行った家も多い一方、「頼母子講」で毎月複数の家から集めたお金を使い、瓦屋根にした家もあったという。当時の八日町通りは、街路に沿って木造二階建ての均一な建物が連なり、同じ高さの屋根が直線的なスカイラインを描いていた。また、このころ門前町には井波商人によって設立された石造建築の銀行が 4 行あり、統一された木造 2 階建ての町家が並ぶ街路でアクセントとなっていた。八日町通りには現在も、大正 13 年建築の井波美術館（写真 2）と新築された富山銀行井波支店の 2 軒の石造り建築がある。

<sup>113</sup> 『富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成—観光の舞台・工業の舞台—』（須山聡、2003 年）、『越中井波タウンガイド 伝統的町家と町並みの魅力』（井波わくわく塾 1996 年）を参考にまとめた。



写真 1. 現在の八日町通りの町並み  
突き当りに瑞泉寺、  
その後ろに八乙女山が控える。

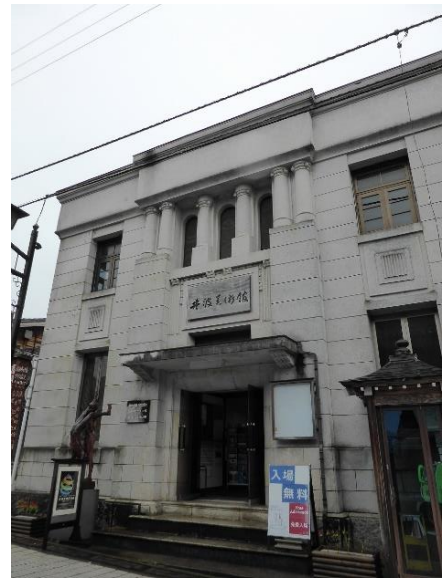


写真 2. 井波美術館  
以前は北陸銀行井波支店の  
建物で、大正 13 年の建築。

## 2-2. 町家の類別と移り変わり—2 階の高さ—

次に、伝統的な八日町通りの町並みを形づくっている個々の町家について詳しく見ていく。ただし、これらの特徴は現在どの家でも見られるわけではない。

八日町通りの町家は、江戸時代から現代まで各時代に建てられており、様々な要素による違いがある。それらを軒高によって分類し、それぞれの特徴を紹介する。

平屋はなく 3 階建てが 1 軒で、その他は 2 階建てである。平成 8 年の時点では、軒高約 2 間強の低町家が 21 軒、軒高約 2 間半の中町家が 6 軒、軒高約 3 軒の高町家が 7 軒、3 階建てが 1 軒、外観の大部分改変の家が 12 軒、鉄筋コンクリート造りが 5 軒である。

低町家は、2 階は屋根裏に相当し天井が張られず、多くは居室化されずにアマ（物置）として用いられてきた。また、低町家には 2 階開口部が格子の古格子型と、2 階開口部が横長窓の窓型の 2 タイプがあり、前者は主に江戸時代のもので、後者は明治期の家屋である。江戸時代に建てられたものに低町家が多いのは、当時奢侈禁止令がしかけていたためである。2 階が贅沢なものとみなされただけでなく、町人が 2 階から武士を見下ろすこともタブーであった。八日町通りは、上使往来という街道の一部で、奉行や巡見上使<sup>114</sup>の行列が通った。他にも、八日町通りの町家の軒高が低い理由として、井波風という井波独特の北からの強風に耐えうる構造を必要としたため、という話もあった。

中町家の 2 階は天井が頭につかえることなく、居室がとれ座敷がつくられることもあり、大正の井波大火（1925 年）以降に建てられたものに多い。

高町家は 1、2 階の階高とも高く 2 階の前面には十分な高さの部屋がとられている。

<sup>114</sup>加賀藩が領内の監視と情勢調査のために派遣した上使。

## 2-3. 伝統的な町家の表構え

八日町通りの典型的町家の表構えについて、図と表で紹介する。

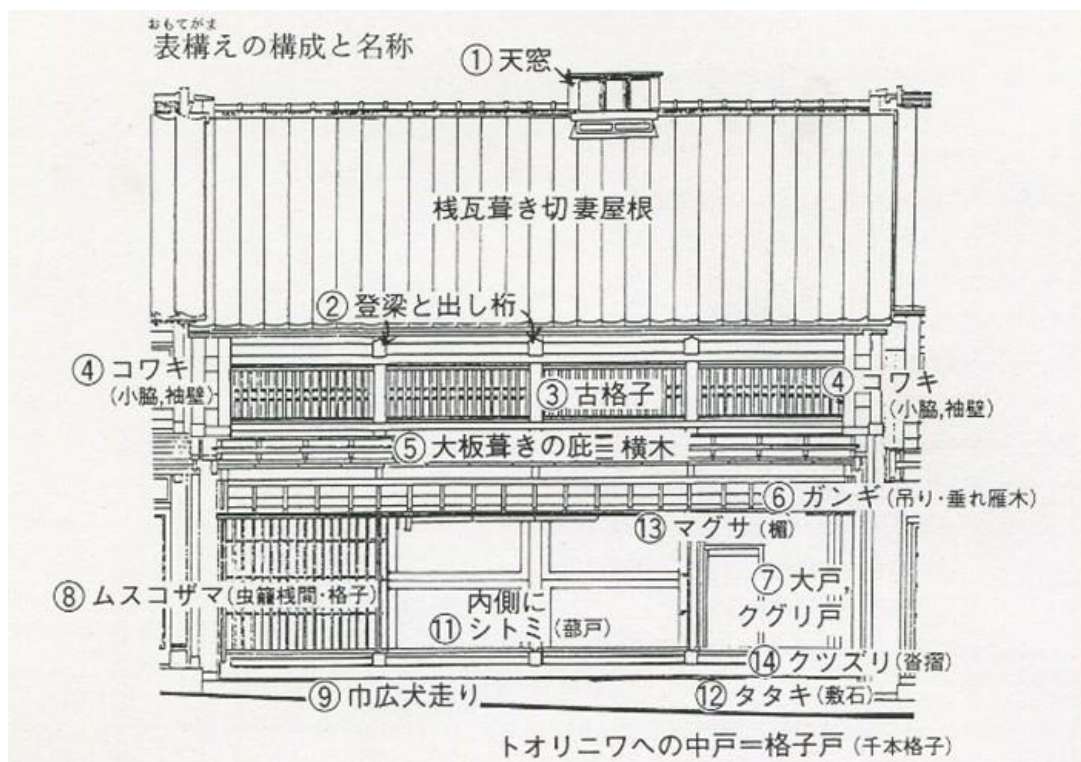


図 2. 典型的町家の正面図

『越中井波タウンガイド 伝統的町家と町並みの魅力』 p.12 より

表 1. 表構えの構成と名称

名称	役割・説明
①天窓 (天窓)	両方の隣家と隙間なく建つ町家は採光が家の表裏に限られるので、建物の中央部に光を取り入れるため設けられた天窓 (明かり窓)。
②登梁 (のぼりばり) と出し桁 (だしけた)	屋根に積もった雪の重みで軒先が折れることがないように、また家の造りを豪華に見せるために出した桁。
③古格子 (こごうし)	2 階開口部の格子で、粗めの平格子をはめこみ横棧が中央部に寄って 2 本入っている。
④コワキ (小脇)	2 階軒下の両妻側に、隣家からの目隠しのように突き出した漆喰塗りの小壁。火事するとき火が軒下を走るのも防いだ。
⑤大板葺きの庇	庇とは、出入り口や窓上に、雨雪防止等に差出した小屋根をいう。町家の 1 階庇は、最近一般の約二倍で大変深い 90~120 cm である。
⑥ガンギ	1 階庇先に付けられた日よけ、雨囲い。



⑦大戸	玄関表にあり、幅が柱間いっぱいの6尺（約180cm）、高さ約6尺の大きさの板戸。片開き扉のように玄関内側に開き、昼間は開けてあり、夜になると閉められる。
⑦クグリ戸（写真3）	大戸の一角に付けられた、かがんで出入りする小さな戸。現在八日町通りでは3軒の町家で見られる。
⑧ムスコザマ（虫籠棧間＝格子）	内から外がよく見え、外からは中が見えにくく、視線の遮断とともにプライバシーを守りながら表通りの気配が感じられる。
⑨巾広犬走り	建物の外回りの土と接する部分を石や石炭などで敷き固めたもの。幅が約4尺（120cm）あり、雨中でも軒を伝って家に帰ることができる。
⑩シトミ（蓐戸）	表に面した柱間に板戸を横にしたように上下2枚をはめ、立て溝によって上げ下げする装置。昼間は店を全面的に開放でき、夜はシャッターのように閉鎖できる。
⑫タタキ（敷石）	家の表から裏まで通り抜けている土間。
⑬マグサ	出入り口の上にかげられた幅広の横木。
⑭クツズリ（杵摺）	出入り口の下横材。床面よりやや高く、堅い木を使う。



写真3. 右手前の木の戸が大戸、その一部黒丸内がくぐり戸。閉店後の夜間の通用口として使う。強風時には昼間でも大戸を閉め、必要に応じてくぐり戸を使う。

## 2-4. 近接した隣家

### 2-4-1. 隣家境の相互利用

八日町通りの家並みで特徴的なのは、家と家との間が非常に狭いこと（写真4-5）と、その隙間の使い方である。この隙間を両側の家がほぼ均等になるように互いに入れ違いになりながら床の間、押し入れ、物入れ、階段などに利用している。この工夫は1階のみならず2階にも同様に見られる。生活状況が現在に比べ厳しい水準にあった江戸時代には、近

所同士が労力などを出し合って相互扶助する地域共同体的関係は、冠婚葬祭などをはじめ日常的にも現代以上に強かったと考えられる。また、宝暦 9 (1759) 年の大火から弘化元 (1844) 年の大火まで八日町は 3 度もの類焼被害を受けている。このような歴史的・社会的状況の中で、隣家境の共同利用が自然な形でなされたと考えられる。

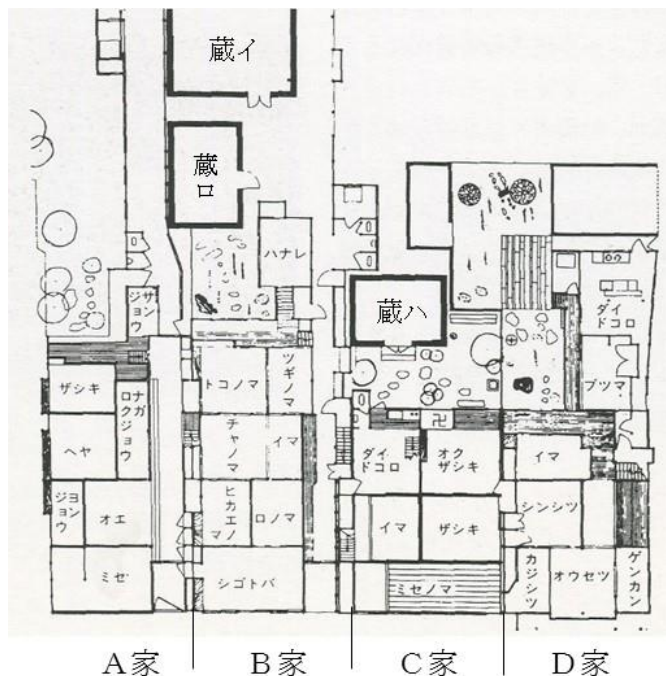


図 3. 八日町通りの 4 軒の町家の相互利用  
現在蔵ハは取り壊され庭になっている。

『越中井波タウンガイド  
伝統的町家と町並みの魅力』 p.33 より

写真 4-5. 独立家屋に建て替えられてからの家と家の間 1 メートル  
余りのところもあれば、わずかに数十センチのところもある。

#### 2-4-2. 借地に建つ町家

井波は全国でも珍しく、地面と家の持ち主が異なるケースが多い。これは八日町通りだけでなく本町通りでも見られ、土地や家の売買を難しくしている。現在でも、年間決まった額を地主に納める慣習は見られるという。家の持ち主は、自分の家の建っている地面も所有したいため売ってほしいと言っても、地主は先祖代々の所有物であるためなかなか売りがたがらない。しかし、売ってほしいといわれた時が売り時だと住民が話すように、一度その機会を逃すとなかなか買い手が見つからず後悔する地主も多いという。また、家の持ち主は家に住まなくなると地主に土地を更地にして返さねばならないため、家を壊すしかなく、これが井波の人の流出の大きな原因となっている。

独立家屋を建てる際の隣家同士のもめごとは、土地をめぐるでも起きる。自分の家の土地と隣の家の土地の境界線は、どちらかの家の建て直しの際に初めて詳しく調べられ、線引きされる場合も多い。祖父同士の土地の約束を孫の代に忘れていてもめごとになる、というケースもあるそうだ。「昔の尺の当て方おおざっぱ。家とか土地は自分のものというよりお互い思いやり、うまくやっていくもの」と八日町通りの住民が話すように、今は厳密な土地の所有権も昔はもっとゆるやかなものであったと思われる。

## 2-5. 伝統的な町家の間取り

町家の敷地は間口が狭く奥行きが深いのが特徴で、「うなぎの寝床」ともいわれる。間取りは前口から裏へ通じるタタキ（通り庭）の通路に沿ってミセ、オイ（茶の間）、ナカノマ、ザシキ、台所、蔵などに続いている（図4）。

おもては商空間、中央部に生活空間、裏に設備・収納空間がとられているが、おもてと中央部のほとんどは接客空間に利用されてきた。現在の住宅が、家族や個人のプライバシーが重視され閉鎖的な傾向にある一方、伝統的な町家は家族のつながりがより強固になり、家族以外の人にも開かれた開放的な空間であると言える。

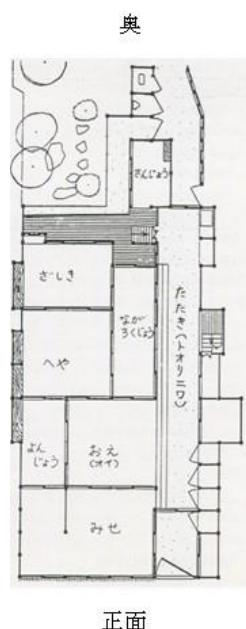


写真 6. 現在の八日町通りで一番太い木が使われている家の玄関先の桢の内造り  
上部の天窓から光を取り込む。



図 4. 典型的町家の平面図  
『越中井波タウンガイド  
伝統的町家と町並みの魅力』  
p.29 より

### 2-5-1. 桢の内造り（写真6）

広間・オイと呼ばれる部屋の上部に頑丈な井桁等を組み、三段構えにヒラモン<sup>115</sup>をめぐらして「桢の内造り」という特徴的の構法が見られる家もある。これは壁の少ない日本民家で、重さを支えると同時に建物のねじれや歪みに備えて二重、三重に梁を組んだものである。雪の重みに耐えられるよう、雪国の富山では径も太い。現在八日町通りでは10軒ほどの町家で見ることができる。

<sup>115</sup>柱と柱の間に結ばれる背の高い差鴨居（サシガモイ）。

### 2-5-2. 背戸（裏庭）（写真 7）

八日町通りの家では、主に母屋の奥に、庭を持つ家がほとんどである。これを背戸<sup>116</sup>と呼ぶ。八日町通りに面していない側の大屋根の雪を下すための、数畳ほど<sup>117</sup>の広さの庭である。



写真 7. 八日町通りの町家の背戸

背戸には「かみ便所」という便所を持つ家もあった。これは明治・大正期ごろにつくられ、お坊さんやお客さんが泊まるときに使用した便所で、家族と同じものを使用してもらうことが恐縮なためであった。かみ便所のない家は、客を泊める部屋に近いよう、便所はなるべく家の奥につくられたという。

また、庭に井戸を持つ家も多く、上水道が来る前はすべて井戸水で生活していた。現代でも、モーター式にはなったものの、昔の井戸を花の水やりや庭の掃除に使用している家もある。

最近の町家の庭について、井波町に住む植木屋の 70 代の男性は、「建て変えるとき、住まいとか駐車場のスペースを広げて庭を縮小する家が多いねえ。庭の手入れをちゃんとできていない家も多いしもったいないねえ。昔ほど庭にかまわなくなってきたよ」とさみしそうに語る。

### 2-5-3. 蔵（写真 8-9）

井波町全体に蔵を持つ家が沢山あり、昔は八日町通りの家のほとんどが持っていたという。現在も八日町通りでは、14 軒の家が蔵を維持している。蔵には、夏・冬の道具（火鉢など）や祭りのときなどに家に人を呼ぶための御膳、結婚式・葬式の道具などが片付けられている。また、屏風や季節の掛け軸、味噌造りの甕や道具も置かれる。昔は蔵に骨董品を持ち、景気が悪くなるとそれを売ったという話もあった。

しかし現在では、老朽化が進み維持が困難になり、蔵を壊してしまったという家も多い。蔵の土壁は長年雨がつたうと、粘りがなくなり砂のようにパラパラと崩れ落ちる。その他にも屋根の雨漏りなどがあり、直すには経済的な負担が大きいという。蔵を維持している家の 70 代の女性は、「今お蔵はどんどん壊されているから、周りには残しておきなさいと言われるねえ」と、可能な限り蔵を残したいと話す。

<sup>116</sup>背戸とは、裏庭、家の裏口、後ろのほう、裏手を意味する、すたれつつある標準語である。本稿では裏庭という意味。

<sup>117</sup>実際には数畳よりずいぶん広い背戸を持つ家も多い。



写真 8. 通りに面した蔵



写真 9. 蔵の内部使用例

### 3. 八日町通りの町家での生活

それでは、上で見てきたような八日町通りの伝統的な町家での生活は、具体的にどのようなものなのだろうか。本節では例として、八日町通りで春田酒店を営む春田邸と、いわくら民芸を営む岩倉家の 2 軒の町家を紹介する。そして、多くの住民は町家の住み心地をどのように感じているのかを見ていく。

#### 3-1. 春田邸の場合

八日町景観委員会委員長を務める春田孝さんは昭和 14 (1939) 年生まれで、奥様と二人暮らし、長男・長女は井波町外在住である。現在も会社勤めを続けながら、週末 3 日間はボランティアで八日町のガイドをされている。祖父の嘉一郎さんが造り酒屋をはじめ、父親も後を継ぐ。父親の代には女性のお手伝いさんがおり、家族のようにともに生活していたという。現在は造り酒屋ではなく、小売りのみを行っている。八日町通りの東側、瑞泉寺から見て下手に 17 年前に建て直した酒屋と生活スペースの新家(写真 10)、上手に築 150 年の旧家が並ぶ。

まずは瑞泉寺から見て下手に位置する新家を見ていく。新築前は築約 150 年の、福野から来た曾祖父紋蔵さんの代に建てた家があった。紋蔵さんは養蚕ブームの中で、2 階で 10 年ほど養蚕を営んでいたが、後に数々の名誉職に就く。その後父親の代に造り酒屋をしていたときは 2 階に酒づくり職人を寝泊りさせていた。祖父が亡くなってから 17 年前に春田さんが古い家を取り壊して新築し、現在こちらの家のみで生活している。1 階には壁を白く塗り天井が高く、柱が抜きこんでいる土蔵造りの古民家風の応接間をつくる(写真 11)。もともとプライバシーのない間取りだった 2 階を、子どもが大きくなったこともあり、壁で仕切って個室を設けた。新築前は玄関から奥まで廊下続き、台所が庭に面してあり、その後ろに通り庭が続いていた。トイレは通り庭にあり下駄を履いて行っていたという。



写真 10. 春田邸新家の正面



写真 11. 新家の古民家風の応接間

白丸内はA中庭に面した大窓。応接間に居ながらミセ越しに通  
りが見える。屋根雪を落とす貴重なスペースともなっている。



図 5. 現春田邸 1 階の平面図

(野口莉奈、2013 年、『町屋を利用した木彫刻業の展開』より)

息子が家を継ぐと言ったために新築したが、息子は妻の母の実家で暮らすことになり帰って来なかった。しかし、冷暖房の整った住みやすい住まいになったため、古い家を壊したことに対する後悔はないという。

次に、上手の旧家を見ていく。養蚕をしていた隣家を、祖父嘉一郎さんの代に購入した。築150年、約50坪で、現在もそのままの状態が残っている。かつて養蚕に使われていた2階は、現在はアマ（物置）でタンス等を置いている。1階の八日町通りに面した前面を彫刻師に工房として貸している。後面には座敷の間がある。下手の家を新築してからほとんどこちらに人を通すことはなくなったといい、「新築の家の快適さに慣れたらもうこっちでは住めないねえ」と話す。下手の家を新築する際、こちらの家も建て直そうと考えていたが、祖父の猛反対で断念した。「今となっては歴史のある家を残しておいて良かった」と語る。

旧家の後ろには150坪の日本庭園（写真12-13）が広がり、落ち着いた風情で生活空間に溶け込んでいる。そこにはもともと米蔵、麴蔵、みそ蔵、つくりこみ蔵と4つの蔵があったが、50年ほど前に壊し、20坪の庭が150坪に広がった。まちなみアート in いなみ<sup>118</sup>では春田邸の庭が開放され、訪れる客の目を楽しませている。

家の今後については、「（新築した）左の家は息子が維持していくと思うけど、こちらはわたしたちがいなくなったらしもたや<sup>119</sup>になる。誰かに貸すことになっても構わないから、できれば残してほしい。」と語る。

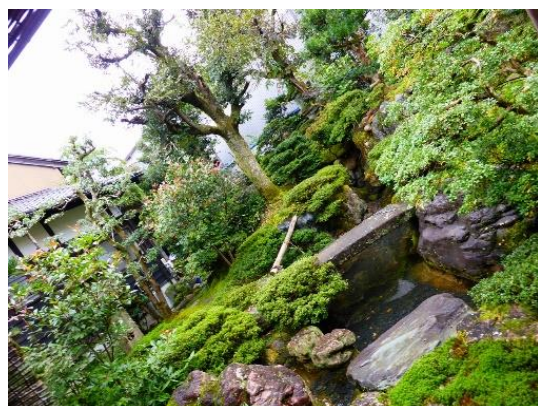


写真 12-13. 今では手に入りにくくなった国内各所の名石の巨石をふんだんに配した背戸白丸内ベンチのある辺りには、もともとかみ便所があった。

### 3-2. 岩倉家の場合

いわくら民芸（写真14-15）を営む昭和12（1937）年生まれの岩倉一浩さんのお宅を見せていただいた。奥さんは亡くなり長男は井波町外在住で、岩倉さんは現在一人暮らしをされている。岩倉家は、明治初期に建てられた築150年近い町家である。江戸時代には「高瀬屋勘兵衛」という屋号で、高瀬村<sup>120</sup>から来た、本家「高瀬屋与右衛門」（現八日町の岩倉酒店）から分家した家である。

<sup>118</sup>詳しくは6-1で紹介する。

<sup>119</sup>空き家のこと。詳しくは5-2で述べる。

<sup>120</sup>かつて富山県東礪波郡にあった村。



写真 14. いわくら民芸の正面



写真 15. 天気の良い日は商品が店先に並ぶ。松竹映画『釣りバカ日誌』やドラマの撮影にも使われた。



写真 16. 「のっぺらぼうになった」と岩倉さんが話す三日町通りに面した外壁

父親が子どものころ、八日町通りに面した店部分と、家の裏手に職場があり菓子屋を営んでいた。父親の進学にともない一家は京都に移り、その間 10 年余り、この家は空き家にならないよう、留守番として従業員であった人に住んでもらっていた。戦火が厳しくなった岩倉さんが 6 歳ごろ、一家は八日町通りに戻り、再びこの家で住むようになる。

父親は、家をいじることが好きで階段やトイレの付け替えなどあちこちを改装したが、大きな間取りの変更等はしておらず、古い時代の形式は残っている。昭和 30 年代終わり、板葺き屋根から瓦屋根にした。このとき、瓦屋根の重みに耐えられるよう家の補強のために添え柱をした。

昭和 30 年代後半、八日町通りに交差する三日町通りの道はば抜幅のため、三日町通りに面する左右の家を半間分ずつ削るという工事が行われ、岩倉さんの家の間口は 4 間半から 4 間になった。「前は小屋根があって家の形がもっとちゃんとあったけど、軒先がなくなつてのっぺらぼうの家になった。断崖絶壁の家になって、格好が悪くなった。その時代は高度成長期で、景観保護の考えはなかったし、車時代が来たから」と話す (写真 16)。

昭和 55 (1980) 年ごろ、今は亡き奥さんが門前町という立地を生かして何かしようと民芸店を始める。店は当初一間分の間口から始め、応接室だったところを徐々に広げ今の四間になった。開店時に正面の扉を中がよく見えるガラス戸にした。昭和 60 年代にトイレ・浴槽・台所の改装をした。台所改装時に、台所に組み込まれていた井戸をなくしたが、それまではすべて井戸水で生活していたという。



母屋の裏にせど(庭)があり、昔はそこに蔵があったが、昭和40年代に古くなり壊した。岩倉さんが子供のころには、借家2軒を持っていたが、蔵を壊す際に売ったという。借家は、2部屋程の平屋建ての長屋で、寝に帰るだけのような小さな住居だったという。

岩倉さんが子どもの頃のこの家の雪にまつわる思い出を語ってくれた。特に、雪下ろしや屋根にまつわるエピソードが印象的であった。屋根雪下ろしには近在のお百姓を雇うことも多かったが、子どもたちも大人の手伝いをした。岩倉さんは小学生のころ、八日町通りに面した方の大屋根の雪を下すとき、家の周りに板を縦に張りめぐらせて雪を下し、雪の壁ができたのをのこぎりで切り、そりに乗せて雪の塊を捨てに行ったという。

瓦屋根に変わる前、板葺き屋根には厚さ5ミリ程の栗の木の板が使われ、毎年職人を雇い、屋根のメンテナンスを行っていた。職人は1日中屋根に上って、まだ使える板はそのまま残し、割れた板や雨で老朽化した板を取り換えて新しい板を差し込んだ。「一気に全部の板を変えるんじゃなくてローテーション。助ける板(まだ使える板)は助けよう、経費節減、安くあげるためです」と話す。板葺き屋根の頃は雨漏りも多かったが、瓦屋根になってからはなくなったという。

岩倉家の今後については、「2人の妹はここが実家だから、残してあげたい。墓も地元にある。息子がどうするかわからないから、どうなるか前人未踏おひとりさまの老後を生きることになる」と話す。

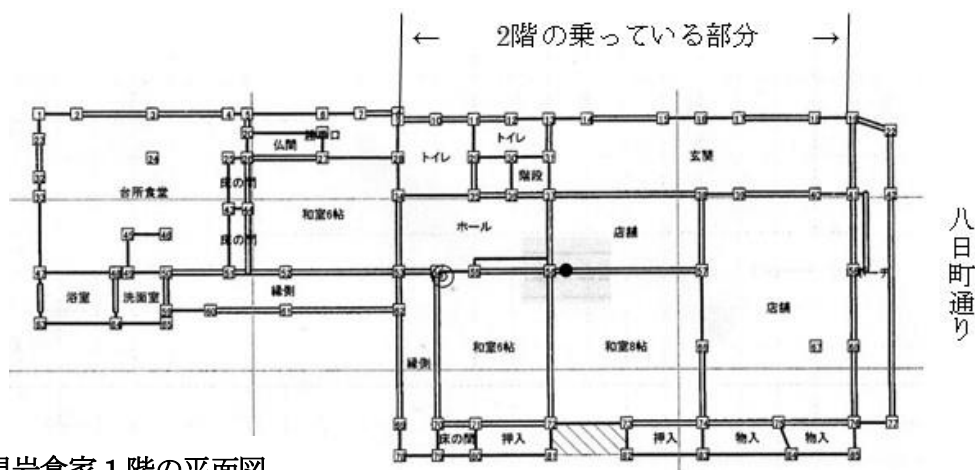


図6. 現岩倉家1階の平面図

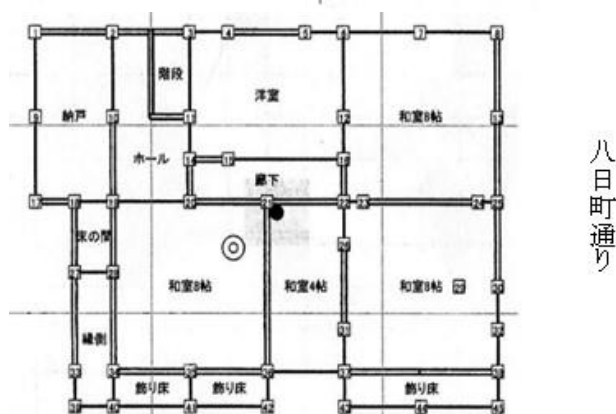


図7. 現岩倉家2階の平面図

### 3-3. 町家の住み心地

以上、二つの町家の歴史を振り返った。それでは、多くの住民は八日町通りでの町家暮らしをどのように感じているのだろうか。現在では、水回りや居間など、毎日の生活で使う部分はリフォームをしつつ、座敷や仏間、玄関先などには手を入れずに、昔の面影を残している家が多い。

#### 3-3-1. 住民の感じている町家暮らしの大変さ・困ること

住民は日々の町家生活の中で様々な大変さを感じているようだ。話を聞いた住民のほとんどが挙げたのは、冬場の厳しい寒さである。エアコンのなかった時代には、囲炉裏やほりごたつ、あんかと呼ばれる簡易足温器で寒さをしのいでいたというが、それでも寒さは大変なものであった。70代の男性は、「2ミリほどのガラスの先は外はだから、隙間風もあるし、外と同じくらい寒い。厚手のカーテンをして、襖を閉めるけどそれでも寒い。ストーブでも間に合わないねえ」と困った様子で話す。昔の町家では、便所に行くには靴を履いてコンクリや土の通り庭を歩いていかなければならず、屋根はあっても外のように寒く、子どもの頃は暗くて便所に行くのが怖かったというエピソードも聞いた。暗さは家屋全体にも言えることで、隣家同士の距離が近く家の左右に窓が取れない町家は、部屋に直射日光が入らず薄暗いのである。

冬場の雪下ろしの問題もある。屋根が板葺から瓦に変わり寒さは少し和らいだ。しかし瓦屋根になったことで、住民が屋根に上り雪下ろしをすると、滑りやすく落下の危険があるために、少し雪を残してある程度の雪しか下ろせない。現在では積雪も少なくなり滅多に屋根雪を下ろすこともなくなったが、どうしてもというときには業者に依頼する家が多くなったという。

また、八日町通りの町家がゆるやかな坂に建っていることや、雪の重みが原因で家が年月の経過とともにゆがみ、襖戸の枠が傾き、襖戸をスムーズに動かしくくなるという話もあった。そのため、襖の枠に木の板を立てて挟むことで枠が下に傾くのを防ぎ、襖戸がスムーズに動かせる隙間風を防ぐ工夫をしているそうだ。伝統的な町家で生活をするには、このような工夫が欠かせない。

そして、住民はみな町家生活の金銭的な負担の大きさを口にしていた。具体的には、家が広いことや断熱材がしっかりとしていないことによる電気代やガス代などの光熱費の高さ、屋根の雪下ろし、庭の手入れ、家のメンテナンス費用などである。家のメンテナンスについていうと、日に日に老朽化が進む町家は毎年どこか直さなければ維持できず、その費用は高額である。八日町通りのある家の改装費用と維持費用を紹介すると、新築するのに4000万円、瓦の総入れ替えで200万円、床下を替えるのに1坪20万円、植木屋による庭の手入れは2日間の作業で1回20万円だという。70代の男性は、「床下とか、屋根瓦を1回替えるともものすごい金額になる。材料も作業費も高いから。町家を維持するのは外の人の想像以上に大変」と話す。また、植木屋の70代の男性は、伝統的な造りの町家を建てる

家が減っている理由を「伝統的な町家風の家を建てるのは、普通の家を建てるよりずっと時間がかかって、1年ほど家に住めない。その間に住む家もないといけないしお金もかかる」と話す。伝統的な町家は現代の家に比べ、維持と建設両方に莫大な金額がかかるのだ。

町家暮らしで困ることは他にも様々な意見が挙がり、地面と家の距離が近いために湿気が多いという声や、家がとても古いためにきれいにならないところもあり掃除が大変という声、部屋の間取りにプライバシーがない、隣の家音が気になるなどという声があった。

そして、隣家同士壁一枚を隔てるのみで、入り組んだ間取りになっている町家独特の特徴ゆえに、時として隣家同士の人間関係に影響を及ぼす場合があるという。それは、それまで繋がっていた家同士を切り離し、どちらかの家が独立家屋に建て替える際に起きる。建て直しの際には、現代の建築法の建蔽率が適用され、隣家との間に一定の空間をとらなければならない。自分の家を建て直そうとした場合、入り組んだ隣家の部屋を犠牲にしてもらわねばならない。そこで、相手が「壊されては困る」という主張を変えてくれなければ、簡単に建て直すことはできない。本来相手の家がお金を出すはずのところを、どうしてもと意見を聞き入れられなかったために、建て替える側がしぶしぶ費用を負担したという話も聞いた。両家が納得のいく話し合いができるのが理想だが、現実にはなかなかそうもいかないこともあり、これがきっかけでけんかになり、隣家同士仲が悪くなる場合も少なくない。

冬には隣家同士で「雪騒動」と呼ばれる雪始末の争いも起きることがある。今でも起きることがあり、これを防ぐために行政では対策をとっている。各家が、道路に勝手に雪を捨てることを禁止し、町ごとに決まった時間に、道路脇や道路真ん中にある用水に雪を流すよう取り決めをしている。

### 3-3-2. 住民の感じている町家暮らしの良さ

上で見てきたように町家暮らしには大変さや困ることも多いと語る一方で、住民はそれぞれに愛着や良さを感じている。挙げられた中で一番多かったのは、夏の快適さである。クーラーいらずの町家は、まさに「天然の冷房」であるという。また、夏には和室の襖戸を簀戸に替えることで、涼しさを肌と目で感じることができ、他の季節とは違った雰囲気演出できる。そして、生活する中でも、伝統的な町家に趣や奥ゆかしさを感じ、落ち着くという意見も多かった。70代の男性は、「座敷や縁側のある家で育つと自然と情緒が芽生える。現代の家は味気ないねえ。」と話す。町家の広さを挙げる住民もおり、襖戸を外すと部屋が広く使えて人が集まるときに便利という声や、広々としているだけで落ち着くという声を聞いた。また、70代の女性は、「広い大きな家に何世帯もそろって、おじいちゃんおばあちゃんからひ孫まで一緒に暮らすことより良いことはない。若いひとは年寄りと一緒にすることで言葉なしに古いことを学ぶ。別々に暮らすのはよくないよ」と話す。大きな町家で世代をこえて生活を共にすることで、家族内の結びつきが強まり、なごやかな団らんのある場をつくっていることを物語る。

またかつての日本ではどこもそうであったように、住民同士の結びつきは現在よりも緊密であったと懐かしそうに話す。昔は隣家同士、味噌や醤油の貸し借りやおかずのやりとりを日常的にしたという話や、家族のような関係であったという話を聞いた。興味深いエピソードとして、70代の男性はある隣同士の2軒の家を指さしながら、「あの家とあの家は電話室が共通で、その左右に戸があって繋がって僕なんか子供の頃、その戸を開けたり閉めたり行ったり来たりして遊んだもんだよ。昔は電話が貴重だったから2軒で1台を共有していたんだ。2軒の家を道路に出ずに出入りするのが子供心にも面白かった」と語った。

それに比べ今は、「八日町通りの人間関係も都会風になってしまった」「昔と全然違う」などと、希薄になった近所関係にさみしさを口にする声もあった。「近所付き合いは特にしていない。煩わしい。ここ（八日町通り）は深く関わらなくてもいいから楽」という70代の男性もいた。

しかし、現代もなお近所同士は親しいものであると喜びを感じている住民も多くいる。彼女たちは、もらいものをお裾分けし合うことや、土産を持っていくことを挙げていた。他にも、外出や旅行の際になんとなく家の見守りを頼むという声や、店を少し離れる間に客が来た場合伝言を頼むという声もあった。また、60代の女性は「都会なんか行くと横に誰が住んでおられるかもわからんけど、そう思うとここはいいねえ。」と笑顔で語る。

### 3-3-3. 住み心地を意識することはないという声

住民から、町家暮らしについて様々な良さや苦勞が挙げられたが、子どもの頃から町家で暮らしてきたという住民の中には、その生活ぶりについて特に意識することはないと話す住民もいる。

60代の女性は、「昔からここに住んでいて町家しか知らないし、住んだことがないから、それが当たり前で不便・困る・辛いとか、好き嫌いとかわからないねえ」と話す。他にも、台所や水回りなどの生活空間を、老朽化に合わせ所々リフォームしているために生活の不便さを意識することはあまりないという声もあった。

隣家境が薄い壁一枚の仕切りしかないことで、騒音などに気を遣うことや、ストレスを感じることはないかを住民に尋ねた。隣の生活音が聞こえるが、そんなにストレスに思うことはないという意見が多かった。境の土地を相互利用する場合、自分の家は主に1階部分で生活し、隣の家は2階部分で生活するというように、互いに気を遣い合うまぐ生活してきたと話す住民もいた。しかし、ストレスを感じないと話すのは、八日町通りでの町家生活が長く、当たり前になっているためであるかもしれない。上新町に住む東京都出身の女性は、とても気を遣うし、隣の音も気になってしまうと話していた。また、八日町通りの住民からは、坂の上の家から下の家へは音が伝わりやすいが、逆は伝わりにくいという声も聞いた。

## 4. 八日町通りの住民が抱く町家・町並みへの思い

このように、住民は様々な良さや大変さを感じながら町家で生活をしているが、住民の声をもう少しよく聞くと、彼らは多少の大変さを感じつつも、歴史ある八日町通りの町家を守っていききたいという強い思いを抱いていることが伝わってくる。「住みにくくても守っていききたい」、「維持するにはものすごいお金がかかる。でも守らないといけない。だから希少価値がある」と話す住民の言葉に胸が熱くなった。

八日町通りの住民は、自身の暮らす町家、あるいは通りの近所の家の維持に対し、どのような思いを抱き、今後をどのように見据えているのだろうか。

### 4-1. 自分の家への思い

はじめに、自身の家への思いを見ていく。歴史を刻んできた町家に住んでいることにありがたさや重み、誇りを感じ、それゆえに世代を越えて守っていかなければという強い責任感、使命感を抱いているという住民の声が印象的であった。彼らは、「息子がどうするかはわからないが自分の代では壊すことができない」「先祖に申し訳なくて壊すことができない。」と話す。70代の女性は、「古い中にいかに上手に向き合い直していくか。建て替えるお金があるとかないとかの問題でないねえ」と話す。また、八日町通りの歴史ある「町並み」を守りたいという思いから、自身の家を維持していききたいと考えている住民も多い。

しかし、維持したいという思いはあるものの、実際には家の存続が難しいと漏らす住民も多い。70代の男性は、「息子にもできれば家を守ってほしいけど、あちこち直して維持するには膨大なお金がかかるし、無理に壊さないでとは言えない」と話す。60代の女性は、「特徴のある枠の内造りの玄関だけでも残したいんだけど、枠の内の木材はもう手に入らないって。それにそこだけ残して改築するのは、耐久性の問題で無理みたい。この家は改築のときに建築業者さんに『持ってあと50年』と言われた」とさみしそうに話す。他にも、継ぐ者がおらず店は自分の代で閉め、家もその後は分からないという声や、子どもは都市部に出て帰って来ないだろうとさみしそうに話す声を聞いた。八日町通りの住民は高齢者の割合が非常に高く、若い世代は富山市や東京などの都市部に出て八日町通りに戻らないケースが多く、家を継ぐ者がいない家が多いのが現状だ。このように住民の多くは、本音では守ってほしいけれど、維持の大変さや子どもの現在の生活を考えると、無理に家を継がせることはできないと考えているようだ。中には、自分の代で家を手放すことをあまり否定的に捉えていない住民もいた。

一方で、家の今後について明るい言葉を口にする住民もいた。息子、孫と後継ぎがいるために八日町通りに家を購入したという声や、息子は現在都会に出ているが、将来は八日町通りに帰ってきたいと言っているという声もあった。息子が東京にいるという70代の男性は、「今の時代、新幹線や飛行機もあって距離の遠さを感じない。だから守っていけるだろう」と話す。

また多くの住民は、「子供が住まなくてもしもたやになるくらいなら、彫刻師にでも来てもらえたら」と話していた。しもたやが増え町並みがさみしくなること、そして死後、自分の家の維持が困難であることを懸念して、家を彫刻師等に貸して守っていくことに積極的な姿勢が見られた。

#### 4-2. 近所の家への思い

次に、同じ通りの自身の家以外の家への思いを見ていこう。住民は、歴史のある家々が建て直され、八日町通りの古い町並みが徐々に変わってゆくことをどのように感じているのだろうか。

住民はみな口をそろえて、古い家々が建て直されることがさみしいと語っていた。しかし、それぞれの家に都合があるということや、古い家の耐久性の限界、寒さなどの住むことの大変さから、残念ではあるものの仕方がないと考えている人が多いことが分かった。後継ぎが帰ってくるために新築を決心した家もあるという。「古い家を建て直す人が多いのはさみしいけど、町家で暮らすことの大変さを知っているから、無理（住めない）という気持ちはよくわかる」という声もあった。70代の男性が「さみしいけど、この通りの町家もいま建て替えの時期になってきている」と漏らすように、いくら家を維持していきたいと願っても、家の耐久年数には限界があり、八日町通りの家々には建て替えざるを得ない時期が来ているようだ。このように、それぞれの人に町家を残したい、残してほしいという思いはあっても、各人の思いだけではどうにもならないことがあるのも事実である。

#### 4-3. 住民の感じる町並みの変化

住民の方々に町並みの思い出をうかがったところ、今は閉めてしまった商店が賑わいを見せていた頃の町並みを懐かしむ声が印象的であった。「店が減って、来る人が減って、時代が変わってしまった」と、変わりゆく八日町通りにさみしさを口にする住民も多い。

また、昭和半ばまでは多くいた子どもが現在では数人となってしまったことをさみしがら声もあった。商店の経営が成り立っていたころはよかったが、今では若い世代が都市部に出ていくことが多いという。都市部の大学を出た若者は、都会の良さを知り、八日町通りに帰らず向こうで家庭を持つケースがほとんどである。

今後の八日町通りの町並みをどう見据えているのかと問うと、多くの住民からは悲観的な答えが返ってきた。彼らは、町の住民の平均年齢が高く、活性化は難しいということや、若い世代が八日町通りに戻ってこないために、後継者がいない店ばかりで、店は途絶えるしかないのではと話す。40代の男性は、「10年先の八日町通りはどうなっているのか」と、八日町通りに閉塞感を感じていると漏らす。他にも、これからさらに空き家が増え、それらの借り手が見つからないのではという声もあった。多くの住民は、若者の流出と高齢化による後継者不足を危惧し、今後の八日町通りの町並みと町家の維持に不安を抱いているようだ。

## 5. 町並み・町家保存への取り組み

### 5-1. 町並みの変遷——商店の衰退

#### 5-1-1. かつての賑わい

昭和 40 年代（1965～1974）ごろまで、瑞泉寺門前町（八日町、三日町通り、六日町、本町）は、城端・福野・福光と並ぶ砺波平野南部の商業中心地の一つであり、40 軒近くの様々な商店が並んでいた。ここに来れば日用品や食品が一通りそろそろ、言うならばショッピングセンターのような通りであり、井波町内や周辺農村部から買い物客が訪れていた。70 代の男性は、自身が小学生の頃、八百屋、魚屋、米屋、乾物屋、造り酒屋、牛乳屋、菓子屋、めし屋、うどん屋、炭屋、道具屋、陶器屋、本屋、呉服屋、小間物屋などが並んでいたことを記憶している。特に多かったのは呉服屋で、5 軒ほどあった。また、参詣者を泊める旅館が 4 軒ほどと、近所には遊郭もあったという。

特に、毎年 7 月 22 日～28 日に開かれる瑞泉寺の太子伝会では、八日町通りは大変な賑わいをみせた。本町通りから八日町通りまで多くの露店が並び、県外各地からも訪れる参詣者の長蛇の列が続いた。古くは、八日町通りの食物屋や土産店では収入の大半をこの 1 週間で稼ぎ、あと半年は寝て暮らせるほどだったという<sup>121</sup>。

#### 5-1-2. 商店の衰退

しかし井波及び八日町通りの中心地としての機能は 1960 年代以降徐々に低下していく。1972 年の加越能鉄道加越線<sup>122</sup>の廃止に象徴されるように、自家用車の普及によって、郊外地域にできたショッピングセンターに人びとは買い物に行くようになった。さらには、砺波市・高岡市など、より高次の中心地に人が流れる傾向が強まった。これらの時代の流れにより、八日町通りの商店は経営が困難になり、次第に減少していった。昭和 40 年代後半頃から、太子伝会の賑わいも漸減していった<sup>123</sup>。それでも 15 年ほど前までは、スポーツ店や本屋など、現在より様々な商店が残っており、地元住民が利用していた。現在の八日町通りは、薬局・司法書士事務所・燃料店・彫刻刀屋・呉服屋・骨董品店・食料品店・蕎麦屋・まんじゅう屋・まちの駅がそれぞれ 1 店ずつ、酒屋（造り酒屋・小売り酒屋）・喫茶店・土産物店が 2 店ずつ、彫刻店及び工房が 10 軒あるだけになっている。日用品などを置く商店は少なくなり、飲食物を扱う商店や、高度経済成長期以前までなかった彫刻関連の店舗・工房が中心になってきていることがわかる。高齢化に加え、後継者がいない商店がほとんどで、今後店じまいが更に加速していくことが予想される。

商店が衰退する一方、しもたや開放事業、1975 年の井波彫刻の伝統工芸品指定が契機となって、八日町通りと本町通りには彫刻師が集結するようになる。八日町通りでは現在、

<sup>121</sup>八日町町内会、1991 年、『越中井波瑞泉寺門前八日町の歴史』より。

<sup>122</sup>小矢部市石動駅と東礪波郡庄川町（現砺波市）庄川駅を結んでいた単線の鉄道路線。

<sup>123</sup>昭和 60（1985）年ごろの瑞泉寺騒動（住職の横領事件）が大きな契機とも言われる。

10 軒ほどの彫刻工房がある。中には借りていた家を購入し、住まいとした彫刻師もいる。

## 5-2. しもたや増加問題

### 5-2-1. しもたや開放奨励制度

1960 年代以降、特に 1970 年代以降、郊外地域に次々とできるショッピングセンターに押され、移転・廃業する商店が増加し、空き店舗が目立ち始めた。「しもたや」とは、人の住まなくなった空き家や、商売をやめ空き店舗になった家をいう。そこで井波町では商工会を中心として、中心商店街の空洞化抑制と活性化を図るため、昭和 56 (1981) 年から「しもたや開放奨励制度」を始めた。これは「井波町商店街等整備対策事業」の一環で、商店街に位置する空き店舗や空き家を事業用に賃貸する所有者に 1 軒あたり 20 万円の補助金が交付されるというものだ。これにより、月 5、6 万円の貸し賃が、最初 3 年間実質半額となるため、借り手が入りやすくなる。現在この制度が適用されているのは 9 軒ほどで、彫刻業の工房、飲食店、土産店として利用されている。

このような空き家対策は、全国の多くの地域ではバブル崩壊後の 1990～2000 年代頃から行われるようになった。それと比較すると、井波の取り組みは全国的に見て非常に早いものだったといえる。

しもたや開放奨励制度を利用して、実際に家の一部を彫刻師に工房として貸しているある家の住民は、「うるさいから粗削りはやめてもらって、仕上げ作業だけにしてもらっている。夜も 7 時にはやめてもらねえ」と話す。20 代の彫刻師は、「家の人が生きているところを通して急にトイレに行ったら家的人是にびっくりするから、トイレは借りている家を使わないで外のトイレに行っている」と話す。また、借主が借りているスペースを改装する際や、改築が必要になった際は、それぞれの家によって貸主と借主が話し合っ費用を出しているそうだ。このように、町家を貸す側と借りる側が意思を疎通しあって、トラブルにならないよう工夫していることがうかがえる。

しもたや開放奨励制度ができる以前にも、八日町通りを離れて生活することがあれば、人に家を貸していた。実際に家を貸していた 70 代の男性は、「家賃で儲けるというよりは、しもたやにならないように。家は人が住まないとばたばた（ぼろぼろ）になるから、手が行き届くのは嬉しいこと。冬雪が降ると、『そろそろ雪下ろしをしないといけないですよ』と彼（貸主）から連絡が入るんだよ」と話す。このように、しもたやになるはずの町家を貸し、住まいや店舗として利用してもらうことは、町家の維持にも大きな役割を果たしているといえるだろう。



また、現在八日町通りでは、しもたや開放奨励制度とは別の形<sup>124</sup>で、ある1軒のしもたやの修復保存再利用が図られている。それは、旧齋賀邸である（写真17）。旧齋賀邸は、瑞泉寺から向かって通りの左側7軒目に位置する。江戸時代末期に建てられ、大正の大火で燃え残った、町家造りの代表的な家屋である。特徴として、初代南部白雲、初代横山一夢作の欄間や、土蔵扉の錠前には人間国宝金森映井智作の彫金加工が挙げられる。



写真17. 旧齋賀邸の正面

平成26（2014）年、家主によって売りに出されたが買い手が見つからず、同年10月に国の登録有形文化財に指定され、10月22日には家主から市に家が譲渡された。町家の修復には、県・市から約2千万円の予算が出された。現在は南砺市教育委員会文化世界遺産課が管理しており、今後の維持管理も含めた自主運営について井波地区自治振興会や商工会・観光協会・八日町町内会、その他の会で組織を立ち上げ話し合いを行っている。井波地区の重要な文化財であり観光資源でもある。

### 5-2-2. 待ったなしのしもたや対策

このような制度による取り組みはあるものの、現在八日町通りはしもたやの増加による、町並み・町家保存の危機に直面している。現在八日町通りには、全く使用されていないしもたやが8軒ある。それらの家主は都市部などに住み、それぞれが任意の不動産業者に賃貸や売買を依頼している。そのため、町並み保存に熱心に取り組もうとしている八日町町内会や住民に情報が共有されず、借り手や買い手を探す作業が業者任せになり、なかなか取引が成立しない。一つでも多くマッチングさせるには、しもたやの家主と町並み保存に取り組む住民が情報を共有し、協力していく必要がある。

また、平成27（2015）年11月に国土交通省によって公布された「空き家対策特別措置法」が井波町では平成28（2016）年3月に施行され、特定空き家<sup>125</sup>に指定されたしもたやの税率が従来の6倍になる。そうすると維持への負担が大きくなり、借り手や買い手が見つからない場合、しもたやを解体処分する家主が出てくる可能性が高い。そこで、町内会の一部から、しもたやの貸し借りや売買を不動産業者任せではなく、自分たちの手で公募という形をとって仲立ちしようという動きが出ている。借り手・買い手が見つからず、家主がしもたやを取り壊そうとした場合、町内会が借り手となり維持していくことも視野に入れているという。春田さんと川島さんは「1万円の家賃でもいいから移住者に来てほし

<sup>124</sup> 県事業の「歴史と文化の薫るまちづくり事業」の一環である。

<sup>125</sup> 倒壊等著しく保安上危険となるおそれのある状態や、周辺環境の保全を図るために放置することが不適切である状態などの空き家をいう（国土交通省HPより）。

い」と話す。今後、移住体験ツアーなどの取り組みが必要となってくるだろう。

### 5-3. 伝統産業都市モデル事業

昭和 59 (1984) 年、富山県は国土庁の「地方都市整備パイロット事業」の一環として、「伝統産業都市モデル事業」の対象地区として井波町瑞泉寺前の八日町通りを選び、町と協力して三か年計画で伝統都市整備事業を行った。井波町の秀れた伝統産業井波彫刻と、背景にある瑞泉寺及び町並みの歴史的財産を活用し、これを整備することで「信仰と木彫りの里」のイメージアップを図るのが目的であった。この事業を契機に、八日町通りは観光地としての色を持つようになり、住民にも観光地という認識が急激に拡大していったという。昭和 61 (1986) 年には八日町通りの 250m に、擬石による石畳舗装が行われた。また、街路灯 (写真 18) 20 本の設置、電柱の調和工事、側溝蓋の彫刻的デザイン化、電話線の地下埋込など、「歴史の薫る町並みづくり」のための様々な整備が行われた。他にも、バス停留所標識 (写真 19) や公衆電話ボックス (写真 20) は彫刻をあしらったものに変更された。

この事業の実施によって、昭和 61 (1986) 年には国土交通省の手づくり郷土賞、平成元 (1989) 年には富山県の「うるおい環境富山賞」を受賞した。



写真 18. 街路灯の木彫りの七福神



写真 19. バス停標識



写真 20. 木彫りの電話ボックス

#### 5-4. 景観づくり住民協定

また、八日町町内会は、旧井波町や商工会・観光協会の要請を受け、修景に取り組んだ。平成 17（2005）年 2 月 10 日には富山県景観条例に基づく景観づくり住民協定「八日町通り人と人とのうまいあるまちづくり協定」が締結された<sup>126</sup>。建築物を新築・改築する際に、外壁の色彩はけげばしいものを避け、できるだけ黒もしくは茶系統又は白にすること、木製のドアや引き戸を活用すること、木製看板（写真 21）や木彫りの表札（写真 22）を設置することなど、建築物を町並みと調和のとれたまとまりのあるデザインにすることを柱とするものである。協定に同意した家には新築・改装の際、通りに面した外装工事費用に、県・市からそれぞれ 3 分の 1 の助成が出る<sup>127</sup>。実際に景観条例を利用して修復した家は 6 軒ほどである（写真 23-24）。



家主の干支をあしらった木彫りの看板と表札

左：写真 21. 店主の干支をあしらった木彫りの看板

右：写真 22. 民家の表札にもその家の主人の干支が使われている。



写真 23. 景観条例を利用し、  
2015 年 11 月に新築した町家



写真 24. 景観条例を利用して  
改修された店舗兼住居

<sup>126</sup> 景観条例は、観光協会井波支部と南砺市都市計画課（前、井波観光協会と井波町経済課）が中心となって取り進められた。

<sup>127</sup> ただし、上限は 150 万円である。

協定を結ぶにあたっては、平成17年の締結の1年前から、県からの研究費用で景観アドバイザーが入り、条例が適用された他地域を視察するなどして検討された。また、平成16（2004）年から1年間、八日町通りの住民を集めて会合を開き、1軒1軒家をまわりハンコを集め、協定への参加を呼びかけた。協定の有効期間は10年間のため平成27年で満期になったが、住民による延長更新申請があり10年間延長となった。以後10年毎に更新手続きが必要になる。

#### 5-4-1. 締結までの道のりや苦勞

景観づくり住民協定について詳しく見ていく。協定のきっかけについて、締結に尽力した南砺市観光協会井波支部長の蓮沼さんは、「どンドン町並みの景観が崩れていくことへの危機が大きい。町が市になるときに一定程度町がしっかりして自分たちで守っていないと、という思いだった。市になったらどこまで融通が利くかわからないから」と話す。

では、八日町通りの住民は協定締結の話が出た当時、どのように捉えていたのだろうか。住民に聞いたところ、先代から八日町通りにいるという住民、井波町外から越してきたという住民のいずれも「賛成だった」「反対する気持ちはなかった」など話を聞いた全員から、協定の締結に積極的であったことがうかがえる言葉が返ってきた。

しかし住民の語りとは反対に、実際には締結への道のりは簡単なものではなかったようだ。蓮沼さんは締結への苦勞を、「最初は『面倒くさい、自由にやりたい、なんでそんなことをしないとイケないのか。』という反対の声も多くて大変だった。かなり強硬な意見もあった」と話す。この協定は、実際には強制的なものではなかったが、八日町通りの景観づくり住民協定の締結は井波町では初めてのことであったために、縛りが強いことを心配する声が挙がったのだ。『アンテナを立てたらだめ、今の家を変えろと言われるのではないか』とか。それに八日町はこれまで、石畳整備など県や国がお金を出してくれていたから、自己負担にも抵抗感があつたのでは」という。

住民協定には、八日町通りを長期不在にしている家のハンコも含め、一定数以上の住民の合意が必要であった。当時八日町通りの町内会長であった春田さんも、承諾を得るために各家庭を回った。「各家は個人の所有だが、表面（表構え）はこの通りを歩く人々、観光客の共有物である。通りは皆のものでもある。だから、古民家の顔を大切にしよう」と呼びかけた。この一言が住民の心に響き、締結へと動いていったという。

続いて翌年以降に住民協定が結ばれた上新町（平成18年）と三日町（平成24年）は、八日町通りの様子を見たのちに締結となったために住民の反対はあまりなく、比較的スムーズに締結にたどり着くことができたという。

#### 5-4-2. 協定締結の副次的メリット

反対の声も挙がり住民協定の締結には時間がかかり、困難も多かったが、それを乗り越え結ばれた住民協定によって、想像以上の利点が生まれたようだ。メリットは町並みがき

れいになったことだけではない。町内住民を商工会に呼び開いた度重なる会合での住民同士の交わりによって、薄かった町内の人間関係は絆が強くなったと蓮沼さんは嬉しそうに語る。

また協定の締結によって、住民ひとりひとりに訪れる客を気持ちよく迎えようという意識も芽生えた。通りに出る際、少し身なりをきれいにして表に出ようといった心がけ、内面的な部分も住民に意識させることができたという。

このように住民協定を結んだことによる嬉しい変化は、2次要素、3次要素にも及んだ。ひとつの協定により多くのメリットが生まれたのは、上からの指示ではなく住民たち自らが動いて協定を結んだことに大きな意義があったと蓮沼さんは話す。八日町通りの住民が観光協会など運営側とぶつかり合いながらも時間をかけ、最終的に納得して自らの意志で締結に踏み切ったために生まれたメリットであろう。このことが、住民自らが町並みと町家を守っていきたいと考える大きな契機となったといえるだろう。

#### 5-4-3. 締結した上新町と未締結の中新町（写真 25）

参考に、景観づくり住民協定を平成 18 年に締結した上新町と、協定を締結していない中新町の住民にも、協定にどのような思いを持っているのかを尋ねた。協定や自分の住む通りに対する意識に、八日町通りの住民と違いは見られるだろうか。

まず、上新町<sup>128</sup>について見ていく。上新町では、「いなみ上新町歩いて楽しめる町づくり協定」という協定が結ばれている。八日町通りと同様に、建築物の景観、植栽（写真 26）をそろえることや木彫りの干支表札・看板を掲げることなどに加え、商店を営む家は店先に大のれん（写真 27）が掛けられることが一番の特徴である。

上新町の住民は、上新町について観光地という認識がある方がほとんどであった。店を営む住民は、自家用車等で訪れる個人客は来るが、団体のお客さんは八日町通りにしか行かないのでさみしいと、みな口をそろえて話していた。一昨年景観条例を利用し補助金を使い店舗兼住居を建て直した 60 代の男性は、補助金に助けられたと嬉しそうに話す。協定を利用して建て直しや改装を行っていない住民も、大のれんや植栽によって通りがきれいになったことを喜ぶ声ばかりであった。「気持ちがいいし、心が和む」と笑顔で話す住民の声が印象的であった。

また、蓮沼さんによると、協定者には建て直しや改装の際に補助金を出す代わりに、花をきれいに保つことや季節の行事に協力してもらっているという。「そうでないと、ただ補助金を出してあげるだけになるでしょう」。上新町でも住民協定によって、行事への参加を通じ、町内住民同士の交わりや連帯感が生まれるというメリットがあった。

他方、協定を締結していない中新町<sup>129</sup>を見ていく。中新町の住民には、中新町が観光地

<sup>128</sup>平成 27（2015）年の上新町の世帯数は 33 で、人口は 92 人である。そのうち満 75 歳以上の住民のいる世帯数は 13 で、満 75 歳以上の人数は 16 人である。

<sup>129</sup>平成 27（2015）年の中新町の世帯数は 51 で、人口は 117 人である。そのうち満 75 歳以

であるという認識は見られなかった。店を営む住民はみな、観光客は誰も来ないと口にしていた。住民協定について父親と店をかまえる 40 代の男性は、「町にお客が来るなら締結したいけど、お客が来ないから意味がない。条例で町並みを揃えるのはあくまでお客へのアピールだから」と残念そうに話す。また、人口も店も減り、跡継ぎのいる家が非常に少ないため、今更条例は必要ないと苦笑いで話す住民もいた。

以上のことから、住民協定を締結した上新町では協定への満足度の高さがうかがえ、未締結の中新町では協定への消極的な姿勢がうかがえる。住民協定への思いの違いは、客足と観光地という認識の有無から来ているのかもしれない。



写真 25. 本町通り（上新町）

瑞泉寺・八日町通りを背に撮った写真。瑞泉寺から八日町通りのゆるやかな坂を経て上新町に続く。

この先さらに中新町・下新町へと続く。昭和の面影を色濃く残した落ち着いた家々や、数多くの彫刻工房が並び、八日町通りとはまた違う魅力がある。



写真 26. 大のれんの掛かる店先



写真 27. 通りになじむ民家の前の植栽

#### 5-5. 町並みづくりへの住民の思い

ここで再び八日町通りに話を戻そう。八日町通りの住民たちは、「伝統産業都市モデル事業」や景観づくり住民協定に基づいて進められてきた町並みづくりをどのように感じているのだろうか。

---

上の住民のいる世帯数は 29 で、満 75 歳以上の人数は 36 人である。

金沢の東茶屋街のように全く同様の家が並んでいるわけではなく、その家その家のイメージや個性が残っているのがいいところだという声を聞いた。景観条例が、「このとおり建てなくてはならない」というような強制的なものではなく、あくまで住民の意思に沿った協定だということが最大の良さであると感じさせる。自己経済・自己責任であれば、好き勝手に家が建てられ町並みは壊れてしまうため、商工会や観光協会など町並み保護の先駆者がいてくれてありがたかったと語った 70 代の男性は、「通りにそぐわない張りぼての看板を出した店もあったけれど、自発的に取り外してくれた。僕のようににらんでいる町の人々の目があるからね。みんな周りを見て動いてくれる」と続けた。道の左右に渡っていた電線が景観を悪くしていたが、今はきれいに整備され気持ちが良いと笑顔で話す声もあった。

また、観光のためというよりは自分たちがきれいで住みやすい町にしたら、客にも喜んでもらえ、お互いが気持ちいいという意見が印象的であった。観光地化という要素も含む町並みづくりが、訪れる客のみならずそこに住む住民にも気持ちの良さを感じさせていることがうかがえる。

#### 5-6. 八日町通りの町並みの魅力—生活空間として、観光地として—

それでは、景観整備が進められてきたことも含め、現在の八日町通りの町並みやこの通りでの生活について、住民はどのような思いを持っているのだろうか。

一番多かった意見は、情緒があり、静かで落ち着くという意見である。人が通るのが中から見え賑やかさが感じられるという声や、季節を感じられ趣深いという声もあった。60 代の女性は、「若い頃はお客さんに『静かでいいね』と言われても静かで地味で物足りなさがあったけど、歳をとると静かで落ち着いていいねえ」と満足そうに話す。

また、町並みは観光地のように美しく整備されているが、観光メインではないところが良いという意見もあった。訪れる客にとっては、自然な地元の人々のぬくもりを感じられるところも、八日町通りの魅力の一つだ。

その他にも、井波町で祭りやイベントがある際に、八日町通りが常にメインストリートになることがうれしいと話す住民もいた。

一方「観光地」として見た場合に、静かすぎる、賑やかさがなくなど、物足りなさを口にする意見が出された。彼らによると、居酒屋や料亭などこれまでの八日町通りにないものが来て、八日町通りを盛り上げてほしいということであった。しかし、訪れる客の思いは違っていた。彼らは、静かでこじんまりしていて、地味で田舎らしいところが八日町通りの一番の魅力であると話す。その良さを損なう、都会を真似たような賑やかさや目新しさはいらないという意見ばかりであった。伝統的な町家が立ち並ぶ石畳の道を歩くだけで、懐かしさを感じ心が癒される客が多いのである。本物志向の客は、現在の八日町通りの町並みや雰囲気が高く評価しているようである。

## 6. 町並み・町家を生かしたイベントと観光

本節では、現在行われている町並み・町家と関連するイベントやガイド観光を紹介する。

八日町通りや本町通りでは、訪れる客により身近に町並みと町家を味わってもらおうと、いくつかの観光への取り組みを行っている。それらを順に見ていく。

### 6-1. 八日町通りの町並み・町家に関するイベントと観光

八日町通りでは、町並み・町家に関連した二つのイベントが開催されている。これらは13年程前から続き、2014年までは連続した日程で行われていたが、2015年は9月と10月に分けて行われた。

一つ目は「いなみ灯りアート」である。2015年は9月19、20日に行われた。瑞泉寺境内参道、八日町通り、六日町通り、三日町通り、上新町通り、各町内が、住民の製作したものや、いなみ国際木彫刻キャンプ<sup>130</sup>に参加した作家のものなど、趣向を凝らした「灯り」を通りに飾り、町並みが幻想的に灯し出された（写真 28-29-30）。また、「おわら踊り」が上新町から八日町通りを通り、瑞泉寺境内参道、本堂まで披露された。



写真 28. 瑞泉寺参道に灯された地元小学生が絵付けをした灯り



写真 29-30. 三日町通りに並ぶ住民手作りの灯り

二つ目は「まちなみアート in いなみ」である。町並みを楽しんでまわってもらうことを目的としたイベントで、2015年は10月3～18日に行われた。八日町通りや本町通りの商店・民家・瑞泉寺をはじめとする周辺寺院にアート作品が展示された。アート作品は一般の人から募るものもあり、富山大学高岡キャンパス芸術文化学部の学生の作品も展示された。この他にも、民家の庭園開放、欄間ウォーク・瑞泉寺探訪などを行い、歴史と文化の薫る井波の魅力を発信している。

<sup>130</sup>世界各国から招かれた彫刻家が、原木を作品として完成させるまで公開制作を行うイベント。開催は4年に一度で、2015年夏に瑞泉寺内で実施された。



町並みアート展示は、民家の玄関先や彫刻工房、しもたやのガラス戸の向こうに、パッチワークや絵画・その他アート作品や木彫りの像が飾られ、訪れる客を楽しませる。庭園開放もしている春田邸では、150坪の庭を眺めながら、築150年の町家に飾られたアート作品を楽しむことができ（写真31）、イベントのメインとなる休日には、奥様の手作りスイーツとコーヒーを味わうことができる。春田邸のアート作品は、ステンドグラスやパッチワークなど毎年異なり、一部販売もされている。

15人限定、昼食付予約制の欄間ウォークは、瑞泉寺やその周辺の寺院や神社に残る欄間や木彫刻作品を、日展作家や伝統工芸士の案内で町歩きしながら巡るといふものだ。

そして、八日町通りで用意されているいくつかの予約制のガイド観光からも、より多くの人に八日

町通りの町並み・町家を味わってもらおうという思いが感じられる。ここでは、二つのガイド観光を紹介する。

一つ目は「木彫りの里町歩き」である。6年ほど前に県からの補助金を利用して、欄間ウォークを基本に、彫刻師が自らの視点で町を案内するもので、予約制で通年行われている。

二つ目は富山県の補助事業「とやまとおき観光商品づくり支援事業」補助金を活用した、「新発見！真宗遺産と町家文化を訪ねて」である。2015年10月下旬から実施され、井波地域の隠れた魅力のあるところを、地元観光ガイド「井波の風」の案内で歩きながら楽しむというものだ。こちらも予約制で、通年実施されている。瑞泉寺、西別院柳汀閣（特別公開）、旧斎賀邸、春田邸を訪れることができる。

井波を訪れる観光客の滞在時間は1時間程度で、観光バスツアーの多くは、井波を県内外の観光地または宿泊地に向かう途中の見学地として位置づけている。春田さんは、転勤で全国数か所かでの生活を経験し、休日には転勤地をベースに周辺の観光地にあちこち足を運んできた。「日本中の色々なところを見てきたけど、60代になって生まれ育った八日町通りに帰ったとき、改めてこの町の素晴らしさに気づいた」と話す。作り物的な観光地が多い中で、ここには人びとの生活に根差した本物の良さが息づいているという。

川島さんと春田さんは、「井波を目的地にという発想転換をして、他にはない井波独特の観光を見出す必要がある」と話す。そこで春田さんは、2016年から毎週金・土・日曜日には自宅の庭を観光客に案内し、旧斎賀邸を面白く丁寧にガイドしようと考えているという。春田さんはまた、2016年から町おこしとして朝市を復活させようと計画中である。



写真 31. 灯りが展示された春田邸  
築150年の旧家の客間

## 6-2. 本町通りの町並み・町家を生かした取り組み

本町通りでも町内が一体となって、町並みを楽しんでもらおうとふたつの取り組みを行っている。一つ目は「お人形様めぐり」である。2007年、上新町より始まり、2012年からは本町通り全体で行われるようになった。2016年は3月1日～20日の20日間実施され、期間中は毎日、通り沿いの民家や店舗に何百年も前のお宝から店主の手作りのものまで、それぞれに味わいのある色とりどりの雛人形が飾られ、訪れる客は個々の民家に入り見学ができる。

二つ目は「ウィンターイルミネーション」である。民家の玄関先（写真32）やしもたやのシャッター（写真33）など、幾つかのスポットがイルミネーションで彩られる。2010年上新町より始まり、2012年からは本町通り全体で行われるようになった。2015年からは各町内会で取り組みを検討することになり、町ぐるみでの実施は上新町のみになったが、中新町・下新町でも、個々に何軒かの家に飾られる。2015年は12月13日～1月末日まで行われた。



写真 32. 町家に溶け込むイルミネーション  
意外な組み合わせが可愛らしい。



写真 33. しもたやのシャッターを  
飾るバラのイルミネーション

## 6-3. 観光への取り組みの意義

上に紹介したように、八日町通りと本町通りでは、様々な観光への取り組みを行っている。これらのイベントが直接的に町並み・町家への維持に貢献しているとは言えないかもしれないが、住民への意識付けになっていると川島さんは話す。八日町通りの住民は当初、観光地としてやっていくことに抵抗を感じる住民も多かったというが、これらのイベントを通じ、徐々に観光地という側面を肯定的に捉え、訪れる客に美しい町並み・町家を見てもらおうという意識が芽生えていったという。

また、まちなみアート in いなみでの作品展示にしもたやが利用されることや、ガイド観光の見学地として旧斎賀邸が開放されていることなど、このような利用は、しもたやに風を通し、維持していくことに役立っているといえよう。

そして、庭園開放や町家のガイドなど八日町通り独特の観光が定着し、団体バス観光客の八日町通り滞在時間が長くなれば、観光地として賑わい商店も増え、町並みの保存に繋がるであろう。

## 7. まとめと考察

瑞泉寺門前町として古くから栄えてきた八日町通りには、大正 14 (1925) 年の大火で旧井波町のほとんどの家が焼失した中、類焼をまぬがれた歴史的な町家が、現在も何軒も残っている。明治・大正期には、木造 2 階建ての板葺き切妻屋根の商家が連なり、終戦後の農地解放以前までは、大地主の多くに住む「おやっさま通り」と呼ばれていた。その後昭和 40 年代 (1965~74) ごろまでは、様々な商店が並び、日用品等を求めて井波町内や周辺農村部からも買い物客が訪れ、いわばショッピングセンターのような役割をはたしてきた通りであった。とりわけ毎年夏に開かれる太子伝会では、多くの露店が並び、通り一帯に人がひしめき、大きな賑わいを見せた。

八日町通りの伝統的町家の特徴は、間口が狭く奥行きが深いこと、隣家同士壁一枚を隔てるのみで、入れ違いながら空間を利用していることである。また、全国的にも珍しく、土地と家の持ち主が異なるケースが多いのも特徴だ。

伝統的町家での暮らしについて住民は、大変さや良さを様々に感じている。大変さとして、冬場の厳しい寒さ、窓がないゆえの部屋の薄暗さ、町家維持の金銭的負担の大きさ、隣家同士距離が近接していることから生まれる建て替え時のトラブルなどが挙げられた。良さとしては、夏の涼しさ、奥ゆかしさや広さ、隣家同士の結びつきの親密さなどが挙げられた。そして多くの住民は、歴史ある町家に住んでいることにありがたみや誇りを感じ、守っていくことへの強い思いや責任感を抱いている。また、建て替えが進み、通りから伝統的町家が減っていくことにさみしさを感じている。しかしそれぞれの家の事情や、古い町家の耐久性の問題、住民の高齢化などを考えると、町家と町並みの維持には、各人の思いだけではどうにもならないものがあるのも事実である。

昭和 40 年代 (1965~74) ごろから、自家用車の普及と加越能鉄道の廃止によって、また、郊外にできたショッピングセンターに押され、八日町通りの商店は次第に店じまいし、しもたや (空き家) が目立ち始める。そこで昭和 56 (1981) 年に、井波町では、しもたや増加に歯止めをかけるため、町家の借り賃の半額を行政が負担する「しもたや開放奨励制度」が全国に先駆けて始められた。また、町家の建て替え等によって損なわれつつあった伝統的な町並みの景観を守ろうと八日町通りでは、昭和 59 (1984) 年から 3 年間、「伝統産業都市モデル事業」が行われた。「信仰と木彫りの里」のイメージアップを図り、石畳舗装や、彫刻をあしらった電話ボックス等が設置された。これを契機に八日町通りの住民には、観光地意識が芽生えていく。平成 17 (2005) 年には、建築物を町並みと調和のとれたデザインにすることを目的とし、景観づくり住民協定「八日町通り人と人とのうるおいあるまちづくり協定」が締結された。反対の声もあり締結までには困難も多かったが、その過程で住民同士の結びつきが強くなり、訪れる客を迎えようという意識が芽生え、住民ひとりひとりの中に自らが町家と町並みを守っていきたいという意識が根付いた。

こうした意識の表れとして、現在八日町通りでは、町家と町並みに関連したいくつかの

観光への取り組みが行われている。民家やしもたやにアート作品が展示され、民家の日本庭園が開放される「まちなみアート in いなみ」は、今年で14年目を迎える。また、町歩きを楽しみ、国の登録有形文化財に登録されたしもたや「旧斎賀邸」を訪ねる、予約制のガイド観光などがその例である。これらの取り組みは、美しい町並み・町家を訪れる客に見てもらおうという意識を住民の間に芽生えさせただけでなく、しもたやの維持にも貢献しているといえよう。

このような高い意識と早い段階からの取り組みにも拘らず、近年は若い世代の流出と高齢化による人口減少、商店の後継者不足などにより、しもたや増加に拍車がかかっており、住人のいる町家の維持にも困難さが増してきている。また、時の経過とともに町家の老朽化が進み、維持のためには改修が必要になってきているが、そこには多くの問題がある。現代家屋に比べ、町家は改修に何倍もの費用がかかることだ。さらに改築時には隣家の同意が必要うえ、土地所有権の問題もある。そまた、2016年3月に施行される「空き家対策特別措置法」により、耐震等に問題があるとみなされたしもたやにかかる税金がこれまでの6倍になることから、しもたやの取り壊しが増えることも予想される。これらの様々な要因が絡み合い、今後町家の維持がますます困難になり、放っておけば町家のみならず町並みが損なわれていくことにもなりかねない。

今後の町並み保存のためには、一軒一軒の町家やしもたやの現状を総合的に把握・検討し、借り手・買い手探しを業者任せではなく町内会等が公募するなども含め、限られた予算や労力を効果的に使っていく必要がある、と八日町景観委員会委員長でもある春田さんは言う。

本稿でこれまで見てきたように、八日町通りの住民はさまざまな困難や課題を抱えつつも、それらと折り合いをつけながら、町家と町並みを後世に繋いでいきたいと強く願っている。住民への聞き取り調査でも、伝統的な町並みと町家にありがたみを感じ、誇りや愛着、受け継ぐことへの強い責任感を持って、住民みんなで守っていこうという思いがひしひしと伝わってきた。これまで維持してこられたのは、まぎれもなく住民のこのような強い思いと地道な取り組みがあったためである。

最後に、今後も町家と町並みを残していくために、町づくりの視点から考えてみたい。

八日町通りに限らず、日本全国には八日町通りのような古い町並みが無数にあったはずである。だがそれらの多くは八日町通りより早く失われてしまった。そんな中でなぜ八日町通りは、現在まで伝統的な町家と町並みを維持してこられたのか。それを考えることで、これからの八日町通りが目指すべき方向性が見えてくるかもしれない。

かつて八日町通りは門前町として栄えていたが、時代の変化に伴って参詣者は減り、人通りが少なくなり、門前町としての要素をしだいに失っていった。しかしその後も八日町通りには、「欲しいものが大体そろそろ」という声からわかるように、日常生活に必要なものが手に入るだけの店が並んでいた。つまり、大型ショッピングセンターができ、自家用車でそれを目指して人びとが郊外に買い物に行くようになった1960～70年代ごろまでは、農

村部に住む者にとって八日町通りはショッピングセンターのような役割を果たし、日常的に生活必需品を買いに来る場となっていたと思われる。

そう考えた場合、今後、日常的に通りに人が集まり町並みが維持されるには、単に観光客が古い町並みを求めて訪れるだけでなく、かつてのように地域住民の集まる生活の場としての機能を部分的にでも回復させることで、町が再生していくのではないだろうか。

郊外にショッピングセンターができる以前の八日町通りを取り戻そうとするには無理がある。現在残る町家と町並みに再び40～50年前の町の機能をそのまま取り戻すことは非常に難しいだろう。たとえ買い物客を呼ぶために周辺にショッピングセンターを誘致するなどしても、通りに賑わいが増すことはほとんど想像できない。訪れる客がそろって口にする八日町通りの「奥ゆかしさ、安らぎ」が損なわれ、逆効果であろう。町家と町並みの維持になんらメリットはないように思われる。

今後の八日町通りの活性化と町家と町並み維持のためには、かつて買い物に訪れていた周辺地域の住民が、「〇〇があるから八日町通りに行く」と言う場をつくっていくことが必要なのではないだろうか。たとえば、近所や近隣地域の住民が日常的に買いに来たくなるような、パン屋や地場野菜の店などはどうだろう。観光客向けではなく、まずは地元の人が毎日のように足を運ぶ店をつくることだ。観光客が来ずとも経営が成り立つ店ができれば通りは元気になり、魅力が増し、新たに店を開く人が来てくれるかもしれない。

するとしだいに人が人を呼び、徐々に高岡・富山など外からの客も増えるのではないだろうか。インターネットと自家用車が当たり前になった今の時代、多少遠くても人びとは選んで訪れる。「新しいものはいない」と話す観光客からも、町家の雰囲気を生かしたものであれば大いに喜ばれそうだ。

また、その他のしもたやの再利用として、町家カフェや甘味処、ゲストハウスやお年寄りのたまり場、井波彫刻を体験できる工房、町歩きに着物を貸し出し着付けをしてくれる呉服店などがあってもいいかもしれない。



写真 34. 築 90 年の町家を改装した  
アトリエ「craft mocca」

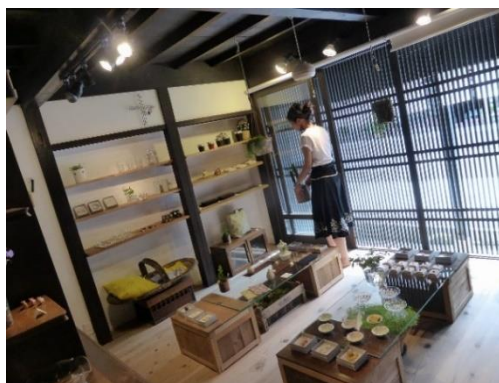


写真 35. 個展を開いている様子

雰囲気を生かした町家の再利用例として、上新町に、木彫職人と陶芸家の夫妻の「craft mocca」というアトリエがある。壊されるはずの築約90年の町家を借り自分たちで少しずつ改装し、2011年頃完成したもので、古い町家の雰囲気や木のぬくもりを残しながら現代らしいおしゃれさを感じることができる（写真34）。ここでは夫妻の作品が展示され、他の作家の作品も集めて個展が開かれるなどしている（写真35）。これから増えていくであろうしもたやの有効利用にヒントを与えてくれるものではないだろうか。

跡継ぎがおらず家の存続が難しいと話す住民の声と照らし合わせてみても、このままではしもたやになるであろう町家が、落ち着いた雰囲気を生かして新たに有効利用されることを願う。それが長い目で見て、八日町通りの町家と町並みの維持へと繋がるのではないだろうか。

## おわりに

わたしは、将来小さなかわいい自分のお店を開いてみたいという夢を持っている。もともと町家での開店に憧れていたが、八日町通りの落ち着きのある伝統的な町並みを歩き、このような素敵な町並みで、町家を自分らしく改装してお店を開きたいという夢への想像が膨らんだ。

また、八日町通りが訪れる人びとに懐かしさや癒しを感じさせているのは、単に美しい町並みと町家が残っているためだけではないだろう。そこには、とても人間らしい人と人との交わりが今も残っている。あいさつを交わし合う町の住民、嬉しそうに商品について教えてくれるお店の人、気さくに世間話をしてくれる彫刻師。それらはショッピングセンターや都市の高層マンションでは決して味わえないものだ。時代の流れに伴って抱える課題は多くなりつつあるが、人と木の温かさを感じられる八日町通りの町並みと町家が、これから先もずっと守られていくことを心から願っている。

## 謝辞

調査に協力してくださったすべての皆様、本当にありがとうございました。特に、このテーマで調査するきっかけをいただき、あらゆる場面で常に支えていただいた南砺市観光協会の川島さんにお礼を申し上げます。また、春田さん、岩倉さんをはじめ、さまざまなお話を聞かせてくださった八日町通り・本町通りの住民のみなさま、彫刻師さん、観光協会支部長の蓮沼さん、どうもありがとうございました。「進み具合はどう？」と声をかけに来てくださったり、「役に立てば」と文献を持って来てくださったり、お気遣いくださった皆様のおかげで、とても楽しくリラックスして調査することができました。多くの方々と出会うことができたこと、一人一人の町家への熱い思いや、いきいきとしたライフヒストリーを聞かせていただけたこと、町家と町並みをテーマにして本当によかったと思っています。

ます。ずっと思い出に残る、素晴らしい経験になりました。またお会いできる日を楽しみにしています。

### 参考文献

八日町町内会 1991年 『越中井波瑞泉寺門前八日町の歴史』

井波わくわく塾 1996年 『越中井波タウンガイド 伝統的町家と町並みの魅力』

須山聡 2003年 『富山県井波町瑞泉寺門前町における景観の再構成—観光の舞台・工業の舞台—』

野口莉奈 2014年 『町屋を利用した木彫刻業の展開：富山県南砺市井波と本町を対象として』

### 参考にしたウェブサイト

「空家等対策の推進に関する特別措置法の概要」

(<http://www.mlit.go.jp/common/001080534.pdf> ; 2015年12月28日閲覧)

# 井波における観光事業の潜在力と町を支える人々

岡田 真歩

## はじめに

私が初めて井波町を訪れたのは小学生の頃だった。石垣の道の両脇には古い店や民家が建ち並び、ガラス張りの入り口からは中で職人が真剣な表情で木彫りを行っているのが見えた。「大きなお寺だ!」と思った建物は山門で、その奥には更に立派な寺院が構えていた。一歩二歩と町を歩くたび、まるで別世界を旅しているようで「こんなところ富山県にあったんだ…」初めての印象はまさにそんな感じだった。

今回南砺市を調査するにあたって久しぶりに井波を訪れた。しかし、その様子はほとんど変わらず、木彫りの温かい町並みは10年前と同じままだった。そこで、この「木彫りの里」を守り続けてきた井波の「町」やその観光事業について調べてみたいと思ったのが、今調査のきっかけだった。

調査を進めるにあたって、井波の観光事業に携わる南砺市観光協会をはじめ、観光ガイド「井波の風」、八日町通り周辺の商店主、観光施設の職員など井波に住む地元の方に聞き取りを行った。その中で見えてきたのは『変わらない町並みの裏で流動する時代に対応するため、常に試行錯誤を繰り返す町の姿』であった。現代の観光のスタイルに合わせ、取り入れなければならないものと、ニーズがなくなりやめなければいけなくなったもの、様々な選択を迫られる観光業の裏舞台を記述していきたいと思う。

本稿では井波の町をあげて行われる「太子伝会」をはじめとする年中行事の歴史や変遷、井波を代表するイベントや施設について前半で報告する。次いで、地元商店主が抱く意見や要望、観光客から聞く井波の印象などから、聞き取り調査を通して見えてきた問題点について、南砺市観光協会の取り組みをふまえた改善策を考察していく。最後に、今後、井波が目指すべき観光のあり方について、私なりにまとめる。

## 1. 調査地「井波」について

井波は富山県南西部の砺波平野の南端に位置し、2015年に開町625年を迎えた。人口は9千人ほどの小さな町であるが、井波別院瑞泉寺が明徳元（1390）年に建立されてから門前町として古くから栄えてきた。また、瑞泉寺建立や火災による度重なる再建にともなって「井波彫刻」が発達し、現代に通じる欄間や獅子頭、天神様など多くの伝統工芸品が生まれ出されてきた。井波には現在約200名の彫刻師が暮らし、井波彫刻の伝統を受け継いでいる。井波の観光において切っても切れないのがこの彫刻産業であり、全国に名が通る自慢の観光資源だ。これらのことから、井波は「信仰と木彫りのまち」とうたわれる。



井波交通広場から瑞泉寺までを繋ぐ一本道は「八日町通り」といい、通りの西側、東側それぞれに彫刻工房や酒屋、呉服店、製菓店などが軒を連ねている（図 1）。木彫の古い町並みは情緒豊かな味わいのある通りを実現させ、石畳が周囲の雰囲気と調和し、町並みを引き立たせている。多くの観光客は交通広場へ降り立ち、この八日町通りを通って井波の町へ足を踏み入れる。次は、この町の玄関口である八日町通りについて記述していく。



図 1. 八日町通り（Google マップ より）

### 1-1. 八日町通りについて

観光客を引き付ける風情ある石畳の町並みが、八日町通りである（写真 1）。ここに石畳が敷かれた所以は、まちが国土庁へ申請をしたことに始まった。井波における石畳化は、瑞泉寺をはじめとする多くの寺社、史跡や門前町の雰囲気が残る瑞泉寺周辺地区、特に古い町並みを有する八日町通りを、門前町の歴史性と木彫りの伝統産業の特性を生かし、新たな個性や魅力を創出することが目的であった。この計画書の策定は昭和 58（1983）年に

行われ、工事着工は翌 59（1984）年 4 月であった。幅 8m、全長 227.4m の八日町通りの工事には約 2 年半の期間が費やされ、竣工は昭和 61（1986）年 10 月であった。石畳舗装の他、街灯設置、側溝整備、消雪工、電柱環境調和工事などが合わせて行われた。具体的な変化を挙げると、整備前までは電柱や電線が景観を損ねていたが、整備後は石畳舗装と古い家並が合致し、歴史の深さをより一層感じさせる町へと変化した。石畳化に関して八日町通り周辺住民からの非難の声はなく、事業は問題なく進められた。しかし八日町通りには軽い傾斜があり、道の勾配によって自動車の出入りが不自由になる民家も発生したため、住民との話し合いの後、工事は慎重に進められた。



写真 1. 八日町通り

また、町の景観（表札、看板の設置、色彩の統一など）はそれまで個人宅に任せられていたが、整備以降は、景観づくりに対するまちの意識が高まり、住民自らによって取り組みが進められた。景観づくりはそこに住む一人ひとりの景観を守り育てようとする意識の高まりがなければ進めることができないものであり、地元の人々の協力により町並み保存は今後も継続される予定だ。

## 2. 井波の観光

井波を団体バスで訪れる観光客には、旅行会社が企画した「募集型」と客が旅行会社に企画を依頼する「企画型」の二通りがあり、その割合は 44 : 56 (%) でほぼ半々だ。「募集型」では同じコースを再度申し込む確率は低い。地元の方は「観光で重要なことは、お客さんからまた来たい、周りの人にも伝えたいと思ってもらえるまちになることだ」と口を揃えて話されるが、単線的になることが多い井波の観光経路や観光内容で、二度三度と足を運んでもらえるかと言えば現状ではそうではないのだ。

南砺市観光協会の井波交通広場観光案内所では、年間を通して井波へ訪れた観光客の入り込み数が記録されている。平成 26 年度にバスや自家用車で訪れた団体客及び個人客の総数は 7 万人弱であり、富山県内からの観光客がその大部分を占める。その他、県外では北陸自動車道や東海北陸自動車道を利用して訪れることができる石川県、愛知県、岐阜県、新潟県、長野県など中部地方からの観光客が多く訪れていた。海外からは台湾やアメリカ、カナダ、ヨーロッパなどを中心に 300 人超が訪れている。井波では 4 年に一度「国際木彫刻キャンプ」が開催され、世界各国から招かれた彫刻家たちが作品の創作に腕をふるう。この木彫刻を通じた国際交流イベントによって「井波」の町がより世界に認知され、海外

からの観光客の誘致に繋がっている。

## 2-1. 企画商品について

井波交通広場観光案内所で働く南砺市観光協会の川島宣夫さんのもとには、県や市、旅行会社から旅行企画書の作成依頼がしばしば届く。企画書は約 3 週間かけて準備し、一つの依頼に対して 2 通りほどの案を考える。これは選択肢の幅を設けることで、より充実した内容の企画商品を創出するためだ。作成期間中は企画で使われる寺や民家、食事処に対して事前に許可を申請したり、一連の流れを想定して打ち合わせを行う。

川島さんは「以前旅行会社に勤めていた経験があるため慣れている部分もあるが、やはり企画は難しい。企画書を考え出したのち提出し、県と話し合った上で推進されたプランに更に肉付けを行わなくてはならない」と話された。考えついた案に「参加したい」と思ってもらえるように、より魅力的に見える工夫を重ねなければならないのだ。そうして出来上がった県や市のための企画商品は、井波独自の年間商品になることもあるという。

例えば、木彫りに関する商品でも、まったくの初心者向けの「体験」を目的とする短時間のチャレンジコースの他、本格的な彫刻を勉強・習得したい人向けの長期型の「塾」コースなど、どの程度本格的に木彫りを体験するか、客の要望に基づいて企画商品を生み出さなければならないのだ。そのため企画書の作成には時間をかけ、個々のニーズに応えた観光を模索する。

木彫りに関する企画以外にも「新発見！真宗遺産と町屋文化を訪ねて」と題した、門前町として栄えた井波の歴史や文化にふれるツアー等が企画されており、井波別院瑞泉寺や旧斉賀邸<sup>131</sup>、旧家の庭などの鑑賞が組み込まれている。これは 2～3 時間のツアーで、ガイド料や拝観料込みで一人二千元から募集している（2015 年 10 月 26 日～12 月 23 日）。知られざる井波の魅力を県内外の人に新たに発見してもらい、リピーターになってもらうことがツアーの最大の目的だ。井波はかつて一向一揆の拠点ともなった地で、お寺と町が深く繋がっている。井波を訪れる人には木彫刻だけでなく、そういった隠れた魅力にも気付いてもらえるようなツアー内容を企画している。

## 3. 太子伝会と観光祭

江戸時代、人々は宗教的な巡礼や神社仏閣への参拝を理由に旅へ出かけることが多かった。「お伊勢参り」のような、旅行と観光、神社仏閣のつながりは古くからあり、参拝の旅へ出かけることは、今も昔も人々の心の寄りどころを生み出しているのかもしれない。本節では、井波の観光の原点であり、今日も地域の伝統行事としてとり行われる「太子伝会」とその時期に併せて開かれる「観光祭」について記述していく。

---

<sup>131</sup>八日町通りに面した井波を代表する町屋。町屋は江戸時代末期に建てられ、門前町の町屋の伝統的風情を今に残す。平成 26（2014）年 10 月に国登録有形文化財に指定されている。

### 3-1. 太子伝会の概要<sup>132</sup>

梅雨が明けた7月下旬（2015年度は7月21～29日）、瑞泉寺では毎年恒例の太子伝会<sup>たいしでんえ</sup>が開催される。2015年の日程は以下の通りで（表1）、聖徳太子二歳の南無仏像のご開帳等が主幹として行われる。太子堂の内陣では聖徳太子一代の遺徳が八幅の絵伝を通して語られ、僧が太子49年間の生涯ひとつひとつ絵の場面を示しながら順次物語っていく。聖徳太子と瑞泉寺の由来は緯如上人<sup>しやくにょしょうにん</sup>から始まった。明徳元（1390）年瑞泉寺開基緯如<sup>しやくにょ</sup>が宮中において聖徳太子伝を講じ、その賞として後小松天皇の勅によって、賀茂神社に秘蔵してあった太子自彫の二才尊像と宇多天皇つきの巨勢金岡筆の絵伝八幅が下賜されたと伝えられている。絵伝は室町時代末期まで各宗派で製作され、四十数点現存しているが、瑞泉寺のように今日も絵解きを行っている例は全国でも少ない。三百年余り続けられてきた井波の伝統行事である。

表1. 太子伝会のスケジュール（2015年）

日程	時間	行事	会場
7月21日～29日	9:30～16:30	絵解法話	太子堂
7月22日～28日	10:00～16:00	特別宝物展	虎の間
7月24日～26日	10:00～、13:00～	法話	本堂
7月25日	13:00～	特別祠堂お紐解き法要	本堂
7月26日	13:00～	全戦没者追悼法要	本堂
7月22日～28日	10:00～16:00	山門二階一般公開	山門

### 3-2. 観光祭

瑞泉寺で行われる行事としての「太子伝会」とは別に休日（2015年度は25、26日）を利用し、重ねて開催されるのが「太子伝会観光祭」だ。観光祭では八日町から上新町、中新町、下新町にまたがって模擬店や町流し、大縁日の会場が設営される。普段は静かな町並みがこの日ばかりは活気に溢れ、多くの人で賑わう。夕方から行われる「よさこいフェスティバル」では県内から10ほどの参加チームが300人規模で踊り、町が一層賑わう時間帯となる。太子伝絵と観光祭の2015年度の施しは以下の通りであった（表2）。

表2. 観光祭のスケジュール（2015年）

日程	時間	催し物	会場
7月25日	16:00～	模擬店	八日町広場

<sup>132</sup>『井波 歴史のうねり六〇〇年』（千秋謙治 井波町開町六〇〇年記念委員会 1990年）による。

	18:00～	木遣り町流し	旧井波駅前スタート
	19:30～	木遣り音頭	八日町広場スタート
	20:30～	太子音頭奉納踊り 千音加礼奉納踊り	瑞泉寺境内
	20:50～	木遣り奉納踊り	瑞泉寺境内
7月26日	12:00～	大縁日	交通広場周辺
	17:15～	よさこいフェスティバル	中新町付近
	17:30～	氷の彫刻 招待者実演	中新町
	18:00～	氷の彫刻フェスティバル開会	中新町
	21:00～	よさこい総踊り	八日町広場前

### 3-3. 参拝者の声

筆者が太子伝会に参加している人たちに話を聞いたところ、絵解きを毎日のように聞きにこられているのはほとんどが地元の方だった。「ここに来るのは毎年。もう何十年と来ている。もう歳だし、来なくてもいいのだけれど…来ないと気がすまないという感じ。ゆったりとお説教を聞いていられるのが幸せ」（83歳 女性）という方や、「初日から毎日来ているけれ



写真2. 太子伝会の様子

ど、戦没者追悼の日は特に来なきゃと思う。亡くなった母や戦死した父がいつまでたっても忘れられないから」（78歳 女性）という方もいらっしゃった。瑞泉寺では太子伝会開催中に毎日の絵解き法話の他に、特別祠堂お紐解き法要（7月25日）や全戦没者追悼法要（7月26日）などがある。万人講まんにんこうと呼ばれる追悼法要が当日に行われ、太子伝会に来られた方の先祖（父母や祖父母等）の法名・命日を帳面に書き、合同で追悼がされる。参拝者の中には「親の代からずっと来ているから、どうしても来ちゃうのよね」と言われる方も多く、太子伝会は先祖代々の「思い」を継承する地元の方々に寄り添う仏教行事である（写真2）。

### 3-4. 「お齋」について<sup>133</sup>

太子伝会の際、お寺から出される食事がお齋ときである（写真3）。「お齋」とは「齋ひとしく頂

<sup>133</sup>『井波 歴史のうねり六〇〇年』（千秋謙治 井波町開町六〇〇年記念委員会 1990年）、『味噌・醤油・酒の来た道』（森浩一 株式会社小学館 1998年）より。

戴する」という意味で、仏事のときに出される食事のことを指す。

このお齋は井波別院瑞泉寺の開基にともない、太子伝会を仏事ではなく、聖徳太子を神格化して、神事と受け止め、富山湾の鯖を得ることができるという物理的条件も満たされていることから鯖ずしが一菜として含まれるようになった。ご飯と鯖ずしその他、茄子やふの煮付け、それに漬物が付いた弁当が、500円ほどで参詣者に振舞われる。



写真3. お齋

例年、5月25日頃になるとこの鯖ずし左奥からふの煮つけ、漬物、茄子の煮つけ、鯖ずしの漬け込みが始まる。大きな四斗樽の底に塩をまき、塩さばの切り身を並べ、その上にご飯を広げて入れる。さらにこうじ、塩、山椒の葉、唐辛子を上にまくようにして入れる。これを樽いっぱいになるまで繰り返して詰め込む。詰め込まれた樽の上には60キロあまりの重石を乗せ、約60日間寝かす。塩漬けの魚と米飯の自然発酵による瑞泉寺伝来の「なれずし」の製法は、古くは延喜式などの古書にも登場する方法という。鯖ずしといえば、京都で有名な鯖の押し寿司が今日一般的に知られているが、それよりはるかに古いつくり方のすしである。全国的に見て、その独特な製法を受け継ぐ地域は琵琶湖の鮒ずしなど一部を除いて減っているが、地元の人にとっては忘れることのできない故郷の味である。

この伝統ある鯖ずしを5年に渡り漬けてられるのが、瑞泉寺世話役の高桑真一さんだ。高桑さんは仕事を退職してから、寺へ通うようになり、世話役の人手が足りていないと聞いて手伝いをするようになった。昔の鯖ずしの漬け方は日を持たせるために、しょっぱく「くどい」<sup>134</sup>味付けであったため、若い人はほとんど口にしなかった。しかし、現在はニーズに合わせて、ある程度塩分を抑えた口当たりのよい柔らかい味付けへ変更をした。若者にも食べてもらいたいと言う思いからこの変更を行ったそうだ。

例年、鯖ずしは5月半ばから4つの四斗樽に3枚に下ろされた鯖600匹を、4人がかりで漬けるという作業から始める。「鯖ずしはうじが湧き始めるころが食べごろ」と言われているが、瑞泉寺で太子伝会の時期をメインに合わせてやっているためうじが湧き始めるまではもたせていない。高桑さんは1年かけて漬けた鯖ずしを味見してみたが、年間を通してもたせることはできなかったそうだ。半年で味の限度を迎え、それ以上はすっぱくなるばかりなので、昔の人とはもかく今の人には食べなれてないから無理でしょうと話された。高桑さんは、自分が受け持つようになってから「昔より美味しくなった」と言って貰えたことから、以前までの塩分の濃い味付けを改めるにいたったそうだ。

<sup>134</sup>富山県の方言で「味が濃い」の意味を持つ。

### 3-5. 太子伝会の変遷

太子伝会が昔と比べてどのように変わってきたか寺や町の方に尋ねると、40年ほど前までは、下の町内から八日町、瑞泉寺にいたるまで出店がずらっと並んでいたそう。昔の出店には陶器や植木、掛け軸に墨絵で描く見世物など、現在とは異なるものが売り出されていた。瑞泉寺の境内には木下サーカスが来て、空中ブランコや鉄製の球体の内部をオートバイが縦横無尽に行き交うショー、お化け屋敷などが行われたこともあり、当時の加越線井波駅（後述）から列をなして祭りに顔を出す人で溢れたという。今は昔のように子供が喜ぶ出店が出ないため、親も子供も祭りに参加せず、お年寄りばかりが集まるようになっている。

30年以上前までは、太子伝会と祭り目当てで瑞泉寺に宿泊しに来る観光客もいた。しかし今では鉄道もなく、お年寄りは瑞泉寺までの道のりを家族に車で送ってもらわなければ来れなくなったため、泊まる人はほぼいない。朝送ってもらい、昼にお齋を食べて、夕方迎えに来てもらって帰る門徒がほとんどとなった。昔は本堂に布団を敷いて大勢で雑魚寝したそう。瑞泉寺に宿泊の受け入れに関して尋ねたところ、太子伝会の際の宿泊客の受け入れは現在も断っているわけではなく、ごく少数の方が今も宿泊していくことがあるそう。井波の交通に大きな影響を与えた加越線の廃線により、太子伝会へ参詣する方もずいぶん減ったという。現在では地元の方の参詣が中心で、宿泊もわずか2～3人程度で、県内在住だが飲酒される方や連日お手伝いへ来られる方、夜回りをされる方などが利用されるのみだ。太子伝会は井波の伝統的な観光行事といえるが、次節では近年始められた井波の観光イベントを紹介する。

## 4. 井波灯りアート おわら町流し

井波では毎年9月半ば（2015年は15、16日）の二日間にわたって「井波灯りアート—おわら町流し」が開催される。2015年度で12回目を迎えた。灯りアートは富山県の「歴史と文化が薫るまちづくり事業」<sup>135</sup>から始まったイベントで、町の随所で地元住民や児童、書道家、漫画家らの協力によって作られた行燈あんどんに火が灯され、幻想的な町並みが映し出される（写真4-5）。2015年度の行燈の中には4年に一度開催される国際木彫刻キャンプで来日した海外作家の作品も含まれており、一味違った作風の作品も楽しむことができる灯りアートであった。行燈の他にも、瑞泉寺では僧侶による「坊主BAR」が開かれ、お酒が振る舞われたり、本堂で坊主バンド「The Others」による演奏が行われたりと賑わいを見せ

---

<sup>135</sup>富山県では歴史的・文化的な地域資源を活用した地域づくりを推進するため、モデル地域を選定し、有識者等で構成する検討委員会が設置された。委員会では歴史と文化が薫るまちづくりのあり方等について話し合いが行われ、選出されたモデル地域で実施する事業に対して県が助成金を出し、地域の活性化にいかされている。

た。なかでも注目を集めたのは、二日目に行われた井波伝統の「木遣り踊り」による町流しと八尾の「おわら風の盆」の競演だ。これを見るために多くの観光客が井波を訪れ、町は人で溢れかえった。



写真 4-5. 行燈がともる町並み

#### 4-1. 木遣り踊り

太子伝会観光祭や灯りアートなどのイベントで、町流しとして踊られるのが、井波伝統の「木遣り踊り」だ（写真 6）。江戸時代（1762 年）に焼失した瑞泉寺の再建のため、五箇山から切り出した木を運ぶ際にうたった唄が旧利賀村に伝わっていた。旧井波町の青年団が昭和 18（1943）年頃に同村から習い受け、男性は采配、女性は扇子を手にした独自の踊りを振り付けた。昭和 40（1965）年の全国青年大会郷土芸能部門で優秀賞に輝いて以来、青年団による町流しが恒例行事になった。しかし、後継者不足から木遣り踊りは平成 7 年を最後に一度途絶えた。

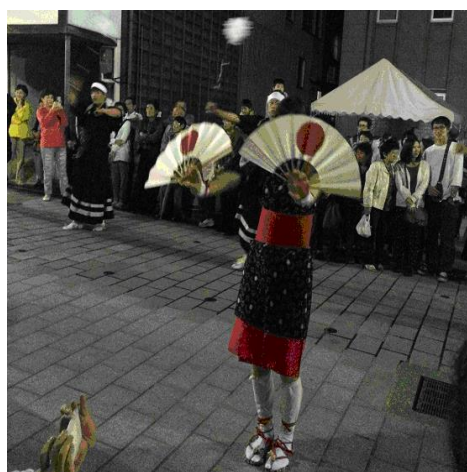


写真 6. 木遣り踊り

その後、太子伝会の賑わいをなんとか復活させようと商工会青年部が名乗りをあげ、幅広い層の協力と結集を経て、平成 17（2005）年に井波木遣りの会が結成された。井波中学校の体育祭では、以前まで城端のむぎや踊りを踊っていたが、今は復活した木遣り踊りが踊られるようになり、中学 3 年間で練習したことが今後の継承に繋がる大切な役割を果たしている。井波木遣りの会の現中心メンバーは約 50 名で、現役高校生から 50 代までの老若男女で構成される。会の中では企画を交えながらメンバーの若返りや後継者不足解消を目指して木遣り踊りを支えている。今では木遣り踊りは毎年披露されており、幻想的な町



の雰囲気には調和した迫力のある舞を楽しむことができる。

#### 4-2. 「井波」と「おわら」の関連性

灯りアートを見に来たという地元の方に話を伺うと、行燈のろうそくが幻想的でとても綺麗だから見に来たと話された。また、木遣り踊りは奉納や町流しの際に披露される井波の伝統的な踊りだが、同時に披露される八尾の「おわら」が目的で集まる人が大半とも言われる。そのことについて聞いたところ「城端のむぎや祭りのむぎや節<sup>136</sup>もそうだが、やはり地元の伝統的な踊りでもてなし、来た人に喜んでもらうのがよいのではという声は最近が多い。おわらをゲストとして招待する現在の形を疑問視する人も少なくない」と話された。既に全国的に有名なおわらを招待することは井波にとってよいことなのかどうか、地元の方は疑問に思っているようだ。

これに対し、おわらの招致を行った元井波町商工会理事の久恵博明さんは「八日町通りは夕方から夜にかけての風景がとてもきれいで、瑞泉寺の裏の八乙女山に浮かぶ十五夜月の哀愁がおわらのイメージにぴったり合うと思った。それに加えて、イベントごとが途絶えるこの時期に井波町商工会で単独の事業をしたいという思いが前からあり、招致に至った」と話された。「おわら」は違う地域で独自に踊られることはあっても、本場「八尾のおわら」を招待して踊ってもらうことは珍しい。久恵さんが当時の局長と二人で八尾の商工会へ行き、保存会の方とお会いして井波へ来てもらうことを約束したという。井波の石畳は八尾の諏訪町のイメージに合い、おわらが町並みに映えるため、承諾してくれたのではないかと話された。

おわらを招致し始めて既に丸十年が経過した。地元の方からは招致に疑問の声も上がったが、既に全国的に名が通っているおわらが来てくれることで多くの観光客が訪れ、井波伝統の木遣り踊りを知ってもらえる機会も増える。平成7（1995）年から約十年の間、途絶えていた木遣り踊りにとって、おわらからは継承の再開や保存に繋がる良いきっかけとなったのだと言える。歴史ある踊りを絶やさないために、八尾や井波にとってお互いに必要な「披露の場」なのかもしれない。

### 5. その他の観光資源

観光客の多くは瑞泉寺への参拝であったり、木彫刻への関心から井波を訪れたと言う。古い町並みの八日町通りを行って戻ってくる U ターン観光がそのほとんどだ。現状では通りの店や瑞泉寺を見回って一時間も滞在することなく早々に町を出る観光客が多い。しかし、八日町通りや通りの外れにはまだ知られていない穴場の観光地がまだ多数ある。以下、5つの観光施設について記述していく。

---

<sup>136</sup> 富山県の三大民謡（越中おわら節、こきりこ節）のひとつで、五箇山地方を中心に城端地区でも継承されている伝統的な踊り。毎年9月に開催される城端むぎや祭りで披露されている。

### 5-1. 道の駅「いなみ木彫りの里 創遊館」

瑞泉寺を北西に進み、ほどなくすると見えてくるのが、道の駅「いなみ木彫りの里 創遊館」だ。創遊館には地元特産品などが並ぶ土産物の販売の他、木彫体験ができる「くりえーと工房」や 9 つの工房で木彫見学ができる「匠工房」などがあり、井波彫刻を肌で体感し、目で堪能することができる。物産展示即売コーナーでは、その場で彫刻師が彫った木彫りの商品を購入することも可能だ。また、食事処や休憩所も完備していることから、地元の人から観光客まで様々な人が利用する憩いの観光施設だ。

### 5-2. 黒髪庵

八日町通り沿いの小道に入りしばらく歩くと黒髪庵の入口が見えてくる（写真 7）。黒髪庵は浄蓮寺の境内に位置し、中にある翁塚は元禄 13（1700）年に芭蕉の門弟であった瑞泉寺十一代の浪化上人が師を慕って建てた塚である。塚に芭蕉の遺髪が納められたことから「黒髪庵」と名づけられた。この翁塚は、伊賀上野の故郷塚、義仲寺の本廟とともに芭蕉三塚とされており、風情ある茅葺きの芭蕉堂（写真 8）や浪化の句碑が見られる。昭和 30 年 7 月に市の指定文化財に指定され、知る人ぞ知る井波と芭蕉の縁が刻まれたお寺だ。



写真 7. 黒髪庵



写真 8. 芭蕉堂

### 5-3. 井波美術館

八日町通り沿いに位置する井波美術館は、大正 13（1910）年に建てられた北陸銀行の跡地を利用して昭和 62（1987）年に開館した。井波を代表する彫刻、写真、書道、工芸家等によって創作された作品が展示替えしながら常時出展されている。運営は南砺市の助成金や出展をする作家の会員費用から成り立っている。「心の休日みつけた」と称する美術館の

中には、広い空間の中に数点から数十点の作品が展示され、作家たちが励み作り上げた作品の粋を楽しむことができる。八日町通りに面しながらも立ち寄って観賞していく観光客はまだまだ少ない。町の企画で入館料が無料になることもしばしばあるため「是非、立ち寄って作品を見て行ってほしい」と職員の方は話された。

#### 5-4. 池波正太郎ふれあい館

八日町通りのちょうど中心部に位置するまちなかの駅「よいとこ井波」（後述）の施設内に池波正太郎ふれあい館がある。「鬼平犯科帳」「剣客商売」「仕掛人藤枝梅安」など数多くの時代小説を執筆した池波正太郎は井波を「父祖の地」として親しみと愛着を持って度々訪れた。井波の人達との交流の深さは書簡や絵画などが多く存在することからも想いが窺われる。そんな親交も含めた彼とのふれあいの証を永く留め、多くの人とその作品にふれあうことを開設の趣旨としている。館内は小説の一説を交えながら池波正太郎の井波訪問時の写真が展示されており、その他井波親交者への直筆の手紙、帽子や和服、万年筆などの愛用した品々、著書や原稿などが展示されている。ふれあい館にはファンの方がゆかりの地と知って度々訪れることもあるそうだが、まだまだ知れ渡っておらず知名度が低い施設だ。

#### 5-5. 旧井波駅<sup>137</sup>（井波物産展示館）

先の太子伝会の記述でも述べたように、井波にはかつて「井波駅」が存在した。井波駅舎は昭和9（1934）年に建築された建物で寺院のような造りをしている。石動駅から井波を通り、庄川まで通っていた鉄道「加越線」の鉄道駅だった。昭和47（1972）年に同鉄道が廃止されるまで、井波町の玄関口として、人々の乗り降りが多かった。



写真 9. 旧井波駅（現井波物産展示館）

総ひのき造りの駅舎は宝形屋根の楼閣が高くそびえたっている。金色の屋根飾りや壁の一部に残っている彫刻欄間などは他に見られない特色を持っている。現在は町の物産展示館（写真9）として、パネルや獅子頭、天神様、お盆などが展示され、またバスの待合所として町の人々に親しまれている。平成8（1996）年11月には国の有形文化財に指定されている。

駅の購買を営む方に話を伺うと、町の玄関役を果たした当時は加越線が駅舎を管理したが、廃線後は町が物産展示館として管理するようになったそうだ。廃線後も地元の方たちに愛着を持って利用される場所となっている。ベンチは駅として利用されていた当時のものがそのまま残されており、ずっしりと重い木製の木彫りベンチからは職人が生み出した

<sup>137</sup>『ふるさと井波 第二集 井波町の文化財』（井波町教育センター となみ印刷出版 2001年）による。

木の温もりを感じ取ることができる。

## 6. 店主や観光施設の声

これまでは井波で開催される行事やイベント、その参加者の声などを述べてきたが、まちの観光業の根本を支える地元店主は、日々訪れる観光客をどのようにもてなしているのだろう。井波では現在八日町通りだけでも、10店舗以上が店を営んでいる。彼らは生業である商業をどのような思いで営んでいるのか。また、町を挙げての誘客事業とは別に、店が独自で観光客を呼び込むために行なったり、心がけたりしていることは何かあるのか、など合わせて聞き取りを行なった。以下、4つの商業施設で聞いた話を記述していく。

### 6-1. 旅館「東山荘」

瑞泉寺前に構える旅館「東山荘」は昭和初期に創られた井波欄間や木彫りの置物など美術品が置かれる書院造の木目の優しい旅館である。創業は元禄までさかのぼり、建物は90年以上が経過している。中高年夫婦の宿泊客が多く「昔に返ったようで懐かしい」と言っ、常連になる客も多いそうだ。今では半分ほどがリピートされたお客だ。

女将の牧野きよ子さんは「個人客は4組までが限界で、団体客は10人を超えると基本貸し切りにする。人数を制限するのは、お客さんにばたばたと忙しい姿を見させるわけにはいかないから。井波にはゆったりと落ち着いた雰囲気を求めて来訪する方が多いので、静かな雰囲気にそぐわないことにならないようにしています」と話された。観光で来た客に「八日町に入ったとたん別世界に来たようだ」と言ってもらえることがよくあるそうで、瑞泉寺とともに歴史を歩んできた古い町並みを活かして、いつ来ても変わらない風景を残していきたいと話された。

一方で、最近では改築や修繕工事によって日本らしい落ち着いた雰囲気を醸し出す格子戸<sup>138</sup>の家が減った。昔はどの家でも取り入れられたものが、八日町通りでは現在5軒あまりとなった。お客さんがわざわざ求めてやって来る「古い町並み」の維持が難しくなっている。このことについて牧野さんは「うちも築90年以上の旅館だけど、今後でもできるだけ保存には努めていきたい。古い町並みを保存していることが、お客さんにまた来たいと思ってもらえる要素の一つだと思うから」と言われた。

### 6-2. 観光土産品店「吉田屋」

井波交通広場に面する「吉田屋」は里芋を主原料とした和菓子「やきもちばあさん」が看板商品の観光土産店で、他にも地元の素材にこだわった土産品を販売している。以前は「やきもちばあさん」を売る店は数十店舗あったが、現在では吉田屋一店舗のみとなった。

吉田屋では昔からの山芋で餅を作るのではなく、井波特産の里芋で作っている。店主の

---

<sup>138</sup>細い角材や竹などを、碁盤の目のように木組した建具。通風や採光に優れ、純和風の家  
に設けられることが多い。

吉田真悦さんはお菓子屋の出身であるため、趣向を凝らした土産品を生み出そうと思案したが、山芋から里芋に原材料を変えて「違う美味しさ」を生み出すには苦労を重ねたようだ。昔の味を知るお客さんの反応を見ながら自分なりに探求して、やっと辿り着いたのが今の「やきもちばあさん」の味だ。

吉田さんによると、吉田屋の客のほとんどは交通広場を利用する観光客で成り立っている。そのため、平成27(2015)年4月から始まった交通広場駐車場の有料化に大打撃を受けた。売り上げは落ち込み、特に平日は客が来ず、ガラガラの状態になっているようだ。吉田さん自身、また無料に戻して欲しいと感じている。

井波の交通広場は現在有料であり、自動車で来た観光客に観光案内所の係員が駐車券を配布している。利用時間の午前8時30分～午後4時30分の間、普通車200円、中型車(11人以上30人未満)1020円、大型車(30人以上)2050円を駐車料金として負担しなくてはならない。この有料化は南砺市により決められ、徴収したお金は駐車場維持管理費や観光復興費用として利用される。井波地区はこの有料化が消費税増税の時期と重なったこともあり、来町客・来店客の減少に拍車がかかることを懸念し、要望書を市に提出した。内容は、買い物目的で交通広場を利用する乗用車(バスは除く)に限り、運転手が商店で駐車券にスタンプを押印してもらい、それを交通広場係員に提示した場合は、駐車料金の免除が認められるようにしたもので、無事承諾を受けた。現在もスタンプ押印の制度を設けつつ、駐車場の有料化は続いている。吉田さんは「お客さんにはここにしかない素材が生かされたものをお土産にして欲しい」と話され、来訪した客のもとに足を運んでは試食を勧めるなど、工夫を凝らしながら駐車場の有料化に対策を講じている。

### 6-3. 町の駅「よいとこ井波」

「よいとこ井波」は八日町通りの中心に位置し、町の活性化を図って国からの補助を受け約10年前に建てられた。カフェや売店、レストランなどが施設に含まれ、町の駅として幅広く利用されている。ホームページではそれぞれの店の雰囲気や商品を写真で見ることができ、開催されるイベントが随時更新されている。

経営者の久恵博明さんによると、駐車場が設けられていないため、車で直接立ち寄ることができず、交通広場の有料化にかなり打撃を受けているようだ。「観光客からお金を取って町に恩恵があるかと言ったらそうではない。お客さんが減れば意味がない。どこの観光地でも有料化は進んでいるかもしれないが、経営面ではもちろん厳しくなる」と話され、有料化が商売に与える影響はここ一年で大きく現れたようだった。

職員の方に話を聞くと、客足は少しずつ減少しているようだ。そのなかで、来店した客から「井波はいいところだ。今まで知らなかったが感激した」と言ってもらえることが何よりも嬉しく感じると言われた。また、太子伝会の開催時期になると、昔は地元住民と観光客と一緒に踊ったりしてとても賑やかであったことを思い出すようだ。出店がたくさん出て、八日町通りは子どもからお年寄りまで皆が集まり、活気に溢れていた。それが今で

は太子伝会自体を見に来る観光客も減り、寂しく感じるそうだ。また、観光には季節によって波があり、秋に紅葉の見頃で観光客が増えたかと思えば、冬に雪が降ると町は閑散としてしまう。観光施設は客に利用してもらってこそ成り立つため、寒くなるとどこか物寂しくなるそうだ。

#### 6-4. 道の駅「木彫りの里 創遊館」

木彫り体験や見学ができる「木彫りの里 創遊館」のインフォメーションコーナーで職員の方に話を聞いた。利用者数は年々減っており、客層は男女問わず60代以上のリタイヤされて時間に余裕がある方を中心に多く訪れる。夏場には売店に地元農家で作られた野菜が並ぶため、地元の人もこぞって足を運ぶ。観光客の流れについて「この施設に限らず、北陸はどうしても冬場の客足が減り、5月、6月になると再び客足が回復してくる。連休が多い5月や9月は南砺市の祭りがめじろおしであり、観光客が集まりやすい」と話された。

施設に関しては、道の駅として気らくに立ち寄れるような憩いの空間を提供できるようにしているそうだ。実際、館内は独特の落ち着いた雰囲気にも包まれており、長旅の観光客や地元の住民らがゆっくりと話をしながら羽を伸ばしているが光景が印象的だった。また、井波は何と言っても「木彫りの町」として名高いため、職員は木製品の品揃えには気を配っているそうだ。キーホルダーなど小物から大小様々な置物まで、常時、観光客のニーズに合わせて販売している。

### 7. 観光客の声

調査で井波を訪れた際、県内客はもちろん、遠方から井波へ訪れた観光客にも出会った。調査期間中は井波の方に話を聞く機会が多かったが、外部から見た井波を知るため、県外観光客にも話を聞いた。遠く離れた地から訪れる観光客の目には井波がどのように映るのか、2組の観光客にインタビューを行った。具体的には、どのように井波を知り、何の目的を持って井波を訪れたのか、またその印象など、訪れて抱いた率直な意見や感想を聞かせてもらった。

一組目は広島県福山市から訪れた60代の夫婦である。趣味で彫刻をやっていて興味があったため、知人の紹介で、全国的に有名な井波へ来たと言われた。観光ルートは2泊3日の予定で白川郷から回ってきて庄川郷で宿泊し、井波へやって来た。2日目の午前中に井波の観光を終わらせ、高岡で再び観光し宿泊した後、金沢を訪れるということだった。井波の印象については「彫刻品がとにかく高級。数十万するものは観光旅行では買えない。家で木彫りをする手本にと思ったが、土産で買っていくには高すぎた」と残念そうに話された。しかし、土産は買えなかったものの、生で見る職人の技には感動し「紙に書いたものを頭で組み立てて彫っていけるのがすごい！さすが職人だ」と感心したそうだ。

夫婦は安く買って行ける土産品が町には足りないと言い、「職人がせっかく良いアイディ

アを持って作品を作っているのだから、町へお金が落ちる方法を考え出して欲しい。キーホルダーを持って帰っても仕方がないし、どうせなら思い出になるものを買っていきたい。私の住む町も観光都市だから分かるけれど、観光というのはいいものが町に溢れていても、客がお金を落としていかななくては意味がないからね」と話され、木彫りの町そのものには満足がいても、観光資源が生かしきれてないことを指摘された。

二組目は京都府京都市から訪れた 50 代夫婦である。富山観光の一環として、観光サイトを通して井波を知り、古い町並みを散策するため訪れたそう。観光ルートは白川郷から井波へ訪れ、日帰りで京都へ帰ると話された。井波の印象について「彫り物が素敵。土産物にと思ったけれど、手が届かなかった」と言われ、やはり、手頃に持ち帰ることができる土産物を欲している様子だった。しかし、来訪日に太子伝会が行われていたことから「たまたま今日井波を訪れたけれど、太子伝会が行われていてよかった」と話された。一組目の夫婦とは異なって、これといった目的を持って井波を訪れているわけではないため、観光地としては物足りなく感じているようだった。また、観光の時間も 1 時間に満たない程度で、八日町通りを往復し、帰途に就かれた。

## 8. 観光協会の取り組み

平成 16 (2004) 年に井波を含む 8 つの町村が合併し南砺市が誕生したことから、観光協会は井波観光協会から南砺市観光協会井波支部に変更された。井波支部では観光事業に携わる方から一般の商店の方まで 117 名が参加する定期総会が年に一度行われ、一年間の行事計画や観光事業について話し合われる。

年間を通しての事業内容は井波地域の歴史・文化・食を生かした誘客事業（井波の独自性、地域色を生かした商品開発など）、近隣地域の各種イベントや団体と連携した誘客事業（シャトルバス事業など）、木彫刻産業を生かした旅行商品の造成など従来行ってきたものから、北陸新幹線・城端線など公共交通を利用したアクセスの整備（北陸新幹線を利用した PR 戦略の確立）や金沢ー井波線路線バスの利用促進及びそれを活かした観光誘客活動など新たに加わった事業も受け持っている。

観光客向けに始めた事業として、“スマートフォンで街歩き in 井波”がある。これは、井波町内の施設や店にフリールーターを設置し、アプリによってガイドブックなしで観光施設や見所をマップや音声案内付きで迷うことなく見回ることができるというものであり、複数の外国語にも対応し、より多くの人に井波を散策してもらえる工夫が施されている。南砺市観光協会井波支部長を務める蓮沼晃一さんは「町の活性化のため新しいものを取り入れて、それを浸透させるための方法をこれからの時代考えていかなければならない。より多くの人たちが井波を訪れてくれることで我々にもいい刺激になる」と話され、井波を訪れた人がいかに満足できるかを模索しているそうだ。

また、金沢ー井波線の路線バスが平成 27 (2015) 年 2 月から試験的に運行しており、利

用者が増え、上手くいけば平成28(2016)年4月から本格的に運行する。従来、井波へ訪れるには高岡駅発の加越能バスを利用するか、高岡駅から城端線を利用し、砺波駅で下車後、タクシーを利用するというのが最も一般的だった。所要時間は前者が約60分、後者が約30分ほどで、どちらも1時間に1本ほどしか通っていないことから交通面に弱く、誘客しづらい環境にあった。しかし、金沢ー井波線のバスが通れば、北陸新幹線を利用して来た観光客が約1時間ほどで井波へ辿りつくことができる。蓮沼さんは「金沢へ来た観光客に井波がバス1本で来れる地だと思ってもらえるようにしなければならない。そのためには彫刻産業だけではおもてなしに欠けるので、若い人たちの斬新なアイデアが欲しい。商工会でも観光協会でも出ているメンバーにそう変わりはないため、今は外からの意見を大切にしていきたい」と話された。

## 9. 井波観光ガイド「井波の風」

井波には観光ガイドを行う「井波の風」というボランティア団体がある。総勢23名がボランティアガイドに参加しており、歴史・伝統に造詣が深い方や木彫刻に詳しい人たちが初めての観光客にも分かりやすく説明を行っている。

メンバーの藤井清美さんに「井波の風」や観光ガイドに関することのお話を聞いた際に、「お客さんのことはとても歓迎している。せっかく来てくださったのだから、30分~1時間と短い間の滞在ではなくゆっくりしていただいたい。どこかへ行く途中や帰りにさらっと立ち寄るのではなく、目的が井波にある方にはぜひ長い間滞在して欲しい」と話され、時間をかけた観光を望んでいた。

実際のところ、団体バスでコースを組んで来訪する観光客のほとんどは1時間前後しか井波の観光に要する時間として与えられていないというのがほとんどだ。というのも、井波から車で1時間ほどの地点に世界遺産に登録されている五箇山の合掌造り集落が存在する。団体バスでの訪問の主たる目的はそこにあり、井波での滞在時間がとれない要因の多くはそのためだろう。しかしながら、団体バスで来た観光客が「もう少しゆっくりしたかった」と言って、今度は個人客として井波を訪れることも少なくないそうだ。藤井さんは「井波のよさが伝わったと実感できる時が一番嬉しい。井波は隠れた憩いの町のようなになればいいと思う。ここ最近は町並みを見ていく人も増えたとし、都会とは異なった静かな居心地のいい井波で綺麗な水を飲んでゆっくりとお食事をしてほしい」と話された。

また、藤井さんが観光ガイドを始めたきっかけは、かつて勤めていた会社の旅行で井波を訪れた際に会社仲間や社長から「君がこの文化の町に住んでいるのは素晴らしいことなんだよ」と言ってもらえたことだった。それまで地元(井波)に住んでいて気がつかなかったことであったが、第三者からの率直な意見が藤井さんの中でとても響いたという。それは、普段町を歩く「近所のおじさん」が都会へ出れば立派な「日展作家」であり、町で見かけて目を背けたくなる裸婦像が文化的な価値を持った「芸術品」であることを再認識



させられた瞬間だった。藤井さんは会社を勤め上げた後、何をしようかと考えたが、自分の生まれ育った井波が「素晴らしい町だ」と誉めてもらえたことを思い返し、観光客にも町のよさが伝わればとボランティアで観光ガイドを始めた。

人に言われて気付き、改めて調べ直した井波の町を紹介できることが一番の醍醐味だと言う。「井波をまったく知らない人にはいかに伝えられるか試行錯誤する。そうして自分自身にも学び直す機会があることは楽しいし、やりがいを感じている。毎日が勉強で、お金以上の価値のあることをさせてもらっていると思っている」と楽しそうに話された。何年たっても町並みが変わらず、「故郷」を思い立たせてくれる井波。藤井さんは変化がないのはありがたいことだと言い、「故郷」を求めてやって来てほしいと言われた。

## 10. 井波観光の課題

上記にもあるように観光協会は、交通の便や町の利便性を含めた「新たな試み」としての誘客事業を積極的に行っている。井波の町の住民にとって、これら誘客事業に取り組む姿勢を大部分の人が「町が更に活性化するには必要」と肯定的な目で見ている。しかし、中には「まだここを直していかなば」というように今後を心配した声も少なからず耳にした。この節では井波の住民の方が挙げた問題点や今後の課題を順を追って記述していく。

### 10-1. 観光における弱点

現在の井波への年間を通しての観光客数は年々減少傾向にある。要因はバスの小型化や社員旅行等の減少であるが、一度訪れたことがある土地を、新たな魅力で引き付け「また訪れたい」と思わせることは難しい。このように井波の観光は一度で完結してしまい、継続性のあるものになかなかならないのが一つの弱みだ。

また、井波はインターネット媒体で情報を拡散することに長けておらず、他の観光地のようにツイッターやフェイスブックをうまく利用して宣伝できていないことも、今の時代には不利だ。加えて、古い町並みを保存している井波ではあるが、特段集客力のある場所があるかと言われればそうではなく、南砺市のなかでも地味な位置を占めていると地元の方自身が感じている。

井波観光は交通広場を出てから八日町通りを瑞泉寺に向かって南下し、戻ってくるという単線的なルートになることが多い。その他の観光資源で紹介した穴場スポットや小道を挟んだ名所は目立たず、観光客の目にとまっていないのだ。バスで来る団体観光客が井波に留まるのは小1時間ほどで、ツアーの目玉に井波が選ばれることは少ない。ほとんどの団体ツアーでは井波を経由して五箇山や白川郷へ足を運ぶのが現状なのだ。

### 10-2. 石畳の問題点

現在の八日町通りには石畳の舗装が施されている。舗装は通りに趣を与え、住む人にも

訪れる人にも居心地のよい町へと変化させた。実際、観光客も町並みに一層目を向けるようになった。

一方で、石畳を保存していくにあたって住民からは例えば以下の声があった。「石畳でできた八日町通りは、本来人だけが通るべきなのに、バスも走っている。石畳が傷むし維持費だって多くかかってしまう…それなら別にアスファルトでいいのにとと思う。バスに対する景観の管理はどうなっているのか」という意見もあった。これに関して井波行政センター長の川原忠志さんは「自動車の出入りに関しては同じ古い町並みをもつ高山のように別段規制は設けられていないが、大型バスなどが通ることによって石畳が浮き沈みし、張り替えが過去 2 回行われたのは確か。工法を変えることにより舗装を長持ちさせられる場合もあるので、行政側としては模索している最中」と話された。この問題に関しては行政面のみで処理しきれものではない。実際、井波の情緒溢れる町並みを見に来た観光客はバスが通ることをどう思うのか、また、道幅がそう大きくない八日町通りで車やバスが観光客の真横を通り過ぎて行くことを町の人々がどう捉えるかの問題だ。しかし、八日町通りには商店のみでなく一般民家も存在するため、簡単には規制に踏み切れないのだ。

### 10-3. 企画商品の課題

井波には年間を通して観光客が参加できる企画商品がいくつかある。その中でも注目されるのが木彫り体験コースだ。彫刻師が観光客に彫刻を教え、体験ができる企画だが、その企画をするにあたって彫刻師はいくつかの問題点を挙げた。内容は①宣伝が下手でありあまり知られていない、②彫刻は彫るのに時間がかかるので観光客が軽い気持ちでやるには時間がかかりすぎる、③職人は時間を拘束され、材料なども考える必要があり若干および腰である、④刃物を扱う危ない作業であるため怪我をさせない程度に何を彫らせていいのかわからない、などといったことだ。

井波といえば何と言っても「木彫刻」であり、全国でも類を見ない木彫りの名産地でもあるが、観光客を誘致し宣伝する側、実際に観光客をもてなす側とでは食い違いが生じてしまうようだ。彫刻を旅の目的に人を呼び寄せるためには、このような井波内部の意識的相違を解消することが重要である。また、観光化に際しては一本芯が通っていてその芯のまわりでいろんなものを取捨選択して進めていく必要がある。しかし今の井波は各々がバラバラに観光化を進めているため、内部組織が上手くまとまっていない、という意見も実際にあった。

## 11. まとめ・考察

井波の調査を通して、観光における弱点や問題点がいくつか浮かび上がってきた。観光事業を今後も継続させていくためには井波に住む内部の人の意見、観光客など外部の人の意見、それぞれを照らし合わせ、解決を図る必要がある。この節では地元商店主や観光客

から聞いた意見を中心に、改善策を編み出していきたいと思う。

一つ目に、単線的な観光ルートの問題がある。先にも挙げたが、井波の観光は八日町通りを北上し、瑞泉寺でUターンして帰って来ることが多い。そのため観光にかかる時間は一時間に満たない場合がほとんどで、メジャーでない施設は立ち寄られることが少ない。これはPR不足から来るものだと考える。具体的に、目安となる観光コースが観光案内所等に示されていないことから、観光客もどこを訪れてよいのか困惑してしまうのではないだろうか。しかし、井波のホームページには観光モデルコースが紹介されている。既存のものを上手く活用して説明書きを加えるなど分かりやすく工夫し、どこでどういうものを一番見てもらいたいのか大きく示す必要がある。また、目的地を指し示す看板や標識など目星になるものが少ないため、観光客は見落としてしまう。町の随所に木彫りの標識や看板などを設置して大々的な宣伝をすることで、観光客に訪れたいと思わせ、観光への意欲を湧き立たせることに繋がるのではないだろうか。

二つ目に、町並みの問題を挙げる。観光客層に中高年が多いことから、休憩所や甘味処などを更に設け、一服できたり、ゆっくりと過ごすことができる空間を提供することが重要である。実際、調査中に手押し車や杖を持って訪れるお年寄りをよく見かけた。八日町通りは瑞泉寺にかけてゆるく傾斜しており、上り坂になっている。そのため、ベンチを増やすなど工夫し、不便を抱える方も安心して訪れることができる町にすることが観光地として必要である。併せて、八日町通りやその周辺にある食事処や喫茶店などは古い町並みを保存していることもあり、どこかハードルが高く、入ることに気が引けるといって観光客の意見があった。店先の外観を阻害しない程度に、食品サンプルとまではいなくても、メニューや看板を設置することで「入りたいな」と思っている人の不安要素を取り除くことができるのではないだろうか。筆者自身、「格式の高いお店だったらどうしよう」、「価格は想定を越えないだろうか」と心配した経験があったが、どの店も実際に入ってみたらそんなことはなかった。入りにくい雰囲気さえクリアしたら井波の飲食業は更に発展するのではないだろうか。

三つ目に、観光資源を生かしきれていない問題がある。前述してきたように、一度訪れただけでは見落としてしまうような穴場や、知れ渡っていない特産品がまだまだたくさんある。そこで、町を挙げて広報すべきものを考えた。まず、現在瑞泉寺の太子伝会でお齋として出される鯖ずしを地域の食文化として食事処で提供すればよいのではないだろうか。今まで受け継がれてきた「なれずし」の製法を太子伝会のみでなく、日ごろから観光客をもてなすところでも出されるようにしたら、そこでしか食べられないものとして認知される。また、里芋でつくられた和菓子「やきもちばあさん」も一店舗のみで販売するのではなく、随所で連携して売られるようにすれば知名度が上がるのではないだろうか。それら地域の食文化と同時に、観光客の意見でもあった手頃な価格の木彫り商品も幅広く供給されるようにしなければならない。彫刻を目当てで井波を訪れた観光客は口を揃えて「彫刻品はどれも高額だ」と言って手ぶらで帰って行く。せっかく井波を訪れてもらったのだから、記

念や思い出に残るような商品を提供し、満足してもらわなければならない。また、そのような観光客のニーズに応えることが新たな需要に繋がるだろう。

最後に、井波内部の問題について考える。八日町通りの石畳舗装は古い街並みに調和し、より一層町の情緒を引き立てる役目がある。しかし一方で、車やバスの出入りに関し、規制を特設設けていないことから道幅が狭いため危険で、舗装が早く傷みやすく、景観の不一致など問題が少なからず生じている。また、企画商品に関して、木彫り体験を企画する側と彫刻師らもてなす側とで意見が分かれる場面もしばしば見られた。これら内部の問題には意見交換を積極的に行わなければならないと感じた。例えば、石畳の問題であれば八日町通りの商店や観光施設の都合、一般民家に住む人の利便性を含めて話し合い、町全体で食い違いを解消する必要がある。

それに加えて、観光地として常に外部の意見を取り入れるため、アンケート箱などを設置すればよいと思う。井波を訪れる観光客を対象に、町への印象や意見、満足度などを聞き出し、また来たいと思ってもらえるような観光地を目指すための目安箱があれば、新たな観光事業の模索や町の活性化に少しでも繋がるのではないかと考える。

## おわりに

小学生の頃初めて訪れた「井波」の地を、10年の時を経て調査で再び訪れた。最初は「観光事業」についてとにかく行事や施設を調べ上げることに徹していたが、町で出会う方に話を聞いたり、イベントごとの主催者に話を聞いているうちに、各々が観光のため熱意を持って動いていることに感銘を受けた。井波の町の観光は「彫刻産業」はもちろんのこと、住む人の支えがあって成り立っているということに気付かされた。そして、観光とは何も資源を生かし活用するだけのサイクルではないことを改めて感じた。時代に合わせて、町の人々は常に試行錯誤を繰り返している。もう一度訪れてもらえるにはどうしたらよいか、町が今すべきことは何なのか、観光客に満足してもらうため、これら課題は尽きることがない。また、観光客ばかりに目を向けていても観光事業は成り立たない。地元の理解や協力があってはじめて観光は機能するのだ。井波は、どの家も木彫りの表札をつけるなど、土地の文化・伝統を共有し継続させていく意思が見られる。また、太子伝会観光祭の際には地元の方が屋台を出し賑やかに交流する姿が見られ、「井波灯りアート」の際には子供から大人まで町の人が皆で協力し行燈を作り上げた。私自身、年中行事を通して町全体が一致団結している様子が特に印象に残った。このような住民の協力体制が新たな観光事業に貢献し、発展させ、「信仰と木彫りの里 井波」を支える柱となっているのだと今調査を通し強く感じた。

## 謝辞

最後に本調査をするにあたり、お世話になった南砺市観光協会井波支部の皆様をはじめ、貴重なお話を聞かせて頂いた皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げたいと思います。皆様のご協力により「観光」というテーマのもと、地域に密着した調査を進め、当原稿を執筆することができました。温かく受け入れてくださり、本当にありがとうございました。

## 参考文献

千秋謙治 1990年 『井波 歴史のうねり六〇〇年』 井波町開町六〇〇年記念委員会  
井波町教育センター 2001年 『ふるさと井波 第二集 井波町の文化財』 となみ印刷出版  
森浩一 1998年 『味噌・醤油・酒の来た道』 株式会社小学館

## 参考にしたウェブサイト

「井波観光案内所」 (<http://www.tabi-nanto.jp/inami> ; 2016年1月14日閲覧)  
「木彫りの里 創遊館」 (<http://www.kibori.co.jp> ; 2016年1月14日閲覧)  
「東山荘」 (<http://www12.plala.or.jp/touzansou> ; 2016年1月14日閲覧)  
「よいとこ井波」 (<http://www.matidukuri-inami.co.jp> ; 2016年1月14日閲覧)

# 木彫刻による国際交流と地域貢献 —南砺市いなみ国際木彫刻キャンプから—

大田 麻美子

## はじめに

私が調査地を井波に決めたのは、現代における伝統工芸に関心があったことと、井波において彫刻制作がどのように地域に貢献しているのかについて関心があったからである。2015年に「第7回南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」が8月に開催されると知った。木彫刻のイベントとはどのようなものなのか、木彫刻キャンプを通じた国際交流の様子や地域活動について関心を持ち、当イベントについて調査することを決めた。

調査では、イベントに参加する井波の伝統工芸士や企画する実行委員会の方に聞き取りを行い、実際に公開制作やイベントの様子を視察し、見学に来た人やボランティアスタッフの方にも聞き取りを行った。またボランティアスタッフとしてキャンプに携わり木彫刻キャンプのボランティア体制や実行委員会についてもお話を伺うことができた。これを踏まえて、木彫刻による地域貢献や国際交流について考察していきたい。

## 1. 南砺市いなみ国際木彫刻キャンプとは？

「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」は「木彫りを通して世界をつなぐ」をテーマに、4年に1回開催される国際イベントである。世界各国から招かれた彫刻家が、原木を作品に完成させるまで野外で公開制作を行う。作品の出来を競い合う「コンクール方式」ではなく、世界各国から集まった作家と来場者とが、制作期間中にお互いの民族や伝統、文化にふれあうことを目的とする「キャンプ方式」となっているのが大きな特徴である<sup>139</sup>。

主催者は南砺市、井波教育委員会、富山県芸術文化協会、井波美術協会、井波彫刻協同組合などからなる大きなイベントである。1988年に長谷川総一郎氏（後述）と地元の木彫刻作家がハンガリーの木彫刻シンポジウムに派遣されたことが契機となって、1991年に合併前の井波町（現南砺市）開町600年記念として第1回が開催された。当初は井波を彫刻の町として外部にアピールすることと国際交流を目的としたものだった。第1回は来場者が3万人で、木彫刻作家や一般町民（当時は井波町）にとっても身近なところから国際交流の目が開かれたという<sup>140</sup>。この結果を受けてからか、以降4年に1回というオリンピックと同じ間隔で開催されるようになった。

---

<sup>139</sup>公式ホームページより (<http://inami-camp.city.nanto.toyama.jp/index.jsp>)

<sup>140</sup>田中晴人 横山幸文 高橋誠一 1996年「伝統産業と環境変化」『高岡短期大学紀要』  
田中晴人、横山幸文、高橋誠一 1996年「伝統産業と環境変化」『高岡短期大学紀要』  
7: 159-167



写真 1. (左) 前回のイベントで作られた「世界一長いベンチ」

写真 2. (右) 過去の彫刻キャンプの作品 (城所啓二作「生命のちから」)

これまでに招待した作家は日本を含め 41 か国 108 人と 10 団体にのぼる。制作された作品は井波芸術の森公園や大門川河川公園などに展示されている。開催期間中に様々なイベントが行われており、写真 1 はギネス記録に挑戦し、瑞泉寺内に展示されたものである。

2011 年と 2015 年の彫刻キャンプの開催場所は井波別院瑞泉寺であった (図 1)。交通のアクセスの関係で第 6 回から使われるようになった。それまでは閑乗寺公園、木彫りの里周辺で行われていた。瑞泉寺の常本哲生さんに聞いたところ、井波彫刻の発祥地である瑞泉寺で開催しようという話があり、その後実行委員会からの要請により 3~4 回の陳情の末、開催地に決定された。先述の交通アクセスの事情に加えて、広い場所を行ったり来たりする必要が無く、あまり歩かなくてもよいという理由もある。瑞泉寺の太子堂が会場で、見に来た人は近くより色々な角度から見られるようになっただけでなく、制作者同士が競い合うことによって緊張感を高める効果も期待できる。

瑞泉寺側は場所の提供くらいでそれ以外は特に何かするわけではない。本堂で開会式や閉会式を行い、旧聖徳幼稚園を本部として休憩室や昼食を提供する。夜間警備などは実行委員会が行う。期間中でも瑞泉寺への参拝客は通常通り訪れる。キャンプ目当てで来た人もついでにお参りすることが多い。

イベントは前年度から準備が行われ、実行委員会が作家の選定を行うなどする。また関係者や参加した作家の話によると、海外の作家に関しては作家が海外の木彫刻イベントなどを視察して招待する人を探すということもある。一級井波木彫刻士の古川鎮雄さんの話では、2015 年度に招待した海外作家のうち 5 人は、井波の彫刻作家が海外の木彫刻イベン

トに参加した際にできた、海外の作家とのネットワークを通じて招待したという。他の 6 人は富山県芸術文化協会が招待した。なお海外からの作家の招待は 1 人 1 回きりである。その理由は日本に来たい人は多いが、日本への渡航費が高額であることと物理的なサポートの問題で何度も行くことが出来ないためとされる。同じ人に何回も来てもらうより、多くの作家に来てもらうことを優先しているということと見られる。

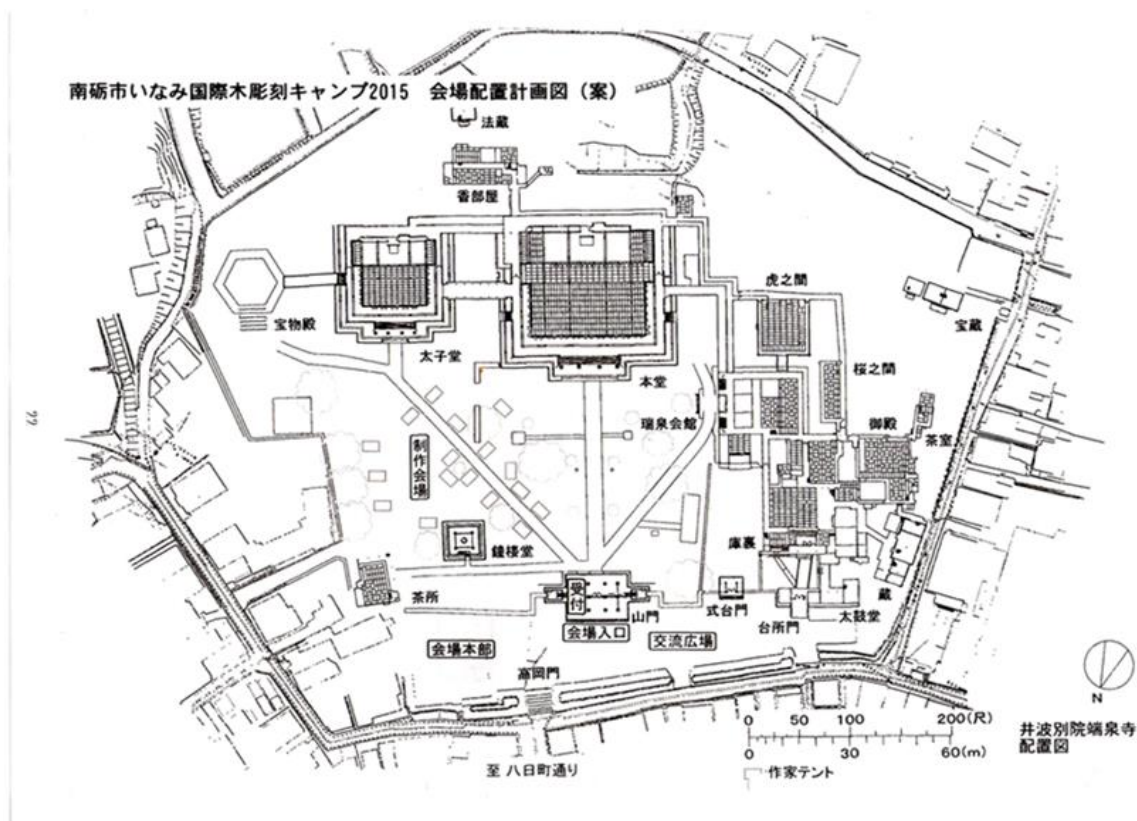


図 1. 第 7 回会場配置計画図 太子堂前にテントが張られ、そこが作家の作業スペースとなった。(南砺市観光協会川島宣夫さんから頂いた資料より)

## 2. 2015 年南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ

### 2-1. 2015 年度の概要

2015 年には 8 月 18 日から 8 月 30 日まで 7 回目南砺市いなみ国際木彫刻キャンプが開催された。今回は海外 11 か国 (アルゼンチン・オーストラリア・中国・チェコ・ハンガリー・イタリア・韓国・モンテネグロ・モロッコ・スイス・トルコ) のうち、新たに 2 か国 (スイス・モンテネグロ) の作家を招待した。期間中は瑞泉寺境内での公開制作の他、片岡鶴太郎氏との共同作品制作など様々なイベントが行われた。



表 1. 第 7 回南砺市いなみ国際木彫刻キャンプのスケジュール（彫刻関係のみ）

開催日	イベント名	会場
8月18日(火)	開会式	井波総合文化センター
8月19日(水)	仕事初めの儀	瑞泉寺境内
8月18日(火)～28日(金)	作品公開制作	瑞泉寺境内
8月22日(土)・23日(日)	片岡鶴太郎×井波彫刻共同作品制作	太子堂・本町通り
8月30日(日)	世界の食文化交流	交流広場
8月30日(日)	閉会式	瑞泉寺本堂
8月30日(日)	フェアウェルパーティー	いなみ木彫りの里

作品展

8月31日(月)～9月6日(日)	制作作品展示	瑞泉寺境内
9月9日(水)～20日(日)	キャンプ2015作品展	井波総合文化センター

関連イベント

8月22日(土)・23日(日)	井波彫刻まつり	井波彫刻総合会館
8月29日(土)	-チルアウト・イン閑乗寺- 祈り・炎の祭典	閑乗寺公園

(公式ホームページより作成)



写真 3. (左) 木彫刻作品をブロンズにした記念碑。(瑞泉寺にて)

写真 4. (右) 片岡鶴太郎氏と井波彫刻の共同作品「龍聲」

## 2-2. 公開制作開始

実際の様子はどのようなものだったのか。開催日の8月18日と仕事始めの儀が行われる19日に現地に行き、様子を見てきた。

初日（18日）は、筆者が到着したのが15時頃だったこともあり、瑞泉寺で職人の姿は見られなかった。会場内には既に各々の丸太が置いてあり、中には切断する目印が付けてあるものもあった。作家は初日は街の散策などをしていたらしい。八日町通りも人通りが少なかった。17時から井波総合文化センターにて開会式とウェルカムパーティーが行われた。式には招待作家や実行委員会をはじめ関係者が参加した。招待作家が紹介され、南砺平高校郷土芸能部による五箇山民謡が披露された。



写真 5. 開催初日の様子



写真 6. 仕事始めの儀

2日目（19日）は「仕事始めの儀」と世界平和を願う「平和の鐘を鳴らそう」が行われた後に公開制作が本格的に始まった。「仕事始めの儀」は朝8時30分から瑞泉寺太子堂前で行われた。まず本堂に向かって合掌し、次に公開制作の安全を祈願するための井波木遣りの会による「木遣り踊り」が行われた。「井波木遣りの会」の男子4人、女子4人が扇子などを使いながら、唄に合わせて踊り、その間井波彫刻協同組合の男性8名が2本のスギの丸太を太子殿前まで引きずる。その後太子殿前に持って行った丸太を横に並べて「ノミ打ちの儀」が行われた。木に杭を打ち、丸太の側面を斧で削り、丸太の上側を鑿で打つという順で行われ、この作業は作家、美術協会、瑞泉寺総務部長ら関係者が順に参加した。

最後に南砺市市長と、瑞泉寺総務部長からの挨拶で開会式が終了した。その後南砺ユネスコ協会を中心として「平和の鐘を鳴らそう」が実施された。会員や招待作家約30人が世界平和と東日本大震災の復興を願い、鐘を突いた。この後、午前9時過ぎに公開制作が本格的に始まった。

### 2-3. 公開制作の様子

ここでは木彫刻キャンプのメインである公開制作の様子を紹介したい。8月19日から8月28日まで、作家は限られた時間の中で自分たちの作品を作り上げていく。19日作家はボランティアスタッフのサポートを受けながら、各々の丸太をチェーンソーや鑿、木槌などで粗削り作業を行っていた。作家のそばにはあらかじめ制作された完成予定の作品の図や小さな模型が置いてあるものもあり、模型は木彫刻、粘土などで作られていた。来場者は、私が見学した10時から11時の間、高齢者から小学生以下の子どもまで、広い年齢層の人々が公開制作の様子を見に来ていた。チェーンソーの音が鳴り響く会場内で、来場者は日ごろ見慣れない木彫刻の制作の様子を物珍しそうに眺めていた。



写真7. 公開制作の様子



写真8. 会場の瑞泉寺境内

次に見学に行った22、23日には粗削りが大体終わり、ノミや鉋、木槌などを使って作業していた。19日に比べ、チェーンソーのけたたましい音もあまり無く、それぞれの丸太から完成予定の形に近づいているのが分かった。作業を黙々と続ける作家もいれば、休憩中に新聞記者や広報ボランティアスタッフからインタビューを受けている作家、山門前で談笑する作家の様子を見ることができた。暑い日の中、来場者は家族連れや団体客で賑わい、団体客は瑞泉寺の歴史などの説明を受けるとともに、作家が木と真剣に向き合っている様子を間近で見れていた。

開催期間中、井波彫刻を大人数で制作する様子も見ることができた。22日に井波彫刻協同組合と井波美術協会の公開制作の様子を見ると、数人がいくつかのパーツごとに分かれて製作している様子を見ることができた。井波美術協会は、1日6人体制で作業を行った。

制作していた美術協会の方に話をきいたところ、「井波美術協会は彫刻だけではなく、工芸、写真、絵画、書道などの分野の人々も含むので出られる人は限られます」と話された。ただ、他の分野の人も手伝いには来るとのことだった。このように、井波彫刻はお寺の欄間やイベント作品、スクールパネルなど大きな注文が来た場合、組合の人たちと集まって制作を行うという。

井波彫刻協同組合は今年井戸の周りに飾る龍と松の木を制作する。これは火事になったとき、龍が松の木に絡まり井戸の水を使って沈下したという伝説にちなむものである。井波彫刻協同組合員は124人でそのうち大体1日10人ほどが若手、ベテラン問わず作業していた。井波彫刻の場合は全体をまとめて一つに彫るのではなく、部品と部品をつなげる形だった。完成した作品は瑞泉寺境内にある井戸の屋根に取り付けられた。

8月29日と最終日の30日に見学に行った時には、作品はほぼすべて完成していた。ただしまだ完成していない作家もおり、細かい作業をしていた。完成した作家も、ほかの作家の作品を鑑賞している姿、中にはまだ完成していない作家を手伝う姿もあった。来場者は、22、23日と比べ少ない印象を受けたが、完成した作品を見て回ったり、作品を一つ一つ写真に収めていた。



写真 9. 最終日の太子殿前の様子

#### 2-4. 作品展

キャンプ終了後、制作された作品は9月6日まで井波別院・瑞泉寺内で作品展示された。その後9月9日から9月20日まで南砺市井波総合文化センターで「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」作品展が開催され、センター内外で今年制作された作品を展示された。作品展最終日に実際に見学に行くと、サイズの大きい3作品が外に、その他の作品は井波総合文化センター内に展示されていた。井波彫刻協同組合の作品は完成後すぐに瑞泉寺の井戸に取り付けられたため、設計図の展示がされていた。

キャンプ開催前に大門川河川公園や井波芸術の森公園で屋外展示されている過去の作品を見て回ったのだが、展示されている作品の中には、経年劣化し形が崩れているものもあった。木材で作られたものであるため長年外に展示されたままだと、腐敗していくのは当然である。こうした過去の作品はどうなるのか。センター内の受付の方に話を聞いたところ、8月の29日に閑乗寺公園にて「-チルアウト・イン・閑乗寺- 祈り・炎の祭典」というイベントが行われた。これまで制作された作品に感謝を表すという名目で過去の経年劣化し修繕が不可能になった作品を焼却したという。



写真 10. (左) 井波美術協会 (代表谷口信夫他 50名) 作「悠久の郷 (ゆうきゅうのさと)」

写真 11. (右) 井波彫刻協同組合作 「龍」 の設計図



写真 12. (左) マルコ ペトロビッチ ニェゴシュ (モンテネグロ) 作  
「モンテネグロ・ウロボロス」

写真 13. (右) マーカス ロデリック タットン (オーストラリア) 作「香る壺」

## 2-5. その他のイベント

キャンプ開催中、木彫刻の公開制作だけでなく、様々なイベントが行われた。そのいくつかを紹介したい。

開催期間中、瑞泉寺前の交流広場にて門前市が開かれ、模擬店や工芸品の販売、ワークショップなどが開かれ県外の特産品など紹介・販売された。瑞泉寺付近には食べ物を販売している所があまりないため、地域の特産品を扱う模擬店などにとっては良い PR の場となっていたのではないと思われる。

8月22、23日にはシンポジウム「全国地域ブランドサミット IN なんと」が開催された。パネルディスカッションや講演などで食や伝統工芸などの地域資源を生かした地域活性化の在り方を考えた。

また俳優・画家の片岡鶴太郎氏と井波彫刻の共同作品制作も行われた。22日に片岡鶴太郎氏が青年部の彫った龍（完成済み）に絵付けし、23日に瑞泉寺内で披露された。これを見に瑞泉寺を訪れる見学者も多く、受付で「片岡鶴太郎さんの講演はどこで行われますか？」と尋ねてくる人もいた。制作中、多くの人が太子堂に押し寄せ、「人が多すぎてあまり見ることができなかった。」と話す人も何人かいた。著名人を招待することでキャンプを多くの人の関心を持たせることができたようだ。

23日にはイベント「世界をつなぐ大きな輪～625のこだま～」が行われた。これは公募により決まったイベントで井波開町からの年数である625個の木の球をつなぎ合わせたものを八日町通りを通過して瑞泉寺本堂へ運んだ。海外の作家も様子を見に行ったという。625個のこだまは後日、井波総合文化センター内にて彫刻作品とともに展示された（写真14）。

30日には山門前で「世界の食文化交流」が行われた。これは各国の郷土料理を小さな器に小分けされたプレート（写真15）が販売され、来場者が招待作家の郷土料理を楽しんだ。販売の際は行列ができ、来場者だけでなく、キャンプに参加した作家やボランティアスタッフも食している様子が見られ、多くの人が異国の食文化に関心を示しているようだった。



写真14. (左) 世界をつなぐ大きな輪～625のこだま～

写真15. (右) 世界の食文化交流で販売されたプレート

この他にも園児～小学生を対象とする、公開制作の様子を写生する「絵を描くコンクール」（募集期間：8月18日～8月28日）、瑞泉寺本堂でのお茶会（23日）、旧正徳幼稚園で行われたパンケーキ作りなどの体験教室（19、23、26日）、本町通りでの国際クラフト市（29、30日）など開かれた。

筆者が見に行った日で来場者が多かったのは22、23日である。土曜日、日曜日だったからか、午前中の時点で団体、個人、親子連れなど多数の人が来ていた。瑞泉寺の門の前には門前市が開かれ、屋台が並んでいた。また閑乗寺の粘土釜で炭焼きしている人が、木炭を使った作品を販売していた。実行委員からの誘いを受けたとのことだったが、なかなか売れないとほかのスタッフに話していた。Tシャツもスタッフに売り込んでおり「売りたいという気持ちが大事」と語っていた。

## 2-6. ボランティアの様子と見えてきた課題

22日と30日に筆者はボランティアの受付係として参加した。ボランティアは職人以外の一般の方、記者、その他団体が参加していた。大人だけではなく、中学生、高校生もボランティア参加していた。高校生は福光高校の生徒で、部活の一環として参加しているとのことだった。ボランティアに参加した人に聞いたところ、自分の子供から話を聞いて参加した、職場でボランティア要請があったから、新聞広告を見て…など様々な理由で参加していた。

会場に訪れた人は多くは県内から来た人だったが、県外から来る人もいた。県外からは奈良、東京、群馬、沖縄…など様々だった。受付には、井波の風という井波観光の人がおり、瑞泉寺の歴史を訪れた人々に解説していた。こうした地域に関する歴史の紹介が、地域の観光に貢献しているという印象を受けた。

ボランティアは先述したように近隣の中学校・高校の生徒が参加した。それに加え、ホームページや新聞、チラシによる募集があった。内容は受付、清掃スタッフ、通訳、広報などで、受付は芳名記入の呼びかけ、パンフレットを渡す、来場者数のカウント、コンクールなど関連イベントの受付等などを担当した。清掃スタッフは、作家が作品制作で出されるゴミ（主に木屑）の処理他会場内の清掃をした。広報は写真、記事の為のインタビューなどを担当した。

他にも、作品をフォークリフトなどで運搬する、チェーンソーのメンテナンスなどもボランティアスタッフがやっている様子が見られた。

2日通しての感想は、大きなトラブルは無かったが、ボランティアスタッフ（運営）の連携がとれていないのではないかという印象を受けた。特にそれを感じたのはスケジュールの把握と来場者の対応である。例を挙げると、絵のコンクールで



写真 16. スタッフがフォークリフトを利用して  
作品を移動させる場面

作家が 625 のこだまのイベントを見に行ってしまう、作家が不在のなか子どもが絵を描くこともあったという話を聞いた。スケジュールと作家の動きを把握していれば、このような事態にはならなかったのではないか。また受付は、実行委員からイベントの場所等尋ねられた時の対処法（どう説明したらいいのか）などについてはボランティアに任せきりになっていたため、各種イベントや片岡鶴太郎氏との共同作品の場所を知らず、訪ねてきた人に十分説明ができなかった。ボランティアには南砺市や井波以外から応募した人も多く、その人たちは瑞泉寺付近の地理についても把握できていない人も多かった。受付には一日 5 人ほどいたので、最低 1 人でも説明できる人がいればよかったのではないかと思う。

### 3. キャンプで会った人々の語り

調査に際して、キャンプ来場者や井波彫刻の職人、ボランティアの方々に話を伺った。

#### 3-1. 来場者の感想

23日、福野から来たという男性（40代）は、キャンプ会場が瑞泉寺に変わる前の時にも来たことがあり、「閑乗寺公園より狭い範囲なので以前より回りやすい。」と語っていた。「写真を撮っていたら海外の職人が送ってほしいとメールアドレスを渡された。」と言っていた。見学者と海外作家の交流も少しではあるが、行われているらしい。

県内から来たという夫婦は新聞などの広告でこのイベントを知ったという。海外の人とは怖くて話せないと言っていた。「八日町通りもいろいろありますよね。何軒かお店の中に入ったりしました。」

砺波から来たという方（60代）は昔井波町に住んでいたためこのイベントの存在は以前から知っていた。この方も外国人作家とは話していないと話されていた。英語を少し話せる人などは海外作家と会話している様子が見られた。

29日に岐阜県から来たという女性（40代）は、今年の7月に井波彫刻総合会館に彫刻を見に行ったときにチラシを見て興味を持ったという。イベント自体に来たのは初めてで八日町通りの店にも何軒か入りましたと話していた。他にも、井波在住の人も見学している様子が見られた。

#### 3-2. 作家の感想

キャンプに参加した京都府の作家に話をきいたところ、「知人の紹介で参加した。違う文化の人の近くで作業することは、自分の視野が広がる。彫刻のやり方や作るものが違うのに共通していることのほうが多いと感じる。木も元々生きているものだからか、『生命』をテーマにしたものが多いですね。」と話された。確かに生命（人間）をテーマにしたものが多かった。また立っている人物をモチーフにしている作品が多いのか、縦に長い作品が多いとも個人的に感じた。

参加者である富山市の女性作家はこのようなイベントは初参加で、彫刻組合を通じて参加したという。他の作家とは毎日ご飯を食べたりして会話したりしたと語っていた。制作に関しては「時間制限があった方が作りやすい。そうでないとなかなか完成しないから。」「井波の人たちはみんなやさしい」「（他の作家と同じ場所で制作することは）刺激になるしとても勉強になる。」とも言っていた。このキャンプは招待作家にとっても貴重な経験の場にもなっていることがわかる。

キャンプ終了後に参加した井波彫刻の職人の方に制作する中で海外の職人と違いを感じることがあるかと聞いたところ、「そりゃあ違いはやっぱりありますよ。道具も人それぞれだし。海外は井波彫刻の職人と違い、木彫刻だけではなく、いろんなものを取り扱うと思



うし、表現のしかたも違う。」とのことだった。また、過去にも参加したことのある方は、「海外作家は決められた制限の中で制作していく中で色々驚いているようだった。」とも話されていた。キャンプを通して井波彫刻の宣伝ができたと思うかと聞いたところ、宣伝出来たのではという声がある一方、「あまり宣伝できたとは感じていない。(見学者は) 鑿などでただコンコンと打っている様子が面白いと思って見に来ていると思う。」「海外はチェーンソーで派手に削ったりしているので、見ている人や海外勢はギャップを感じている人も多いのでは？」という意見もあった。確かに、井波彫刻は鑿を打って削っていくという作業が多い。海外作家も無論このような作業があったのだが、井波彫刻と比べてコンコンと鑿を打っている様子を見るのが少なかったように思われた。こうした作業工程にも井波彫刻と海外の彫刻とのギャップがあるということだろうか。またキャンプ開催前に井波彫刻作家はほぼボランティア（無報酬）で参加するようなものであるという話を聞いた。キャンプを歓迎する人もいれば、このように井波彫刻には利益にはなっていないと考える人もいるようだ。

### 3-3. キャンプに携わる人々—ボランティアスタッフ—

通訳のボランティア（モンテネグロの職人の通訳を担当）の方にお話を伺ったところ、富山市在住1年ほど前にホテルか何かのチラシを見て興味を持ったという。英語通訳だが、相手の作家が実は英語が不得意で上手く通じない。そのため、インタビューも断ってしまうことがあったと話されていた。また、他の日に通訳を担当したという井波在住の方はヨーロッパから来た作家が多いから、団結力があると話されていた。

私と同じ日に受付を担当した富山市の女性は読売新聞の募集欄を見て応募した。外国人は自分の国の事を色々知っているが自分は富山の事を知らないから自分も富山について知りたいと思い、このイベントのボランティアに参加したとのことだった。ボランティアスタッフの雰囲気も和気あいあいとしており、ボランティアの仕事が一通り終了した後に参加したスタッフの人達は笑顔で「お疲れ様でした。」と同じ日に作業をしたボランティアスタッフとの別れを惜しんだ。

## 4. キャンプ運営と設営の経緯

今回実際に見てみて、「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」は大規模なイベントであると改めて知ることが出来た。このイベントの実行委員会とはどのようなものなのか、またどういった経緯でこのイベントを開催することになったのか。関係者の方々に話を伺うことが出来た。

### 4-1. キャンプ運営体制及び各種イベント

まず、南砺市教育委員会文化・世界遺産課南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ実行委員会

事務局 副主幹・柴田秀光さんに実行委員会の体制、ボランティア、各種イベントなどについて話を聞いた。

実行委員会は、前年度に発足し準備を進めていく。実行委員会はその都度決められ、今回の実行委員は42名である。誰がするのかは事務局が決める。実行委員は市の職員、報道関係者（北日本新聞、富山テレビ、チューリップテレビ、NHK、北日本放送、FM とやまなど）各一人からなる。

ボランティアは今回県内外からのべ約330人が参加した。基本的に一般募集で過去にも参加していた人（リピーター）も多い。前々回や第1回から参加している人もいる。今回ボランティアに多くの応募があり、見込みでは前回の倍ほどになった。土日に応募が集中したため、多すぎて断る場合もあったという。団体に応募する場合もあった。

期間中開催されたイベントについては芸能人の片岡鶴太郎さんを招待し、井波彫刻と共同制作を行った。どのように招待したのか経緯をたずねたところ、様々なイベントを模索しているなかでタレントを呼ぶことも候補に入れていた。井波彫刻と関係を持てるような人に来てもらおうと、芸術家の面もあるタレントを選び打診した。当初は「とんねるず」の木梨憲武さんが候補に挙がっていたという。

公開制作以外のイベントも前年度から準備している。井波本町で行われた「世界をつなぐ大きな輪 ～625のこだま～」は前回と同様に「世界一長いベンチ」としてギネス記録に挑戦する予定だったが、今回問い合わせたところ、対象に該当しなかったという。

イベントは4年ごとに減っている。高齢化などが原因である。地域の各種団体が減ることとはあっても、増えることはない。反面、新たに参加を希望する団体もある。全国地域ブランドサミットは全国14の市町がPRブースを構え、名産品や食べ物を販売していた。

制作された作品は市内の保育所、公共施設、井口の椿館、クリエータープラザ、市内の河川公園、瑞泉寺、都市計画道路の歩道などに設置される。井波彫刻総合会館には先述の片岡鶴太郎さんとの共同作品が展示される。

開催に当たり、新しい試みも実践されたという。できるだけ世界に発信したいという理由から、今回は先述したとおり新たにスイス、モンテネグロのか国の作家を招待した。そしてSNS、Facebookで情報発信を行った。Facebookでは海外2作家の制作している様子やその他イベントの様子が多く紹介されていた。インターネットの利用により、50か国程にアクセスされていると話されていた。英訳も載せており、井波の魅力を積極的に発信していたようだ。他にも先述の片岡鶴太郎との絵画と彫刻のコラボ、625のこだまも市民参加型の企画として公募したものである。

前回は途中で帰ってしまった作家もいたとのことだったが、今回は特に大きなトラブルには見舞われなかった。作品も全員完成することができた。ボランティアも多く集まり、人手に困ることもあまりなかった。全体的に滞りなく進んだという。<sup>141</sup>

---

<sup>141</sup> 予算については前回（第6回・2011年）前々回（第5回・2009年）ともに開催事業補

#### 4-2. キャンプのねらいと設営の経緯

イベントを企画した方にも話を伺った。井波ご出身の長谷川総一郎先生（福井大学特命教授、富山大学名誉教授）にお聞きしたところ、キャンプ開催の契機となったのは1988年に開催されたハンガリーの木彫刻シンポジウムに参加し、東欧諸国の彫刻家が野外で制作している様子を見て、井波でもできないかと考えたことから始まったという。ご本人は事前、事中、事後のうち事前（海外視察と招待）が第3回以降中心となっている。当初は木彫刻の知名度向上、次世代継承、世界への発信が目的で、「それは今もあまり変わらない。難しいかもしれないが、井波彫刻をメジャーなものにしていきたいと思っている、がなかなか…。高齢化も進み難しいかなと。最終的には無形文化遺産の登録が目標です。」「そのための実績が必要です。ただ、審査する人が現場を見ずに決める。また井波彫刻に関するパンフレットはあるが本が無いという指摘を受けたことから、本を出すことも目標「10年計画です。」とも話された。

海外での招致・視察について重視しているのは作品レベルの高さや年齢、国籍である。いい作家を教えてくれることもあるので、いいネットワークが作れるかも大切だという。また、アルコールやドラッグについても注意を払う。ヨーロッパ文化を全部は持ち込めないのですり合わせが大事だと話されていた。それでも残りの約半数は県や富山県芸術文化協会によるという。長谷川先生は3回目あたりから海外へ赴くようになり、これまで32か国訪問された。「自分からキャンプに参加したいと言う作家もいる。たくさん名刺を配るからか、自宅に泊めてくれと押しかけてくる作家もいた。」と話されていた。また、彫刻には具象と抽象があるが、県は具象を作る作家を欲しがっており、住民も抽象が多い現代彫刻はわからないという声もあるらしい。

道具について、日本と海外の違いについて少し話を聞くことができた。「海外作家と井波職人の違いはやはりありますね。」日本のノミの刃は鋼と地金の2枚刃であるが、海外の刃は1枚である。欧州の1枚刃は切れ味が持続せず、刃こぼれがしやすいという。

また保存については、外に展示するとやはり経年劣化するがそれでも当初は保存したいという声もあったという。木彫刻キャンプを始めたころ、デジタルアーカイブ化による展示も提案されていたようだが、町の人などの様々な意見を反映した結果、結局屋外展示に落ち着いたそうである。「例えばハンガリーは作品を外に飾る。劣化した場合、また新しく創る。ヨーロッパ地域では普通に壊したり、燃やしたりする。そうして木彫刻の需要ができる。対して、日本は大抵座敷に飾る。だから需要が増えにくい。屋内で保存すると10～20年は保存できる。このイベントは需要喚起の側面もあるが、日本は文化を優先してしまうため、なかなか需要まで結びつかない。」と述べられていた。

今回の井波彫刻共同組合・井波美術協会の作品には関わっておらず、期間中に訪れて初めて知ることもあったという。期間中会場を見に行くのは、専ら事後評価（来場者数やテ

---

助金は5000万円だったが、今回（第7回・2015年）は4500万円で500万円減少した。

ントの配置など) のためだと述べられていた。

南砺市いなみ国際木彫刻キャンプも 7 回目になり、これまで多くの海外作家を招待してきた。「作家の経歴にイベントの名前が (英語で) 載ったのは嬉しいことで、世界的にも有名になりつつあると実感している。」と話されていた。

これからの課題は何かと伺ったところ、「続けないといけない。長く続けていくための対策を練っていききたい。彫刻文化というものを、文化として世界に育てていききたい。」と話された。

## 5. まとめと考察—キャンプの感想とこれからのキャンプに向けて—

今回南砺市いなみ国際木彫刻キャンプを見学して、作家同士が通訳ボランティアを通じて会話している場面や、見学者やスタッフが通訳ボランティアを通じて会話をしている場面がたびたび見られた。中には英語で会話を試みる来場者の姿も見ることができ、会話を通じた国際交流が行われていた。会話を通じたコミュニケーション以外にも、「世界の食文化交流」、「世界をつなぐ大きな輪～625 のこだま～」などの彫刻以外のイベントも作家や見学者を含めての様々な形で国際交流が図られていた。こうしたイベントを交えた国際交流は、子どもから高齢者まで広い年齢層に受け入れられやすいと私は考える。こうした交流型イベントを積極的に採用していくことも国際交流を考える上で大切と思われる。個人的には海外の作家を招待するきっかけにもなる「海外で開催された木彫刻キャンプ」について気になった。これを来場者等にどのようなものなのか紹介するのも海外に関心を持ってもらえることになるのではないかと思われた。

井波彫刻については、会場の瑞泉寺に向かう際、八日町通りを通るため、木彫刻の店に出入りする人や、中には店内で職人に話を聞いている様子が見られた。木彫刻キャンプの開催そのものが井波彫刻の宣伝になっていたといえる。地域に対する貢献は間違いなくあるはずである。今回キャンプで制作された井波彫刻の 2 作品も、他の作品に負けない完成度だった。井波彫刻の特徴は何といても欄間制作などで培われてきた緻密で高度な彫刻技術であり、この技術を後世に伝えるためには若い人材が必要である。こうした点でも南砺市いなみ国際木彫刻キャンプは井波彫刻の宣伝とともに、技術後継者の発掘、育成の場としても機能するのではないだろうか。そして国際交流を通して、これまで継承されてきた技術や作風とともに井波彫刻に新たな作風が生み出されることも期待できると私は考える。また様々なイベントをはじめ片岡鶴太郎さんとの共同作品の制作といった著名人を起用するイベントや、毎回異なる国からの作家も招待することで前回と違ったものにしようとする工夫もここまで木彫刻キャンプが続いているポイントではないかと私は考える。

今回のキャンプは、SNS を利用した宣伝や広告などの効果もあり、多くの海外の方や幅広い世代の方が来場していた。ボランティアにおいて、先述したように「富山について知るいい機会だったので参加した。」という方もおり、このキャンプには交際交流だけでなく、

地域のことを自分から進んで学ぶ生涯学習の場としても機能していると考えられる。ボランティア応募者の増加やリピーターが多いのは、ボランティアを通じて井波や富山を知りたいという人や、井波の魅力を来場者に伝えたいという気持ちもあるのかもしれない。

これからも彫刻キャンプを続けていくにはと長谷川先生にお話を伺った際、「ローカル（自分たちが住む地域）の事を知らないと、グローバルにはならない。しっかり調べて、グローバルに持っていくことが大事です。」という話を聞いて、井波という地域について、そして井波彫刻や彫刻キャンプについてより詳しく、関心を持ってもらえるよう継続して国内外に情報を発信していくことが大切なのではないかと考えた。そういった意味では、SNS の積極的な活用によるネットワークの形成や長谷川先生が話されていた井波彫刻についての書籍を発行することは有効な手段であると思える。

このキャンプは、木彫刻という多くの人が普段あまりなじみのない美術工芸品を通して井波彫刻、地域、海外の民俗・文化について学ぶことができる場であり、そして言語と文化の壁を越え人々が交流する貴重な場でもある。これからも木彫刻キャンプが続いて木彫刻や文化の魅力を多くの人々に発信していくことを私は期待したい。

## 謝辞

今回の調査に当たり、井波彫刻及び南砺市いなみ木彫刻キャンプについての貴重な話を聞くことができました。特に南砺市観光協会の川島宣夫さん、井波彫刻の職人の皆様、長谷川総一郎先生をはじめとする南砺市いなみ国際木彫刻キャンプに携わる方々にお忙しい中ご協力をいただきました。この場を借りて感謝の意を述べたいと思います。ありがとうございました。

## 参考文献

田中晴人、横山幸文、高橋誠一 1996年「伝統産業と環境変化」『高岡短期大学紀要』  
7 : 159-167

北日本新聞 2015年8月19日～9月1日分の「南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ」関連記事

## ウェブサイト

南砺市いなみ国際木彫刻キャンプ 公式ホームページ

(<http://inami-camp.city.nanto.toyama.jp/index.jsp> ; 2016年1月10日閲覧)

南砺市ホームページ

(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/index.jsp> ; 2016年1月10日閲覧)

# 散居村の生活・農業から見る民具—南砺市飛騨屋地区の事例より—

熊谷 俊哉

## はじめに

このテーマを選んだのは一年前の文化人類学実習で「となみ散居村ミュージアム」の民具館を訪れた際、展示してある民具の量の多さと保存状態の良さ、その種類の豊富さに私は驚嘆した（写真1・2）ためである。そこには私の地元（栃木県日光市）の資料館とは比べ物にならないほど膨大な一般の人々の生活の記録が保存されていた。どうしてこのように多様な民具が存在し、保存されているのか、また、それらの民具は現在、家庭でどのように扱われているのか、これらに関心を抱き、今回調査することにした。

本章では実際に散居村に住む方々への聞き取りを行い、その具体的事例から民具の現状とそれに対する人々の考えを記述する。そして民具と民具収集事業の今後について考察する。調査では砺波郷土資料館学芸員の安カ川恵子さんに紹介していただいた南砺市飛騨屋地区の方々を対象に聞き取り調査を行った。



写真1. 民具館の様子



写真2. 民具展示室の様子

## 1. 砺波の民具収集事業について

現在、砺波郷土資料館が行っている民具収集事業は、もともと昭和42（1967）年、当時の太田小学校のPTA活動の一環として「このままでは先人の知恵と努力の歴史が失われてしまう」という危機感から民具を収集したのが始まりである。また、昭和52（1977）年には婦人ボランティア「のぎくグループ」により仕事着の収集が行われ、昭和58（1983）年に砺波郷土資料館が開館すると移された。その後も砺波地方を中心に農具をはじめ衣食住、運搬、社会生活、職人道具など様々な分野の民具収集が続けられてきた。以上の記述は、

散居村ミュージアム、民具展示室などの職員の方、また砺波郷土資料館前館長新藤正夫さんへのインタビュー調査をもとにした。

### 1-1. 現在

主な収集範囲は砺波地方とされ、砺波市、南砺市、小矢部市、高岡市の一部に及んでいる。収集より寄贈される数の方が多い。特徴としては農具が多く、しかも地元で製作し、創意工夫され使用されてきたものが主である。代表的なものでは鋤、田植定規、螺旋水車などが挙げられる。現在、砺波郷土資料館が収集した民具は約 1 万 3000 点にのぼり（平成 24 年 8 月現在）、そのうちとなみ散居村ミュージアム民具館では約 1600 点を展示し、砺波郷土資料館分室砺波民具展示室<sup>142</sup>には約 1 万 2000 点が収蔵展示されている（写真 2）。しかし、収集品が増えたため収蔵スペースが不足し、最近では調査・収集に赴くことは少なく、寄贈も断ることが増えたという。

### 1-2. 特徴

この砺波郷土資料館の民具収集事業の特徴として、同じ種類の民具を大量に展示している点が挙げられる。それはなぜかという点、例えば「唐箕」という農具は製造元や収集地、さらには家ごとに大きさ・材質・仕組みなどに微妙な差異があるからである。それは「少しでも米の収穫量を増やすため」や「少しでも作業を効率よく行うため」に各農家がそれぞれ工夫を積み重ねてきた結果である。それらの差異をただ「唐箕という名の道具」として一括りにして数台展示するのではなく、各農家がそれぞれの家の事情に合わせた工夫や独自に開発・改良をしてきた歴史を展示するために行っているのである。

そして、資料館に展示されているものは実際にどのように使われてきたのか、また、いつから、なぜ使われなくなったのか、などを具体的に把握するため南砺市飛騨屋地区でフィールドワークを行った。

## 2. 飛騨屋地区の概要

この節では、今回調査地とした南砺市飛騨屋地区についての概要を記述する。飛騨屋は富山県南砺市福野地区と砺波市庄川町の間ほどの平野部に位置する集落であり（図 1）、70 世帯 259 人が住んでいる（平成 27 年 12 月現在）。また、飛騨屋地区の特色である散居村と農業、特に里芋栽培が盛んであることからそれらについても触れる。

---

<sup>142</sup> 平成 27（2015）年開設。砺波市立庄東小学校 3 階のスペースを利用し、民具を展示している。

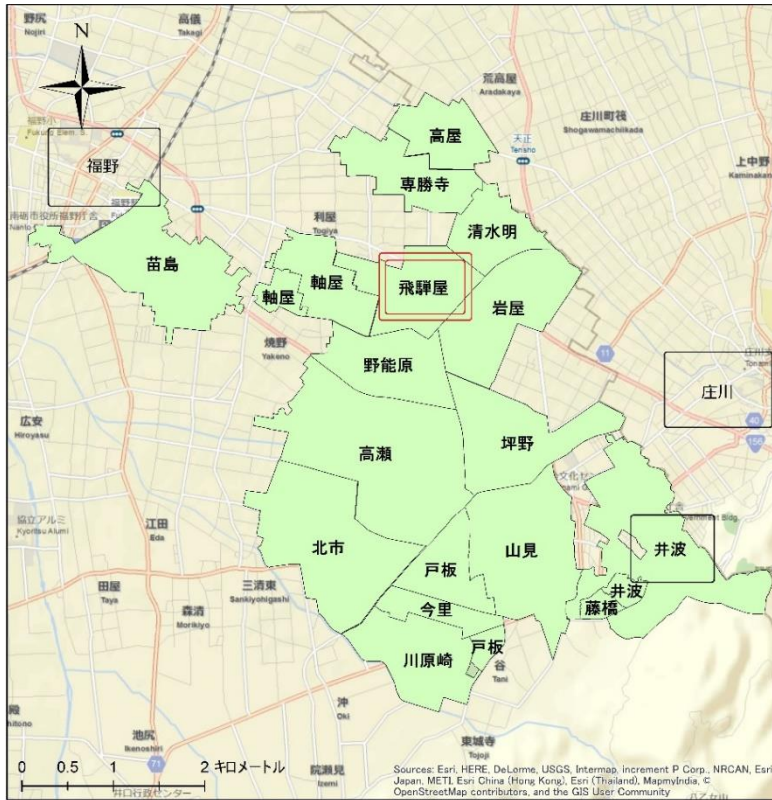


図 1. 飛騨屋地区周辺

## 2-1.. 歴史<sup>143</sup>

### 2-1-1.. 飛騨屋村の始まり

戦国時代、天下統一を目指す織田信長は、戦国大名をしのぐ勢力となった真宗本山石山本願寺攻略を開始するとともに、配下の武将佐々成正を宗派の拠点である越中に派遣した。

天正 8 (1580) 年より 11 年にわたる争いは信長側の勝利となり、翌年に井波の瑞泉寺が敗退した。瑞泉寺住職と門徒宗は一時、北野 (城端町) に逃れ、寺侍齋藤一族<sup>144</sup>が彼らをかきまい、近隣の人里離れた地に洞穴を掘って隠れ住まわせた。さらに天正 11 (1583) 年には、瑞泉寺に呼応し信長に立ち向かった婦負郡八尾の聞名寺も焼き討ちされ、牛岳を越えて井波へと逃げてきた。これも齋藤市郎兵衛が現在の飛騨屋の地にかくまうこととなる。また、この一部の門徒宗が旧庄川町 (現砺波市) の光照寺を頼ったため、光照寺門徒宗も合流しこの地に隠れ潜んで再起をはかった。それが飛騨屋地区のおこりとされる。

天正 16 (1588) 年、豊臣秀吉によって出された刀狩令により兵農分離となり、農民は武器を捨てて農地へと帰って行った。飛騨屋村でも同様で、帰村を許された聞名寺住職・門徒宗は聞名寺再興のために八尾に戻っていった。しかし、一部の聞名寺門徒宗、現佛巖寺門徒宗・光照寺門徒宗はこの地にとどまり、引き続きこの地を開墾していった。聞名寺が美濃→飛騨高山→八尾と移動してきたことからこの地を「飛騨屋」と名付けた。

<sup>143</sup> 『飛騨屋 400 有余年史』より

<sup>144</sup> 現在、瑞泉寺 5 カ寺といわれている寺のひとつである佛巖寺の門徒



## 2-1-2. 飛騨屋村の発展

その後、砺波平野に人々が永住の地として定着し集落が発展してきたが、それは加賀前田藩が45年〔寛文10（1670）年～正徳4（1714）年〕という長い歳月と多額の投資をし、藩の命運を賭して築いた「松川除堤防」（旧庄川町）の完成以降と考えられている。それにより庄川を用水として利用できるようになり、人々は高台から平野へと進出し、散居村という独特の景観を形作りながら開拓を進めていった。

## 2-2. 飛騨屋地区の生活

砺波平野では米作りなどの農業が盛んであった。それを語る上で砺波平野の農業の変遷について触れたいと思う。ここでは、砺波平野独特の散居村という生活様式、その成り立ちと現在に至るまでの砺波平野の農業の変化について記述する。

### 2-2-1. 散居村の農業<sup>145</sup>

砺波平野最大の特徴は扇状地を開拓した田園地帯に広がる散居村である。散居村とは平野に散らばるように家々が建ち、その家の周囲に自分の水田などが集まっている居住形態である。このような独特の景観の成立には、庄川の氾濫による地形が第一と考えられており、その後、加賀藩の政策によるもの、第二次大戦後の農地改革、昭和40（1965）年代の圃場整備などの要因で現在の形になったと考えられている。

江戸時代に砺波平野を治めていた加賀藩では年貢割合を公平にするために「<sup>でんちわり</sup>田地割<sup>146</sup>」と呼ばれる制度を実施していたが、多くの人々はくじで引いた田をお互いに交換して自分の家の周囲の土地を耕作していた。第二次世界大戦後に実施された農地改革によって地主制がなくなり、耕作していた土地が自分のものになった。そのため、それ以前は約90%が他人の土地を耕作する小作農か、一部他人の土地を耕作する自小作農であったがほとんどの農家が自作農になった。さらに農地の交換、分配、合体なども行われ、農家の多くが家の周りに耕作する水田をもつことになった。当時の牛馬耕は何度も踏襲、工夫され昭和20（1945）年～昭和30（1955）年代頃まで続けられた。

大正3（1914）年頃、砺波地方では足踏式回転脱穀機が普及し始める。これは元禄年間以降の千羽扱き脱穀を消滅させ、大正5（1916）年には水利の豊かな砺波地方の特性を生かした螺旋水車が考案される。第二次世界大戦前はこれと石油発動機が主な動力源となり、これ以後は富山県内に機械化農業が急速に広まることになる。現在のように電気が主流となるのは昭和24～25（1949～1950）年頃である。

昭和30（1955）年代の高度経済成長期以後、農業は全国的に大きく変化し、砺波平野でも様々な変化が起きていった。まず、圃場整備によりそれまでの小さくて形が不ぞろいであった水田が大きく形を整えられたため、トラクターやコンバインといった大型の農業機

<sup>145</sup> 『砺波平野の散村「改訂版」』より

<sup>146</sup> 田の良し悪しによって水田を分け、くじで耕作する人を振り分けた制度

械が導入され始めるようになった。収穫したコメの乾燥や精米も共同で行われるようになり、あちこちにライスセンター<sup>147</sup>なども建てられていった。そして機械の導入により作業が効率化し、時間の余った農家の間で兼業が盛んになっていった。さらには農作業の一部、もしくは全てを他の農家に任せる農家が多くなった。これは「請負耕作」と呼ばれ、兼業農家に代わって米作りを行う農家や農家のグループが現れ始めるようになり、中には組合や会社などの仕組みとして農業法人を作る人も出現するようになっていった。

## 2-2-2. 里芋について

飛騨屋や近隣の地区では、家の床下に芋穴と呼ばれるものを掘ったり、イモニョウ<sup>148</sup>を作って、里芋を貯蔵保管している。そのような地域独特の光景を見せていることから、里芋はこの地区の代名詞ともいえるほどなじみ深い作物である。そもそも里芋は病気や虫に強く、収穫量も比較的安定した作物である。さらに扇状地という排水の良い土壌と豊富な庄川の用水という条件がそろい、早くから凶作の年や厳しい年貢米の取り立てられる農民たちの糊口をしのぐ救荒作物として普及したようである。少なくとも江戸時代初期万治年間（1658～1660）には、隣村専勝寺の旧家所蔵の古文書にその消息が記録されている。

高山さんによると、かつては各家庭の菜園で口に合う品種を作っていたが、昭和 52～53（1977～1978）年頃に県指定の産地にするならば品種を統一しようという動きが農協を中心に起こった。そのため現在では出荷するものは統一品種を栽培し、各家庭の菜園では口にあう他種の里芋を栽培している。また、飛騨屋では味噌をつけ、里芋田楽などにして食べることが一般的である。さらにスズキと呼ばれる、赤芋やハッ頭<sup>やつがしら</sup>という品種の茎を空炒りして熱いうちに酢を入れ、そのまま食べたり、醤油や砂糖をつけて食べる料理もある。これは茎が真っ赤になることから赤スズキとも呼ばれるが、一般の里芋（白芋という）のズイキを食すこともある。

また食料としてばかりではなく、商品としても販売されており、特に明治年間の農村恐慌による北海道移民や、昭和期戦前の出稼ぎに歯止めをかけてくれたとされる。ただ里芋販売が盛況になるのは大正期に入ってからで、「畑買い」という、稲作で言うところの「青田買い」に類する方法が主流となり、掘り取り、貯蔵、販売は全て商人の手にゆだねられた。

この時代より里芋は冬季出荷が主体で、2～3月に雪をかき分けてイモニョウを崩し中から芋を取り出していた。そして選別、俵詰めを行い、雪の上をそりや荷車に乗せて旧高瀬駅や福野駅まで運んで出荷した。出荷しない越冬用の自家保有のものや種子用のものは自宅地下の芋穴で保管した。

---

<sup>147</sup> 147 籾の荷受から乾燥、<sup>もみす</sup> 籾摺り、選別、出荷という 4 段階を行う収穫施設のこと。

<sup>148</sup> 148 土饅頭のようなもので野積みする貯蔵方法、またはそれ自体を指す名称。

### 2-2-3. 報恩講<sup>149</sup>について

飛騨屋地区では年に1~2回ほど報恩講が行われている。報恩講とは仏教の行事であり、かつては、公民館がなかったため地区の人々が集まることのできる大きな家で開催され、その際には太鼓を鳴らして、人々に知らせた。そして呼んだ住職を皆でお世話をした。開催する家は毎回、寺と相談しながら変えていた。

報恩講にはいくつか種類があり、若衆報恩講(ワカイショ ボンコウ)、<sup>あまこ</sup>尼講、惣報恩講(ソウボンコウ)などがあった。若衆報恩講は(比較的若い)男性の、尼講は女性の、惣報恩講は(比較的高齢の)男女合わせた村(地区)全体の集まりである。この区分や開催時期、場所などは地区ごとに異なっており、寺に集まる地区もあった。また新しく嫁いできた嫁さんはお姑さんに連れて行ってもらう風習があった。飛騨屋地区では若衆報恩講と尼講は分かれていたが、のちに惣報恩講にまとめられた。

さらに、斎藤さん(後述)によると報恩講のほかに「お座」と呼ばれる不定期の集まりもあった。お座とは、農作業が一段落する冬場に個人宅へお坊さんと呼び、説教してもらうことである。夜に行く場合は「お逮夜」、午前中は「オアサジ」、(午後に行く場合の名称は不明)、朝方6時頃に行く場合は「<sup>きょうてんほうわ</sup>暁天法話」と呼ばれ、それらの総称がお座である。これも開催する際は太鼓をたたき、近所の人を呼んで行われた。

報恩講やお座を開催する際に叩かれた太鼓は現在、公民館に保管されている。かつて、これを叩く際には「もう少ししたら始まる」という一番太鼓と「今から始まる」という二番太鼓が叩かれていた。

## 3. 飛騨屋地区二世帯における民具保存状況

この調査では飛騨屋地区に在住している方々に聞き取りを行い、実際にどのような生活をしてきたのか、また過去どのように民具を使用していたのか、現在それはどうなっているのかなどについてお話を伺った。本節では前節で述べた散居村での生活、特に農業などに関するお話から、民具の実態についてまとめたいと思う。ここでは特に納屋を見せていただいた杉森さんと斎藤さんについて取り上げるが、この他にも飛騨屋地区在住の高山<sup>き</sup>喜代恵さん(昭和15年生まれ、75歳)、前述した砺波市立郷土資料館前館長の新藤正夫さん(砺波市林地区在住)からお聞きしたエピソードも参考にする。

### 3-1. 聞き取りをした二世帯について

#### 3-1-1. 杉森孝一(66歳)、桂子(61歳)さん夫妻について

杉森ご夫妻は、南砺市飛騨屋地区に住んでいる。主に桂子さんにお話をお聞きし、途中から孝一さんも加わり様々なお話を聞くことができた。昔ながらの散居村農家の典型のよ

---

<sup>149</sup>浄土真宗の宗祖(開祖)とされる親鸞(1173-1262)の祥月命日の前後に、宗祖親鸞に対する報恩謝徳のために営まれる法要のこと。

うな家であり、この地区でも特に立派な屋敷林と家屋をお持ちである。ご夫婦の厚意により家の中だけでなく納屋、牛納屋の中を見せていただくことができた。その際に民具について一つ一つ丁寧に解説して下さったため、その使用方法を理解することができた。

また、この家では以前から散居村を調査する方々などに協力してきたため、「杉森メモ」という散居村生活の特徴や屋敷林の効用、飛騨屋地区や杉森家の由来をまとめた資料を独自に作られており、今回それを見せていただいた。そのため杉森家の詳細について知ることができた。

### 3-1-2. 杉森家について

杉森家は、1650年代、今のところより東に200メートル先にあったが、家主の小右衛門が杉のある高台に屋敷替えし、さらにその後も杉を植栽してきた。名字は、明治6(1873)年以降に旧庄川町金屋の光照寺にお伺いを立て、多くの杉に囲まれていることから、「杉森」と名乗ることとなった。

現家屋は、約120年前に旧庄川町の木材商の茅葺の家を買い取り、分解し、冬に庄川をいかだに組んで渡り、ソリにて現在の場所まで運搬し組み立てたという。移築当時それは既に樹齢100~200年の杉に囲まれていたため、春先の防風(井波風)や防雪への配慮をすることなく東・東南向きに建てたと思われる<sup>150</sup>。明治42(1909)年に屋根を降ろし、茅葺から瓦葺の「マエナガレ」様式に替えた。

戦時中の昭和19(1944)年には、供出のため杉の大木を数本伐採した。また、その後には枯れ、倒木、落雷のために26~7本もの杉を伐採、檜の大木も納屋に影響が出始めたために伐採した。昭和46~48(1971~1973)年には圃場整備によって水利が変化し、樹木の勢いの衰えが顕著になった。これらの伐採杉材は挽いて(池中<sup>151</sup>、大工格納<sup>152</sup>、納屋に)保管し、それ以後は改装時に利用してきた。杉森さんによると「伐採するときには次に修理するところを考えて製材する」そうだ。

杉森家では先祖代々お世話になっている近隣の大工、瓦屋、トタン屋、電気屋などがある。木を切る際はその職人たちと「将来、家のどこを直すのか」を相談してから伐採し、直さない場合は木材を売るか捨てるかする。大きな家や屋敷林を維持していくためには、このような職人さんたちのメンテナンスが必要不可欠であり、またそれを可能にするための財力も散居村で生活する上では必要であることが窺える。

### 3-1-3. 斎藤博さんについて

斎藤博さんは飛騨屋地区に在住する昭和11年(1936年)生まれの79歳の男性である。飛騨屋壮年会の編集により平成4~7年(1992年~1995年)にかけて飛騨屋地区の村史であ

<sup>150</sup>近隣の家の多くは北・北東向きである。これは当時の近辺の各小川が東西に流れていたため、玄関口を川に向けた北玄関が多いとも言われる。

<sup>151</sup>池中とは木材を丸太のまま庭の池に沈めて保管しておくこと。

<sup>152</sup>杉森家では馴染みの製材所に先祖が伐採した木材などを預けている。

る『飛騨屋四百有余年史』がまとめられたが、それを実質1人で執筆されたのが斎藤さんである。飛騨屋地区の歴史に精通され、飛騨屋の由来から現在の生活の様子まで様々な事柄について詳しくお聞きすることができた。また、納屋を見せていただいた際には牛馬耕用の鍬や犁をわざわざ実演していただくことができた。

### 3-2. 杉森家、斎藤家の保有民具

ここでは両家の納屋などを見せていただいた際に確認できた民具について記述する。既に現存<sup>153</sup>していないものについてもそれぞれの方からの聞き取りをもとに記述する。さらに、当時の生活を知る上で重要なエピソードや施設などについて両家以外の方からの聞き取りも加え、記述する。

#### 3-2-1. 田植定規<sup>たうえじょうぎ</sup>（杉森家現存）

田植枠、六角式田植定規、タコロガシ、ラチコロガシとも呼ばれる（写真3、4）。これは田植えをする際に転がして印をつけ、苗と苗の間隔を一定に植えるための道具である。枡が正方形のものを尺角<sup>しやくかく</sup>、長方形のものを尺二八寸<sup>しやくにはっすん</sup>と呼ばれるものがあり、品種によって使い分けられた。写真の場合、枡の地面に平行な辺が長かったり短かったりしており、地面に垂直な辺をラチ幅と呼び、そちらは同じ長さである。表面は匏がかけてあり、とてもなめらかで光沢がある。また、ほとんど釘を使わずに木材を組み合わせて作られている。

杉森さんは、先日、高瀬神社に奉納する米を植えるために貸し出した際、久しぶりに納屋から出したのだという。写真撮影時には泥がついていたが「お盆前くらいになったら掃除してまたしまおうかと思っていた」そうだ。約55年前（桂子さんが小学1年生くらいの時）には現役で使用しており、約30年前にも息子の学校の体験学習の際に使用した。「今後も、奉納米などの時期になったら貸してくれてと言われるんじゃないかねー。（うちの納屋に）まだあるってわかつちやったから」とのことであった。



写真3. 杉森家の田植定規



写真4. 散居村ミュージアムの田植定規

<sup>153</sup>「現存」とは「あるが使っていない」、「現役」とは「まだ生活で使用している」という意味である。

### 3-2-2. 筵むしろ（杉森家現役）

現在の住宅の床は畳やフローリングなどが一般的であるが、かつては板張りが普通だった。普段、畳は日焼けなどを避けるために積んで保管され、行事などの際に敷いて利用していた。その板張りの床の上に敷き、今で言うカーペットの役割を果たしていたのがこの筵である。当時、筵はゴザより安値で入手が容易であり、また夜なべや冬仕事、子供の小遣い稼ぎとして各家庭で藁を打って織っていたようだ。



写真5. 保管されている筵

杉森家では農作物を上に乗せて干すのに便利なものとして今でも使用しており、「下に湿気がこもるためビニールじゃダメ」で、筵だと通気性が良く乾きやすいのだそうだ。昔は10枚以上持っていて、「あればほしい」とのこと。座布団などちょっとした物を干す際にも使用し、他にも休憩する際に敷くなど多目的に使用する。今は自作していないため、畳屋さんからゴザをもらい代用するなどしている。

### 3-2-3. 箕み（杉森家現役）

物を運ぶ、分ける、種や肥料など、を撒く際など様々な用途に使用できる道具である。さらに、ほとんどが植物由来の素材でできているため、使えなくなったら燃やせばよく、後処理が楽であった。写真7は「トウミダテル」という屑米やもみ殻（ネカ）などの細かいものをふるい分けるしぐさで、上下左右に細かく振ることにより粒の重さで選別することができる。



写真6. 植物性素材の箕

杉森さんによると、氷見で作っていた人が冬に行商に来ていたものを買っていたが、その人も既に作らなくなってしまったので今では新しく買っていないとのこと。価格は2~3千円ほどで、現在4つ所有している。きれいなものは米用、少し汚いものは大豆やその他用、さらに汚いものや古い物、プラスチック製のものなどは（里芋にかけるための）泥運び用や掃除用などと、それぞれ使い分けている。また、プラスチック製のものはホームセンターで安価に入手できるが、植物由来の素材の箕に比べて「(折り曲げたりすると) すぐ壊れるし、燃やすと有害物質が出る」ため使いにくいとのことであった。



写真7. トウミダテルしぐさ

所有している4つのうち、最も古いものは全てが植物性の素材でできていた。他には物を載せる部分にビニールが使われているものや、口の先端にカンバ（桜の木の皮）や金属板を使用し耐久性を高めるなどの工夫が凝らされているものもあった。

#### 3-2-4. 台秤（杉森家現役）

米を俵などに入れ、台の上に乗せて量る道具である。台秤は杉森家では約50年前から使用している。「デジタルは信用できない」ため、現在でも米を量る際に使用している。分銅で量るタイプであり、いまだに狂いがなく、150キロまで量ることができる。

高山さん<sup>154</sup>と杉森さんによると、米を詰める俵装用具も時代によって変化してきた。杉森さんが幼稚園か小学生の頃（高山さんが農協に勤めだした頃、約50年前）までは藁を編んだ俵が使用されていたが、昭和30（1955）年頃から<sup>かます</sup>吠<sup>ひょうそう</sup>に替わり、さらに昭和40（1965）年代（杉森さんが高校生くらいの頃）からはマタイと呼ばれる麻袋、平成2（1990）年からは紙袋が使用されるようになったとのこと。また、詰める量も、俵から麻袋までは一袋60キログラム、紙袋からは一袋30キログラムになり、「運びやすくなった」そうだ。また、当時は協力人夫と呼ばれる制度があり、集落から1人ずつ出して農協で米や粳の集荷、集配の手伝いを行っていた。ライスセンターに集荷してきた米を積み上げるため、女性の杉森さんも米の入った紙袋などを下から放り投げ、上の人に渡したとのこと。



写真8. 台車



写真9. 台車のラベル

#### 3-2-5. 牛納屋（杉森家現役）

昔は牛使いの人が春先に農作業のための牛を預けに来ていた。その間（約四日ほど）牛の世話をするのが女性の仕事であり「牛や馬は家族と同様」に丁寧に世話をした。当時は

---

<sup>154</sup>飛騨屋地区在住の高山喜代恵さん [昭和15（1940）年代生まれ、75歳]

<sup>155</sup>藁製のもので、俵が円筒形に対してこちらは座布団のような四角形である。俵よりきめが細かいように見える。

土間であったが今はコンクリートになっている。屋根も当時は板葺きだったが今は瓦屋根である。現在は二階を藁置き場に、一階を道具置き場になっている。

かつて、稲作をするためには田畑を耕す牛や馬が必要であった。しかし砺波平野では一年中農耕用牛馬を飼っている家は少なく、大半の農家は馬仲間（牛仲間も）と呼ばれる結ゆいのような組ぐみ156を作っていた。その仲間で馬などを共同で借り、水田を耕すという借馬慣行が行われていたようだ。農家達は加賀や能登方面からやって来るバクロウ（馬食）157という人々から反別割り158



写真 10. 牛納屋と杉森さん

で牛馬を借り、餌代などかかった耕作賃は世話をした人に支払うかわりにつけておく。そのお金を使って仲間内で旅行や温泉に行く、次の馬の餌代に充てるなどしていたとのこと。そうすることによって、仲間をただの「お金の貸し借りだけの関係」だけに終わらせず、さらに忙しい農作業の息抜きにもなるとのことであった。

馬などを使用する際にはなるべく早く次に使用する家に渡さなければならないため、日の出前に道具などを準備し、日中は作業、夕方には道具や馬の汚れを落として次の家へ渡すといった忙しい日程をこなしていたようだ。

### 3-2-6. 犁（斎藤家現存）…森河式双用犁、単用犁

犁とは写真のように牛にクビキなどを装着して引かせ、犁本体を人の手で操作しながら田を耕したものだ。写真 13 のタイプは双用犁と呼ばれるものである。犁ヘラと呼ばれる部分が左右に回転するため土を両側におこすことができ、それ以前の単用犁よりも使い勝手が良くなった。そのため砺波平野では大正末期頃から改良されたものが次々と製造・販売され、県内だけでなく東北地方や北海道までにも販売された。しかし、単用犁も軽くて扱いやすいため、遠い田や小さな田でのちょっとした作業の際には使用されていた。「その田に合った道具を使う」と斎藤さんはおっしゃっていた。砺波地方に動力耕運機が広まる昭和 30（1955）年代頃まで使用されていたようだ。

この章の写真は斎藤家の納屋にしまっていた犁を、斎藤さんがトラクターを牛に見立てて実演してくださったものである。写真 13 と 14 を比較すると良く分かるのだが、単用犁は犁先の部分以外が基本的には木材を組み合わせただけなのに対し、双用犁では犁ヘラ

156馬仲間とは親戚や近所の人など、気の合う数人で作る共同作業の組のことである。結とは主に小さな集落などにおける共同作業の制度である。耕運機が導入され始めると、それがそのまま耕運機仲間となる農家が多かった。

157バクロ、馬（牛）使いとも。農家への馬のあっせん、馬鉄を打つなど様々なことを行っていた。あまり品行方正ではなく、評判は良くなかったようだ。

158所有地や耕作地の割合で出資すること。



を左右に回転させるために、犁柄（カジトリ）と呼ばれる部分から金属製の仕掛けがヘラに繋がっており、金属製のネジや釘が使用されている。木材自体も、単用犁では犁身（オイタテ）と呼ばれる部分が曲線を描いているのに対し、双用犁の方は塗装が施され、木材が直線的である。技術が進歩し、会社で製造・販売されていたことがわかる。



写真 11. 人の手で操作する様子



写真 12. トラクターを牛に見立てる様子  
(右側が頭部にあたる)



写真 13. 操作している様子



写真 14. 単用犁

### 3-2-7. 牛馬耕用具

(首枷、引綱、鞍、尻枷、馬盥うまだらい、飼葉桶…斎藤家現存 口枷…杉森家現存)

写真 15 の馬盥は馬洗い桶とも呼ばれていた。1 日の田仕事を終えた馬を洗う道具で、小川などでざっと泥を落とした後、この盥に水を張り、足を丁寧に洗ってやったとのこと。そのため、底が抜けないように頑丈な作りになっている。大きさは大人が丸まって入れるくらいで、高さは 30 センチほど。また、赤ん坊の湯あみに使用する桶は円形をしているが、馬洗い桶は楕円形をしているのが特徴である。



写真 15. 馬盥の様子



写真 16. 鞍とクビキ (杉森家、現存)



写真 17. 口籠

牛耕では、鞍、耕鞍 (写真 12 左、中央と 16 中央)、「く」の字型の首枷、クビキと呼ばれるもの (写真 12 右と写真 16 右)、そして引綱、ヒキテと呼ばれるもの (写真 13 で斎藤さんが握っているもの)、尻枷、スルカス (写真 11 で犁が接続されている横 1 本の木材) を牛に装着して行う。鞍には荷物を括りつけ、運搬時にも使用した。クビキは牛の首筋に装着し、引綱で牛の向きを操作しながら農具を引かせた。さらに引綱は農具に取りつける尻枷の両端にも巻き付けた。

また、写真 17 は口籠、口枷と呼ばれ、その名の通り口にはめて牛馬が勝手に道草を食わないようにするためのものである。斎藤さん、高山さんによると、戦前は馬耕が一般的だったが戦時中に軍馬として供出させられたため、牛を飼育して耕す農家が増えたとのことである。

### 3-2-8. 苗籠 (斎藤家現存)



写真 18. 苗籠の様子

苗籠とは苗代で育て、苗束にまとめた苗を田まで運ぶ道具である。主に天秤棒の両端に吊りして、それを担いで運搬した。斎藤さんによると、写真 18 のものは子供用に作られたものであるため、非常に軽い。当時、農作業は「猫の手も借りたい」ほど忙しかったため、子供は貴重な労働力であった。そのため農具の中には子供でも扱えるように小さく、軽いものが作られることがあったという。

高山さんと杉森さんによると、昭和 35 (1960) 年頃までは春と秋と 2 回、1~2 週間ほどの農繁期休みというものがあり、その間の学校は休みとなって子供たちは農作業に駆り出されたとのことである。小学校 1 年生まではねねんもり (子守りのこと) が仕事で、親戚

の家に1週間泊りがけでお手伝いに行っていた。今で言う宿泊体験のようなもので高山さんによると「おばさんと一緒に寝たり、お菓子をもらえたり楽しかった」。小学校2年生からは田の手伝いで、草取りや農耕馬などへの餌やりなども子供の仕事だったという。

### 3-2-9. 鍬くわ（斎藤家現役）

鍬は田畑を耕す、土を砕く、ならすなどの整地作業、畝(うね)立て、畦(あぜ)作り、中耕や除草、土寄せの際など幅広い作業で使用されてきた。写真(19-24)は斎藤さんの家で見せていただいた鍬である。昔は刃床部はししょうが木製の物を使用していたが、次第に鉄製に代わっていったそうだ。写真19のように刃床部が一枚板のものはイタガ(板鍬)、ヒラガ(平鍬)と呼ばれ、田畑を耕す場合や溝を掘る場合に使用していたとのこと。一方、写真20のように刃床部は3つに分かれているものをミツガ(三ツ鍬)、4つに分かれているものをヨツガ(四ツ鍬)と呼ばれており、前者は重く頑丈なため深く土をおこす場合に、後者は軽いため泥を細かくする場合や、土を寄せる場合に使用していたとのこと。また、斎藤さんによると「里芋を掘るならミツガが(使い勝手が)良い」とのこと。一方、ミツガは女性には重いため、杉森桂子さんは扱いにくかったとのこと。また、写真21の三角鍬はニクカキ<sup>159</sup>に使用していたとのこと。



写真19. ヒラガ、イタガ



写真20. ミツガ、ヨツガ



写真21. 三角鍬

杉森さんと斎藤さんによると、鍬は写真23のように使用前は1~2時間ほど水に浸して柄を膨張させる必要がある。なぜかという、作業をしている時に刃床部が抜けないようにするために、写真22のように柄と櫃(櫃壺)<sup>160</sup>の間に楔と呼ばれる金属板をはさむなど工夫していた。使用後は泥をよく落とし、納屋の内外に写真24のようにぶら下げて保管する。

<sup>159</sup>ニクカキとは田の水はけを良くするために田に溝を掘る作業のこと。5月終~6月頃の「田(の土)が柔らかい」梅雨時に行い、素手で行う場合はテニクと呼ばれる。杉森さん、高山さんによると「テニクの方が早い」。そのため、長年のテニク作業よってお二人の指関節は太くなったり曲がったりしていた。

<sup>160</sup>刃床部の根元にある輪のような部分。ここに柄を入れる。



写真 22. 櫃と楔の様子      写真 23. 水に浸す鋏（斎藤家）      写真 24. 収納時の様子

これらの鋏の多くは地元の職人（金物屋）が作るか、遠方の市で購入してきた。当時、これらの道具はすべて手作りであるため、1つ1つの柄の角度や長さ、太さ、角度などが微妙に異なっていた。そのため、それぞれ「自分の体格や好みに合ったものを買ってきた」こともあり、かつては1つの家には何本も同じ種類の道具があった。そして、使用しているうちに刃先が減ると近所の鍛冶屋で先ガケ<sup>161</sup>をしてもらい、何度も何度も修理して使用し、「文字通り、擦り切れるまで使った」そうだ。

しかし、現在ではほとんどの鍛冶屋が廃業してしまい、農協の資材センターが鍛冶屋代わりではあるが、「イタガを直せない。新品を扱うだけ」になっているそうだ。また、斎藤さんも「今では直すよりも新品を買った方が安い」こともあり、そういったことが鍛冶屋の廃れる原因の1つになったのではないかと推測されていた。しかし、「ホームセンターの道具は均一すぎて使い勝手が良くない」ともおっしゃられており、今では修繕が必要な状態の道具を「不自由しながら使っている」とのことであった。

### 3-2-10. 報恩講太鼓（杉森家現存）

杉森家で報恩講を開催する際に叩き鳴らしていたもの。現在では壊れて鳴らせなくなったため、蔵の軒下に吊るしてある。斎藤さんによると、杉森さんのように個人で太鼓を持っている人は珍しく、とても大きな家であることから、よくお座などを開催していた家なのではないかとのこと。こういった太鼓は葬式などの開始の合図でも使用され、それぞれ叩き方が違った。また、公民館に保存されている地区の太鼓と違って祭りなどでは叩かれなかった。

当時、太鼓は行事の合図や祭りの際に使用されるなど、人々の生活の節目で活躍していた道具であった。特に生活の中心である農業は祭りや行事などと関連が深く、一年の



写真 25. 報恩講太鼓

<sup>161</sup>先ガケ（先掛け）とは、欠けたりすり減ったりした刃先を補強、修繕すること。鋼を叩いて伸ばす、鋳直すなどをする「大変技術が必要」なことだそうだ。

間に太鼓を鳴らす機会が何度もあった。例示すると、まず4月中頃に「種まき盆」と言っ  
て水苗代を行った際に叩いた。主に夕方だった。次に5月の終わり頃から6月初めにか  
けての夕方に「植え付け盆」と言っ、かつては地区ごとに行っていた苗の植え付けが終  
った際に、農作業の一区切りとして区長宅（現在は公民館）に保管されている大太鼓を叩  
いていた。これを人々は「タアガリヤ！」と喜び、「この太鼓が鳴らないと休みにならな  
かった」とのこと。約10年前までは行っており、リズムが難しいため斎藤さんが頼まれて太  
鼓を叩いていたようだ。他の地区では数年前まで行っていたらしく、夕方になると太鼓の  
音が聞こえてきたようだ。現在では若い人が少なく、機械化が進んだ農業では「みんな  
で一斉に作業する」ということがなくなり、各農家がバラバラに作業を行うため、いつ  
しか鳴らされなくなっていったようだ。また、この数日後に「ヤスゴトヤ！」と農作業の  
一休みとして近所の人や馬仲間などで飲みに行ったりしていたようだ。6月9、10日頃  
には「田祭り」と言っで行燈を持ち、太鼓を鳴らしながら地区を練り歩いたようだ。  
杉森さんによると、約50年前までは砺波地方の各地区で夜高祭りを行っていたらしく、  
地区の男性陣が1カ月ほどかけて制作したりアカー1台分の夜高行燈や子供（男）が  
作った「デンガク行燈」を引いて回っていたようだ。それがいつしか「トッペ行燈」と  
呼ばれる個人持ちの小さいものに変化し、これは平成15年まで地区の青年が大  
きい行燈を作り行われていたようだ。現在ではやる気のある家が細々と続  
けている。7月25～30日ほどの土曜日の日中には「熱送り」と言  
い、五穀豊穰と稲に虫がわからないようにと祈願し、虫を音で追い払う祭  
りを行う。秋は収穫に必死で叩く暇がないためこの時期に行う。福光  
などでは大きな太鼓をリアカーに載せて叩きながら練り歩くが、飛  
騨屋では公民館の太鼓を移動せず叩くようだ。また、これを叩く  
リズムは種まき盆や植え付け盆と同じだとのこと。

### 3-2-11. 一斗<sup>と</sup>枘、斗<sup>と</sup>搔棒（杉森家現存）



写真 26. 方形穀用一斗枘



写真 27. 円筒形穀用一斗枘



写真 28. 斗搔棒

イットーマス、トボとも呼ばれ、米を俵に詰める際に使用する枘である。米を多めに入  
れ、上部を斗搔棒でならすことによって一斗を計量する。もとは方形であったが精度が悪  
かったため、明治42（1967）年以降は全て円筒形に統一され、検定証印がつけられたもの

のみが使用可能となった。杉森さんによると、方形の方が普段使いで汚いため、豆などの計量に使用していたか、円筒形の方は比較的きれいなので米の計量に使用していたのではないかとのことであった。

### 3-2-12. ドウダレ（杉森家現役）

ドウダレとは藁を細紐で結んだもの。保湿のために芋などにかけて使用する。ビニールで保湿しようとするとう湿気がこもりすぎてしまうため、こちらの方が良いそうだ。また、写真のものは杉森桂子さんの母が作ったものだという。昔は日本晴、モチ米などの丈が長い品種の藁で作っていたが、今の品種は短いから作るのが大変という。コシヒカリなどは藁のコシが弱く不適とのこと。



写真 29. 収納しているドウダレ

### 3-2-13. 油紙（杉森家現存）

苗代（<sup>なわしろ</sup>育苗のこと）の時に保温のために使用していた。昔は怪我の手当の際に薬、ガーゼ、油紙、包帯の順に巻いていたので「もしもの時のためにとっておいたんだわ（笑）」とのこと。

ここで言う苗代とは「保温折衷式苗代」のことであり、油紙で苗代を覆うことによって風雨を防ぐと共に、平均して2～3度苗代の温度を上げて発芽を促す方法のことである。それによって通常より早く苗が育ち、その分早く田植えを行うことができるため冷害や病気などにかかりにくくなるのである。これも当時の農家の工夫の一つであった。現在ではビニールやポリエチレンなどが用いられるようになってきており、散居村では写真31のような方法での育苗を見ることができる。



写真 30. 油紙



写真 31. 現在、散居村で見られる育苗の様子

### 3-3. まとめ

ここで、以上の確認することができた民具を分類・整理してみる。現存のものは6種類、現役のものは7種類であり、現役のうち、かつてと異なる利用をされているものは筵と牛納屋の2種類であった。また、現存、現役を通して、もはや入手困難や現品限りのものと思われるものは田植定規、箕、台秤、牛納屋（建築困難）、犁、牛馬耕用具、苗籠、報恩講太鼓、一斗枡（斗搔棒）、ドウダレの9種類であった。

次に、使われ続けているものと使われなくなった民具の差は何かについて考えてみたい。まず使われなくなった理由の一つに「生活の変化」があるだろう。報恩講太鼓などは壊れたという理由があるが、それに加えて個人の家で報恩講を行わなくなったことが大きな影響を与えているのだろう。そして生活の変化を受け、二つ目に「代替品の登場」である。田植定規、犁、牛馬耕用具、苗籠などはトラクターなどの大型機械に取って替われ、油紙やドウダレなどもビニールなどの安価で入手が容易なものに変わった。一方で、まだ使われ続けている筵や鍬は、例えホームセンターなどで安価で代替品が入手できるとしても杉森さんは筵を、斎藤さんは鍬を使い続けている。そこから、「使い勝手の良さ」から未だ使用されているということが考えられる。

## 4. 考察

今回の調査で調査に協力していただいた方の納屋には未だ多くの民具が眠っていた。それどころか機械化が進んだ現在でも使用しているものもあり、とても驚かされる結果となった。そこで私が疑問に思ったのが、これらの道具はどうして現存している、あるいは現役であるのだろうか、なぜ捨てられないのか。そして、なぜ砺波郷土資料館は多量の民具を収集できたのかという点である。

私は当初、先祖代々使用してきた道具への愛着などから簡単に道具を廃棄しないのではないかと考えた。聞き取りを進める中でそれは間違いではないものの、別な側面もあることがわかってきた。それは①飛騨屋地区をはじめ、砺波平野などの散居村の家々はそれぞれとても大きな母屋と納屋、しっかりとした蔵を持っていること②農業政策や車社会などの影響③世代交代である。

まず、①について私は「蔵を持つと人々の志向」「季節ごとに行事があり、置く場所も多い」ことが関係していると考えた。

散居村での生活において、立派な屋敷林（カイニョ）や母屋などを維持していくにはある程度の財力が必要である。散居村の人々は「蔵を持ってこそ一人前」という意識があり、蔵を持たない家や分家はアラヤ、アライエとして少なからず蔑視される傾向があり、そのため人々は立派な蔵を持つとしようとする傾向があった。また、杉森さんのお話を聞くと蔵とは通気性が良く、頑丈であり、保管している物が傷まず残りやすいとのことであった。そして、蔵には決して電気などの火元となるようなものを置かず、家の風上に建てられたため、

当時の人々が防火にも細心の注意を払っていたこともわかる。そして蔵とは大切なものをしまっておく場所であると同時に食器や客布団、座布団、着物など季節によって頻繁に出し入れするものなどをしまっておくところだった。行事や季節が変わるたびに道具を出し、そのたびに手入れなどをして大切にしまっておくため、道具が長持ちやすくなったのではないだろうか。さらに、広い母屋や納屋、蔵など物を置くことができるスペースがあったことも使われなくなった道具があまり捨てられない一因ではないだろうか。

次に②について、まず農家には国から補助金が出ているが、それは厳しい出荷規制などを守らなければならない。例えば杉森家では約20年前まではモチも作っていたが、国の規制によりウルチにモチが混じると出荷ができなくなった。また、それまでは豆や麦も作っていたが、これらをコンバインで刈り取ると、混入を防ぐために機械を全て分解して掃除しなければならなくなったのである。「国の規制で小さな農業がやりにくくなった」と杉森さんは語っていた。それらの事情もあり、機械化が進む現在では「個人で一つ数百万円もする機械を買ってられない」→「より大きな請負業者に委託した方が良い」となり、農業自体をやめてしまう人がでてきた。さらに杉森さんによると最近では納屋を車庫にしてしまう家が増えたという。それはなぜかという、「委託した際などに納屋を掃除する」→「道具を捨てる」→「納屋を空にし、車庫などに再利用する」ということらしかった。その納屋を掃除した際に使われなくなった農具を中心とした民具が処分されるのではないだろうか。そして、上記の①のため保存状態が良いものなどを捨てるのが惜しいと思った持ち主が、資料館などに寄贈するのではないだろうか。

最後に③世代交代についてだが、現在、民具を使用した経験があり、民具に馴染みのある世代はもう祖父母と呼ばれるほどの年齢になっている。一方、家の物事を取り仕切り、建て替えや引っ越しなどを主導するのは子や孫の世代となっている。その子や孫世代は民具を使用した経験どころか、民具の存在を知らない世代である。その世代にとって納屋や倉庫に置いてある民具はただの場所を取る荷物でしかない。そのため、より納屋を車庫などに再利用しようとし、民具を捨てる、などするのではないだろうか。その際に、その民具に馴染みや思い入れのある祖父母世代などが廃棄するくらいなら、と寄贈するのではないだろうか。

以上の①～③の理由により、砺波平野の散居村では「道具が捨てられず、状態が良いまま保存できる環境」と「政策や車社会化などの影響により、納屋や蔵から道具が一気に放出される状況」、「放出されたものを廃棄する世代、寄贈する世代の意識差」があるため、砺波郷土資料館は多種多様で良質の民具が収蔵、展示することができているのではないだろうか。

おわりに



前述した通り、現在、資料館では収蔵スペースなどの問題から寄贈も断ることが増えた。つまりそれは「一つ一つが創意工夫の歴史」である民具が廃棄されてしまうことに繋がっているということである。私は資料館の方針に驚きと感銘を受けたため、この事態が非常に残念だと思う。これを避けるためには行政の理解や支援が必要なのはもちろんのこと、民具の所有者自信の理解や、「古くなったら、使わなくなったら捨てる」という価値観を持つ大量消費社会を生きる現代人に「創意工夫の歴史」の大切さを伝えていく努力が必要であると考えている。

また、調査中に斎藤さんから「電気がいつ頃に点いたのかなどを調べようと思っても、その当時を知っている人がいない」ということを聞いた。そのことから「当時を生きる人には普段、当たり前すぎて意識していないが、後世の人にとっては貴重な情報」になり得るかもしれないことが、今現在、急速に失われて行っているのではないかと危機感を覚えた。私は民具などもそういった情報の一つだと考えているため、それらが永遠に失われてしまう前に収集し、少しでも後世に伝える必要があるのではないかと考えている。その先駆者である砺波郷土資料館の方々には、今後もぜひ民具収集事業を続けてもらいたい。

協力していただいた方に教えていただいた情報を十分にまとめられたとは言えないが、この報告書で少しでも読者が砺波の散居村の生活や民具、そしてその歴史に興味を持つきっかけになればと考えている。

## 謝辞

最後に、今回の調査を進めるにあたって、多くの方々から貴重なお話を伺うことができ、また様々な体験をさせていただくことができました。協力者を紹介していただいた砺波郷土資料館の安力川恵子さん、各資料館の方々、民具を実演も交えて説明して下さった飛騨屋の斎藤博さん、貴重な当時の生活をたくさん教えて下さった高山喜代恵さん、民具に興味を持つきっかけともいえる民具収集事業を始められた新藤正夫さん、大変お世話になりました。特に、飛騨屋地区での聞き取りに毎回付き添っていただいたばかりか、わざわざ合宿所の方まで村史を届けて下さった杉森夫妻には感謝してもしきれません。この報告書は夫妻の協力なしには到底書き上げることができなかつたと思います。本当にありがとうございました。

この場を借りて皆様に心からお礼申し上げます。ご協力ありがとうございました。

## 参考文献

杉森夫妻 平成24年3月、8月、平成26年5月 『杉森メモ』

砺波市立砺波散村地域研究所 2010年 『砺波平野の散村「改訂版」』

飛騨屋壮年会、村史編集委員会 平成8年 『飛騨屋四百有余年史』

砺波郷土資料館、散居村ミュージアム民具館、砺波郷土資料館分室砺波民具展示室  
各資料館パンフレット

**参考にしたウェブサイト**

砺波正倉 電子書籍 (<http://1073shoso.jp/www/book/index.jsp> ; 2015年1月7日閲覧)

砺波市立砺波郷土資料館 2006年3月『砺波の民具 砺波郷土資料館所蔵民具写真目録』

南砺市 さきがけて 緑の里から 世界

(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/index.jsp> ; 2015年1月7日閲覧)

## 第 3 部 福光の調査報告

# アサガオにかける想い—福光新町あさがお通り—

西尾 早織

## はじめに

アサガオ<sup>162</sup>。この花の名を聞くと、小学生の時に観察日記をつけた記憶がよみがえる方が多いであろう。もちろん私もその一人だ。

私が南砺市福光新町のあさがお通りに興味を持ったのは、小学生でも育てられるその花を町全体で育てることが町おこしにつながりうるのだろうかと思ったからである。花による町おこしは、華やかそうではあるけれど、食べものなどに比べてインパクトに欠けそうだし、時期も限られる。その花に合わせるため短期間であるだろうし、何より客引き力が小さいように思われた。また、チューリップというイメージが強い富山で、なぜアサガオなのかと率直に疑問に思った。

調べてみると、「アサガオは小学生でも育てられるから」という実に単純な理由であった。しかし、実際に新町の人々が育てるアサガオは、世間一般の人々が知っているだろう、小学生が育てるアサガオとは似て非なるものであった。

この調査報告では、住民の方々に伺ったあさがお祭りの今昔、そこから垣間見える新町の人々のアサガオにかける愛と情熱、そして福光新町の魅力を伝えたい。

## 1. 福光の概要

### 1-1. 福光の自然・人口

福光について、『福光町史』（福光町史編纂委員会、2011年）を参考にしつつ以下に述べていく。

市街の中心部は商店街であり、それを包み込むように住宅地が広がる。福光は平成16（2004）年の合併により南砺市に属した町で、富山県南砺市の西南に位置する（図1）。総面積は約168,05 km<sup>2</sup>であり、約北半分が平地、南半分が山岳地帯である。石川県との県境には県立自然公園に指定されている医王山があり、中央には小矢部川が流れ、自然豊かな地

---

<sup>162</sup>ヒルガオ科の蔓性の一年草。茎は左巻き。葉は大きな切れ込みがある。夏の朝、ラッパ状の花を開く。アサガオは、奈良時代末期に遣唐使によって中国から渡来した。江戸時代より園芸植物として栽培され、多くの品種が生まれた。種々のアサガオを持ち寄り花や葉の優劣を競う「あさがお合わせ」という品評会も流行した。アサガオは大きく「日本アサガオ（別名大輪アサガオ）」と「西洋アサガオ」に分かれており、色は白、クリーム色、紅色、桃・桜色、藤、浅葱・納戸色、水色、茶色、黒鳩色、葡萄鼠色などの色がある。また、花は単色のみでなく、縞、絞り、縁取り、斑入りと色々あり、葉の色も緑一色のものだけでなく緑に白や黄色っぽい斑が入ったものもある。（出典：朝顔百科編纂委員会 2012年 『朝顔百科』 誠文堂新光社）

域である。南砺市の平成 27 (2015) 年 11 月末現在の統計資料<sup>163</sup>によれば、福光の世帯数は 6,023 世帯、人口は 18,003 人である。



図 1. 南砺市福光の位置 (南砺市公式ホームページより作成)

## 1-2. 福光の歴史

福光では、「立野ヶ原遺跡群」や「立美遺跡」などの旧石器時代の遺跡が確認されており、遺跡からはナイフ形石器や尖頭器（槍先）などの石器が発見されている。富山県下でも特にこの時期の遺跡が集中する地域として注目されている。

古墳時代の福光には、5 か所の集落遺跡が確認されているが、「古墳」そのものについては、福野にまたがって分布する「善法寺古墳群」があり、そこでは古墳後期（6 世紀）の群集墳 6 基の存在が知られている。

福光は平安時代後期に石黒太郎光弘が築城した福光城を中心に開けたと思われる。福光という名も、光弘の弟の福満五郎と関係があるようである。

現在における福光の前身である福光村は、15 世紀末、石黒一族が瑞泉寺との戦いに敗れた後、廃城となった福光城の城壘に山本村から善徳寺が移ってきたことで、門前町的な性格を持つようになった。江戸時代に入り、承応 3 (1654) 年の村御印<sup>164</sup>には、すでに 10 人組・蔵宿が設置された。次いで寛文 11 (1671) 年、小矢部川の水運を利用した米の集荷場として加賀藩の御蔵が設けられると「町並の地」として商業が許され、次第に商工業者が

<sup>163</sup>南砺市ホームページ 統計データ 2015 年 12 月 10 日閲覧より

<sup>164</sup>江戸時代に加賀藩で行われた年貢の取り決め書。標準的な収穫高と年貢の率などを書面に記し、藩主の印を押して交付した文書。御印が押されていることから「村御印」と呼ばれている。

集まるようになり、「在郷町<sup>165</sup>」として幕末まで近隣村々の中心的存在となった。

明治 22 (1890) 年 4 月、町村制が実施されると、福光村と福光新町村に荒木村の一部を編入して福光町が成立した。昭和 27 (1952) 年 5 月、福光町と石黒、広瀬、広瀬館、西太美、太美山、東太美、吉江、北山田、山田の 9 村を合併して福光町が成立した。そして平成 16 (2004) 年の合併により南砺市に属し、従来の自治体名の福光町が廃止され、この地区の大字は、新町は福光新町、それ以外はすべて福光となった。

### 1-3. 福光新町—新町あさがお街道—

筆者が調査を行った福光新町は、福光駅から小矢部川を渡った西側に位置する (図 2)。平成 22 年度国勢調査によると世帯数は 69 世帯、人口は 198 人である<sup>166</sup>。



図 2. 福光における福光新町の位置 (ウェブサイト「Google マップ」より作成)

明暦期に「村」と確定した福光村に代わって、江戸中期ごろまで、町方、即ち商業機能を果たしたのが、慶安 4 (1651) 年に「町立」された「福光新町」である。町立ての当たっては、福光新町は、慶安 4 (1651) 年に福光村の戸数増加に伴い、福光村の頭振<sup>あたまふり</sup><sup>167</sup>がその屋敷地として福光村の 6,000 歩を請地し、福光新町村ができた。地子銀<sup>ちしぎん</sup><sup>168</sup>を納入していたため「地子町」と呼ばれた。通りの南端に鎮座する神明社は、この年に創建された。

<sup>165</sup>江戸時代に村方 (郡奉行支配下) でありながら町としての機能を果たしているところ。

<sup>166</sup>南砺市ホームページ 統計データより 2015 年 12 月 15 日閲覧

<sup>167</sup>江戸時代、金沢藩領の田地を持たない農民のこと。

<sup>168</sup>古くは、田以外の土地、畑や屋敷を対象とする賦課を地子といった。江戸時代には宅地に課された税 (地子役) であり、町に住む証ともなった。この銀納する地子役のことを地子銀といった。

安永7(1778)年の福光新町には、生産高の多い曾代糸・干鰯を扱う商人のほか、木綿・豆腐・藍玉・味噌・鍋・薬・つるし柿・絵具刷毛を扱う商人が存在した。

明治22(1890)年、町村制施行により福光村と福光新町村が1つになり、福光町が成立した。

350年以上の歴史を持つ福光新町は、昭和61(1986)年に第2回福光新町あさがお祭りの宣伝チラシに新町通りのことを「新町あさがお街道」と印刷したことからそう呼ばれるようになり、あさがお祭りを通して町内の親睦と町の活性化に力を入れてきた。今は短くして「あさがお通り」と呼ばれ親しまれている(写真1)。



写真1. あさがお通り

## 2. あさがお祭り：当日

「あさがお祭り」は、毎年8月上旬に南砺市福光新町で行われる祭りである。「あさがお通り」の愛称で親しまれる福光新町で、第30回新町あさがお祭りが平成27(2015)年8月8、9日に行われた。この2日間、約200メートルの通りは、どの家にも住民が丹精したアサガオの鉢やプランターが並び、可憐であった。鮮やかに咲き誇るピンクや紫、水色などのアサガオが訪れた人々の目を楽しませた。新町かその近くののだろうか、高校生



写真2. 浴衣で祭りを訪れた女の子たち  
くらいの女の子2人が浴衣を着て下駄をはき通りを歩いていた(写真2)。軒先の棚には、



写真3. 小さな切込み作り



写真4. 立ち並ぶアサガオ達

各班の選りすぐりのアサガオが飾られ圧巻であった（写真 3-4）。全部で6つの棚が用意されていた。よその班に対して少なからず対抗心があり、美しいアサガオを咲かせるためのやる気にもつながっているという。

祭りの期間中、各商店の玄関には「あさがお街道」の暖簾（写真 5）が吊るされていた。この日以前には吊るされていなかったもので、祭りの日に吊り下げようだ。日の当たる玄関の外側に吊るしている店や内側に飾っている店などさまざまであった。外側にある暖簾は色あせていて、年季が入っているように思えた。この暖簾は15年前、新町商店である呉服屋さんにお願いで揃いのものを仕立てたそうだ。また、風鈴（写真 6）も吊るされ、夏の雰囲気醸し出していた。この日は日差しが強く午前中から暑かったが、風が吹くたびにちりちりんと風鈴が音を鳴らすたびに心持ち涼しく感じた。風鈴は10年前より吊るしているそうである。



写真 5. あさがお街道暖簾



写真 6. あさがお街道風鈴

2日目の9日にはあさがおフリーマーケット（写真 7）や、新町商店会によるあさがお茶席「朝顔亭」（写真 8）が設けられ、通り 5 か所に設けられたポイントを巡る「あさがお街道クイズラリー」や、福光美術館主催の「福光まちなか写生会」などが開催された。



写真 7. あさがおフリマの看板



写真 8. 朝顔亭の立て看板



また移動販売車がクレープ・ポップコーン・かき氷を販売しており、子供たちに人気であった。新町の人がお願いして城端から来てもらっているという。ホットドッグや焼きそばを出した年もあったそうだ。かつては出店も新町の人で行っていたが、茶席に人手が多く必要になるため、自分たちでやらなければと思いつつも、今は頼んで来てもらっている。

その茶席「朝顔亭」では、床がコンクリートむき出しであったのには困惑したが、中の四方がすだれで囲まれており、氷柱とアサガオを飾って涼感を演出している（写真9）、実際涼しかった。座るところに赤い布が被せられていて風情もあった。この茶席はあさがお祭りの目玉の一つであるという。1席300円と安く、そのためかお客さんの憩いの場となっていて、特製の「あさがお饅頭」と抹茶でもてなしていた。浴衣を着た女子小学生が愛らしく菓子を運び、訪れた人を和ませていた。



写真9. 朝顔亭の中

写生会には、中学生と高校生計18人と一般の絵手紙愛好家6人が参加した。福光新町の伝統的な町並み、古い石垣や板塀が残る家々、通りに並んだアサガオを題材に思い思いにスケッチする姿が見られた。作品は10月に行われる「福光まちなか文化祭<sup>169</sup>」で福光会館に展示されるそうだ。

夜は通りの道沿いにアサガオの絵が描かれた燈籠がともされ、幻想的な雰囲気になる。この燈籠を道沿いに置くのは、郡上おどり<sup>170</sup>の様子を参考にしたそうだ。以前たまたま新



写真10. 奉納あさがお展の看板



写真11. 入賞アサガオ

<sup>169</sup>10月上旬ごろに福光中心商店街一円で、町家カフェやまちなかレストラン、蒔絵体験や手作り雑貨体験などの多彩なワークショップ、新鮮野菜などを豊富に取り揃えたまちなかマルシェなどが催される祭り。

<sup>170</sup>岐阜県郡上市で行われる踊り。7月中旬から9月上旬にかけて33夜にわたって踊られる。踊る際下駄を身に付ける。

町から数人郡上踊りを見に行ったところ、その様子が素晴らしかったので、やってみたのだという。また、平成 20 年と平成 22 年には、新町でも実際に商店街で下駄を用意して、郡上踊りを行ったことがあり、大変盛り上がったという。

福光新町神明宮ではあさがお祭りに合わせて、8 月 8 日～10 日に神明宮にて奉納あさがお展が行われた(写真 10)。平成 27 (2015) 年度で 4 回目となる。この奉納展は「南砺あさがお会<sup>171</sup>」の会員 20 名によって開かれた。この奉納展では素晴らしいアサガオに天・地・人の賞が与えられる。アサガオは日によって美しく咲いたりうまく咲かなかったりするため、期間中審査は毎日行われる。写真 11 は 9 日の審査結果である。この日の最優秀賞を表す天位には松本さんの数咲作りで



写真 12. 天位を受賞したアサガオ

作られた「彩花錦」に贈られた(写真 12)。涼感漂う色とりどりの大輪アサガオが境内を彩り、来場者を楽しませた。中には台湾からアサガオ研究者らが見に来て大変称賛されたという。8 日は 100 鉢ほど飾り、落ち着いた茶色で人気が高い「団十郎」(写真 13) や一株から紅白の花が咲く「源平」などが飾られていた。また、アサガオの育て方(切込作り、らせん作りなど)の説明や、アサガオの概要が記された看板が立てられていた。会期中は朝顔市を開き、さまざまな品種の花鉢や種子を販売し、会員が栽培法もアドバイスしていた。さらに、9 日には小学生を対象にしたアサガオの押し花教室が開かれ、にぎわいを見せた(写真 14)。写真は押し花教室で実際に作られたものである。



写真 13. 団十郎



写真 14. 押しアサガオ



写真 15. 水を入れた容器にさされたアサガオ  
(瀬川さん撮影)

<sup>171</sup>南砺あさがお会については 4-4 で詳しく述べる。

## 2-1. 祭り後のアサガオ

祭りの後、アサガオは花の付け根から切り取って、水を入れたビン等にさして飾る。こうすることで花が咲いた状態が長持ちするという（写真 15）。

## 3. あさがお祭り：準備

毎年6月22日前後に、新町の空き地で町内の皆が集まって、アサガオを育てるための準備が始まる（写真 16）。新町商店街にある種・苗木店が京都から取り寄せた土と肥料とともに、鉢、腐葉土、苗を集めて行く。苗づくりは個人で行うのは難しいため、5月から福光の南に位置する城端の農家の方に、アサガオの葉が7～8枚になるところまで育ててもらった苗を使用している。

種は、一般用の植物カタログからまとめて購入することで入手する。種類、色に特にこだわらずまとめて購入するのだという。花咲きの良いアサガオを育てたいのならば、各地にあるあさがお祭りの展示場へ赴いて購入したり、実際に入会したりするなどして優秀品種を手に入れることは可能であるが、1粒数百円という値段の高さから新町商店会では容易に手が出せないようだ。



写真 16. 空き地での苗植え（瀬川さん撮影）

### 3-1. あさがお委員

皆で準備したアサガオは町内に無料で配布される。新町には10軒ごとに1班という「班制」があり、全部で6つの班がある。そして、各班につき1人のあさがお委員がいる。あさがお委員は商店主が持ち回りで担当しており、それを考慮してか、各班に商店が数軒組み込まれるよう割り振りされているようだ。このあさがお委員は、みなで準備したアサガオを班の各家に配る。商店主は一軒につき6鉢、一般住民には一軒につき4鉢配ることになっている。あさがお委員は、あさがお祭りの班ごとのまとめ役といえる。アサガオを各家に配る際に、アサガオの育て方が詳しく記された作業カレンダーも配る（資料 1）。この作業カレンダーは新町で豆腐屋を営んでいる名村さんによって作られた。これを見て指示通りに行えば、初心者でもアサガオをきれいに咲かすことができるようになっている。だが、資料からも分かるように、ただ種をまき日当たりのいいところに置いて水をやっておけばいいというものではなく、ほぼ1日ごとに行わなければならない作業があり、細かな指示が多いため面倒になる人が多いようだ。

### 3-2. 新町におけるアサガオの育て方

アサガオには日当たりが重要であるため、1日中陽が当たり、風通しのいいところに置いておくことが望ましいが、あさがお通りは道幅が狭いため、あまり日当たりがいいとは言えず風通しも良くない。つまり、アサガオを育てるには少々不向きである。そこで、新町では、アサガオを日当たりが良く風通しのいいベランダや屋根の上、空き地で育てている人が多い。資料の経過日数37日目の項目に「鉢を地上に下ろす」とあるのもそのためである。梅雨明け後には、1日3回の水やりが必要で、ベランダならまだしも、屋根の上や空き地にまで3回も水やりに行くのは大変だという。反対に、梅雨明け前は自然の雨で事足りるため、水やりの心配が特になく、その時期は楽であるという。水分が多いとアサガオはきれいな花を咲かせない。蔓を育てている間は水を少なめにして、枯れるかどうかというぎりぎりの水量を保った方が、より花に栄養を持っていこうとするため美しく咲くのだという。土の表面が白っぽく乾いたら、水をやるタイミングだ。

蔓の先端を摘み取る「摘心」は特に行わなくても構わないが、行ったほうが蔓の数も増えてボリュームが出るので、見栄えが良くなる。最終的に蔓を1本にしてしまうのは大輪アサガオの特徴で、できるだけ大きな花を咲かせるために行う作業である。これは、先ほど記述した水分の話と同じで、蔓を一本に絞れば自ずとその蔓だけに栄養がいき、大きな花を咲かせることができるからである。一つ一つは小さくても花いっぱい仕立て上げたいならば、蔓を数本残しておけば良い。

アサガオを上手く咲かせる重要な作業として、6月28日頃に行われる「短日処理」がある。アサガオは短日性植物で、日が短くなると花芽が咲き、成長する5~6月は日照時間が長く花芽がつきにくい。そのため、アサガオを夕方5時ぐらいから翌日朝10時ぐらいまで暗い所に置く「短日処理」が必要になるのである。大きなダンボールを被せたり、家の中の暗い所に置いたりするなどを2日間位行なう。こうすると花芽が形成され、その後花が育っていく。反対に、夜でも明るい街路灯の下で栽培するとなかなか花芽が付かないのだそうだ。

これほどの作業を、あさがお祭りのため半ば仕方なく行っている人もいれば、美しいアサガオを咲かせようと一生懸命に頑張る人もいる。後者のような人も最初から一生懸命だったわけではない。初めは祭りのためにと思っただけで義務感から育てていたが、徐々に楽しくなり今やこだわりを持つまでになった人もいるという。アサガオを育てるのが上手な人は、こだわりをもっており、作業カレンダーに載っていないちょっとしたことを自分で調べて行っている。例えば、アサガオは一日中陽に当たらなければならないことはすでに記したが、夜は逆に光を当てないほうが良い。そこで、街灯の光を当てないために夜間は黒い画用紙でアサガオを覆うという人もいる。もちろん、そのようなことをしなくてもアサガオの花は咲くのだが、こうした小さな工夫によって出来栄に差ができるのだ。

### 3-3. アサガオの仕立て

資料1にある「あんどん・らせん作り子蔓仕立て」とは、蔓性植物であるアサガオの性質にあった自然な作り方である。「らせん作り」のやり方に従うと、蔓を大きく曲げることなくラセンに連続的にまきつけることができ、整った容姿に仕立てることができる（写真17）。他にも、「切込作り」といって、蔓を切り込んで容姿に園芸的な要素を強く出した栽培方法がある。これは「切込盆栽養作り」とも呼ばれ、香炉撥の上の整った容姿に1～2輪の花を咲かせる。花模様も多様で、縞・吹雪・吹掛け・刷毛目などがあり、変化に富んだ花が魅力である（写真18）。さらに、この切込作りの応用として、「数咲つくり」がある（写真19）。このつくりは、一度に5花以上、10数花咲かせる方法で、絢爛豪華である。京都で確立され、完成された。「数咲作り」は難しく、初心者では作ることが困難であるが、らせん作りは比較的簡単であり、新町では主にらせん作りでアサガオを育てている。



写真17. らせん作り



写真18. 切り込み作り（森田さん撮影）



写真19. 数咲作り（森田さん撮影）

資料 1. 平成 27 年度 作業カレンダー

平成27年度					
『あさがお』あんどん・らせん作り子蔓仕立て・作業カレンダー					
月	日	経過日数	作業	水肥	水やりの目安
	22		本鉢定植	双葉の脇芽をかく	移動時タップリ
6	23	1日目	乾燥肥料を左右に置く		
	24	2日目	(有機質固形)		土を乾かす
月	25	3日目			
	26	4日目			
	27	5日目			
	28	6日目	短日処理(夕方4時～		
	29	7日目	翌朝8時)着蕾のため	*・・・水肥実施日	
	30	8日目			土が乾いたら
	1	9日目	本蔓仮摘心	*水肥150cc	150cc～200cc
	2	10日目	第2回置き肥(前後2カ所)	イ、ハイポネックス 500倍	※晴天の時以外は
	3	11日目		ロ、スーパー1 200倍	ほとんど必要ない
	4	12日目	本蔓仮摘心 子蔓3本	*水肥150cc	
	5	13日目			
7	6	14日目	オルトラン、アカール	(交互に与えると一層良)	
	7	15日目	鉢を廻す	*水肥200cc	
	8	16日目	子蔓2本にする	*イ、ハイポネックス 400倍	
	9	17日目	子蔓の本葉が5～6枚	*ロ、スーパー1 150倍	
	10	18日目	↓	*	水よりも乾かすことに
	11	19日目	子蔓1本にする	*	心を配る
	12	20日目	増し土、行灯を立てる	*水肥300cc	
	13	21日目	↑	*イ、ハイポネックス 300倍	
月	14	22日目		ロ、スーパー1 150倍	
	15	23日目	子蔓が20cmほど伸びたら	*	
	16	24日目		*	
	17	25日目		*水肥300cc	
	18	26日目		*イ、ハイポネックス 250倍	
	19	27日目		*ロ、スーパー1 100倍	
	20	28日目		*	
	21	29日目		*	
	22	30日目	上段蔓止め	水肥打ち切り	※ 梅雨明け後の
	23	31日目	つぼみの脇から出る芽はかく		水量(晴天時)
	24	32日目			朝 500cc
	25	33日目			昼 300cc
	26	34日目	初花開花		3時頃 200cc
	27	35日目	鉢を地上に下ろす		
	28	36日目			
	29	37日目			
◎ 水肥の打ち切りには、それぞれの苗の仕上がり、品種によっても本当は一様ではなく、また天候によって成長が毎年同じではないので、最終期は苗をよく観察して、2、3日早めたりする(特に白色・茶・吹掛絞りなど一般に弱性種といわれるものは早く、紫・藤色は強性なので、やや遅れてもよい)					

## 4. あさがお祭りについて

アサガオで町の活性化を図ったきっかけは、30年前（1985年）に当時商工会長だった本田喜一郎氏（故人）の呼びかけであった。あさがお祭りの中心人物の一人である松村寿さんによると、彼がアサガオを選んだわけは、小学校で最初に育てる花であるし、小学生が育てられるのなら我々にも育てることが出来るだろうと思われたからだという。本田氏は、アサガオで町内の親睦と町おこしを思いついたのである。

### 4-1. 初めてのアサガオ育成

このようにして新町商店街の人々を中心にアサガオによる地域活性化が始まった。最初の1年目、アサガオの育て方が何も分からない状態から西洋アサガオを育て始めた。商店街に種や肥料を販売している店があったため、小学生でも咲かせるのに我々ができないはずはないと高を括って、とりあえずやってみようと市販の種からの苗作りを始めた。土づくりに必要な腐葉土は新町で山を持っていた人から取ってきてもらい、肥料は新町の商店で肥料を仕入れている店で調達したものを使用し、日々の水やりも我流で行った。そして8月。新町の人たちは決して手を抜いていたわけではないし、自分たちにできることはすべてしたつもりだったが、結果は、咲いたとしてもせいぜい小さな花がただけだったり、うまく咲かなかったりと、失敗に終わってしまったのだ。新町の人々はこの結果に、これでは地域活性化のきっかけどころではないと驚きあわてた。この結果をふまえて、アサガオをただ咲かせるだけでなく、美しく咲かせるためには技術が必要だと思いついた。そして、次年に向けて参考にするために、アサガオを町ぐるみで育てているところはないかと、皆で探すことから始めた。

### 4-2. 新町あさがお祭りの変化

調べてみると、隣の石川県の松任町（現在の白山市）であさがお祭りが行われていることが分かり、新町でアサガオを育て始めて2年目に町の皆でアサガオを見に松任町を訪れた。この松任町は、加賀の千代女<sup>172</sup>との関連でアサガオを町花にしており<sup>173</sup>、町全体で大輪アサガオを育てている。8月上旬に「千代女あさがお祭り」が催されており、市民らによるアサガオの栽培の成果が一堂に展示され、約4,000鉢の色とりどりのアサガオの花を並べる。新町では最初、一本の蔓につき3、4個の小ぶりの花を咲かせる西洋アサガオを育て

---

<sup>172</sup>千代女は元禄16（1703）年、加賀国松任町（現在白山市）の表具師、福増屋六兵衛の娘として生まれる。千代女は幼いころから俳諧に親しみ、湊町本吉などの開明な俳人達に学んでいたと伝えられている。ほぼその全生涯を北国の小さな在郷町で過ごしその名と代表句「朝顔に釣瓶とられてもらひ水」は広く知られ、やがて、さまざまな伝説が作られて、民衆のヒーローとなり、今も多くの人々に親しまれ続けている（出典：ウェブサイト『千代女の里俳句館 加賀の千代女について』2015年11月05日閲覧より）。

<sup>173</sup>現在の白山市でも市花はアサガオ。

ていたが、白山市で育てているアサガオは大輪アサガオであった。これは一本の蔓につき1つの花しか咲かないが、西洋アサガオと比べてその花弁が大きくとても見栄えが良いためより存在感がある。新町の人たちは、町中に咲き誇る大輪アサガオの錚々たる様子を見て嘖然とし、また感激したという。自分たちも松任町のような美しいアサガオ溢れる町にしたいと決意したそうだ。

その決意を実現すべく、まずその千代女あさがお祭りの中心人物でアサガオ作りの名人を新町に呼び、アサガオ栽培の講習会を開いて、新町の皆で学ぶこととなった。アサガオのイメージは、小学生でも育てられ、水さえやっておけば大丈夫な花、というものだった。しかし、もちろんただ咲かせるだけならばそれでいいのだろうが、この講習会によって新町の人々は大きく美しく咲かせようとなると細やかな世話が必要だと思い知った。例えば水を与えるタイミング、日当たりの時間、肥料の種類といった具合にである。アサガオ講習会を受けてから、新町で育てるアサガオを西洋アサガオから大輪アサガオに変更したり、新町であさがお祭りをやるならコンクールもあると賑やかになると考え、コンクールのやり方や審査方法をコンクールの仕掛人から学んだりした。

#### 4-3. 新町白千鳥の誕生

アサガオ名人やコンクールの仕掛人を呼んで話を聴くうちに、熱心なアサガオ愛好家が育ち「福光新町朝顔研究会」を発足させたり、偶然にも新しい品種を生み出したりするほどになった。あさがお通りの軒端を飾るしだれ朝顔（紅千鳥）から、平成7（1995）年、突然変異で「新町白千鳥」の白花が誕生したのだ。そののち、紅千鳥の育種会社から新品種として命名が承認された。白千鳥は新町のシンボルとして大切に伝えていきたいものであるという。しかし、新町では白千鳥を毎年育てているわけではなく、白千鳥を誕生させた地として知られているようだ。それからほどなくして、この新町白千鳥の存在を知った、主にアサガオを研究している九州大学の仁田坂英二教授から「研究したいからぜひ譲ってほしい」との連絡を受け、新町側は快く承諾し、教授が研究している変化朝顔<sup>174</sup>の種と交換で白千鳥の種を譲った。このことをきっかけとして、仁田坂教授とは今もなお交流が続いている。

さらに、通りの人たちによるアサガオ育成の努力の甲斐あってか、富山県より福光新町商店会に対して功労賞が贈られた。また、第一回と第七回「花のまちづくりコンクール」では国土緑化に貢献したとして入賞を果たした（写真20、21）。

---

174主に大輪の花の色や模様を鑑賞する大輪朝顔に対して、とても朝顔とは思えないような奇態をしめす花や葉を鑑賞するアサガオの突然変異系統を変化朝顔と呼んでいる。そして、変化朝顔には他の園芸植物と違い品種名がないため、その花の葉色・葉模様・葉性・葉の地合・葉癖・葉型、花色・花模様・筒色・花弁の様子・咲き方によって決まる。一見煩雑に見える変化朝顔の花銘も一定のルールがあり、名称だけでその花を見なくてもおおよその形を推測することができるのである。（出典：ウェブサイト『九州大学院 アサガオホームページ』2015年11月05日閲覧より）



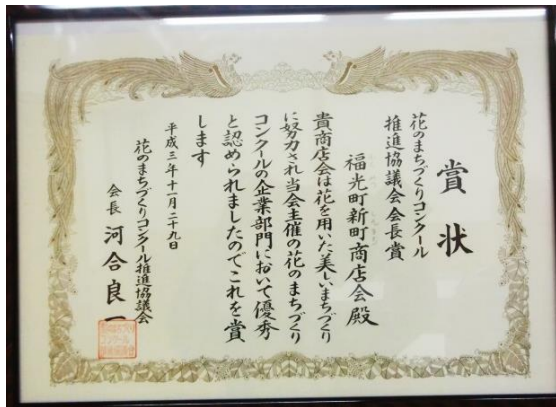


写真 20. 第一回 表彰状

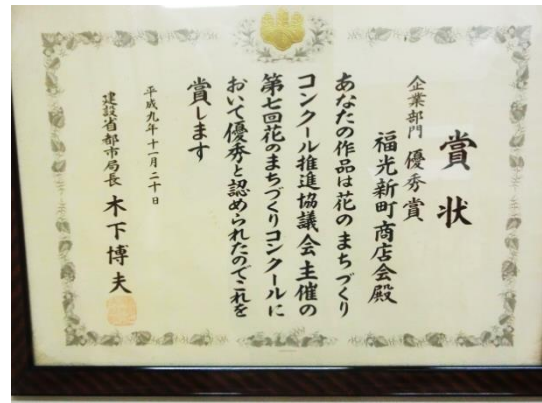


写真 21. 第七回 表彰状

#### 4-4. 南砺あさがお会

また、熱心な愛好家でアサガオに詳しい方として、森田光正さんが挙げられる。森田さんも松村さんと同じく、あさがお祭りの中心人物の一人である。アサガオは数多くの種類があるが、盆栽仕立てにすると美しい大輪を咲かせる優良品種は希少で栽培が難しい。平成 23 (2011) 年に森田さんら福光新町の有志は研究会を結成し、「福光新町朝顔研究会」を発足させた。新町でアサガオを栽培し始めて 25 年経った年だった。当時、新町の人々がアサガオ栽培に飽きたのか、毎年の苗づくりを業者に任せ、6 種類程度しか育てず大きな花が咲かない状態になっていた。森田さんはこの状況を見て、これでは栽培意欲がなくなり「あさがお通り」がなくなってしまうのも時間の問題だと感じていた。こうして結成された研究会の当初のメンバーは新町だけで構成されており、こぢんまりとしていた。

森田さんは新町だけでは物足りない、もっと本格的に朝顔を育てたいと、東京にある「東京あさがお会」に入会してアサガオの栽培技術を学んだ。東京あさがお会では、会員になることで、年二回初心者向けに開催される講習会で資材の準備から、種子のまき方、苗の育て方、その他朝顔栽培に関する大切な点を、入賞経験豊富な会員から直接指導を受けることができるのである。森田さんは東京で学んだ栽培技術を生かし、素晴らしいアサガオを育てていた。そのアサガオを見た砺波市、南砺市のアサガオ愛好家たちは、ぜひ福光新町朝顔研究会に入会したいと申し出てきたのである。森田さんは、メンバーが福光新町だけでは収まらなくなったため、平成 27 (2015) 年 5 月 9 日に名称を「南砺あさがお会」に改めを創立した。この日の総会後には、大輪アサガオの講習会が森田氏によって開催された。この会には新町の方 3 名を含め、砺波市、南砺市から計 20 名参加している。

#### 4-5. 奉納あさがお展

南砺あさがお会 (当時は福光新町朝顔研究会) は、4 年前からあさがお祭りと並行して、奉納あさがお展を新町神明宮で開いている。この奉納展では、会員によって丹精込めて育てられた 350~400 鉢の中から選りすぐりのアサガオが出展され、それらを会長を含む 3 名

の会員が審査する。特に優秀なアサガオには、天・地・人の賞が与えられる。

筆者は、奉納あさがお展に会員以外誰もアサガオを出展しないこと疑問に思い、森田さんに尋ねたところ、富山県には南砺あさがお会以外にもあさがお会はあるのだが、南砺あさがお会ほど美しいアサガオを咲かせる会がないのだという。他の会から出展者がいたとしても、賞をもらうことは難しいそうだ。

#### 4-6. あさがお祭りに伴う変化

アサガオによって新町の人々の関係性が変わった。新町で種苗屋を営む瀬川さんは、町ぐるみでアサガオを育てることでアサガオを通じて新町の人同士が会話をする機会が増えたという。アサガオを育てる以前は現在のほどつながりがなく、あいさつ程度で終わっていたそうだ。他の町内の人からも、新町の人たちは仲がいいと聞くようになったと、嬉しそうに話してくれた。このことについては松村さんも、アサガオを育てることが新町のお年寄りたちの生きがいとなっていて、さらに新町にアサガオ以外の花も多く溢れるようになったのだという。アサガオは夏に育てるため、秋から春にかけても花を育てる人が増えたようだという。

#### 4-7. かつて行なわれていたこと

現在は行われていないが、かつて祭りの前に行われていたことや、多くはないが幾人かの人でやっていたことがあった。それらを以下に記す。

##### 4-7-1. 通りへのアサガオ絵描き

祭りが始まった3年目から10年間、7月にアサガオの絵を通りの道路に描くことが行われていた。これは、アサガオの花が8月まで咲かないため、それ以前に訪れた人々に少しでもアサガオを感じてもらおうと始めたものである。車が走行する前に、この作業を片側行って、それらが乾いてから次の日にもう片側をやるという具合に、絵師が朝4時頃より、段ボールでつくられたアサガオの型を使って道路に下書きをしていき(写真22)、朝5時頃



写真 22. 下書きの様子 (瀬川さん撮影)



写真 23. 色付けの様子 (瀬川さん撮影)

に町民の人たちが色を塗っていた（写真 23）。通りの両側に合計 12、13 個描かれ、訪れた人々の目を楽しませたという。これを行う際に、道路に絵を描くことが法的に問題にならないかどうか、警察に尋ねたところ「ぜひやってくれ」と力強く言われたとのことだった。この話を伺った方に、なぜ 10 年で辞めてしまったのか訊いたところ、アサガオの絵を描いていた絵師が病気になり絵を描くことができなくなり、代わりに絵を描く人をどうするかを考えているうちにうやむやになり、いつの間にかこの話がなくなっていたそうである。その方も、なかなか好評であったのになぜ辞めてしまったのだろうかと首をかしげていた。

#### 4-7-2. 変化朝顔

かつては幾人かで各々育てていた変化朝顔だったが、今では松村さんしか育てていない。松村さんはあさがお祭りが初めて開催された当時から中心人物のひとりであり、町長に任じられたこともある方である。白千鳥が突然変異で現れたときもその場に居合わせていたという。

変化朝顔の見頃は 9 月であるため、花が咲いている様子をお客さんに見てもらおうにも、8 月のあさがお祭りには間に合わない。したがって、松村さんは、祭りの時は葉を鑑賞してもらうのだそうだ。いつの年だったか、当時松村さんが育てていた変化朝顔は、葉のところどころ白くなって色が抜けている斑入りの葉であったために、それを見たお客さんが「このアサガオは病気なのか」と心配そうだったという。斑入りであっても、決して病気や害虫のせいではなく、このアサガオの種類として斑入りなのであるということを説明して安心してもらうことが多々あったと、松村氏は楽しそうに話してくれた。そして、9 月に訪れた方が実際に花を咲かせた変化朝顔を見ると、一般的なアサガオとは余りに見た目が異なるため、皆驚き訝しがるそうだ。

変化朝顔は種から育てる一年草のため、花が終わると枯れてしまう。新たに変化朝顔を育てようとする、一般には売っていないため、どこかから種を譲ってもらうしかない。そこで松村さんは、平成 26（2014）年に申請書を書いて、九州大学より 4 種類の変化朝顔の種子 10 粒ずつもらったという。申請書を書いたというのは、変化朝顔は貴重で、九州大学のある福岡県の財産でもあるため、必要なことであるようだ。

### 5. まとめ—あさがお祭りの今後—

毎年あさがお祭りが終わって 9 月ごろに、次年度の祭りへの参加・不参加を尋ねるアンケートが各家に配られる。瀬川さんが語るには、このごろ、新町にはお年寄りが多くなり、病気で入院したり亡くなったりする人が増えてきて、アサガオを育てる人が年々減ってきているのだそうだ。そしていつかは祭り自体がなくなるかもしれないと懸念される中、毎年アサガオの苗を育ててもらっている農家から、次年から苗を育てることを断られたという。苗を一から育てるのは大変で難しく、次のあさがお祭りはどうなるのかと不安そうで

あった。筆者が瀬川さんに話を伺ったとき、まだアンケートは締め切りではなかったが、彼女が言うには、もしかすると次年度からアサガオ育成の方針が、新町のみんなでアサガオの準備をして町内に配るというやり方から、アサガオを育てたい人が各々好きな種類のアサガオを育てるというものになる可能性があるという。その方がむしろあさがお祭りの規模がより小さくなるように筆者は思った。平成 27 (2015) 年があさがお祭りのひとつの転機になるのかもしれない。

11月に再び新町に赴いて話を聞いたところ、平成 28年のあさがお祭りからは南砺あさがお会が中心となって種からアサガオを育てていくことになるだろうという。ということは、少なくとも話し合いであさがお祭りがなくなってしまうという結論には至らなかったということであり、筆者としては大変安堵した。

松村さんは、祭りが 30年間も続いたのはたくさんの人が喜んでくれたからであるし、同時に、みんなが毎年あさがお祭りに期待しているから逆にやめられなくなったと、本意ではないだろうが苦笑しながら語った。祭りをやめるという選択肢が毎年挙げられていたことに、筆者は驚きを隠せなかった。もちろん、祭りを継続することが決まっても、アサガオを新町で育てることに苦労は絶えない。アサガオを育てることが好きな人もいれば嫌いな人もいて、嫌いな人たちは口を開けば「もうあさがお祭りをやめにしないか」と言うという。松村さん曰く、この「アサガオを育てたくない」人たちに今回もどうかアサガオを育ててくれないかと説得することが、毎年大変なのだそうだ。

しかし、どんな形になろうとあくまでもあさがお祭りを続けていくことを考えるならば、必ずしも新町の人全員で祭りをやる必要はないはずだ。新町の地区が広いとは言えないために、新町の人がほとんど参加しなければ祭りが成り立たない、ということもあるだろう。とはいえ、本当に祭りに参加したくない人を無理やり参加させるのもまずい。となれば、アサガオの総数は減るだろうが、もはやアサガオを育てることに意欲のある人を中心に祭りを運営していくしかない。何事も、興味がなければ続かないものである。この考え方は、あさがお祭りを自分たちのために行うと仮定したときの話だが、あさがお祭りは「アサガオお披露目会」と割り切るのはどうだろうか。あさがお祭りをお披露目会と解する場合、奉納あさがお展とあさがお祭りを合体させることで解決するはずだ。しかし、奉納あさがお展で、南砺あさがお会に属していない人のアサガオが展示できるのかという問題があるが、展示できるか否かはアサガオの出来栄次第、ということにすれば、もっとアサガオ栽培にやる気が出るだろう。人というもの、何かをやるときは少なからず自己顕示欲が湧くものであるからだ。この展示会には選りすぐりの素晴らしいアサガオしか出展されないのだから、この展示会に刺激されて、自分もアサガオを育ててみようかなと思ってくれる人が出てくれば、祭りに未来が見える気がしないだろうか。言葉による説得ではなく、アサガオを観てもらふことによって、アサガオに込めた想いを多くの人に伝えるほうが、より説得力があるように思う。祭りの今後はまさしく、アサガオ次第だといえよう。

## 謝辞

最後に、お忙しい中、本報告書のために多くの貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。特に森田光正様、松村寿様には本当にお世話になりました。他にも、あさがお通りの方、商工会の方など、調査にご協力いただいたすべての方に、この場をお借りにして心からお礼を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

## 参考文献

朝顔百科編集委員会、2012年、『朝顔百科』、誠文堂新光社

福光町史編纂委員会、2011年、『福光町史』

北日本新聞 2015年8月9日朝刊

富山新聞 2015年8月10日朝刊

## 参考にしたウェブサイト

南砺市ホームページ 統計データ

(<http://www.city.nanto.toyama.jp/cms-sypher/www/info/detail.jsp?id=15389> ; 2015年12月10日閲覧)

『ヤサシイエンゲイ アサガオの育て方』

([http://yasashi.info/a\\_00008g.htm](http://yasashi.info/a_00008g.htm) ; 2015年08月12日閲覧)

『千代女の里俳句館 加賀の千代女について』

([http://haikukan.city.hakusan.ishikawa.jp/chiyojo/about\\_chiyojo.html](http://haikukan.city.hakusan.ishikawa.jp/chiyojo/about_chiyojo.html) ; 2015年8月12日閲覧)

『花と緑銀行について』

([http://www.bgtym.org/fgbank/bank/bank\\_r.html](http://www.bgtym.org/fgbank/bank/bank_r.html) ; 2015年10月26日閲覧)

『九州大学ウェブサイト 変化朝顔』

(<http://mg.biology.kyushu-u.ac.jp/mg-files/henka/index.html?sess=444ade289dd9f1021e8bd2d8dd412910> ; 2015年11月05日閲覧)

『東京あさがお会ホームページ』

(<http://tokyoasagao.com/> ; 2015年11月10日閲覧)

南砺市の皆さま、調査へのご協力ありがとうございました！！



(2015年5月5日)

地域社会の文化人類学的調査 25  
伝統と現代が重なり合うまち—南砺市福野・井波・福光—  
(改訂第三版)

発行日： 2016年11月11日

編集： 藤本 武・野澤豊一

発行： 富山大学人文学部文化人類学研究室  
〒930-8555 富山市五福 3190

Tel. : 076-445-6185

E-mail : anthro@hmt.u-toyama.ac.jp

印刷： (株)オダケ印刷

〒931-8453 富山市中田 45-63